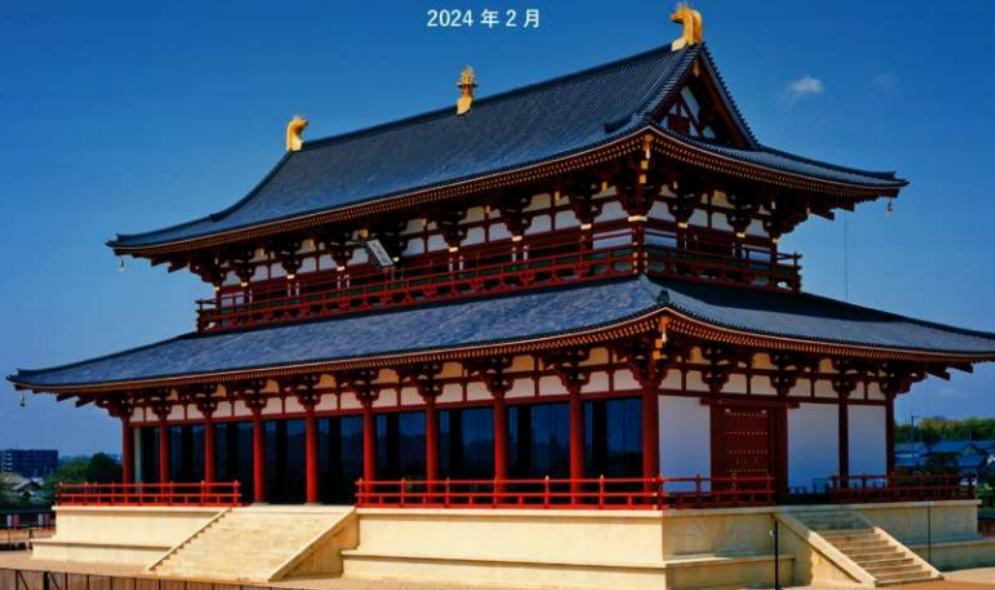


太極殿・含元殿・明堂と大極殿

-唐代都城中枢部の展開とその意義-

城倉正祥 著

2024年2月



太極殿・含元殿・明堂と大極殿

－唐代都城中枢部の展開とその意義－

城倉正祥 著

2024年2月

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

例言

1. 本書は、早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所の調査研究報告第6冊として刊行した。
2. 本書の編集は、Adobe Indesign を用いて城倉（研究代表者）が行った。表紙デザインは、高橋亘（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）が担当した。表紙に使用した平城宮中央区大極殿の写真は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に提供・使用許可をいただいた。
3. 本書は、以下の科学研費補助金の成果である。
 - ①基盤研究（C）『衛星画像のGIS分析による隋唐都城とシルクロード都市の空間構造の比較考古学的研究』（課題番号：17K03218、代表：城倉正祥）
 - ②基盤研究（C）『衛星画像のGIS分析に基づく唐代都城中枢部の構造比較と設計原理の考古学的研究』（課題番号：22K00976、代表：城倉正祥）
4. 本書の刊行費（300部）は、上記科研①より支出した。
5. 本書の内容は、早稲田大学リポジトリ、および全国遺跡報告総覧でPDF完全版を公開している。なお、本報告書で掲載した図版（実測図・写真）は、既に発表されている報告書・概報・論考などから転載したもので、カラートーンを入れて表示した。出典は、巻末の図表出典一覧にすべてを明記した。

謝辞

本書刊行前に、下記の先生方には内容をお読みいただき、事前にご意見をいただいた。それぞれの専門的立場から様々な貴重なご意見をいただいたが、筆者の力量もあり、十分に反映することは出来なかった。ご指導をいただいた先生方のご芳名を記し、心より感謝を申し上げたい。

江川式部（國學院大學）・小澤 純（三重大学）・小田裕樹（奈良文化財研究所）・川尻秋生（早稲田大学）
佐川英治（東京大学）・妹尾達彦（中央大学）・積山 洋（大阪市文化財協会）・武田和哉（大谷大学）
林部 均（国立歴史民俗博物館）・廣瀬 覚（奈良文化財研究所）・古松崇志（京都大学）
村元健一（大阪歴史博物館）・吉田 歆（山形県立米沢女子短期大学）・李 陽浩（大阪歴史博物館）
渡辺晃宏（奈良大学）。
※五十音順、敬称略。

また、以下の方々には、文献の収集・資料の解釈・写真の提供に関して、ご助力を賜った。ご芳名を記し、感謝を申し上げたい。

栗山雅夫（奈良文化財研究所）・吳 心怡（早稲田大学）・齋藤茂雄（帝京大学文化財研究所）
中村一郎（奈良文化財研究所）・若杉智宏（奈良文化財研究所）。
※五十音順、敬称略。

本文目次

中表紙（i）・例言（ii）・謝辞（iii）・本文目次（iv）・図表目次（v）・序言（vi）

はじめに	1
1. 東アジア古代都城中枢部の変遷に関する研究史	1
1-1 日本都城における中枢部の研究	2
1-2 日中古代都城の比較研究史	24
1-3 中国都城における中枢部の研究	27
1-4 論点と課題	48
2. 東アジア古代都城の遺構比較に関する方法論	48
2-1 比較視座と方法論	48
2-2 分析対象遺構	49
3. 中国都城（中原・草原地域）、高句麗・渤海都城、日本都城における正殿遺構	50
3-1 中原都城（秦・前漢・後漢・魏晉南北朝・隋唐・北宋）の正殿遺構	50
3-2 草原都城（遼・金・元）の正殿遺構	64
3-3 明清都城の正殿	70
3-4 高句麗・渤海都城の正殿遺構	70
3-5 日本都城の正殿遺構	75
4. 中国都城における正殿の発展と唐代における東アジアへの展開	87
4-1 中原都城における正殿の発展と草原・明清都城への継承	88
4-2 高句麗・渤海都城における正殿の構造とその特色	93
4-3 日本都城における正殿の構造とその特色	96
4-4 唐代東アジア都城の正殿遺構—規模と構造の比較—	106
4-5 儀礼・饗宴空間としての都城中枢部と東アジアへの展開	109
おわりに	113
引用文献（日文）	115
引用文献（中文）	122
東アジア正殿の報告書（中・日文）	126
図表出典一覧	128
索引（遺構関連用語）	132

結言（vii）・著者略歴（viii）・出版シリーズ（ix）・報告書抄録（x）

図表目次

図 1	唐長安城太極宮・前期難波宮の「逆凸字プラン」(上)と前期難波宮・藤原宮の比較(下)	3
図 2	重見泰による飛鳥宮跡Ⅲ期遺構の殿舎比定	4
図 3	奈良時代前半(上)と後半(下)の平城宮における天皇出御の儀礼空間	5
図 4	平城宮中央区の変遷(上)と東区の変遷(下)	6
図 5	平城宮内裏・東区大極殿院の変遷	7
図 6	平安宮の農楽院(左)と朝堂院(右)	8
図 7	重見泰(上)と渡辺晃宏(下)による日本都城中枢部の変遷案	9
図 8	後期難波宮大極殿・後殿の復原(上)と平城宮・長岡宮の比較(下)	10
図 9	鬼頭清明による大極殿の分類とその系譜	11
図 10	発掘された日本都城の幡旗遺構	14
図 11	平城宮朝堂院(中央区・東区)で検出された大嘗宮	17
図 12	渡辺信一郎による『大唐開元礼』に基づく元会儀礼の空間復原(左)と進行表(右)	19
図 13	藤森健太郎による「元日朝賀」空間の唐・日本比較	20
図 14	元日朝賀儀礼の内容(上)と宝輦・高御座(下)	21
図 15	御斎会における大極殿の舎設	22
図 16	含元殿の龍尾道(左)と平安宮大極殿の龍尾壇(右)	26
図 17	渡辺信一郎による南朝建康宮城の復原案	28
図 18	内田昌功による魏晉南北朝の宮略図	28
図 19	松本保宣(左)と吉田歓(右)による唐長安城・北宋開封城における宮城の構造と機能	29
図 20	後漢洛陽城の復原	31
図 21	曹魏鄆北城(左)と北魏洛陽城(右)の中軸線	32
図 22	曹魏西晋洛陽城(左)と六朝建康城(右)の平面形	33
図 23	唐長安城・洛陽城の宮城	34
図 24	唐長安城大明宮における「三朝」(左)と北宋・呂大防『長安城図碑』の大明宮(右)	35
図 25	楊鴻勛による明堂の諸例	37
図 26	唐洛陽城における武則天明堂関連の資料	38
図 27	唐洛陽城における天堂の位置と発掘成果	39
図 28	唐東都洛陽城武成殿・北宋西京洛陽城文明殿とされる遺構	40
図 29	北宋西京洛陽城の宮城復原	41
図 30	松本保宣による唐宮城(左)と北宋宮城(右)の比較	42
図 31	北宋東京開封城の重圍構造(左)と宮城復原(右)	42
図 32	劉露露により系譜関係が指摘される高句麗・渤海・遼の都城	43
図 33	諸葛淨による唐宋～遼金元都城の空間構造の変遷	44
図 34	渤海都城(上京城・西古城・八連城)の中枢部比較	46
図 35	秦成陽宮1号宮殿と阿房宮前殿	52
図 36	前漢長安城未央宮の前殿	53
図 37	北魏洛陽城と東魏北齊鄆城の宮城と太極殿①	54
図 37	北魏洛陽城と東魏北齊鄆城の宮城と太極殿②	55
図 38	十六国北朝長安城の樓閣台遺跡	56
図 39	唐長安城太極宮(太極殿)と大明宮(含元殿・朝堂・麟德殿)①	58
図 39	唐長安城太極宮(太極殿)と大明宮(含元殿・朝堂・麟德殿)②	59

図 40 唐長安城興慶宮（勤政殿本樓・花萼相輝樓）	60
図 41 唐洛陽城の明堂・天堂	61
図 42 北宋洛陽城の宮城と 1・2 号建築遺構	63
図 43 北宋東京開封城と遼上京城・中京城	64
図 44 金上京城の宮城内建物（1号基壇）	65
図 45 金中都の皇城・宮城の復原	65
図 46 元上都の宮城と正殿	66
図 47 元中都の宮城と正殿	67
図 48 元大都の宮城と正殿	68
図 49 明清北京城の紫禁城と正殿	69
図 50 高句麗安鶴宮の宮城と正殿	70
図 51 渤海上京城の宮城と正殿	72
図 52 渤海西古城の宮城と正殿	73
図 53 渤海八連城の宮城と正殿	74
図 54 前期難波宮の内裏前殿（SB1801）	75
図 55 近江大津宮の内裏正殿（SB015）	76
図 56 飛鳥宮の内郭前殿（SB7910）とエビノコ郭正殿（SB7701）	77
図 57 藤原宮の大極殿・後殿・東楼	78
図 58 平城宮の中央区大極殿（SB7200）と東区大極殿（SB9150）①	79
図 58 平城宮の中央区大極殿（SB7200）と東区大極殿（SB9150）②	80
図 58 平城宮の中央区大極殿（SB7200）と東区大極殿（SB9150）③	81
図 59 恽仁宮の大極殿（SB5100）	82
図 60 後期難波宮の大極殿（SB1321）と後殿（SB1326）①	83
図 60 後期難波宮の大極殿（SB1321）と後殿（SB1326）②	84
図 61 長岡宮の大極殿	85
図 62 平安宮の豊楽殿と大極殿	86
図 63 中国都城における正殿遺構の変遷	90
図 64 北宋西京洛陽城（左）と北宋東京開封城（右）の双軸構造	91
図 65 高句麗・渤海都城における正殿・寝殿の構造	94
図 66 東魏北齊鄆城の後寝（206・209 大殿）と渤海海上京城の後寝（3・4 号宮殿）の比較	95
図 67 日本都城における正殿：大極殿の系統と変遷	97
図 68 唐長安城太極宮・大明宮の朝堂と日本都城の朝堂（第一堂）	101
図 69 前期難波宮八角殿と樓閣建築の展開	102
図 70 東アジア都城中枢部に見られる八角形の系譜	103
図 71 東アジア都城における「後殿」の分類	105
図 72 唐代東アジア都城の正殿とその比較	107
図 73 唐代都城の国家的儀礼空間（上）と饗宴空間（下）の比較	110
 表 1 宿白による日本都城と唐長安城・洛陽城の要素比較	25
表 2 渤海上京城の宮城構造と三朝制諸説	47
表 3 東アジア都城の正殿遺構（分析対象一覧）	51
表 4 日本古代都城における「儀礼的宮城正門」と「空間的皇城正門」	100

序言

本書の研究課題

本書は、2021年9月30日付で刊行した東アジア都城・シルクロード考古学研究所の調査研究報告第5冊『唐代都城の空間構造とその展開』（城倉正祥著）の続編として刊行した。前稿の第II部では、「東アジア古代都城門の構造・機能とその展開」と題した論文を掲載し、都城門を分析対象として、発掘遺構の国際比較の方法論を示した。前稿の結論では、発掘遺構の国際比較に関しては更に多くの遺構への適用が可能な方法論であり、中枢部・里坊へと分析を進める点を記載した。本報告書は、その方向性に基づいて進めてきた東アジア都城の中枢部、特に正殿遺構に関する国際比較をテーマとする。

研究の契機と視点

奈良文化財研究所に在職した2007-2010年度の4年間、中国社会科学院考古研究所との共同調査で、漢魏洛陽城宮城2・3号門の発掘に従事した。漢魏洛陽城の中軸正門の発掘経験で積み重ねた問題意識は、既に前稿で総括したが、発掘で中国に滞在した1年半、発掘現場のすぐ北側に存在する太極殿の巨大な基壇を頻繁に観察する機会があった。同時期には、洛陽工作站の唐城隊が唐宋期の宮城中枢部（明堂・天堂）の史跡整備のための発掘を進めており、西安では大明宮含元殿を中心とした国家遺跡公園の大規模な整備が進んでいた。また、西安隊の調査を見学に行けば、阿房宮前殿、前漢長安城未央宮前殿を何度も見学することができた。さらに、毎回の発掘期間が終わって帰国する際には、必ず北京の紫禁城太和殿も見学していた。

一方、毎回3ヵ月ほどの発掘期間が終わって、日本に帰国すると、日常業務の平城宮（東院・東方官衙）の発掘に従事しなければならない。毎日、建造中の第一次大極殿や基壇復原された第二次大極殿を横目に自転車を走らせながら、中国都城の正殿に思いを馳せていた。このような環境の中で、必然的に都城中枢部の「正殿」を身近な存在として強く意識するようになり、2000km以上離れた古代の建造物を直接比較して考えるようになった。しかし、早稲田大学に転出した2011年からは漢魏洛陽城の発掘に関わる機会はなく、洛阳隊の仲間たちが太極殿・東堂の発掘調査を進めるのを羨ましく遠くから見守る日々が続いた。

その後、2019年には、科研費を用いて、北京の中国社会科学院考古研究所に客座研究员として1年間滞在する機会があり、瓦の製作技法の分析を積み重ねながら、都城中枢部の構造に関して思考を深めることができた。自分が「体感」した正殿に関して、研究史を渉猟して知識を増やし、時空間を越えた比較分析を徐々に進めた。コロナ禍が厳しい2020年3月に北京の下宿を引き払って東京に戻ってからは、都城門のまとめに入り、2021年9月に前稿を刊行できた。2022年からは新たな基盤研究Cが採択され、本格的に中枢部・正殿の国際比較を進めることになった。日本の古墳・古代の研究と並行しながら、2年以上かけて作業を積み重ね、本報告に至ることが出来た。2章で整理したように、本書の分析視点は非常にシンプルである。すなわち、都城の中枢部に位置する正殿の発掘遺構を、東アジアの広い地域で時空間を越えて考古学的に比較する試みである。発想も視点もシンプルではあるが、考古学的な作業としては様々な工夫が必要だった。

研究方法と作業経過

まず、「同一の機能を持つ建造物（遺構）は時空間を越えて比較可能」という前提に基づき、日中の都城における宮城中枢部、特に正殿の報告事例と関連研究を集めて整理した。報告書類は限られているが、日中の関連論文・著作に関しては、文献史学・建築史学・考古学・歴史地理学など膨大な量となり、その中から重要なものを選抜した上で全て読み直し、内容カードを作り、研究史をトピック毎に整理した。研究史50頁の作成に、1年間を要した。研究史を整理する過程で正殿の国際比較の論点を絞り、考察のトピックを設定した。その後、発掘された正殿遺構の集成を行い、原図に忠実な形で実測図を提示する部分を作成するのに半年かかった。最後に考察の論点を何度も練り直しながら、執筆を進めた。粗削りではあるが、東アジア都城の中枢部に関しては、現段階の情報を悉皆的に示し、多岐にわたる論点を整理できたと考える。

はじめに

唐代を中心として東アジアに展開した都城の考古学的国際比較に関しては、平面形の比較、および周礼・三朝制などの思想的背景に基づく比較、2つの方法論が主体となってきた。しかし、各王朝が創始する思想空間としての都域に1つとして同じ平面形は存在しておらず、周礼・三朝制などの形而上の思想を前提として現実に存在する都城の構造を解釈する方法にも限界がある。唐長安城・洛陽城など中原都城の単純な模倣によって各国に都城が出現したわけではなく、中原の伝統的な思想や概念を解体・再編成した上で、各地の支配体制や思想観念に基づいて各国でも都城が「再創造」された点を重視する必要がある。以上の視点から、前稿では都城の空間構造を現出させたメカニズム（原理）の解明を目的とし、都城の階層空間を結びつける役割を果たした都城門の遺構に着目して、その構造・機能と東アジアへの展開過程を考察した（城倉2021）。本論では、同様の視点・方法論に基づき、都城中枢部の宮城正殿の遺構を分析対象とする。

中原で発達した都城中枢部の正殿に関しては、秦始皇帝がBC212年に造営した阿房宮前殿から、前漢長安城未央宮前殿・後漢洛陽城南宮前殿へと発展し、曹魏明帝が青龍3年（235）に洛陽宮に造営した太極殿に結実する。「歴代点名、或沿或革、唯魏之太極、自晋以降、正殿皆名之」『初学記』卷二四、居處部、殿、叙事）とされるように、太極殿は晋南北朝から唐が滅亡するまでの670年以上、「建中立極」の思想に基づき宮城正殿であり続けた。太極殿の名称は北宋西京洛陽城を最後に消えるものの、北宋東京開封城の「工字形」正殿である大慶殿にその機能は受け継がれ、遼・金・元の草原都城を経て、現存する清北京紫禁城太和殿まで連続と継承された。しかし、中原都城が東アジア各国へ展開した唐代は、太極殿以外の宮城正殿が複数存在した特異な時代だった。すなわち、唐高宗龍朔3年（663）に完成した唐長安城大明宮含元殿、および唐睿宗垂拱4年（688）に唐洛陽城乾元殿跡地に造営され、焼失後の唐武則天天堂殿万歳2年（696）に再建された明堂（万象神宮一通天宮）を加えた3つの正殿が国家的儀礼空間として併存していた。都城の展開最盛期における太極殿・含元殿・明堂という3つの宮城正殿の併存現象は、従来の研究ではあまり注目されてこなかった。特に武則天の洛陽明堂は、その存在の「異質さ」故に都城发展史上の例外として認識されてきた部分も大きい。太極殿・含元殿・明堂、三者の関係性と宮城正殿としてのそれぞれの構造的特徴の把握は、東アジアへ展開した都城の系譜を考究する上で、非常に重要な視点だと考える。

本論では、唐長安城・洛陽城の宮城正殿である太極殿・含元殿・明堂の遺構に着目し、前後の時代における中国都城の正殿の変遷を踏まえて、その構造や系譜的位置を整理する。その上で、渤海都城・日本都城中枢部との比較を行い、唐代における都城制の東アジアへの展開過程に関する歴史性を正殿の考古学的比較分析の視点から考究する。

1. 東アジア古代都城中枢部の変遷に関する研究史

東アジアに展開した古代都城の中枢部に関する研究には、膨大な研究史が存在する。本論は、中国中原・草原で発達した都城、および渤海・日本都城の正殿遺構の構造比較を目的とするが、それには都城研究史上で宮城正殿がどのように分析され、位置付けられてきたか、を涉獵・整理する作業は避けて通れない。そのため、本論執筆に際しては、まず日中の都城中枢部の研究論文・著作・報告書を集め、500本以上的重要論文を情報カード化した上で、トピック毎に研究史を整理した。文末の引用文献の内容を見れば明らかだが、都城中枢部の理解に関しては、新たな発掘調査に基づいて更新されてきた歴史があるため、日本都城中枢部の研究史が非常に厚く、中国都城中枢部の研究は2000年以降の発掘事例の増加に伴って急増している状況にある。以上を踏まえて、都城の歴史的な発展とは逆になるが、本論では日本都城中枢部の研究史→日中古代都城の比較研究史→中国都城中枢部の研究史、の順序で整理を進める。

都城中枢部の研究史に関しては、文献史学・建築史学・考古学など様々な分野にまたがっており、論点も非常に多岐にわたる。膨大な研究史を時系列で網羅的に整理するよりも、研究課題を明確化するために、次節以降ではトピック毎にタイトルを付けて、記載を進める。また、本研究分野においては現段階の日中における研究史の整理自体が、今後の研究の基礎作業としても重要な意味を持つと考えるために、図面などを丁寧に提示しつつ、整理を進める。なお、本研究で分析対象、および研究史の整理対象とするのは、宮城中枢部

において国家的な儀礼空間として機能した「正殿」とし、皇帝・王・天皇が居住した空間は一部を除いて対象外とする。皇帝・王・天皇の居住空間と国家的な儀礼空間との関わりも重要な論点ではあるが、中国都城では皇帝の居住空間の発掘例が現段階ではほとんど存在していないため、本論では国家的な儀礼の舞台となった正殿の国際比較を課題とする。

1－1 日本都城における中枢部の研究

日本都城中枢部の研究 日本では、関野貞による大極殿＝「朝堂の正殿」（[関野 1907](#)）という指摘に基づき、大極殿・朝堂の関係性を追求する研究が行われてきた。また、大極殿は内裏正殿から発展したと考えられているため（[相原 2010 p. 12](#)），日本都城では内裏正殿・大極殿・朝堂の関係性の追求を中心とした研究が進んできた。以上を踏まえ、日本都城の中枢正殿、すなわち大極殿の研究史に関しては、相原嘉之や積山洋の研究史の整理（[相原 2010・積山 2013a](#)）を参考にしながら、大極殿の起源・系譜・発展・系統・構造・思想論を中心に整理した上で、朝堂院の位置付けに関する研究にも言及する。さらに、即位儀・元日朝賀儀・御斎会など大極殿院・朝堂院を舞台とする儀礼の文献史研究、複都制・天命思想など、日本都城中枢部に関連する研究史をそれぞれのトピック毎に整理する。

大極殿の起源・系譜論 関野貞の大極殿＝「朝堂の正殿」との指摘を受けた福山敏男は、朝堂院の分析を進めるとともに、史料から大極殿の成立を天武朝飛鳥淨御原宮とした（[福山 1957](#)）。その後、前期難波宮・飛鳥淨御原宮・藤原宮の中枢部の発掘調査の進展に伴い、大極殿の起源論に関する議論が進んだ。中尾芳治は、前期難波宮の内裏前殿SB1801を大極殿に相当する施設とし、前期難波宮が藤原宮に直接的に繋がる構造を持つ点を指摘した（[中尾 1972・1981](#)）。直木孝次郎も、前期難波宮で内裏内部の「大殿」が公的な性格を増し、前殿SB1801が内裏から独立して、藤原宮大極殿に発展すると考えた（[直木 1973・1975・1995](#)）。一方、岸俊男は、前期難波宮の系譜を検討する中で、唐代都城の影響を認めつつも、藤原京の系譜は北朝都城にたどれるとの持論を踏まえ、SB1801の東西にある南北長殿（西長殿：SB1101／東長殿SB1001）を、魏晋南北朝期における太極殿東西堂の模倣と位置付けた（[岸 1977a・b](#)）。なお、福山敏男以来の天武朝大極殿成立説に関しては、飛鳥宮跡の発掘調査が進展するまでは、日本書紀の「粉飾・文飾・潤色」と位置付け、藤原宮で大極殿が成立したと考える説が主流だった（[狩野 1975・鬼頭 1978・和田 1980・今泉 1984](#)など）。

その後、飛鳥宮跡の発掘調査が進展すると、III-B期のエビノコ郭正殿SB7701を画期と把握する説（[亀田 1987・菅谷 1987](#)）が現れた。小澤穂・林部均は、飛鳥宮跡III-B期を天武朝の淨御原宮に比定し、エビノコ郭（東南郭）正殿SB7701を史料上の「大極殿」と位置付けた（[小澤 1988・1997a・林部 1998](#)）。しかし、史料上の殿名の問題を除くと、エビノコ郭正殿SB7701から藤原宮大極殿への飛躍は大きく、孝德朝難波長柄豊崎宮とされる前期難波宮の中核部の構造が藤原宮の原型となったと考える説（[積山 2002・2009](#)）も根強い。山本忠尚は、エビノコ郭正殿の梁間3間庇付建物に関して、5世紀後半に出現し、7世紀以降に正殿になり、8世紀以降の天皇の内裏正殿へと繋がる系譜と指摘し、大極殿説に疑問を投げかけている（[山本尚 2004](#)）。また、鶴見泰寿はSB7701を大極殿ではなく、「朝堂」と位置付ける（[鶴見 2023](#)）。以上、大極殿の名称問題とは別に、構造的には藤原宮大極殿の登場を大きな画期と考える説が主流である。

前期難波宮に関しては、軒廊で接続する内裏前殿SB1801と後殿SB1603、巨大な内裏南門SB3301と東西八角殿（東SB875401／西SB4201）、内裏前殿東西の長殿（東SB1001／西SB1101）、広大な朝庭と14朝堂など、その「先進的」な構造が早くから注目されており、唐長安城太極宮との類似性、および藤原宮への系譜が指摘されてきた（[中尾 1995a・2014](#)）。孝德朝の難波長柄豊崎宮を画期と考える説は、文献史学の立場（[吉川 1997・西本 1998・2008・市 2020](#)など）でも強調されている。さらに、唐長安城太極宮と前期難波宮の比較に関しては、中枢部の「逆凸字形プラン」の共通性を指摘する積山洋（[図1上](#)）や、遣唐使を通じてたらされた太極宮の情報に基づく模倣を想定する村元健一の議論（[積山 2013a・村元 2020a](#)）も注目される。白雉3年（652）に完成した孝德朝難波長柄豊崎宮が、唐長安城太極宮をモデルとしており、その構造を基本として藤原宮が造営された点が有力視されつつあるといえる。

一方、前期難波宮における三朝制の採用や中国都城の模倣による「先進性」を強調する立場を批判し、推

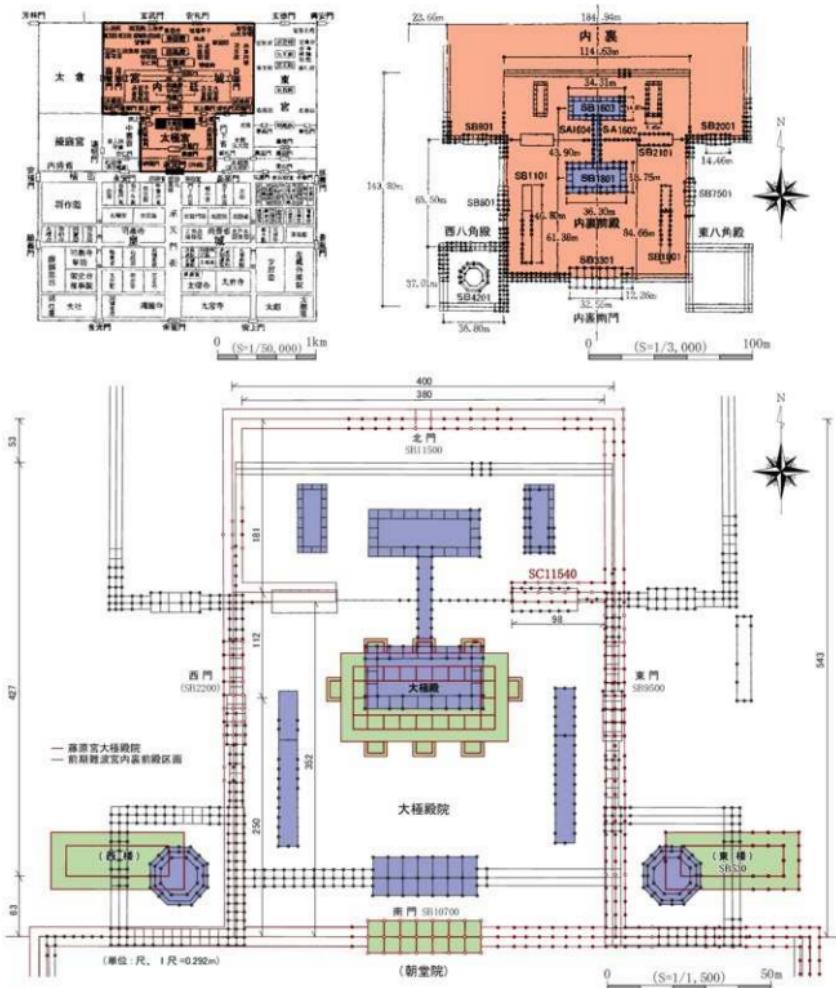


図1 唐長安城太極宮・前期難波宮の「逆凸字プラン」(上)と前期難波宮・藤原宮の比較(下)

古朝の小堀田宮など伝統的な王宮から日本都城の発展を考えるのが重見泰である。重見は飛鳥宮跡III期をa・b・cに細分し、III-a：後岡本宮（内郭の造営）、III-b：淨御原宮前半（内郭前殿SB7910／大安殿の造営）、III-c：淨御原宮後半（エビノコ郭造営／大極殿SB7701の造営）と整理した（図2）。その上で、前期難波宮内裏前殿SB1801は、天武朝の複都構想に基づいて増築された建造物とした。重見の議論は、天武12年(683)の複都制の詔を積極的に評価することで、淨御原宮エビノコ郭正殿SB7701と藤原宮大極殿の間の型式的距離を埋めようとする議論と把握できる（重見2020a・2023）。しかし、天武朝の部分的な殿舎の交替はあっても、孝德朝難波長柄豊崎宮の基本構造が天武朝に引き継がれたと考える説（家原2020・佐藤2022）が現在は主

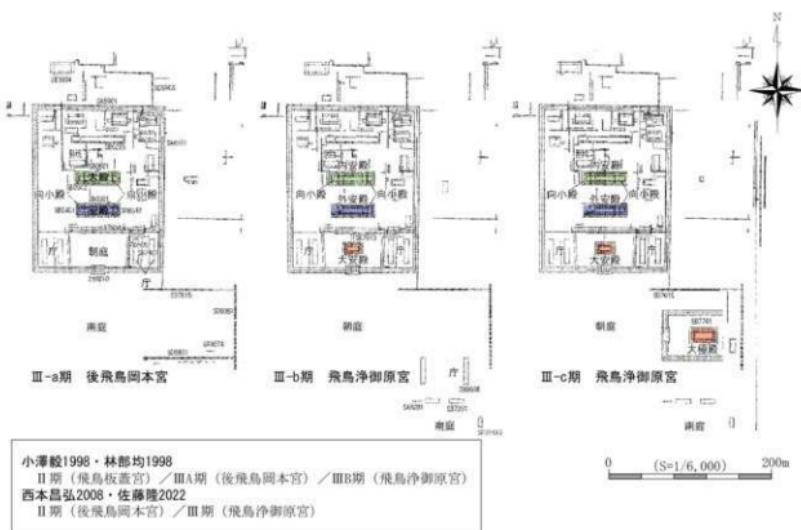


図2 重見泰による飛鳥宮跡III期遺構の殿舎比定

流である。しかし、前期難波宮の天武朝造営説（山中1986など）も古くから存在しており、今後も発掘調査の進展を踏まえて、飛鳥宮との比較研究や造営年代の議論が進むことが期待される。

以上、日本都城における大極殿の起源、すなわち藤原宮大極殿の系譜に関しては、前期難波宮・飛鳥宮の発掘調査の進展に伴って、議論が活発化している状況にある。近年では藤原宮大極殿院の発掘調査も進み、前期難波宮との構造比較（奈良文化財研究所2020）も進展しつつある（図1下）。また、藤原宮大極殿院東西の東樓（SB530）・西楼の系譜を前期難波宮内裏南門東西の八角殿院、あるいは魏晋南北朝期の太極殿東西堂に求める議論（竹内2009）など、宮城正殿に「附帯する施設」も併せて分析が進んでいる点も注目出来る。この点は、上野邦一が整理したように、中心建物周辺の莊嚴施設という枠組みでの通時的研究（上野2010）も重要である。ところで、大極殿の起源・系譜論では、各都城における中枢正殿の「建造物としての画期」が議論の対象となることが多く、必然的に各研究者によって強調する部分が異なる。しかし、歴代王権が伝統の継承と革新を繰り返して創造した都城は、その個別の存在自体が画期となるため、通時的・系統的・客観的な分析が重要である。前期難波宮・近江大津宮（林2001・吉水2020など）・飛鳥宮・藤原宮など、各宮城中枢部の比較研究を進めると同時に、藤原宮以降の大極殿の発展、あるいはそのモデルとなった中国都城中枢部との比較も含めて広い視野で議論する必要がある。

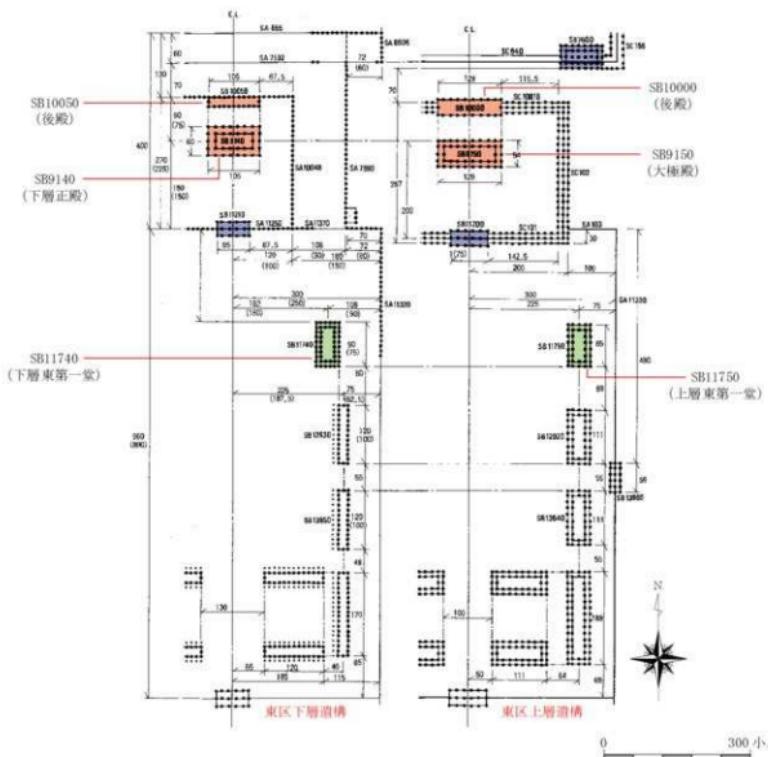
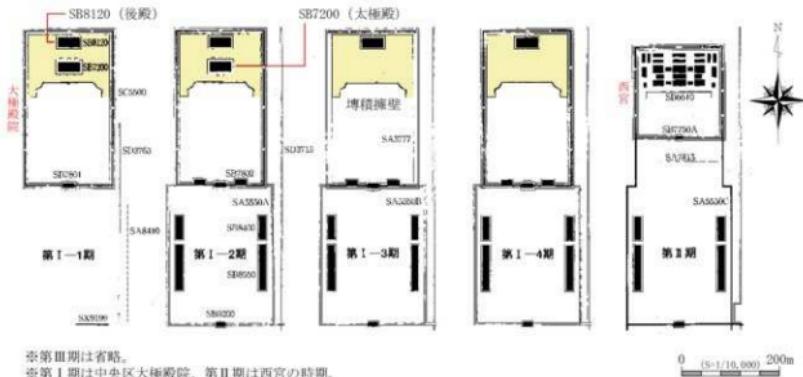
大極殿の発展・系統論 藤原宮以降の大極殿に関しては、積山洋が6つの特徴を挙げている。すなわち、①朝堂院の北側に位置する、②大極殿院を形成する、③基壇上に建つ、④9×4間（四面廂）建物となる、⑤桁行に対する梁行の比率が0.42～0.46となる、⑥礎石建ち瓦葺建物となる、の6つの特徴である（積山2013b）。特に、平城宮第一次大極殿（中央区大極殿）、および第二次大極殿（東区大極殿）の発掘調査の進展によって、唐長安城太極宮・大明宮との比較が可能となり、日本都城中枢部の研究が活発化した。日中都城の比較の際に重要なのが、平城京造営の契機となった栗田真人を執節使とする大宝遣唐使（新藏1995・河内1996・妹尾2020b）の存在である。現在では、大宝遣唐使が持ち帰った情報に基づいて平城京遷都が決定されたとする説が主流になっている（井上2008・2021、石川2010・2020など）。その主要な根拠になっているのが、平城宮朱雀門の中軸線上に造営された第一次大極殿院の空間構造が唐長安城大明宮含元殿の模



図3 奈良時代前半（上）と後半（下）の平城宮における天皇出御の儀礼空間

倣（狩野 1975・鬼頭 1978・浅野 1990）である可能性が高い点である。この点は、後述するように中国都城の側からも注目されている（王仲殊 1999・2000）。なお、日本における唐制の受容は奈良時代後半に本格化する点、天平勝宝度の遣唐使以降の報告で含元殿が登場して大明宮の日本への影響が決定的になる点から、平城宮造営時における大明宮の影響に関する過大評価を批判し、太極宮の模倣の可能性を指摘する意見もある（古瀬 1992・西本 2015）。

平城宮は東アジアで最も発掘が進められている都城だが、中央区・東区の2つの軸線をもつ特殊な中枢部の構造が発掘によって徐々に明らかになってきた（図3・4・5）。阿部義平による初期の中枢部把握（阿部 1974・1984）から、中枢部の機能や儀礼空間としての整理（岩永 1996）が進展し、特に豊富な文字史料を基にして中央区（図4上）・東区（図4下・5）のそれぞれの機能と変遷に関する研究が蓄積された。特に、大極殿院の機能に関する分析として後の研究に大きな影響を与えたのが、橋本義則による儀礼の分類である。橋本は、奈良時代の天皇が出御する儀礼を「大極殿出御型」と「閑門出御型」に分類した。前者は天皇が大極殿に出御し、大極殿門を挟んで朝廷に文武百官が列立する儀礼（即位儀・元日朝賀・任官・叙位・改元宣詔・告朔など）、後者は天皇が大極殿閑門（南門）に出御し、朝堂に集まる臣下と共に食する儀礼（節会・騎射・賜宴など）とする。その上で、平城宮「大極殿出御型」→平安宮「朝堂院出御型」、平城宮「閑門出御型」→平安宮「豊楽院出御型」の系譜関係を指摘した（橋本 1984・1986）（図3・6）。橋本の研究を受けた今泉隆雄は、平城宮中央区を儀式・饗宴の空間、東区を日常朝政の空間とし、大極殿・朝堂院での政務・



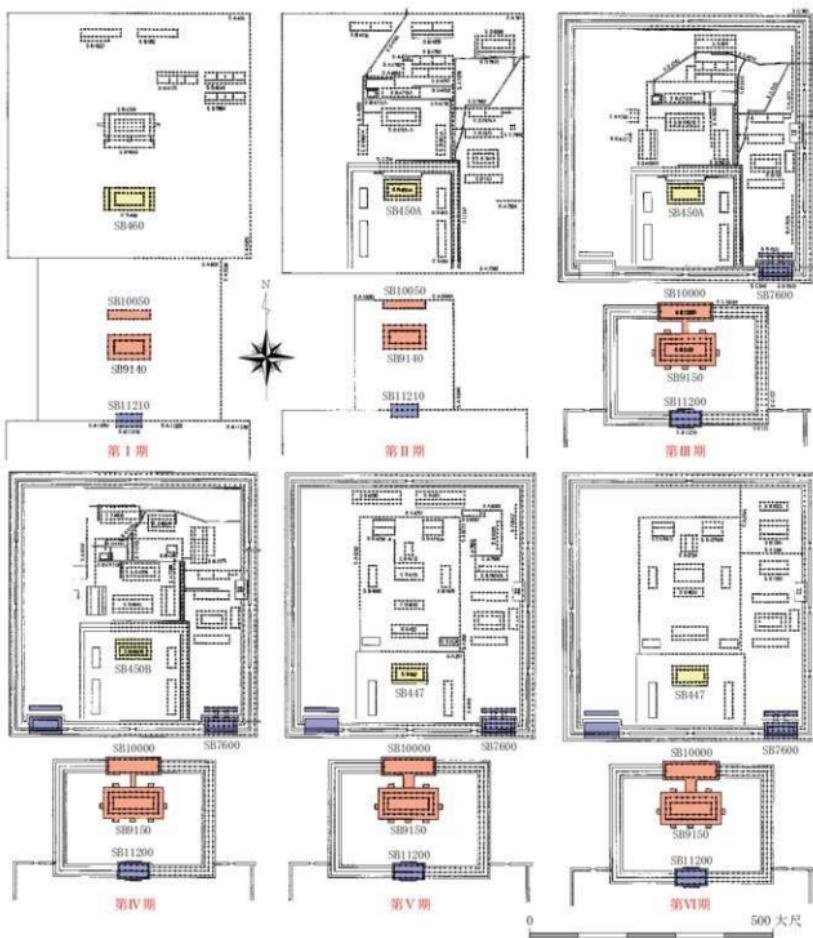


図5 平城宮内裏・東区大極殿院の変遷

儀式・饗宴を、それが行われた空間を踏まえて以下の4類型に分類した。すなわち、①大極殿一朝庭型（即位儀・朝賀）：中央区大極殿+朝庭、②大極殿一十二朝堂の朝庭型（告朔・選叙などの宣命宣布）；東区下層正殿・大極殿+十二朝堂・朝庭、③大極殿一十二朝堂型（朝政）：東区下層正殿・大極殿+十二朝堂・朝庭、④閑門一四朝堂型（饗宴）：中央区閑門+四朝堂、である（今泉 1980・1989・1993・1997）。なお、④の饗宴の場としての中央区大極殿閑門の役割は、奈良時代後半には東区大極殿閑門+十二朝堂に移行した点も指摘されている（小澤 2012）（図3）。なお、東区下層正殿SB9140に関しては、寺崎保広が大安殿に比定（寺崎 1984）したが、現在は上層の第二次大極殿SB9150への建て替え時期を孝謙天皇即位前後（740年代末～750年代前半）とし、奈良時代前半に東区下層正殿は中宮正殿の大安殿として中央区第一次大極殿と機能を分掌したと推定されるに至っている（山元 2015・渡辺 2020）。ところで、東区下層正殿SB9140を大安殿に

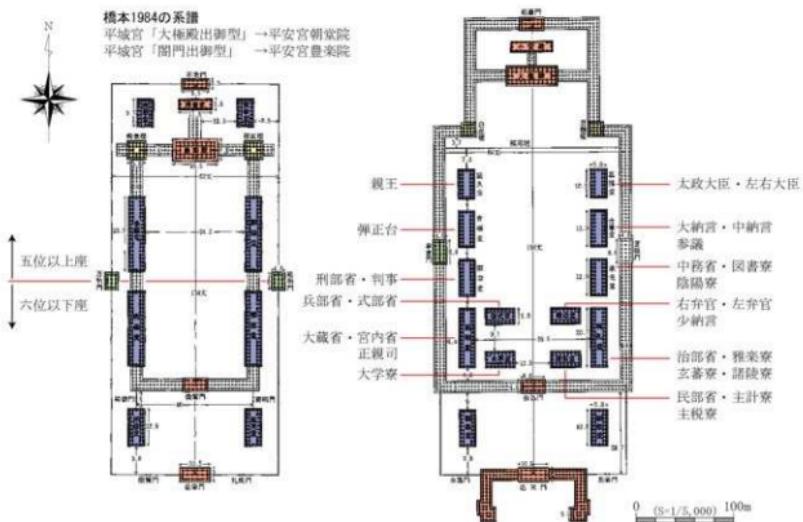


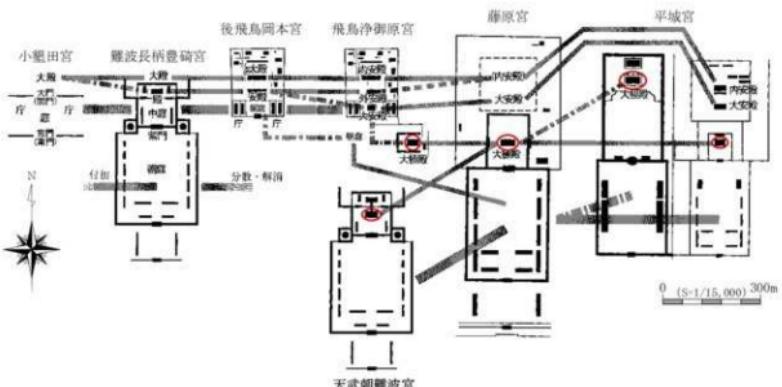
図6 平安宮の豊楽院（左）と朝堂院（右）

比定した寺崎は、平安時代には小安殿とも呼ばれた大極殿後殿についても考察し、藤原宮段階の後門から平城宮では堀・回廊が取り付く後殿となり、長岡宮・平安宮に至って回廊から独立する過程を想定した（寺崎 2006b）。なお、この点は近年の調査で藤原宮大極殿の後方至近で東西回廊と接続する後殿が検出され（報告：奈良文化財研究所 2023）、日本都城における後殿の系譜も議論されるようになっている（廣瀬 2023）。

橋本・今泉・寺崎・小澤の議論、および近年の発掘調査の成果を踏まえて、平城宮中枢部の歴史的位置付けを行っているのが渡辺晃宏である。まず、渡辺は中央区大極殿院西棟の調査で南面回廊基壇下の整地層から和銅3年（710）3月の荷札木簡が出土した点から、遷都時に第一次大極殿は未完成とし、和銅8年（715）の元日朝賀が大極殿の竣工を示す行事と推定した（渡辺 2003）。また、中央区朝堂院で称徳の大嘗宮が発見されたことを受け、中央区大極殿院II期の遺構を西宮に比定した上で、諸説あった中宮を東区内裏・下層正殿とし、寺崎保広の説に基づき中宮正殿を大安殿と呼称していた点を推定した（渡辺 2006）。また、平城宮第一次大極殿を即位儀・元日朝賀儀・蕃客辞見の舞台空間とし、壇上の大極殿（天皇の場）と階下の庭（臣下の場）によって、身分秩序を演出する空間であった点を強調した。一方、東区下層正殿：大安殿は日常政務の空間として、第一次大極殿とその機能を分掌したと考えた。さらに、奈良時代前半における第一次大極殿と東区下層正殿の二者については、飛鳥淨御原宮の内郭前殿SB7910（外安殿 or 大安殿）とエビノコ郭正殿SB7701（大極殿）が藤原宮で一元化された後に、平城宮段階で再び分化したものと位置付けた（渡辺 2009）。すなわち、日本的な日常政務空間（内裏前殿の系譜）と中国的な儀礼空間（大極殿の系譜）の統合に苦心していた段階を経て、遷都後に初めて平城宮東区の第二次大極殿で統合が実現すると整理した（渡辺 2020）。飛鳥淨御原宮エビノコ郭正殿SB7701を大極殿成立の画期と見る点は、前述の重見泰の議論とも共通するが、日本都城中枢部の変遷を内裏正殿・内裏前殿・大極殿の系統関係から読み解こうとする両者の視点が、現段階での最新研究（重見 2020a pp.158-159 第23図／渡辺 2020 p.12図7）といえる（図7）。

大極殿の構造・分類研究 ここまで大極殿の空間構造を中心とした研究史を整理したが、大極殿の建造物としての構造分析や遺構自体の分類研究も非常に重要である。

平城宮第一次大極殿の構造に焦点を当て、移建の問題を扱ったのが小澤毅である。小澤は、平城宮第一次



緑：日常公務空間（内裏前殿の系譜）

橙：儀礼空間（大極殿の系譜）

赤：両者の統合空間

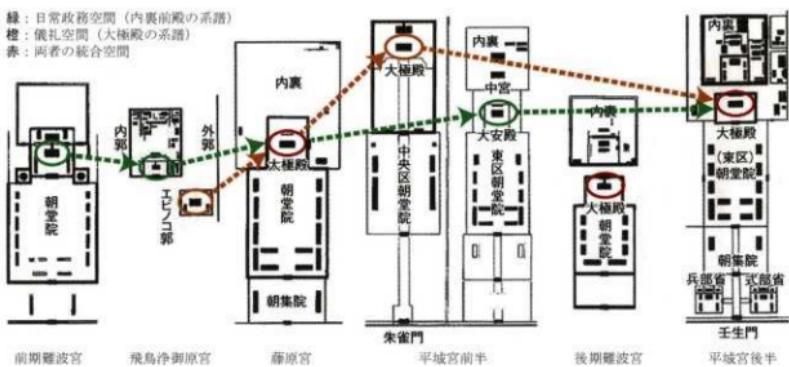


図7 重見泰（上）と渡辺晃宏（下）による日本都城中枢部の変遷案

大極殿 SB7200：桁行9間・梁行4間（四面廂）の調査成果を再検討し、桁行長總149尺（身舎17尺等間・廂15尺）・梁行長總66尺（身舎18尺等間・廂15尺）に復原した。その上で、藤原宮大極殿・恭仁宮大極殿が同規模である点に注目し、藤原宮大極殿→平城宮第一次大極殿→恭仁宮大極殿の移建を想定した（小澤1993）。また、平城宮第一次大極殿の南面階段にも注目し、学報XVII（報告：奈良文化財研究所2011）の中央1段階説を批判し、学報X I（報告：奈良国立文化財研究所1982）の3段階→1段階改造説を追認した。藤原宮大極殿が南面3段階である点、興福寺中金堂が南面3段階から幅広い1段階に改造された点を根拠とし、天皇が大極殿南門での饗宴儀礼の際に南面階段から埠積擁壁木階を降りて出御した可能性も指摘した（小澤2020）。陽明文庫所蔵宮城図所載八省院指図・年中行事絵巻所載朝堂院絵図・朝賀絵図（福山1957 図版63・67・70）で判明している平安宮大極殿の南面階段は3段階である一方、唐長安城太極宮太極殿は東階・西階の2段階（藤森2000・吉田2006）であるように、南面階段は儀礼空間としての大極殿の利用方法、あるいは皇帝・天皇の権威を象徴する役割を果たす重要な要素である。平城宮第一次大極殿の基壇に関しては、寺院や中国の事例との比較（報告：奈良文化財研究所2009）も行われているが、平城宮第二次大極殿以降、建築平面や基壇規模が縮小する方向が指摘されている（平津2002など）。平城宮第二次大極殿SB9150、後期難波宮大極殿SB1321（澤村1995）、長岡宮大極殿（後期難波宮大極殿からの移建とされる）（中尾1995b・積山2013b）は、いずれも後殿と軒廊で結ばれた「工字形」を呈し（図8）、藤原宮大極殿→平城宮第一次

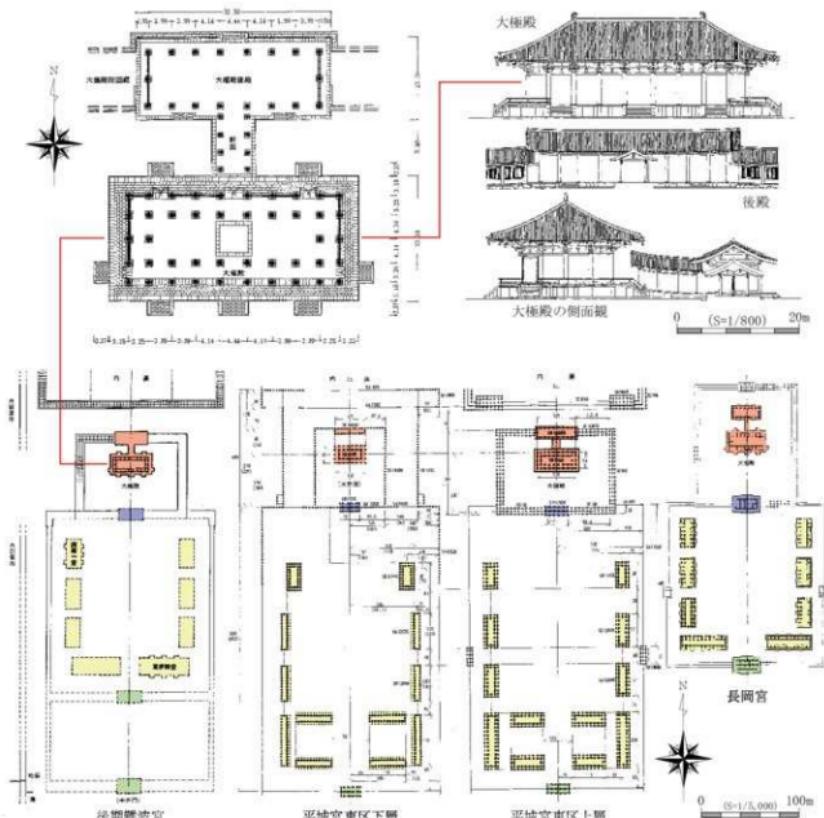


図8 後期難波宮大極殿・後殿の復原（上）と平城宮・長岡宮の比較（下）

大極殿→恭仁宮大極殿と移築されたと考えられる建造物に比べて小型化している。

以上のように、藤原宮以降の大極殿に関しては、移建による建造物としての直接的な系譜関係が想定される例がある。しかし、唐招提寺講堂（平城宮東区朝集院の東朝集堂の移建）例が示すように（奈良文化財研究所 2006b）、建造物としての移建は必ずしも機能上の系譜と一致するわけではない。そのため、発掘された大極殿の構造に関しては、あくまでもそれぞれの平面構造や空間配置に基づいて分類が行われてきた。代表的な研究として、鬼頭清明・積山洋・吉田歎の研究がある。まず、鬼頭清明は日本の大極殿を中国の太極殿と比較した上で「構造的に形式分類」し、以下の3分類を設定した。すなわち、①前期難波宮型、②平城宮第一次大極殿型（+長岡宮大極殿・平安宮大極殿／唐長安城大明宮含元殿の模倣形式）③藤原宮大極殿型（+平城宮第二次大極殿・後期難波宮大極殿／唐長安城太極宮太極殿の模倣形式）である（図9）。その上で、藤原宮成立段階（694）には、含元殿（662）が存在していたものの、白村江の戦い（662）以降は太極殿（617-）の情報しか参考に出来ず、大宝遣唐使（701）の派遣によってもたらされた大明宮の情報によって、第2形式が出現したと考えた（鬼頭 1978・2000）。次に、積山洋は大極殿と内裏・朝堂との関係を整理し、6分類を設定した。すなわち、①内裏前殿A型（前期難波宮内裏前殿・後岡本宮内郭前殿・藤原宮大極殿）、②内

【鬼頭による大極殿の分類】

①前期難波宮型

②平城宮第1次大極殿型

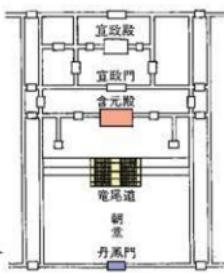
- 唐長安城太明宮含元殿の模倣
- 長岡宮大極殿
- 平安宮大極殿

③藤原宮大極殿型

- 平城宮第2次大極殿
- 後期難波宮大極殿



※縮尺は原図と同じ。



第2型式の原型（大明宮含元殿）



第3型式の原型（太極宮太極殿）

図9 鬼頭清明による大極殿の分類とその系譜

裏前殿B型（平城宮東区下層正殿・第二次大極殿）、③朝堂院正殿A型（後期難波宮大極殿・恭仁宮大極殿）、④朝堂院正殿B型（平城宮第一次大極殿・長岡宮大極殿）、⑤朝堂院正殿C型（平安宮大極殿）、⑥単独型（エビノコ郭正殿）である。その上で、内裏前殿期（①⑥）一大極殿Ⅰ期（①）→一大極殿Ⅱ期（②③④）一大極殿Ⅲ期（⑤）の4時期に区分した（積山2013b）。上記分類に関しては、鬼頭が中国における正殿の系統から分類を行っているのに対して、積山は内裏正殿（前殿）から成立した大極殿が朝堂院との結びつきを強める国内の変遷に着目している点に違いがある。両者の視点の違いにより、結果として大極殿の分類に大きな差異が生まれる点も興味深い。最後に、天皇の大極殿への出御方法を中国と比較する作業を踏まえて、大極殿を後殿との関係性から分類したのが吉田歓である。吉田は、平安初期の『内裏儀式』において、冕服を着た天皇が小安殿から四幅布卓が敷かれた軒廊を通り、大極殿に出御して高御座に着座する点を整理した。一方、中国皇帝は『大唐開元礼』によると、輿で閣門を出て太極殿内の西房経由で御座へ出御し、東房を経て還御する。この在り方は、前漢における前殿内の「房」から輿に乗って出御する方式の系譜を引くとされるが、南朝梁では輿に乗った皇帝が太極殿前まで来て、自ら階段を登って御座についたように太極殿東西堂の存在により出御方法が変化した点を想定する。吉田によると、中国の「後房」が大極殿と別棟である点が日本の特徴であり、日本の「工字殿」は「柱廊」で主殿と後殿を結ぶ北宋以降の工字形正殿とは異なり、日本独自に生み出されたものとされる。このような整理を踏まえて、吉田は日本の大極殿を後殿との関係から3つに分類した。すなわち、①内裏正殿と結合するタイプ（前期難波宮内裏前殿）、②後殿・後門が大極殿院回廊あるいは墀に取り付くタイプ（藤原宮大極殿・平城宮東区下層正殿・後期難波宮大極殿・平城宮第二次大極殿）、③後殿が大極殿院回廊から独立するタイプ（平城宮第一次大極殿・長岡宮大極殿・平安宮大極殿）である。中でも天皇の冕服の着用が開始された時期：後期難波宮大極殿・平城宮第二次大極殿の軒廊の存在を重視し、それが長岡宮・平安宮へ続くと考えた（吉田2006）。天皇の出御方法も踏まえて、大極殿を後殿との関係性という視点から分類した吉田の②類は鬼頭の藤原宮大極殿型、③類は平城宮第一次大極殿型に対応しており、ともに中国都城を比較対象とする両者が同じ分類案を示している点は重要である。東アジア都城の正殿の比較を試みる本論においては、鬼頭・吉田の研究が出発点になる点を明記しておく。

大極殿の思想背景 日本の大極殿が、中国の魏晋南北朝～唐代の宮城正殿である太極殿から命名されている点は明らか（王仲殊2003）だが、岸俊男が古く整理したように「太極は太一ともいい、天地萬物の根源を意味し、宇宙の本體であることから、天を支配する神で、占星思想にいう紫微宮の中心に常居する星」（岸1977 p. 3）で、太極殿は天命思想に基づいて世界を支配する中国皇帝の正当性を象徴する宮城の正殿である。一方、日本大極殿は、天武朝～持統朝における日本の国号・天皇号の確立、大嘗祭・即位式の整備など、日本的な君主の地位が確立する中で「太極殿」ではなく「大極殿」と故意に名称を違えたという説もある（岩永2008 p. 473）。大極殿の思想背景については、特に平城宮第一次大極殿に焦点を当て、中国との比較から設計思想や統治理念を追求した内田和伸の研究がある（内田2011）。なお、大極殿を含めた宮中枢部の構造

を中国と比較する際に、重要とされてきたのが三朝制に基づくアプローチである。

玄宗期に成立した『唐六典』(卷七、尚書、工部)には、唐長安城太極宮の承天門・太極殿・両儀殿以下に記載がある。すなわち、①「若元正冬至大陳設、燕會、赦過宥罪、除旧布新、受万国之朝貢、四夷之賓客、則御承天門、以聽政。蓋古之外朝。」②「其北曰太極門、其内曰太極殿、朔望則坐而視朝焉。蓋古中朝也。」③「又北曰両儀門、其内曰両儀殿、常日聽朝而視事焉。蓋古之内朝也。」である。『唐六典』に記載される三朝は、周制の三朝（燕朝・治朝・外朝）とは異なり、玄宗期に実際に存在した殿舎を周制に当てはめて解釈したもの（吉田 2002・村元 2020a・豊田 2020）だが、唐太極宮・大明宮の「三朝」と日本都城中枢部の対応関係を整理した研究は非常に多い（岸 1977a・中尾 1995a p. 179 第38図・金子 2007 p. 64 図13・山田 2007 p. 172 図18など）。例えば、今井晃樹は奈良時代前半の平城宮に関して、唐長安城太極殿・大明宮の対応関係も踏まえた上で、丹鳳門・中央区朝堂院南門・承天門・含元殿（外朝）：第一次大極殿院+中央区朝堂院・太極殿・宣政殿（中朝）：東区下層正殿+東区下層朝堂院・両儀殿・紫宸殿（内朝）：内裏の対応関係を示した（今井 2012 p. 948 表1）。周礼・三朝制など、抽象的な思想背景から実態として存在する都城中枢部の構造を比較・解釈する方法論には十分な注意が必要と考える（城倉 2021 p. 187）が、唐長安城と渤海・日本などの各国都城を比較する際の視点として、三朝制が注目されてきた点は重要である。

大極殿閣門・左右樓閣・龍尾道（壇） 前述したように、天皇の大極殿への出御に連して、大極殿の南面階段、あるいは後殿という附帯施設が果たした役割は重要である。藤原宮以降の大極殿に関しては、回廊・築地回廊で囲繞された単独の「大極殿院」（平安宮のみ12朝堂と一体化して「朝堂院・八省院」）を形成するため、院内の構成要素も含めた分析が必要になる。具体的には、大極殿院南門（閣門）・南面左右樓閣・殿前広場・龍尾道（壇）・回廊・後殿などが挙げられる。ここでは、専論が存在する大極殿閣門・左右樓閣・龍尾道（壇）の研究史に関してのみ、簡単に整理する。

大極殿院の南面中央門は、閣門とも呼ばれ、奈良時代においては橋本義則の「閣門出御型」（橋本 1986）に分類される大極殿と並ぶ重要な天皇出御の空間である。大極殿院南門に出御した天皇は、朝庭に南面し、左右朝堂に着座する臣下と共に食する（饗宴儀礼）。日本における大極殿院南門については、既に詳述した（城倉 2021）ので省略するが、文字史料から呼称を整理した市大樹も大極殿院南門が持つ多様な機能を強調している（市 2021）。特に、藤原宮で成立し、奈良時代に発展した饗宴儀礼の空間としての大極殿院南門については、山下信一郎の研究が特筆される。山下は、橋本義則の「閣門出御型」を継承しつつ、天皇が大極殿院南門に出御する場合だけでなく、内裏に出御して五位以上の官人を内裏に宴し、六位以下官人を朝庭に饗する形態がある点を指摘する。この場合、天皇は大極殿院南門には出御しないが、大極殿院南門は「同門を挟んだ内外空間とその場の参列者を、物理的かつ精神的に媒介・結合する重要な役割を果たす」ことになる。この形態の儀礼を「閣門出御型」から分離し、山下は「閣門介在型」饗宴儀礼として類型化した。また、藤原宮・平城宮で重要な役割を果たした大極殿院南門は、本来的には大王宮の内裏「大門」に由来し、7世紀に併存していた「内裏・朝庭系」と「広場・苑池系」儀礼が、藤原宮大極殿院南門の成立によって前者に統一される過程を想定した（山下 2018）。藤原宮以降の大極殿院南門・朝堂を中心とする饗宴儀礼に関しては、山元章代・志村佳名子も整理しており、奈良時代前半の平城宮中央区4朝堂が平安宮豐楽院と同じく様々な階層・人数の臣下を着坐させられる汎用性の高い構造である点（山元 2020）、奈良時代後半には饗宴の場が東区朝堂に一本化され、長岡宮・平安宮に至って機能分化しながら内裏紫宸殿を中心とする日本的な饗宴儀礼の空間が成立していく過程（志村 2015）が指摘されている。

平城宮大極殿院南門の左右には、東樓 SB7802・西樓 SB18500 の存在が知られている。浅野充は、この左右樓閣について、唐長安城大明宮含元殿の樓鳳閣・翔鸞閣を模倣した点を指摘し、平城宮中央区を「中華を体現する場」と位置付けた（浅野 1990）。なお、上野邦一は平城宮中央区大極殿院南門の東西楼だけでなく、東区大極殿院の東西で内裏内部に位置する樓閣（東樓 SB7700）にも注目し、中心建物の前面左右などにおいて中心を莊厳化する樓閣の重要性を強調した（上野 2010）。この点に関しては、山田邦和も「樓閣附設建築」の重要性を指摘し、桓武天皇が唐長安城承天門・含元殿を模倣して、長岡宮・平安宮に营造した建造物と位置付けている（山田 2007）。大極殿・大極殿院南門周辺の樓閣建築に関しては、異なる系譜を持ついく

つかのタイプに分類できる点は既に指摘した（城倉 2021 p.181）ところだが、その構造・機能だけでなく、中国都城におけるモデルの追究なども視野に分析を蓄積する必要がある。

なお、大極殿と大極殿南門の間に存在する重要な施設として、龍尾道（壇）がある。その名称が示す通り、高宗龍朔 3 年（663）に落成した大明宮正殿・含元殿前の龍尾道（安家福 2005a・b など）をモデルとしたもので、平城宮中央区大極殿・平安宮大極殿前に存在する点が知られる（王 1999・2008a）。平安宮では「龍尾壇」と呼ばれたが、発掘調査では明確な形として遺構が確認されているわけではない（京都市文化市民局 2019）。一方、平城宮中央区の第一次大極殿前では長方形の壇を積んで構築した堆積擁壁（内田 2002）が検出されており、中央を隔離し、左右斜路から臣下を登壇させる唐長安城大明宮含元殿前の龍尾道を模倣した構造が確認されている。唐皇帝の隔離した権力を象徴的に可視化する舞台装置として著名な龍尾道であるが、平城宮中央区大極殿前の堆積擁壁の正面部分には木階が検出されている。王仲殊はその存在を疑問視しており（王仲殊 1999）、学報 X VII でも天皇が大極殿を降りることはないとするが（報告：奈良文化財研究所 2011）、小澤毅は饗宴儀礼の際に天皇が、第一次大極殿南面 3 階段の中央、および堆積擁壁木階を降りて出御する可能性を指摘している（小澤 2020 p.484）。この点に関しては、内田和伸も「堆積擁壁正面中央には天皇が南門に出御するときに使うと考えられる、掘立柱でできた木製階段の遺構」が存在すると言及しており、同様の想定をしている点がわかる（内田 2011 p.6）。後述するように平安時代の『儀式』（渡辺校注 1980）によると、元日朝賀儀・即位儀において、大極殿南面中央階段を使用するのは確かに皇太子だけだが、唐長安城太極宮太極殿では南面中央階段自体が存在しておらず（藤森 2000 など）、モデルとなった唐代都城との構造・機能面の差異も含めて大極殿周辺の施設を分析する必要がある。

宝幢四神旗の研究 上記の大極殿周辺の建造物に対して、大極殿前に元日朝賀儀・即位儀に際して設置される臨時の施設もあった。『文安御即位調度図』にも描かれ、大極殿の南 15 文 4 尺に樹てる銅鳥幢・日像幢・月像幢（宝幢）、および四神旗である（図 14 下左）。宝幢四神旗は、朝堂に囲まれた朝庭、あるいは大極殿前の殿庭部分で 7 基の「幢旗遺構」として検出される。『続日本紀』大宝元年（701）正月乙亥朔条には、「天皇御大極殿受朝、其儀於正門樹烏形幢。左日像・青龍・朱雀幡、右月像・玄武・白虎幡。蕃夷使者、陳列左右。文物之儀、於是備矣。」とあり、藤原宮の元日朝賀で正門（大極殿南門）前に「幢幡」が樹てられたことがわかる。「幢幡」（以下、宝幢もしくは幢旗遺構と記載する）樹立は唐の儀仗制度を範として成立したとされ、藤原宮朝堂院朝庭から大極殿前庭へと移動した点が判明している（志村 2019）。中国古代の神話にある日像（太陽の中に赤鳥）、月像（月の中に菟・蟾蜍・桂樹）、あるいは四神に対して、日本は八咫鳥を銅鳥幢の形で配置する点が独自であり、倭国の自己認識を表現したものとされる（西本 2017）。

発掘で検出された幢旗遺構の研究に関しては、平城宮第二次大極殿前で検出された 2 期分の遺構に関して、光仁（770 年）・桓武（781）の即位に関する点が指摘されていた（報告：奈良国立文化財研究所 1993）が、即位した天皇がいない長岡宮大極殿前で中軸から左右対称に展開する 7 基（確認されているのは 5 基）の幢旗遺構が検出され、元日朝賀での使用が指摘されるようになった（図 10 下右）（山中 1997）。長岡宮の事例を検討した吉川真司は、兵庫寮・木工寮が「幢柱管」を大極殿前庭に設置するという史料を踏まえ、宝幢柱根元の「筒状固定具」が常設されており、即位儀・朝賀儀に幢旗が使用された可能性を指摘した（吉川 1999）。また、西本昌弘は、平城宮第一次大極殿 II 期（西宮）の正殿 SB6611 前の SB7141 を 2 列の幢旗遺構とみなし、称徳の西宮での朝賀の際に使用されたと推定した（西本 2004）。これに対して、平城宮第二次大極殿の報告者である金子裕之は吉川説を中心に反論を行い、第一次大極殿地区の SB7141 を幢旗遺構と見る説も否定した（金子 2002）。しかし現在は 1 回の掘削で常設の「幢柱管」を設置し、元日朝賀・即位儀などで複数回樹立する吉川説が有力と見られており、平城宮西宮の SB7141 も幢旗遺構と結論づけられている（海野 2014）。最近の研究では、大澤正吾が幢旗遺構を集成し、その変遷をまとめている。大澤は、藤原宮大極殿南門前で検出された中央 1 基の大型柱穴（鳥形幢）の東西に 3 基の柱穴がセットになる（西：月像・玄武・白虎幡／東：日像・青龍・朱雀幡）ものを最古型式と位置付けた。その上で、平城宮中央区第一次大極殿前面の堆積擁壁上において第 69 次調査で検出された遺構を再検討し、主柱に対して 2 本の脇柱が付随する 3 本柱構造の幢旗遺構を 7 基推定し、新しい型式が平城宮遷都段階の中央区大極殿で達成されたと指摘

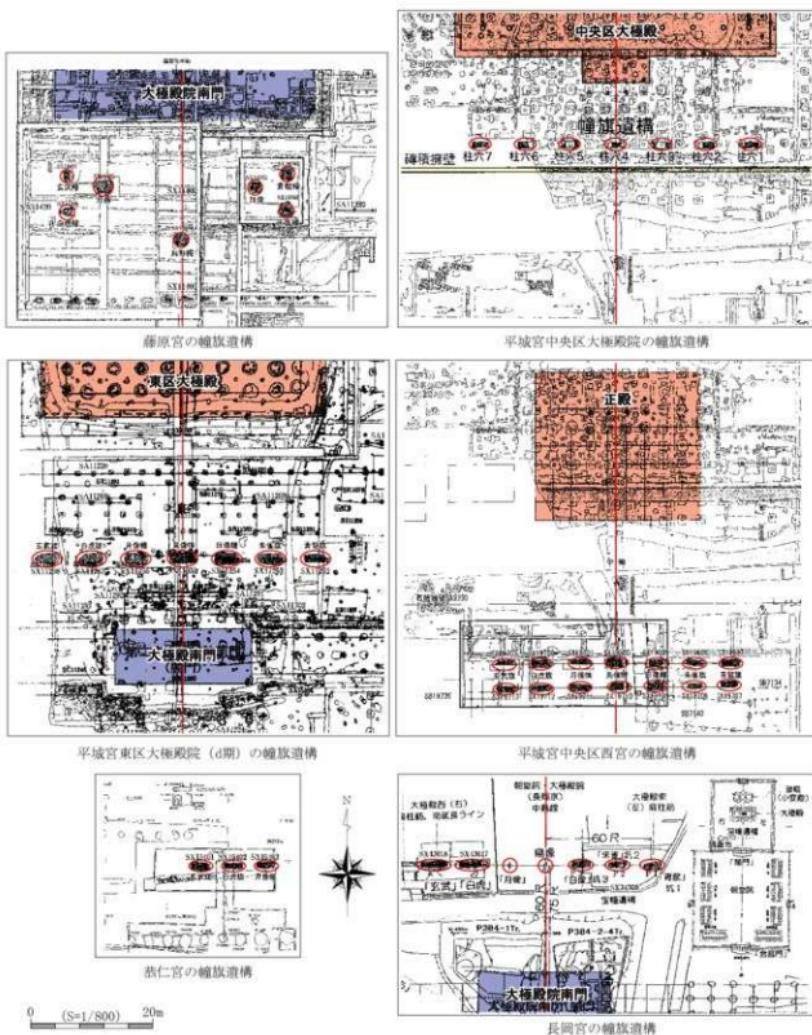


図 10 発掘された日本都城の幡旗遺構

した（大澤 2019a・b）（図 10）。また、古川匠は恭仁宮朝堂院地区で検出された幡旗遺構に注目した。恭仁宮では、天平 13・14・15 年の元日朝賀のうち、15 年は大極殿で行われた点から、幡旗遺構北西で確認された SB11000（掘立総柱の櫻闇遺構）を仮設大極殿の西廻と推定している（図 59）（古川 2020a、報告：古川 2020b）。

以上の大極殿前に樹立された宝幡・四神旗以外にも、平安宮における元日朝賀儀・即位儀に際しては、八省院北門から朱雀門外までの各所に幡が立てられたことが知られており（福山 1957 図版 70 朝賀絵図など）、

これらを総体として把握するべきという指摘もある（山本 2012 p.103）。また、奈良時代の元日朝賀儀・即位儀に際しては、朝堂院南門前に櫛・鉾を樹てることも知られており、平城宮南西隅のSE1230の井戸枠が隼人の威儀用櫛と一致する点も指摘されている（竹森 2015など）。大極殿周辺の建造物以外にも、儀礼に関わる遺構・遺物の更なる研究が必要である点が理解できる。

朝堂院の研究 大極殿・大極殿院を中心として、その構成要素毎に研究史を整理してきたが、関野貞が大極殿を「朝堂の正殿」（関野 1907）としたように、日本都城において大極殿院と朝堂院は密接に関係しながら発展した。ここでは、朝堂院の平面配置や中国朝堂との比較を行った研究を中心にまとめておく。

関野貞の研究以来、朝堂は儀式の場とされてきたが、岸俊男は推古朝小畠宮で大門前の朝庭を囲む「序」がその起源である点を指摘し、朝堂が持つ朝參・朝政・朝儀の3機能の中でも、本来は朝政の場である点を強調した（岸 1975）。岸の指摘を受けた鬼頭清明は、天皇が居住する場に「庭」があり、朝堂院に転形したとし、藤原宮の12朝堂で基本構造が完成した点を整理した。また、中国漢代では宮城内、唐代では宮城正門前に朝堂が位置する点から、日本朝堂は集議の場である漢～魏晋南北朝の朝堂に近く、王權が未成熟な日本では貴族層の合議が政治的に重要だった点を指摘した。その上で、律令官制の整備に伴って朝座を持つ官司の数が拡大し、日本独自の12朝堂となった点を推定した（鬼頭 1984）。橋本義則は、各都城の朝堂の規模に注目し、前期難波宮・藤原宮では東西第一堂が特別の規模・構造を持つ点を指摘した。平城宮以降は第一堂も他の諸堂と規模が同一となり、長岡宮・平安宮にかけて建物の格が下がる傾向から、朝政の盛衰と関わる点を整理した。さらに、奈良時代の平城宮で行われた儀式を天皇が出御する場を基準として整理し、「大極殿出御型」と「閑門出御型」を指摘した点は前述した通りである（橋本 1986）。平城宮東区朝堂院の遺構を検討した寺崎保広は、下層朝堂において第一堂のみが四面廊で中軸寄りに位置するのに対して、その他の朝堂は片廊であり、前期難波宮・藤原宮の特徴を継承し、第一堂の格が高かった点を追認した。第一堂は大臣の堂であるだけでなく、朝政が始まるとき議政官が集まる重要な堂であったとする。また、奈良時代前半においては、中央区朝堂院が儀式・饗宴の場であったのに対して、東区朝堂院が朝政の場であった点を指摘する。しかし、奈良時代後半の東区朝堂院上層以降においては、後期難波宮・長岡宮・平安宮と朝堂全体が均質化する変化の方向性を整理した（寺崎 2006a）。また、前述したように今泉隆雄は、橋本義則の「大極殿出御型」「閑門出御型」の指摘を受けて、平城宮中央区・東区に分けて、朝政・朝儀の空間を整理した（今泉 1989）。なお、金子裕之は、以上とは異なる視点で大極殿・朝堂院の関係性を整理し、「藤原宮型」と「平城宮型」に分類した。すなわち、前者は大極殿・朝堂院が中軸上で南北に位置する類型（+後期難波宮・長岡宮）、後者は大極殿・朝堂院の軸線が2つ並列する類型（+平安宮）で、「平城宮型」は唐長安城の太極宮・大明宮を原型とすると考えた（金子 1996）。

以上、朝堂を朝儀の場（関野 1907）、朝政の場（岸 1975）とする議論は、今泉隆雄によって統合され、平城宮東区・中央区朝堂院という場に結び付け整理された（今泉 1989）。一方、吉川真司は、少なくとも8世紀前半には五位以上の官人は原則毎日、朝堂で天皇に侍候しており、これが朝堂の本質的機能だと指摘する。しかし、朝堂=五位以上官人の侍候空間という機能は、長岡宮段階では失われつつあり、大極殿・朝堂院は国家的儀礼の場として純化したとする（吉川 1996・2005）。山元章代は、藤原宮段階から朝堂院での朝政は官人によって自律的に運営され、重要事項のみが内裏で奏上されたとし、朝堂院における朝政は理念上「百官庶政」にあった点を想定する（山元 2010）。志村佳名子は、日本王宮における伝統的な政務・儀礼空間である大王居所前の「庭」が、中国都城の「朝堂」の影響を受けて、藤原宮で大極殿に接続する施設へと展開したと指摘した。また、奈良時代前半の平城宮では中央区・東区が機能によって使い分けられたが、後半以降は東区朝堂に一本化される点から、内裏と繋がる東区朝堂院が本来的な朝堂と推定した（志村 2015）。なお、朝堂院南側の朝集堂に関しては、岸俊男が唐長安城大明宮建福門外の百官待漏院と同じ機能を想定しているが（岸 1975）、近年、馬場基が朝堂院に包摂されない集団=国司・郡司など「外官」のための空間とする説を提唱している（馬場 2018）。

ここまで研究史が日本での朝堂院の発達を位置付けているのに対して、その語源ともなった中国の朝堂との比較を行った研究もある。佐藤武敏は、中国における朝堂の歴史について整理した。すなわち、前漢

未央宮の庭中 2か所に存在した朝堂は儀礼と集議の場であり、後漢・魏晋南北朝に引き継がれるが、徐々に儀礼の場としての性格を強めていく。唐長安城では太極宮正門の承天門前、大明宮正殿の含元殿前に肺石（東）・登聞鼓（西）と共に、東西朝堂が置かれた。その機能についても、賓礼・軍礼・嘉礼など儀礼が中心で訴訟・裁判などは行われたが集議の場ではない点を整理し、東宮朝堂・命婦朝堂が別に存在した点も指摘した。その上で、12 堂を基本とする日本の朝堂は中国をモデルにしながらも独自性が強く、機能的には魏晋南北朝の朝堂に近いとした。しかし、系譜的には隋唐朝堂をモデルにした可能性が高く、外朝（太極宮承天門・大明宮含元殿）・朝堂・皇城の 3つと一緒にして、朝堂・曹司という形に変えた可能性を指摘した（佐藤 1977）。なお、中国で実際に発掘された朝堂の事例は、大明宮含元殿前の東朝堂に限られる（馬得志 1987）ものの、文字史料は比較的豊富で山崎道治がその用例を集成して整理している（山崎 1996a・b）。日本朝堂の起源を中国都城と比較して考えた秋山日出雄は、東魏北齊鄴城で太極殿が「南進」して中朝化し、唐では宮城正門前に出てくるが、日本で太極殿南門前に朝堂があるのは隋唐制度の漸次的移入とした。また、「日本宮室の朝堂は、太極殿門外（原文ママ）の左右至近にある建物であり、それは平安官八省院=朝堂院で云えば、昌福堂・延休堂にあたる。一中略一。藤原宮や前期難波宮でも、十二堂北端の二堂が他の建物よりも梁間が大きいのはこのことに関係がある。」とし、「中国朝堂が宮門外に進出して尚書省と一体となつたのが、我が八省院=朝堂院の祖型となったと考えるが如何であろうか」と結論づけた（秋山 1981）。藤原宮大極殿院南門における赦宥儀礼の廃止記事から、大極殿院南門が唐長安城太極宮承天門に比定されていた点は佐竹昭が指摘している（佐竹 1988・1998）が、前期難波宮に関しても中尾芳治が三朝制の観点から唐長安城太極宮との比較を行い、内裏南門を唐外朝承天門にあたると指摘している。また、中尾は、前期難波宮の 14 堂のうち、東西第一堂が本来の朝堂であり、第二堂以下が日常的な政務のための「序」と考えた（中尾 1995a p. 181）。しかし、近年は考えを変更しているようで、前期難波宮内裏前殿前の東西長殿（SB1001・SB1101）こそが唐代朝堂をモデルにしたものとし、14 朝堂を唐長安城太極宮に対置させれば、「皇城」となる宮衙地区であると指摘している（中尾 2014 pp. 208-215）。なお、前期難波宮内裏前殿 SB1801 の前面東西の長殿に関しては、前述したように魏晋南北朝期の太極殿東西堂に起源があるという岸説（岸 1977a・b）もある。また、内裏前殿 SB1801 と後殿 SB1603 の間の東西に存在する建物（東：SB2101）に関しては、長安城太極宮太極殿東西の上閣門に該当するという説もある（積山 2013a p. 68）。さらに、飛鳥宮における朝堂の存在に関して、空間構成を中心に検討されている（亀田 2000・林部 2001・小澤 2003）点も付言しておく。

ところで、日本の朝堂（院）を「皇城」と考える説は中国人研究者の王仲殊も指摘している。王仲殊は、日本朝堂院は中国朝堂から名づけられると同時に、附属する曹司と併せて、唐長安城の皇城（省・寺・台・監）の政務機構を兼ね備えた存在とし、内裏・太極殿・朝堂院を包括する日本の宮城は、唐長安城における宮城・皇城の結合体と指摘した（王仲殊 1983・王 1983）。前期難波宮・藤原宮の朝堂院は、唐長安城の皇城を繼承しているという考え方が、近年の文献史研究者に受け入れられている点も興味深い（山元 2010・市 2020 など）。

即位儀と元日朝賀儀 ここまで大極殿院・朝堂院の発掘調査の進展に伴う研究を中心にまとめてきたが、次には文献史を中心として都城中枢部で行われる儀礼（奈良文化財研究所 2003・2005a など）に関する研究成果を整理する。具体的には、大極殿・朝堂院を舞台とする即位儀・元日朝賀儀に焦点を当てる。

日本古代の大王繼承儀礼に関しては、岡田精司が、践祚（即位）と大嘗から成る点を指摘している。岡田は、大嘗祭が日本古代の伝統的儀礼であるという説に疑問を呈し、即位儀（王位を象徴する宝器：レガリヤの授受）こそが天孫降臨神話と不可分の本来的な儀礼であるとしたうえで、大嘗祭は持続朝から始まる律令的儀礼とした。大嘗祭は、天皇が資格を得た直後に、附属する畿外の国々の貢する初穂をもって天皇の守護神を祭るものとし、その象徴として悠紀・主基の斎田を設定し「呪的に全国土を服属せしめる祭儀」とした（岡田 1983）。貞觀年間に成立した官撰儀式書である『儀式』によると、践祚儀（劍壓渡御儀礼）は平安初期に創出された新儀で、それ以前は即位式と大嘗祭の 2 種の儀式・祭儀により構成されていた（加茂 1999）。即位儀は大極殿において举行され、元日朝賀儀と同じ内容とされる。

一方、中国皇帝の即位儀礼に関しては、西嶋定生が天子即位・皇帝即位の 2 段階で成り立つ点を指摘した

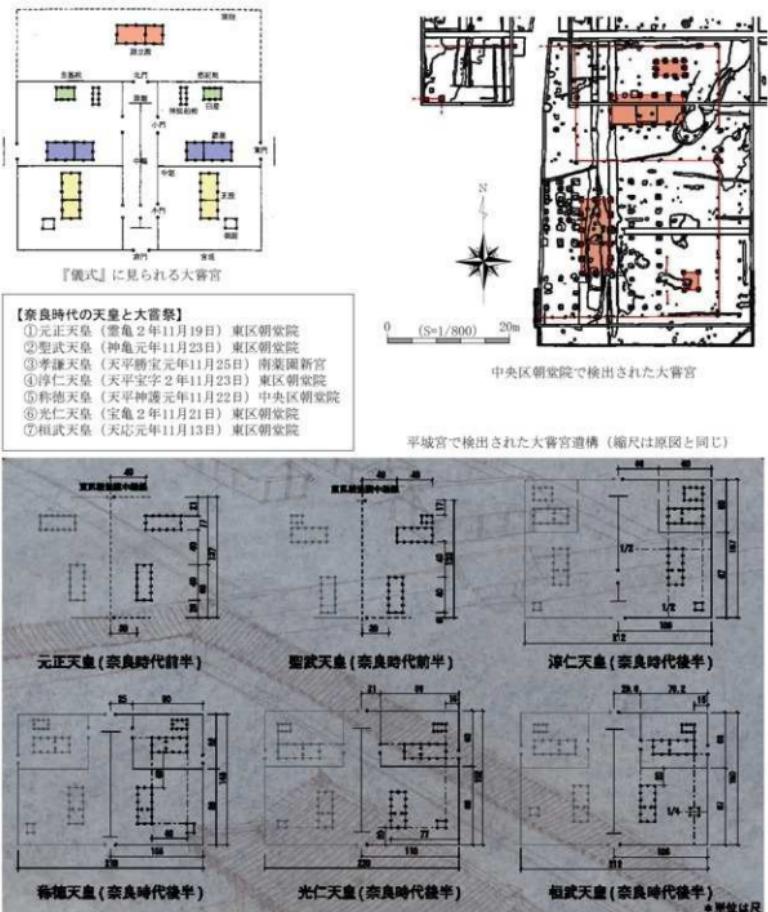


図 11 平城宮朝堂院（中央区・東区）で検出された大嘗宮

点が有名である（西嶋 1975）。漢初の即位は宗廟で行われるが、武帝以降は柩前即位が基本となり、魏晋南北朝の太極殿で行われる柩前即位が唐にも引き継がれる。西嶋の2段階即位の概念を継承した尾形勇は、唐代においても伝位の場合は、凶礼としての柩前即位（天子即位）と嘉礼としての冊・宝の伝授（皇帝即位）が行われた点を指摘した（尾形 1982）。しかし、現在は天子即位に関しては疑問が呈されており、唐代即位儀礼は皇帝即位のみとされるに至っている（小島 1991・松浦 1993）。特に、松浦千春は、高祖廟の親謁が即位を完了させる儀礼である点に注目し、皇太子からの即位、および皇太子以外からの即位における謁廟について整理した。詔・冊に対応する皇帝即位の二重性が天子・皇帝即位と認識された点を指摘するとともに、祖靈の承認によって皇太子が皇帝「家」の嗣子となる、すなわち天命の受命者たらしめる儀礼が謁廟であると指摘した（松浦 1993）。中国皇帝はその祖先を通じて昊天上帝と繋がりを持ち、「受命」と「世襲」が両立するわけだが、この点は日本の「即位儀・大嘗祭」の関係性を考える上でも重要である。このような状況

を踏まえて、金子修一は唐代の即位儀礼を再検討し、伝位の場合における即位儀礼を、①囚礼（柩前即位／第一次即位／大明宮）、②嘉礼（冊・宝の伝達／第二次即位／太極殿）に分けた上で、即位儀礼が太極殿で行われる第二次即位に中心がある点を明らかにした。すなわち、高宗以降に大明宮正殿として使用された含元殿に関しては、第一次・第二次の両即位でも全く関与することではなく、太極宮太極殿で行われる即位儀礼が中心であったとされる（金子 1994・2001a）。唐代の太極殿で行われる即位儀の在り方は、日本の太極殿で行われる即位儀を考える上でも重要である。

さて、日本における即位儀・大嘗祭のうち、朝堂院に営まれる仮設の祭場である大嘗宮が発掘調査で検出される場合があり、都城中枢部の構造を考える上で重要な要素となる。藤原宮で即位した文武・元明の大嘗宮は未確認だが、平城宮で即位した天皇は大嘗宮が判明している。まず、平城宮東区朝堂院の朝庭部で1985年（第163次）、1986年（第169次）に実施された発掘調査で、奈良時代後半の3時期（A・B・C期）分の悠紀院の遺構が検出された（奈良國立文化財研究所 1985・1986）。その後、上野邦一の遺構の検討により、さらに2時期（01・02期）の遺構の存在が判明し、01：元正（716年）、02：聖武（724年）、A：淳仁（758年）、B：光仁（771年）、C：桓武（781年）の大嘗宮にそれぞれ比定された（上野 1993）。さらに、2004年（第389次）には、中央区朝堂院の朝庭部で称徳（765年）の大嘗宮が検出され（奈良文化財研究所 2006a）、平城宮外に設置されたと推定される孝謙（749年）以外の大嘗宮が全て確認された（奈良文化財研究所 2019）（図11）。この平城宮の大嘗宮については、悠紀院正殿の位置を分析した岩永省三が、正殿が重ならないように桁行長40尺ずつ南にずらしていく規則性（奈良文化財研究所 2005b）を整理し、遺構がほぼ重複する光仁と桓武のみが血統的繋がりを表現していると指摘した。また、西宮を拠点とした称徳が対立関係にあった淳仁の大嘗宮の場を忌避し、元正大嘗宮に敵った位置で中央区朝堂院朝庭に造営した点も推定した。さらに、有力氏族が集合する場としての朝堂の意義が形骸化しつつあった奈良時代に、古い姿を観念的に留め、律令国家の国家秩序を象徴する「幻想の共同体パンテオン」である朝堂院に大嘗宮が造営された意義を論じた（岩永 2006a）。岩永の研究を除くと、遺構としての大嘗宮に関する考古学的研究は限られているが、桜井生衛は、平城宮大嘗宮の基本構造が天武朝まで遡り得る点、区画・遮蔽施設内での食膳調理と皇祖神への供饌・供食儀礼が古墳時代の豪族居館で行われた祭祀（人物埴輪配列にも表現される）などに起源をもつ点を指摘した（桜井 2019）。古代の即位儀礼に伴う祖先祭祀を古墳時代まで遡って考える桜井の分析視点は、非常に重要なである。青木敬は、奈良時代の大嘗宮が附属施設も含めて整備され莊厳化されていったという岩永の指摘（岩永 2006b・2019）も踏まえて、淳仁・称徳から大嘗宮が大型化するなど官衙の技術が導入された点を推定し、廻立殿が定型化しない状況から根源的な施設ではない点を指摘している（青木 2022）。なお、大嘗祭・大嘗宮は日本的な要素として把握されることが多いものの、池浩三は大嘗祭を「律令体制の建設と共に、隋唐の影響を受けた即位儀礼が整備される過程で創出されたもの」であるとし、大嘗宮正殿の「室・堂」の性格に注目し、中国古代宗廟形式との比較を試みている（池 1981）。平城宮で大嘗宮遺構が検出される前に発表された池の研究は非常に先進的な内容を含んでいるが、その後の研究では継承されていない。しかし、近年では中国都城での宗廟関連の遺構の検出事例も増加しており、今後の進展が強く望まれる視点である。

次には、元日朝賀儀の空間を扱った研究について整理する。日本においては、即位儀と元日朝賀儀は同構造であることから、『大唐開元礼』と『儀式』の比較を通じて、太極殿・大極殿の空間比較を行う研究が進められている。ところで、中国の元正朝会・元会（元日朝賀儀）（図12）に関しては、渡辺信一郎が漢～唐まで整理し、漢代の朝儀（委贊儀礼=臣従に際して君主に礼物を差し出すことで君臣関係が結ばれる）と会儀（皇帝からの賜物・賜宴による君臣関係の和合）に根源的意義がある点が指摘されている。唐代においては、中央集権化・地方諸機構の改革が進んだことで儀式としての形式化が顕著にはなったものの、皇帝一臣下、中央一地方、中華－夷狄といった対置構造、あるいは中央（皇帝）－地方州郡－外国諸蕃夷といった階層構造が1年に1度更新される象徴的な儀礼が元会であるという。渡辺はこのように論じた上で、帝国各地から貢納される産物が儀礼・祭祀を通じて全体性を獲得し、皇帝権力による再分配を通じて実現される「帝国的構造」が、皇帝権力と諸外国・諸民族との政治的従属関係にも普遍化されたと指摘した。また、中国古代国家の「帝国的構造」は貢納物の貢納を普遍原理としている点を強調した上で、中枢における公の生



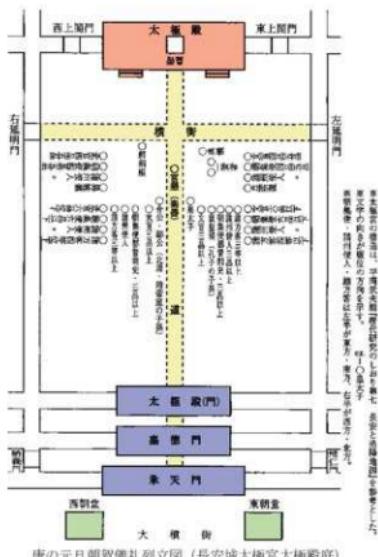
前回	尚書奉卿・太僕令等、儀礼用施設設當
当日	<p>①王公・群寮・謁見、朝請使・諸客集合(中殿) ①群官・客使等、東西廊内所定位置に集合。②外門・中門(「中興」)に進む。</p> <p>②群寮・諸使等、門外に整列(外朝) ③群官・諸使等、東西副室の門外位に整列待機。④侍中・外弔「放業」を放業。</p> <p>⑤羣寮御席を履く。羣寮に乗って出御。御座に就く。</p> <p>(1) ⑥朝賀の儀式 ①王公以下群寮・諸使、掌大藏院の所定位に就き、余冠再拜。②臣下一人・西面より升殿。御座の前で、「某官臣某奏」。正元の貴賤・職事・准則を新たにしたり、伏して飾るのみで、元神位を除く。天と体を同く「せぐれん」とし、賛物を奉上。群官・群寮・諸使等再拜頂戴。③御中・進出して「羣寮の御公・公等これに同くノム」と言説。④宣制後・群寮・諸使等全員再拜。顕揚して万歳を三度。さらに再拜。</p> <p>⑤膳部頭上表文、祥瑞の上美、諸膳部賞、諸膳部賞の貢物の準備</p> <p>⑥膳部頭上表文、祥瑞の上美</p> <p>⑦膳部頭賞、膳部賞の貢物 ①行郊尚書が京都貢物を貢納。②群寮・尚書等が膳部賞を以貢。③大臣が膳部賞。諸膳部賞を受領し、退場。</p> <p>⑧朝賀終了・皇帝、王公以下群寮・諸使退出</p>
当日	<p>⑨朝賀終了後・尚書奉卿等・食尚奉卿等・膳部の設殿</p> <p>⑩群寮・諸使・宰相、門外に整列・侍中・外弔「放業」を放業。</p> <p>⑪皇帝、通天冠・綵絲袍を服して出御。御座に就く。</p> <p>⑫王公以下群寮・諸使入殿。三品以上文武官・三等以上春喜升殿、「新和之樂」演奏。</p>
(2)	<p>⑬上寿酒 ①上公・群寮・御中衛の前に進み、「良医百葉図・禮書」して言す。元の首長位、臣下大慶に上す。運軸・下方建秀をまつる」と称す。再拜。群寮・諸使入殿・蹴上・蹴殿を全員再拜。</p> <p>⑭皇后等が御中・飲ぶ。「御和之樂」演奏。⑮群官・諸客・殿前・殿庭で全員再拜し、万歳を三度。また全員再拜。</p> <p>⑯行酒礼 ①太常会が尊崇を祝する・西面に準則。②尚食奉卿が酒を温め。皇帝が酒を呑む。群寮・諸使は、皇上・御殿で金盞再拜し。酒を飲む。③坐歌美が「朝和之樂」を三度詠唱。</p> <p>⑰廣殿・膳部・酒 ①尚食奉卿が御酒を進める。②皇帝が食事を始める。と、「休和之樂」が進舞される。群官・諸使客が候・殿庭で全員食事をする。③酒・酒器され膳部賞が並べられる。太常会が二度祝をかい。奉承次第。④酒が12度すると。酒が終わる。</p>
(3)	⑲羣寮・王公以下群寮・諸使・諸使退出

図 12 渡辺信一郎による『大唐開元礼』に基づく元会儀礼の空間復原(左)と進行表(右)

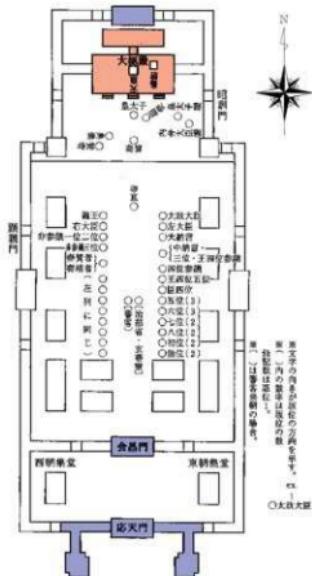
活部門の自己再生装置を「帝国オイコス」と呼称した(渡辺 1996)。渡辺の研究は、現在に至るまで日中都城の比較研究に大きな影響を与えたが、その研究を承けて、日本史の立場から日唐元日朝賀儀礼の比較を行ったのが藤森健太郎である。藤森は『大唐開元礼』における太極殿、『儀式』における大極殿、それぞれの元日朝賀儀礼の子細を空間的に比較分析し、その類似性と差異を整理した(図 13・14 上)。また、日本都城における 8 世紀の即位儀・朝賀儀の場についても、整理した。すなわち、唐長安城太極宮太極殿・大明宮含元殿ともに「殿庭」が主要な舞台となるが、中国皇帝と臣下の間には門が存在しないのに対して、平安宮八省院は同じ構造であるものの、8 世紀の都城では天皇と参加者の間が門で隔絶される点に注目した。もともと藤原宮大極殿では、元日朝賀で大極殿前に宝幢四神旗が樹立されたように、参加者は大極殿門外に参列した。一方、平城宮中央区大極殿は天皇と参加者の間に門が存在しない唐の空間が模倣されたものの、恭仁宮以降は門の中に移動し、天皇が再び参列者の前に現れるのは平安宮の桓武天皇だとする。藤森はこのような天皇と参加者との関係を、「門の中の王」「壇の上の王」と表現し、平城宮遷都段階での革新が一旦頓挫したものの、桓武の平安宮で唐制に近づく即位・朝賀儀礼の大改変がなされたと結論づけた(藤森 2000)。

なお、日本における元日朝賀の初見は、孝徳朝の大化2年(646)正月甲子朔条だが、西本昌弘は孝徳朝の中国化政策の中で朝庭に百官や外国使客を会集して行う朝賀儀礼が創始された点を指摘した。前期難波宮の広大な朝堂と14朝堂は元日朝賀の儀場として注目すべきで、後の律合的十二朝堂は元日朝賀・元日節会・佛教法会に利用された点を強調した(西本1998)。前期難波宮における法会に関しては、吉川真司も「天下僧尼」を屈請した法会などを挙げて強調しており、「儒教と仏教を2つの軸とする孝徳朝の国家イデオロギー」と指摘している(吉川1997)。また吉川は、大極殿儀式からみた時期区分論を展開する中で、四字年号時代(749-770)の画期を指摘し、その代表的儀礼として大極殿で行われる法会を挙げる。平安宮大極殿で行われた御斎会は、大極殿において天皇が施主となって金光明最勝王経と吉祥悔過を行い、五穀豊穣を祈願する仏事で、その説明は『儀式』卷五に詳しく記載されている(山本崇2004など)(図15)。大極殿身舎が内陣、

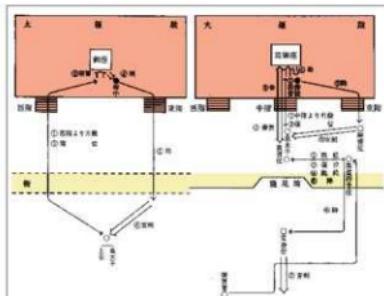
※縮尺は任意。



唐の元日朝賀儀礼立図（長安城太極宮太極殿庭）



日本の元日朝賀儀礼立図（平安宮朝堂院）



『開元礼』と『儀式』の元日朝賀における奏賀次第

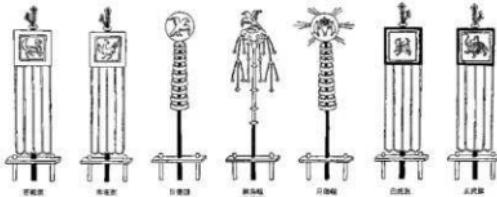


『開元礼』と『儀式』の元日朝賀における君主の周囲

図 13 藤森健太郎による「元日朝賀」空間の唐・日本比較

廟が外陣となり、高御座は仏座（八角宝殿）、高御座壇は須弥壇となる。すなわち、大極殿自体が巨大な仏堂となり、朝堂院は寺院として機能する。吉川は、仏堂としての大極殿が總國分寺的な役割を果たすとし、中央での大極殿御會、地方での國分寺成立による新しい法会の形式が、國分寺制度確立期の稱徳朝に成立したと想定する（吉川 2007）。以上、即位儀・元日朝賀儀だけでなく、佛教法会も大極殿の空間利用を考える上で重要な儀礼である。一方、儀礼の際に天皇がどのように大極殿に出御するかは、前述した吉田欽の詳細な研究がある（吉田 2006）。また、天皇が出御する場としての高御座も大極殿の成立、展開と密接に関わるものとして分析の対象となってきた。和田翠は、即位儀・元日朝賀儀の記事を中心として、高御座の分析を行った。そして、孝徳朝に始まる元日朝賀儀は、中国へ渡った知識人を通して元会が導入されたもので、その省略形が天皇即位儀である点を指摘した。また、高御座の形状が八角形である点に関しては、佛教に關

<p>【前日】 大嘗祭に高御座を設営する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・媛や娘などとて。 ・大嘗祭御殿等より朝服に版位を置く。 <p>【当日】 百官が行方の版位につく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天皇が御旗を打つ。諸門の鼓がこれに応じる。 ・開外の大鼓が鼓を打ち、諸門の鼓がこれに応じる。 ・天皇が乗り、大嘗祭後殿に入り、皇后・侍従らが從う。 ・開外の大鼓が鼓を打ち、諸門の鼓がこれに応じる。 ・天皇が乗り、大嘗祭前殿の門に入り、群臣は朝庭の版位につく。 ・皇后が乗り、出で大嘗祭前殿の版位につく。 ・皇后が大嘗殿の高御座に出御し、皇后・侍従らが從う。 ・大嘗殿の鼓を打つ。房に香をたく。 ・皇后へ、再詳し大嘗殿より、北面の年賀の辞を述べ、のち版位に戻る。 ・侍従、天皇の靈廟をさげ、大嘗殿を下り、前殿の招便位から皇子に詔を伝える。 ・皇子へ、再詳し儀を振り、侍従も大嘗殿上の位に戻る。 ・奏賀者と應賀者が朝庭の位を立た、電尾壇の東階から大嘗殿前庭に進み、版位につく。 ・奏賀者と應賀者が版位から詔を述べ、朝庭の群臣も再拜す。 ・天皇より勅が下される（「詔は皇子への詔と同じ」）。 ・群臣・再拜・詔讀・「萬歳」・群官は万歳と称しながら頭を振る。礼が終わり、鼓を打つ。 ・天皇・大嘗殿前庭に退く。 ・鼓が打たれ、諸門の締めに応じて、散会。
--



『文安御即位調度図』の宝幢



『文安御即位調度図』の高御座

図 14 元日朝賀儀礼の内容（上）と宝幢・高御座（下）

連させるのではなく天皇による日本全土の支配を象徴するものとした。すなわち、天平改元の宣命にある「この天つ高御座に坐して天土八方（あめつちやも）を治め賜ひ調べ賜ふ事」から、大八嶋国を統治する象徴として八角形の高御座（図 14 下右）が成立したと考えた（和田 1995）。また、吉江崇は高御座を内裏の日常的な座とは異なる非日常的なものとし、大極殿中央に常設壇が存在した点を指摘した上で、その存在は大極殿の成立と不可分であり、淨御原宮エビノコ郭正殿と同時の天武末年に成立したと推定した（吉江 2003）。

以上、大極殿院・朝堂院を舞台とする儀礼、特に即位儀・元日朝賀儀・御坐会について整理したが、都城中枢部の空間構造を考える際には、発掘成果と文献史料の研究を総合化する視点が不可欠である。

複都制と天命思想 最後に、日本都城を考える上で重要な複都制の研究史を整理しておく。唐の都城制の強い影響を受けた日本では、隋唐長安城・洛陽城の「両京制」をモデルとした複都制が採用されたと考えられている。複都制は、日本都城中枢部の変遷を考える際の重要な論点とされる。また、日本における複都制の思想背景、あるいは遷都の経緯には中国における天命思想が深く関わっていると想定される（瀧川 1967a）ため、

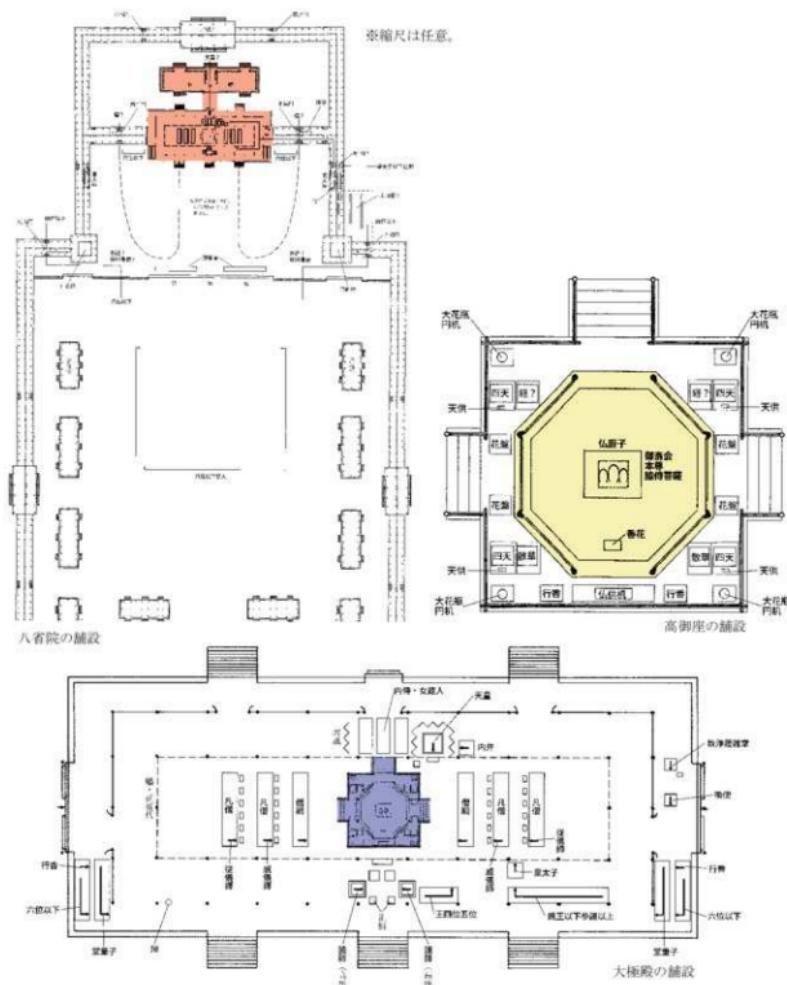


図 15 御斎会における大極殿の舗設

ここで併せて整理する。

日本都城研究で一般的に使用されている「複都制」という言葉は、歴史的な用語ではなく、瀧川政次郎による造語であり（瀧川 1967b）、中国では唐宋期に成立した「陪京・陪都」の用語が一般的に使用されている。中国の複都制を検討した妹尾達彦は、複都制から恒常的な單都制への長い道程の中で、武則天・玄宗期を周期と指摘している。すなわち、都（京師）を補佐する陪京の用語は玄宗の時期から始まる点を指摘し、武則天による洛陽、および玄宗による長安の集権化という対を成す政治的行為によって都城の序列化が進み、陪京制・陪都制が形成されたと論じた（妹尾 2020a）。同時期に展開する渤海五京制や日本の複都制も、唐の

陪京制を模倣したと想定されている。この点に関して、村元健一は、隋唐期において制度として複都制を取り入れたのは、隋煬帝・唐高宗のみである点を指摘し、日本は高宗期の長安・洛陽の状況を学んだことで、前期難波宮が飛鳥宮を凌駕する規模を持ちえたと推定した（[村元 2017](#)）。しかし、渤海五京制・日本複都制の在り方が示すように、唐の陪京制を模倣したとしても各国独自の形で展開した点が重要である。

日本では、『日本書紀』天武 12 年（683）12 月庚午条の記載「又詔曰、凡都城官室、非一処、必造兩參、故先欲都難波、是以、百寮者、各往之請家地」の記載が、複都制の初出記事としてよく知られている。日本における複都制に関して、瀧川政次郎は單なる唐の模倣・憧憬と考えていたが（[瀧川 1967b](#)）、仁藤敦史の研究以降、日本における複都制は都城成立期（未成熟な段階の都城制）の統治形態を反映するものとして重視されるようになった（[仁藤 1998](#)）。榮原永遠男は、天武天皇が中央集権的な地方支配構想に基づいて、畿内・難波・信濃を都とする計画を立てたものの、持続朝における国制・七道制の定着に伴って藤原京を中心とする支配構造が定着したことで継承されなかつたと考えた（[榮原 2003](#)）。館野和己は、天武朝の複都構想について、政治的な中枢である新益京（藤原京）に対して、外交的な機能を重視した難波宮という構造を指摘した（[館野 2010a](#)）。また、天武の副都構想は軒余曲折を経ながら平城京・難波京という形で実現したと考えた（[館野 2010b](#)）。一方、天武朝の複都制の詔に信濃の計画がある点を重視した直木孝次郎は、新羅の侵攻に備えるための政策であると指摘した（[直木 2005](#)）。重見泰も直木の指摘を継承し、天武の副都構想は、対新羅との関係を念頭に置いたものとし、692-695 年の新羅の来朝によって新羅の脅威がなくなり、複都制構想が消滅したと結論づけた（[重見 200b](#)）。ところで、山田邦和は、複都制こそが日本古代都城における重要論点であるとし、聖武の「彷徨 5 年」とも呼ばれる一連の遷都（恭仁京・難波京・紫香楽宮）も天武を模倣した壮大な複都構想とみる独自の見解を示している（[山田 2016](#)）。聖武朝における難波宮再興は、聖武の「天武直系」を意識した事業であり、造営が進む段階において新羅に日本の威信を誇示するための整備に変化していく点も指摘されるなど（[山本 1988](#)）、天武・聖武の難波宮に関しては共通点が多いとされる。

しかし、日本都城研究において複都制を自明の前提とする立場に関しては、榮原永遠男が疑問を投げかけている。榮原は、「京」と「都（天皇が居る京）」を区別し、日本における複都制は天武の晩年に一時期実現が目指された（それも観念的なものに留まる）が、その後には継承されなかつた点を強調する（[榮原 2019](#)）。ところで、天武朝・聖武朝に整備が進んだ難波京は、桓武の長岡京遷都によって平城京と主副系列が 1 つに統合され（[岸 1974](#)）、後期難波宮の大極殿・朝堂院は長岡宮に移建されたと考えられている（[中尾 1995b・國下 2014](#) など）。今後、難波宮・難波京の歴史的位置に関しては、更なる議論が期待される。

日本古代における「主副系列」統合の画期である桓武の長岡京遷都に関しては、天智系の光仁を継ぐ桓武による「新王朝の創始」の考え方が強調されてきた。瀧川政次郎は、中国の「易姓革命」の概念から、皇統が交代しても性が変わらない「易房革命」と呼び、桓武の一連の改革の背景に中国の天命思想を想定した（[瀧川 1967a](#)）。妹尾達彦によると、中国帝国期の王権の正当性は、超越的な力の根源である神・天によって保証されており、天命（天帝の命令）を受命した 1 人の人間が天子として地上の統治を委ねられる天命思想が、西周期以降（[豊田 1980](#)）に成立した。その根幹になるのが、王莽の時代に整備された郊祀体系であり、皇帝が南郊で行う円丘祭祀は前近代まで継承された（[妹尾 1998](#)）。閑晃が整理したように、天命思想は郊天儀礼・祥瑞制度と深く結びついている。つまり、天子が徳高い政治をすれば天（天帝・上帝・昊天上帝）がこれに感応し、麟・鳳・龜・竜その他の動植物や天然現象を出現させ、悪しき政治であれば災厄を下すという思想で、日本では孝德朝の白雉元年が最初であるように、律令国家形成期に中国の天命思想を受容したとされる（[閑 1997](#)）。周知の通り、中国の郊祀制度（[小島 1989・1991・金子 2001a・2006・妹尾 1992・2001・佐川 2016](#)）は、古代日本に本格的に導入されることはなかったが、桓武の延暦 4 年（785）・6 年（787）、文徳の齊衡 3 年（856）の 3 回、南郊祭祀が行われた記録がある。狩野直喜が古くに指摘したように、唐においては太祖（景皇帝＝李虎・高祖李淵の祖父）をもって始祖としたが、桓武・文徳は昊天上帝を祀る際、高紹天皇（光仁）を配祀しており（[狩野 1931](#)）、その背景に桓武の天命思想に基づく新王朝の創始という意識があつた点が強調されてきた（[瀧川 1967a・王仲殊 2004](#)）。一方、河内春人は交野の郊祀と長岡遷都の直接的な関係を想定せず、天智系の新しい皇統のアピールではなく、桓武・文徳の即位の正当性が不安定であり、天皇とその後継の正

当性が二重で不安定だった際に行われるのが郊祀と指摘している（河内 2000）。佐野真人も天智系王朝による天命思想と長岡遷都を結びつける説に疑問を呈し、奈良時代には既に郊祀が理解されており、皇位の所在と国家の安定を保つために実施されたと推定した（佐野 2009）。しかし、宮城正門に中国都城の外朝大典空間を表現した連体式双閑門が採用される長岡宮の画期は無視できず（城倉 2021）、佐竹昭が指摘するように、中国政治思想の受容・変容において桓武朝は1つの転換点であると思われる（佐竹 2020）。なお、皇統の交替（新王朝の創始）という観念に基づく都城の新しい建造物の導入という点においては、「王位簒奪」によって皇位についた天武が、天命思想に基づきその正当性を保障する舞台装置として淨御原宮エビノコ郭正殿（大極殿）を造営したという林部均の指摘は重要である（林部 2005）。7世紀後半における天武王朝の創始、8世紀後半における天智系王朝への転換、両時期が「複都制」の創始・終焉の画期となっている点は、日本古代都城の変遷を考える上で、非常に示唆的な現象と言えるだろう。中国都城は王朝交代による新しい思想空間の創造によって発展したが、「易姓革命」のない日本において都城の画期を求めるのであれば、皇統の交替などの歴史性を無視することはできないと考える。

小結 以上、日本都城中枢部に関する研究史を整理した。膨大な発掘調査の蓄積による考古学・建築史学の研究、あるいは文字史料を対象とした文献史学の研究によって、大極殿を中心とする中枢部の変遷が明らかにされてきた。しかし、現在の日本の経済状況や今後の見通しを考えると、今後、大極殿関連の大規模な調査によって研究が劇的に進展するような状況を想定することは難しい。発掘調査の継続や個別の新知見により研究は徐々に進展していくと思われるが、今後主体となるのは、今までの成果の新しい視点での再評価や国際的な比較研究だと思われる。一方、近年、経済成長に伴う発掘調査の進展によって大きく研究が進展している中国都城に目を向けると、都城中枢の宮城構造の認識が大きく変わった結果が上がりつつあり、日本都城の起源を探る国際比較も見直しが迫られている状況にある。また、膨大な発掘調査に基づく詳細な日本都城の研究成果は、中国都城の歴史性を理解するためにも重要な比較対象である。本来、東アジアにおける都城制の発展と展開の歴史的意義の追究という視点でみれば、都城は現代国家の枠組みを越えて比較が必要な普遍的な研究対象である。さらに、中国都城は殷周を遡る時期から明清北京城まで連続と続く歴史があり、東アジア諸国に伝播した時期は、その中でも魏晋南北朝～唐代と極めて限られた時期に過ぎない。日本都城研究が蓄積してきた膨大な詳細研究を継承しながらも、より広い時空間で都城の本質を探る研究が、求められていると考える。

1－2 日中古代都城の比較研究史

1－1では、日本都城における中枢部の研究史について、トピック毎に分類整理した。次には、1－3で中国都城における中枢部の研究史をまとめると、その前に両者を繋ぐ視点として日中古代都城の比較を扱った研究に関して、簡単に整理しておく。当該研究分野では、中国都城研究の立場から日本を比較対象とする分析は極めて少なく、そのほとんどが日本の特定都城の発掘調査成果を踏まえて、その系譜・源流を探る視点である。日中都城の宮城中枢部の研究史については、吉田歓が2002年までの研究を端的にまとめており（吉田 2002）、本論での研究視点や問題意識と共通する点も多い。しかし、吉田の分析対象は文字史料が中心であるのに加えて、この20年間、日中両国で蓄積された発掘成果も膨大な量に及ぶ。ここでは、日本都城の源流を探る研究に絞って、整理をする。

平城京の系譜 幕末の北浦定政による平城京の調査を踏まえて、関野貞は『平城京及大内裏考』を発表し、平城京の源流を唐長安城に求めた（関野 1907）。その後の発掘調査の進展に伴って、平城京・藤原京・前期難波宮の系譜に関して、中国都城との積極的な比較を行ったのが岸俊男である。岸俊男は、藤原京の宮城が都城中央に位置する点、あるいは前期難波宮内裏前殿SB1801および東西の長殿が太極殿東西堂の系譜を引く点、などを指摘し、唐長安城・洛陽城などの影響を認めつつも、日本都城は隋唐以前の中国都城（北魏洛陽城・東魏北齊鄆城など）の伝統を繼承すると考えた（岸 1976・1977bなど）。この点については、中国の郭湖生も「城市制度」から見ると平城京は隋唐長安城の模倣だが、「宮室制度」からみると平城宮は南北朝の宮城構造と共通すると指摘している（郭湖生 1981・1990）点が注目できる。当時の中国では、まだ北朝

表1 宿白による日本都城と唐長安城・洛陽城の要素比較

各京の 具體情況	京城面積 南北長、東西窄	宮城位于京城 北部正中	朱雀大路于 都城正中の南北 中軸線上	京城左右对称 建置東、西兩市	方形坊里或大都 是方形坊里	每坊東西 兩坊門	每坊內割分十六 小區	朱雀大街南端 (即羅城門內) 兩側坊各置宗教 建築一所
藤原京	✓	✓	✓		✓			
重波京	✓	✓	✓		✓			
平城京	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	
長岡京	✓	✓	✓		✓			
平安京	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
形制圖譜	洛陽制度	長安制度	長安制度	長安制度	洛陽制度	長安朱雀門制 東西第一、二街 里坊制度	長安 洛陽(?) 制度	洛陽制度

都城の発掘調査が進んでおらず、漢から隋唐都城への変遷過程も明らかになつていなかつたため、北朝・南朝都城の比較（錢國祥 2010）なども進んでいなかつた。南北朝都城から発展した隋唐都城がモデルになつてゐるのであれば、日本都城も当然ながら南北朝都城の系譜も引き、共通点も多いことになるが、70・80年代の研究段階では、源流となる中国の様相が明らかではなく、系譜関係の整理に限界があつた。

岸俊男説の南北朝都城系譜説に関しては、王仲殊が日文（王 1983・1994・2004）、中文（王仲殊 1983・1999・2000・2001a・2001b・2002・2003）で数多くの著作を示し、批判を加えている。その論点は、150～160年の時代差がある北魏洛陽城・藤原京に關係性を見出すのが難しい点、藤原京・平城京は唐長安城・洛陽城の模倣（両者の融合体）である点、栗田真人を執節使とする大宝遣唐使（第七次遣唐使）が持ち帰った大明宮の情報で平城宮・平城京が造営された点、唐長安城太極宮太極殿・大明宮含元殿が日本の太極殿に影響を与えた点、大明宮麟德殿が平城宮西宮・平安宮豐樂院に影響を与えた点、平安京段階では唐都が強く意識された点、など多岐に及ぶ。ちなみに、王仲殊の日中都城の比較に際する基本的な考え方は、日本都城の個別要素を「長安制度」「洛陽制度」に分けて検討し、日本都城は唐長安城・洛陽城両者を模倣しているとした宿白の先進的な研究（宿白 1978）（表1）に強い影響を受けている。特に、日本都城における条坊が300歩（1里）四方の正方形里坊を16分割する「洛陽制度」に基づく点を指摘した宿白の研究は重要な視点である。この点に関しては、5尺=1歩、360歩=1里と想定される隋唐長安城に対して、300歩を1里とする隋唐洛陽城は6尺=1歩、300歩、すなわち1800尺四方を基準にすると思われ、平城京や渤海海上京城と一致する（積山 2010・井上 2005）点が重要だと考えている（城倉 2017 p.16）。なお、日本都城は唐長安城・洛陽城のどちらをモデルにしているのか、という点に関しては、劉曉東が前期難波宮・藤原京は隋唐洛陽城、平城京は隋唐長安城と指摘し、渤海都城においても前者から後者へと影響力が変化する点を指摘している点も注目できる（劉曉東 1999）。

一方、藤原京・平城京とともに、その模倣対象は唐洛陽城ではなく唐長安城のみが「模彷惟一藍本」とするのが王維坤である。王維坤も日文（王 1997・2008a・2008b）、中文（王維坤 1990・1991・1992・2002）で多くの論文を書いているが、藤原京・平城京の模倣原型は唐長安城のみであり、特に大明宮含元殿が日本・渤海都城中枢部に与えた影響が大きいと考え、藤原宮大極殿でも龍尾道（図16）の存在を想定している。平城京に関しては、井上和人も「すべては唐長安城を指向して」いる（井上 2008 p.39）と王維坤と同様の見解を示している。井上は、平城京朱雀大路の幅が長安城朱雀大街の幅の2分の1である点、平城京は「長安城×半分→90度回転」したもの、つまり4分の1の面積である点を指摘し、「唐国との国家間の格の相違を顕示し、国家としての恭順の意を唐に対して表現するもの」と考えた（井上 2008 p.40）。なお、前述したように大宝遣唐使の情報に基づいて平城京遷都が決断された点はほぼ定説化しており、平城宮第一次大極殿院の空間が大明宮含元殿を模倣した点は多くの研究者が論じている（狩野 1975・鬼頭 1978・浅野 1990・舛村 2011・今井 2012など）。この点に関しては、大明宮含元殿の影響が表れるのは天平勝宝度の遣唐使以降という見解（古瀬 1992・西本 2015）もあるが、中国人研究者も平城宮第一次大極殿院と大明宮含元殿の直接的な関係を想定するのが通説となっている（王仲殊 1999・陳繼 2020）（王 2008a）。さらに、王仲殊は平

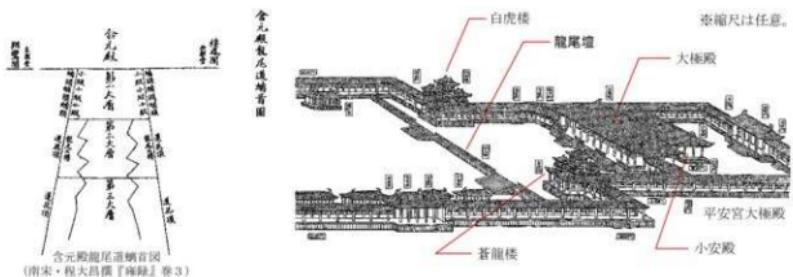


図 16 含元殿の龍尾道（左）と平安宮大極殿の龍尾墻（右）

城宮中央区の西宮、および平安宮豊楽院のモデルを大明宮麟德殿としている（王仲殊 2001b）が、福田美徳・浅川滋男は建築史学の立場から、平城宮と大明宮の比較を行っている。福田・浅川は、平城宮中央区が大明宮含元殿の模倣、東区が藤原宮からの継承とし、奈良時代後半の西宮（桁行9間の総柱建物が南北に3棟並ぶ構造）に麟德殿の影響がみられるとした。また、平安宮の段階では、含元殿・麟德殿は既に憧憬の対象ではなかったとも指摘している（福田・浅川 2002）。

以上の研究史からもわかる通り、平城京造営に際して大宝遣唐使が持ち帰った情報が重要な役割を果たした点、平城宮中央区が唐長安城大明宮を模倣している点は、ほぼ確実視されつつある。しかし、発掘調査が進む大明宮のみが主要な比較対象になっている点は否めず、太極宮との関わりは議論が少ない状況にある。また、高宗・武則天期に発展した洛陽城に関しては、宮城や外郭城の様相が発掘調査で判明しつつあり、平城京、あるいは日本都城に与えた影響に関して今後は議論を深める必要がある。

藤原京の系譜 藤原京の復原に関しては、1969年に岸俊男によって、東西京極を中ツ道・下ツ道、北京極を横大路、南京極を阿部山田道とする南北12条・東西8坊案が示され、広く受け入れられた。岸説は1坊を半里四方とするのが特徴で、藤原宮は中央やや北よりに位置する（岸 1988）。このような宮城の位置から、岸は藤原京が北魏洛陽城などに系譜を持つ点を主張したのである（岸 1976 など）。その後、岸説の藤原京よりも外側で道路構造が検出され、いわゆる「大藤原京説」が主張されるようになった。京城の拡大によって、宮城が中心近くに位置することが判明する過程で、秋山日出雄は中国北朝の都城を検討し「日本の藤原京と平城京との関係は、中国南北朝期の都京と隋唐都城の関係に、則応している」（秋山 1982 p. 82）と指摘した。その後、1996年には岸説の条坊呼称でいう場所の東十坊大路、西十坊大路（東西京極）が確認され、中村太一・小澤毅によって十条十坊説が提唱されることになる（中村 1996・小澤 1997b）。小澤毅は、藤原京に関して10里四方の正方形が当初から設定されていたものとし「実在の中国都城を直接モデルにしたのではなく『周礼』にみられるような中国都城の理想型に基づいて設計された、いわば理念先行型の都城」（小澤 2003 p. 220）と位置付けた。藤原京は、天智8年（669）から長期に渡る遣唐使の中止で中国からの直接情報が途絶えた中で造営された理念先行型の都城であり、大宝2年（702）に派遣された遣唐使の持ち帰った情報によって、平城京遷都が決まり、藤原京の「形態上の問題点が、平城京では、唐長安城と共通する方向への変化によつて克服された」（小澤 2003 p. 222）と考えたわけである。一方、藤原京十条十坊説に関しては、南北京極が確定していない点を踏まえてさらに広がると考える説（山中 2011）、天武新城段階の不整形プラン説（山田 2016）、あるいは文献史料を重視した岸俊男の12条8坊を継承する説（西本 2014・仁藤 2022）など、国内においても異論がある。さらに、唐代における『周礼』の解釈と藤原京の構造が異なる点を指摘し、『周礼』そのものの内容を直接的に実現した都城であるとはいえないとする外村中の指摘もある（外村 2009）。藤原京を「理念先行型都城」と断定してしまうよりは、同時代の唐長安城・洛陽城の発掘成果も踏まえて、考古学的な現象を遺構レベルで丁寧に比較する作業が今後求められると考える。

ところで、藤原京に関しては、新羅文武・神文王代と日本天武・持統朝の性格を比較した李成市が、新羅

王京とほぼ同じ規模である点などを踏まえ、新羅を参照しつつその上位に立とうとした都城と位置付けている（李 2004）。新羅王京については、発掘調査の進展を踏まえて、高麗尺（1 尺 35.5 cm）で設計され、都市計画の基準が皇龍寺から北宮に段階的に移行した点が指摘され、不規則な形の街区も復原されている（黄 2011）。その点を踏まえた上で、小澤毅は新羅王京と藤原京は形態・設計で大きく異なり、小中華を目指した日本が新羅王京を模倣したとは考えられないと指摘している（小澤 2011）。なお、藤原京から平城京への転換は、中国の南朝系都城→北朝系都城に該当すると考え、中国南朝系都城が新羅王京を介して藤原京に導入されたという佐川英治の指摘もある（佐川英治 2015・佐川 2018）。

前期難波宮の系譜 平城京・藤原京を遡る時期の都城に関しては、飛鳥宮が日本の伝統的な王宮から発展したとされるのに対して、孝德朝難波長柄豊磐宮とされる前期難波宮と中国都城の比較が試みられてきた。既に 1~1 で整理したが、岸俊男・中尾芳治・積山洋・村元健一などが代表的研究者であり、唐長安城太極宮にそのモデルを求める説が主流となっている。特に積山洋は、前期難波宮の内裏に見られる「逆凸字形プラン」が唐長安城太極宮と共に可能性を指摘する（積山 2013a）が、この点は三朝制の比較視点に基づいて内裏正殿 SB1603 を両儀殿（内朝）、内裏前殿 SB1801 を太極殿（中朝）、内裏南門を承天門（外朝）に比定する説（岸 1977b・中尾 1995a・2014）とも整合性を持つことになる。また、隋唐の宮城構造を検討した村元健一は、南から北に向かって小さくなる 3 つの空間が並ぶ基本構造を整理し、中枢に行くほど儀礼への参加者が少なくなり、空間規模の大小が皇帝との親疎を可視的に示す点を指摘した。さらに、三朝制に関しては、賀公彦『周礼疏』が高宗の時期に成立するため、唐初は鄭玄説が主流だが、『周礼』や『三朝制』も明確には規定されておらず、『唐六典』の記載も太極宮設計時の概念ではなく、実際に存在する宮城を周制に当てはめて解釈している点を強調する。その上で、7 世紀中葉段階において、中国からの影響は儒教の經典に基づくものではなく、遣隋使・遣唐使を通じてもたらされた「実際の宮城の情報」とした。すなわち、唐の太極宮から大明宮へと受朝の場が変化したこと、日本都城における模倣対象も変化していくと考えた（村元 2014・2020a）。

小結 以上、平城京・藤原京・前期難波宮の系譜を中国に求める研究、すなわち日中比較都城研究に関して整理した。前期難波宮が唐長安城太極宮、平城宮中央区が唐長安城大明宮の強い影響を受けている点から想定できるように、日本都城の宮に関しては唐の宮城・皇城の構造に関する直接的な情報に基づいて造営されている可能性が高い。一方、京に関しては唐長安城・洛陽城の影響を受けている可能性が高いものの、京城が未だ確定していない藤原京に関しては、諸説ある状況といえる。日本の条坊と中国の里坊（外郭城）との比較は、改めて論じる予定なので、ここでは踏み込まないが、中枢部の造構レベルでの国際比較に限ってみると、前期難波宮・平城宮中枢部の研究に重心が集中している状況である。このような特徴的な構造的部分的な比較には限界があるため、中原・草原都城、渤海都城、日本都城など、各國・各王朝の中枢部の変遷を踏まえて東アジアレベルで相互に比較する作業が重要だと考える。特に、近年の発掘調査の進展によって劇的に研究が進んでいる中原都城の様相を基に、新しい比較の視点を見出していく必要がある。

1-3 中国都城における中枢部の研究

中国都城中枢部の研究 日本都城中枢部の研究が 1970 年代以降の膨大な発掘調査の蓄積によって、進展してきたのに対して、中国都城中枢部の研究は 2000 年頃までは豊富な文献史料を中心に研究が進んできた。その段階では、発掘によって様相が判明している日本都城（前期難波宮・藤原宮・平城宮）の成果を基に、中国都城を比較対象とする日本人研究者の研究が多かった。しかし、2000 年以降、中国の急激な経済発展に伴って、中国社会科学院考古研究所の各都城調査隊などがボーリング調査・発掘調査を進めたことにより、研究は劇的に進展した。各都城調査隊が発表する簡報・報告書の成果に基づいて、文献史学・建築史学・考古学など様々な分野の研究論文が毎年、膨大な量、蓄積されている。

以上を踏まえ、本節ではまず、中国都城研究史の大きな流れと日本人研究者による機能論を重視した宮城の復原研究を整理する。次に、漢～魏晋南北朝、唐～宋、遼・金・元の時代毎に、発掘調査の進展に基づく中枢部の研究成果をまとめる。最後に、渤海都城の中枢部に関する研究史を整理する。

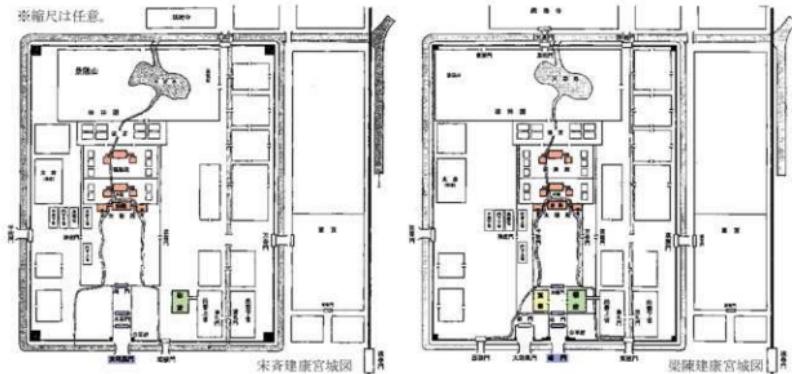


図17 渡辺信一郎による南朝建康宮城の復原案

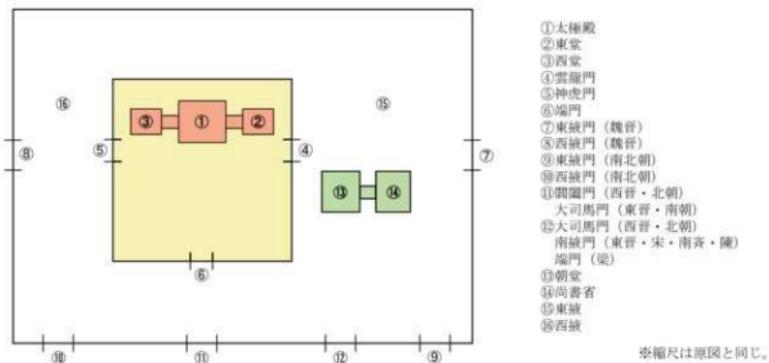


図18 内田昌功による魏晉南北朝の宮略図

中国都城の通時的研究 中国都城の通時的研究としては、王仲殊・俞伟超・杨宽・刘庆柱などの研究が代表例（王仲殊 1982・俞伟超 1985・杨宽 1993・刘庆柱 2000）として挙げられるが、考古学的調査によって把握された都城平面形を礼制と政治史の立場から検討し、その変遷を位置付けた杨宽の研究は最も通時的・体系的研究といえる。日本にもその成果が紹介される（楊寬著／西嶋監訳 1987）とともに、殷周～明清までの都城・陵墓の大局的な流れをまとめた著作集が復刊されるなど（杨宽 2016a・b），今なお、その研究は強い影響力を持っている。なお、近年では歴代都城の発掘調査を整理した概説書（刘庆柱主编 2016・中国社会科学院考古研究所 2010a・2019 など）も刊行されている。中国都城の通時的位置付けに関して言えば、建築史学分野の整理も重要である（刘敦桢 1996・傅熹年 1998c・杨鸿勋 2009・2023・刘叙杰主编 2009・傅熹年主编 2009 など）。発掘による検出遺構の構造分析や史料に基づく建造物の復原は、唐長安城大明宮（杨鸿勋 2013）、高句麗都城（张明皓 2019）、渤海海上京城（张铁宁 1994・刘大平・孙志敏 2018 など）など個別の都城単位でも進められており、中国都城研究の重要な分野である。なお、中国歴代王朝の都城营造に関する思想的な概観（陈筱 2021）なども、近年の中国では建築史学分野で盛んである。

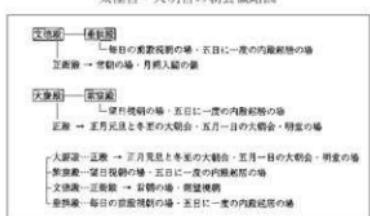


図19 松本保宣（左）と吉田繁（右）による唐長安城・北宋開封城における宮城の構造と機能

日本人研究者による宮城分析さて、中国都城の中核部の研究に関しては1970年以降に膨大な発掘事例を蓄積した日本都城との比較という視点で、多くの日本人研究者が分析してきた。前述したように難波宮の系譜を追究した岸俊男（岸1977b）、日本太極殿の系譜を追究した鬼頭清明（鬼頭1978）、朝堂院の祖型を追究した秋山日出雄（秋山1981）など、いずれも中国都城中枢部の検討を行っている。唐の宮城正門での儀礼（佐竹1988）、朝堂（佐藤1976・山崎1996a）、前殿（村田1951・鈴木1980・1982・1990）など、特定の遺構を対象にした分析も蓄積されている。特に、前殿に関しては、吉田歓が秦始皇帝の甘泉宮前殿（BC220）・阿房宮前殿（BC212）で出現し、前漢未央宮前殿、そして曹魏明帝太極殿に繋がる系譜を整理している（吉田2021）。文献史学の立場からの研究としては、後漢の宮城を復原した渡邊将智（渡邊2014）、六朝期の太極殿を扱った渡辺信一郎（渡邊2000・2009）（図17）、漢～唐の宮城構造の変遷を扱った吉田歓（吉田2002）や村元健一（村元2010・2014・2016・2019・2020a・2020b・2022）、北周長安城の宮城構造を復原して隋唐期への変化を論じた内田昌功（内田2004・2009・2010・2013）など、漢～唐にかけての宮城構造とその変化が詳細に位置付けられてきた。これらの研究を網羅的に整理する余裕はないが、宮城正殿に関する成果としては前殿から太極殿への変化が明らかになっている点が注目できる。すなわち、秦始皇帝の阿房宮前殿（BC212）が前漢・後漢に引き継がれ、曹魏明帝青龍3年（235）の太極殿の造営（安田2006）を経て、太極殿・東西堂（東堂：皇帝の朝政空間、西堂：皇帝の居住空間）（劉敦楨1982）の「東西軸構造」（内田2004）が成立した（図18）。太極殿・東西堂は「六朝太極宮型宮城」（渡邊2009）として南朝にも引き継がれ、魏晋南北朝を通じて存在する基本構造となる。その後、前漢長安城の北東隅角部分を改築した北周長安城において、三朝制に基づく南北構造や宮城南の官署の集中配置（皇城の成立）を経て、隋唐都城へ発展する変化が整理してきた。

なお、唐代都城の宮城に関しては、長安城の太極宮・大明宮に関する研究が多く蓄積されている。太極宮・大明宮を比較し、その「三朝」構造が一致する点は佐藤武敏・古瀬奈津子・松本保宣・吉田歎らが機能論の側面から詳述している（佐藤 1976・2004、古瀬 1998、松本 2006、吉田 2002）（図 19）。両宮城の差異については、即位儀礼の場として分析した金子修一、前者から後者への歴史的転換を整理した妹尾達彦の研究（金子 1994、妹尾 2014）も重要である。

以上、漢～唐の宮城中枢部に関する日本人研究者の研究を簡単に整理したが、特に徹底した史料批判による詳細な「機能論」に基づく宮城構造の復原研究は、重要な成果を蓄積してきた。なお、本論では議論の対象としていないが、円丘（安家瑠 2001・2002 など）で行われる南郊を中心とする皇帝祭祀（金子 2001a・

2006) (金子修一著 / 徐璐・張子如译 2018) と宮城中枢部を結びつける分析 (妹尾 2001・佐川 2016) (妹尾 达彦著 / 高兵兵译 2012、妹尾达彦著 / 高冰冰・郭雪妮・黃海静译 2019) も日本人研究者が進めてきた重要な研究として注目できる。

日本人研究者による東アジア史の視点 ところで、日本人研究者が中国都城を分析対象とする場合、東アジア世界の中での都城制の歴史的位置付けが課題になることが多い。特に日本都城との比較の視座に基づいて中国都城を分析する場合、必然的に東アジア世界の国際関係をどのように把握するか、が歴史的な解釈に影響を与えることになる。ここでは、金子修一の著作 (金子 2001b・2010・2019) に基づき、研究動向のみを簡潔に整理しておきたい。

6～8世紀の中国王朝と周辺諸国との関係を「冊封体制」という理論的枠組みで理解しようとしたのが、西嶋定生である (西嶋 2002)。漢字文化・儒教・律令制・仏教の4つを指標とする「歴史的文化圏」として提唱した西嶋定生の「東アジア世界」の存在は、現在は広く使用されている概念であるが、李成市や金子修一らは批判的に検討を行っている (李 2000・金子 2019)。李成市は、西嶋定生の「東アジア世界」を検討してその歴史的背景や有効性・限界を整理した上で、秦漢以来の中国皇帝の支配は郡県制と羈縻と呼ばれる異民族首長に対する支配に二分されるとする堀敏一の議論を引用し、冊封は「中国皇帝と異民族の首長との関係のあり方からすれば、一部に過ぎず、それが周辺諸民族との関係を規定するわけではない」(李 2000 p. 47)と指摘した。一方、金子修一も、日本の歴史的展開を中国・朝鮮半島と結びつける枠組みとして登場した西嶋定生の理論と、中国史を中心とした東アジア論を展開した堀敏一 (堀 2006など) の理論を対比して、両者の研究の意義を考究した。結論的には、西嶋定生の「冊封体制論」は、魏晋南北朝においてはある程度有効だが唐代の国際秩序を把握する上では無理がある点、北アジア・中央アジア・東南アジア研究の進展を踏まえて中国と周辺国との関係を一律には理解するのが難しい点などの問題点を指摘した (金子 2010)。

以上の研究動向を踏まえれば、「東アジア世界」における都城制の比較研究においても、特定の理論的枠組みで歴史的位置付けをするのは難しく、個別現象の動態を通時的・国際的・多角的に丁寧に叙述することが重要だとわかる。

漢～魏晋南北朝の都城中枢部の研究 本題である中国都城中枢部の研究史について、整理を進めていきたい。前述したように中国都城中枢部の研究は、各調査隊が実施する発掘の成果によって劇的に進展しつつあるが、ここでは漢～魏晋南北朝、唐～北宋、遼・金・元、そして渤海と中原との比較に分けて整理する。

中国都城中枢部の発展で大きな画期となるのは、秦始皇帝の阿房宮前殿の造営である。秦の都城であった咸陽宮は前漢長安城 (徐龍国 2022・中国社会院考古研究所 2022) 北側の渭河北岸に立地し、東西 870m・南北 500m の城壁に囲まれる範囲 (張建峰 2019) に存在するが、検出されている宮殿遺構は北西部に集中し、規模も阿房宮前殿ほどは大きくはない (報告 : 陕西省考古研究所 2004)。なお、咸陽宮を遡る秦樸宮 (前漢初頭の造営時期を含む) も、近年では発掘調査が進んでいる (中国社会院考古研究所等 2020・2022) が、中枢部の全容は未だ明らかではない。一方、前漢長安城南西側に位置する阿房宮では、巨大な前殿遺構が現在も残存している。地表面に残る版築基壇の規模は、東西 1119m・南北 400m・高さ 7～9m を測り (報告 : 中国社会科学院考古研究所等 2014)、まさに桁違いの規模を誇る。しかし、考古学的な調査は、ボーリングによる範囲確認と一部の試掘に限られており、具体的な構造などはほとんど不明である。この阿房宮前殿の系譜を引くのが、前漢長安城内西南に位置する未央宮 (東西 2250m・南北 2150m) 中央に造営された前殿である。前漢長安城は東を向く構造をしているが、未央宮・前殿は南面する構造を持つ。前殿はボーリング調査によって、東西 200m・南北 400m の規模を持つ基壇が確認されている。前殿基壇上には、南北に連なる3つの宮殿遺構が想定されているが、やはり具体的な構造に関しては不明な部分が多い。続く後漢洛陽城に関しても、建武 14 年 (38 年) に南宮正殿として前殿が建造されたが、遺構としては未だ確認されていない (钱国祥 2002・2003・2022a など) (図 20)。このように、秦漢期の宮城中枢部、特に前殿の様相は考古学的に不明な部分が多いのが現状だが、後述する曹魏・西晋・北魏洛陽城の宮城正門～太極殿の中枢部が発掘調査されたことにより、魏晋南北朝の都城研究が急速に進展している状況である。

魏晋南北朝の都城に関しては、華北の曹魏鄆北城、曹魏・西晋・北魏洛陽城、東魏・北齐鄆南城、北周長

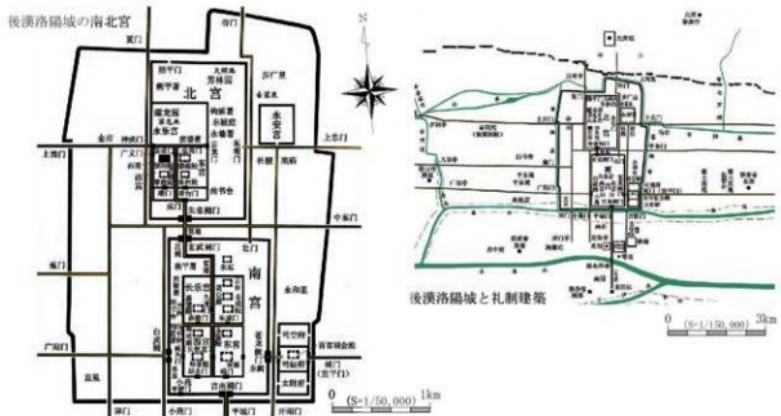


図20 後漢洛陽城の復原

安城の調査研究が進んできた。太極殿・東西堂の成立、坐北朝南する單一宮城制の成立、宮城正門南側の官庁集中配置（皇城空間の前身）、外郭城の成立など、隋唐都城の原型が形成されていく時期である。この時期の都城制の意義を論じた先駆的研究に、郭湖生・朱海仁の研究がある。郭湖生は、北魏洛陽城に闕闈門と司馬門の2つの軸線が存在し、それぞれ「礼仪性的大朝殿廷一组」「处理政务的议事处及枢要部门一组」（郭湖生 1990 p.16）で構成される点を指摘した。この構造を「駢列制」と呼称し、もともとは曹操が造営した鄆北城の文昌殿・聴政殿の二軸構造由来する点、西晋を継承した東晋南北朝から再び北朝北魏へ導入される点を論じた（郭湖生 1981・2003）。朱海仁も曹魏鄆北城の画期を指摘し、それを継承する北魏洛陽城・東魏北齊都城において隋唐都城の「隋唐封閉式都城」の原型が完成した点を強調した（朱海仁 1998）。なお、魏晉南北朝都城における東西2つの軸線、および中軸線の成立に関しては、佐川英治が文献史料の分析から興味深い指摘を行っている。佐川は、よく知られた曹魏鄆北城の復原図（徐光冀 1993 p.424 図2）（図21左）に対して疑問を呈し、中陽門一司馬門一聴政殿の中心に対して、西側に止車門一端門一文昌殿を想定し、シンメトリー構造を否定する。その上で、漢魏洛陽城においても魏晉期まで宣陽門に向かい合うのは司馬門であり、闕闈門と並ぶ「双軸制」が採用されていたが、北魏洛陽城において宣陽門が移築されたことで、太極殿一闕闈門（官庁街の集中配置）宣陽門一円丘が並ぶ中軸道路が完成し、東魏北齊都城で中軸シンメトリー構造が採用されたと指摘した（佐川 2017・2018）（図21右）。同じく文献史学の渡辺信一郎も、曹魏太極殿を模倣した南朝においても大司馬門の軸線に存在した西側に偏る太極殿の軸線（図17左）が、梁の天監12年（512）の大改築によって中央の南掖門が端門に改修され、中軸線に朝堂を取り込むシンメトリーな宮城構造（図17右）が出現したと想定している（渡辺 2009）。一方、漢魏洛陽城の發掘を長年主導した錢国祥は、闕闈門・2号門・3号門・太極殿の軸線は、曹魏明帝の「宮室修治」（安田 2006）により整備されたもので、曹魏西晋期に成立した單一宮城制が南朝に影響を与えたと想定している（錢国祥 2010・2016・2022b）（図22）。特に司馬門に関しては、「水經注」（卷一六、穀水）にある「司馬門南。魏明帝始築闕、崩圧殺数百人、遂不復築、故無闕門。門南屏中、旧有置銅鷹仲匱。」の記載から、後漢北宮正門の朱雀門の修築工事の際に事故が発生し、代わりに西側の闕闈門の位置で曹魏の中心軸が整備され、東側の司馬門は重要な官署・尚書省・朝堂などが置かれることになり、その二軸構造を北魏が踏襲したと考えた（錢国祥 2003 p.59）。錢国祥は、曹魏西晋期に成立した單一宮城を中心として、北魏が宮城・内城・外郭城を整備していく過程を想定している（錢国祥 2019a・2019b・2020）。このように魏晉南北朝期に存在する「駢列制・双軸制」と呼ばれる宮城の2つの軸線構造の存在形態については諸説あるものの、隋唐都城に続く原型が漢魏洛陽城・東魏北齊都城・

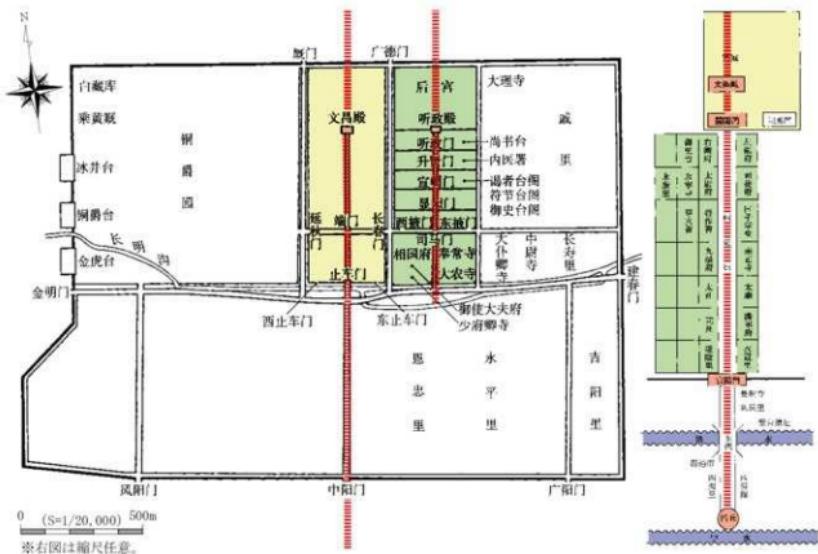


図21 曹魏鄆北城（左）と北魏洛陽城（右）の中軸線

北周長安城の北朝都城で形成されていく過程は徐々に明らかになりつつある。特に、単一宮城における東西2つの軸線構造は、後述する北宋期の都城を考える際にも問題になる重要な論点である点は強調しておきたい。

「建中立極」の宮城正殿である太極殿に関しては、漢魏洛陽城の太極殿・東堂が発掘された意義は非常に大きい（報告：中国社会科学院考古研究所洛陽汉魏故城隊 2015・2016）。なお、曹魏・西晋洛陽城における単一宮城の存在については、太極殿の位置問題と合わせて、多くの議論が蓄積されてきた（佐川 2010・外村 2010など）。詳細に関しては、向井佑介・田中一輝らが研究史を整理している（向井 2012・田中 2017）ため省略するが、現在は後漢の北宮にあった徳陽殿を中心に曹魏に単一宮城が成立したという錢国祥の説（錢国祥 2003）が広く受け入れられている（晏曉雨・程有为 2017、陳建军・周华・扈晓霞 2020、陳苏镇 2021、趙永磊 2021など）。曹魏・西晋・北魏洛陽城の宮城中枢部の様相が発掘調査によって明らかになりつつある（郭ほか 2021など）点は重要で、特に太極殿の構造に関する研究が今後、蓄積される点が予想される。一例を挙げると、陳建军らは太極殿に関連する史料を集成したうえで、太極殿の建築についてまとめており、すなわち、発掘によって検出された創建期（曹魏）の太極殿は、桁行12間で南面には東西2階段が存在していたが、北魏も同じ構造を踏襲したとされる。しかし、北周の「洛陽宮」の造営に際して、桁行13間に改築された。一方、西晋から南朝に継承された太極殿は当初、桁行12間で建築されたが、梁武帝の天監13年（513）に北魏の太極殿を上回る規模の13間に改築された（『建康志』卷二、城闕志「太極殿、建康宮内正殿也。晉初造以十二間、象十二月。至梁武帝、改製十三間、象閏焉。）点を整理した。そして、基本的には北魏洛陽城、および東魏・北齊鄆城の太極殿の構造が、隋大興城大興殿・唐長安城太極殿の桁行12間、南面に東西2階段を有する建造物へと継承された点を指摘した（報告：陳建军・余冰 2019）。

東魏・北齊鄆城に関しては、ボーリング調査によって内城・宮城の平面配置が判明しており（郭济桥 2013・徐光翼 2014）、基本構造が北魏洛陽城と共に通する点が多く、研究者によって指摘されている。太極殿・東西堂、およびその北側の昭陽殿が魏晋南北朝における「前朝」正殿にあたる建築群である点は、曹魏・西晋・北魏洛陽城の発掘調査から判明しているが、注目されるのは2023年に公表された北齊鄆城の「後寝」の主

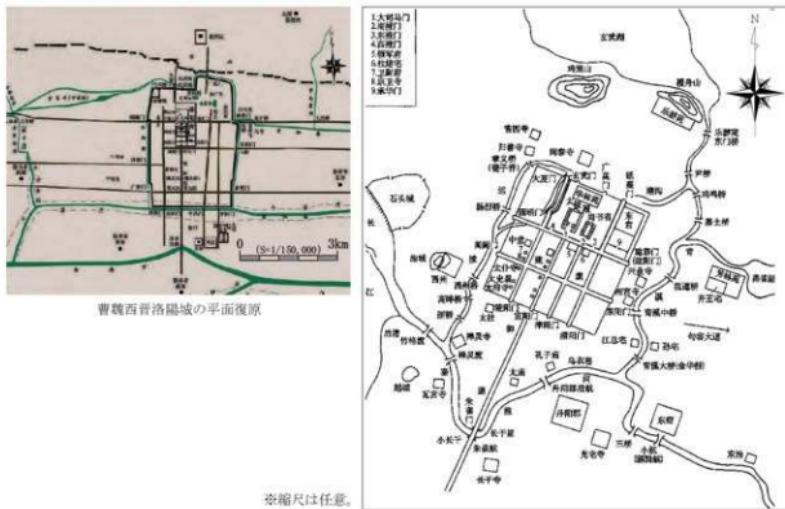


図22 曹魏西晋洛陽城（左）と六朝建康城（右）の平面形

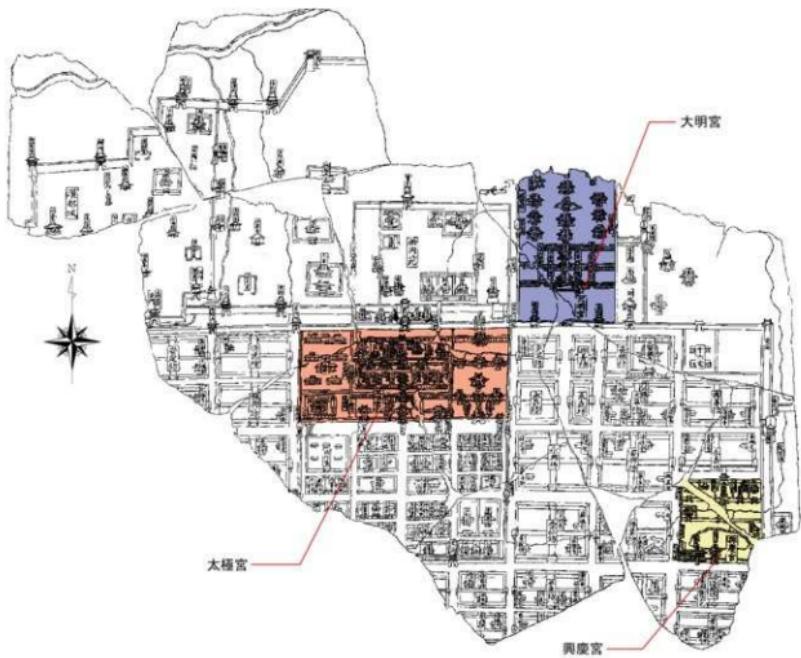
要建築群の調査成果である（報告：中国社会科学院考古研究所等 2023）（図37①右）。昭陽殿より北側は「帝后寝宮」に該当し、北齊の文献史料では顯陽殿・宣光殿の二殿が主要宮殿であった点が知られている。最近の発掘調査では、「東西廊房」で連接されたシンメトリーで規格的な206・209号殿が発掘調査され、その様相が明らかになった。中原都城では宮城の前朝にあたる中枢正殿が明らかになっている事例はあるものの、後寝部分の様相が明らかになったのは初めてである。高句麗・渤海・日本では、王・天皇の居住空間の発掘が進んでおり、東アジアレベルでの比較研究が進むことが期待される分野である。

十六国（前趙・前秦・後秦）～北朝（西魏・北周）期の都城に関しては、前漢長安城北東部に位置する東西小城が宮城遺跡とされる。西小城南壁にある樓閣台遺跡（劉振東 2006、報告：中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊 2008）を積極的に評価し、北周長安城の宮城構造を復原した内田昌功の一連の研究（内田 2009・2010・2013など）もある。しかし、村元健一は、文献史料や地名から北周宮城は前漢長安城の南部に位置していた可能性を指摘し、文献史料上も西魏・北周の宮城構造に「画期性を見出すのは困難」（村元 2022 p. 43）と指摘している。一方、東西小城を結ぶ宮門（中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊 2023）の発掘成果で十六国～北朝・隋の変遷が明らかになり、近年の中国の研究者は十六国・北周期長安城の存在とその意義を積極的に評価するようになっている（史硏析 2023など）。

最後に、漢～魏晋南北朝の都城の長い歴史を概観し、考古学的遺構の変遷過程をまとめている徐龍国研究にも言及しておく。徐龍国は、当該時期の前段を「統一王朝時期」、後段を「大分裂時期」と把握し、單一宮城・三城制・中軸対称布局・一門三道・坐北朝南などの新しい様式が発展していく過程を整理した（徐龍国 2019）。その上で、都城の建築遺構を、①城壁・城門、②宮殿官署、③礼制建築、④宗教建築のそれぞれ異なる特徴を持つ4つに分類し、前漢期の高台建築が土木技術の進歩によって徐々に低くなり、樓閣などの木造中心の建築様式へ変化する点を整理した（徐龍国 2020）。発掘される遺構の種類毎に、その構造を通時的に比較する考古学的視座を示している点において、徐龍国研究は非常に重要である。

唐～北宋の都城中枢部の研究 前述したように漢魏洛陽城中枢部の発掘調査により、魏晋南北朝の都城研究が急激に進展つつある。唐代都城に関しては唐長安城（陝西省文物管理委員会 1958）が都城発展史上の

北宋・呂大防『唐長安城図』の宮城・皇城縮尺は任意。



唐長安城太極宮

唐洛陽城宮城

0 (S=1/35,000) 1km

図 23 唐長安城・洛陽城の宮城

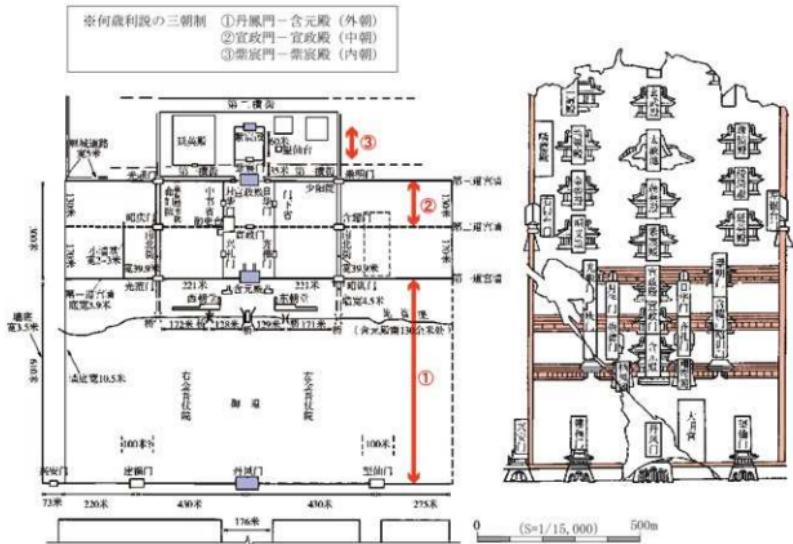


図24 唐長安城大明宮における「三朝」(左)と北宋・呂大防『長安城図碑』の大明宮(右)

ひとつの到達点と考えられてきたが、中枢である太極宮に関しては考古学的な情報が極めて少なく、主に北宋呂大防の「唐長安城図碑」(図23上)の分析(妹尾2009など)や文献史料に基づく復原(傅熹年主編2009 p.384図3-2-2など)(図23下左)が進められてきた。一方、太宗が造営を始め、高宗以降には実質的に長安城の中権となる大明宮に関しては、丹鳳門・含元殿・麟德殿・太液池などが発掘調査され、現在も「國家遺跡公園」として整備されるなど調査研究・保存整備・活用公開が進展している。なお、近年の動向として注目されるのは、京師としての長安城に対する陪京(陪都)であった東都洛陽城における発掘調査の進展である。唐洛陽城は、高宗～武則天期に整備され、武則天の時期には神都として中枢部に明堂・天堂が造営されるなど殷賑を極めた。また、続く北宋期には東京開封城に対して、西京洛陽城として再整備されており、唐代都城の諸要素は洛陽を通じて北宋へと継承された可能性が高い。この点は、唐代都城をひとつの到達点と考える従来の研究ではあまり注目されてこなかった部分であり、唐代都城から北宋都城への変容過程、そして北宋から遼金元の北方都城への展開過程は、近年、中国でも非常に注目されている研究分野である。以下、唐～北宋期の都城中枢部の研究史を、近年の動向を中心で整理する。

唐長安城大明宮に関しては、発掘調査報告や関連文献がまとめられている(報告:中国社会科学院考古研究所編2007)。麟德殿(報告:中国科学院考古研究所編著1959)、含元殿と東朝堂(馬得志1961・1987、中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊1997・1998・2012)、丹鳳門(中国社会科学院考古研究所西安唐城隊2006)などが発掘・報告されている意義は大きい。今までに建築史学の立場からの復原研究(郭文宇1963、劉致平・傅熹年1963、傅熹年1973・1998a・1998b、楊鴻勛1987・1989・1991・1997・2013)、文献史料の整理(吳春・韓海梅・高本寧主編2012)、三朝制に関する分析(辛德勇1991、劉思怡・楊希義2009、楊軍凱2012、杜文玉2012a・2012b、杜文玉・趙水靜2013、賈鴻源2017、何岁利2019)(図24)など非常に多くの研究が蓄積されている。特に大明宮正殿であり、元正冬至の大朝会・改元発布・大赦・冊封・受賞の場、すなわち外朝大典空間として機能した含元殿については、左右朝堂、左右樓閣(翔鸞閣・鳳閣)、龍尾道などの建築構造が研究対象となってきた。皇帝権力の隔絶性を可視化すると同時に、左右階から臣下を

登壇させる特徴的な立体構造に関しては、渤海・日本都域への影響が注目されてきた（安 1998・2003、安家瑤 2005a・b、王仲殊 1999 など）。また、大明宮正殿でありながら左右楼閣を有する「闕式主殿」の構造は、承天門の系譜を引く朝堂・肺石・登聞鼓などの諸施設の存在も含めて分析対象となってきた。これに関しては、馬得志が隋仁寿宮・唐九成宮 1 号宮殿を含元殿の祖型と考えている点が注目できる（馬得志 2005）。なお、外国使節が来朝した際の宴会の場となった麟德殿についても、日本都域へ影響を与えたと考える説（王仲殊 2001b）がある点も注意しておきたい。

唐洛陽城に関しては、唐長安城との対比的分析（宿白 1978、馬得志 1982、傅熹年 1995・1998c、姜波 1996、石自社 2009）が多く蓄積されているが、近年、1959～2001年の発掘調査を総括する報告書が刊行され（報告：中国社会科学院考古研究所編 2014）、研究が新しい段階へ進みつつある。宮城中枢部に関しても、応天門・明堂・天堂・九洲池などの発掘成果が整理され、武則天期に大明宮と並ぶ威容を誇った宮城構造が判明しつつある。もともと隋煬帝の東都宮の大規模造営によって形成された中枢部主軸（傅熹年主编 2009 p. 392 図 3-2-4）は、端門（皇城正門）・則天門（宮城正門）・乾陽門・乾陽殿で構成されていたが、隋滅亡後に焼失し、唐太宗に至って洛陽宮と改称して再整備され、高宗が東都と改称して正殿を乾元殿、乾陽門を乾元門（665）とした。その後、武則天が乾元殿を取り壊して明堂（万象神宮：688）を造営し、北西側に天堂も建造した。695 年に明堂・天堂は焼失するが、696 年には明堂が再建され、通天宮と改称された。玄宗の時期には、明堂の上層が撤去されて 717 年に乾元殿（740 年に含元殿）と再度改称され、安史の乱で焼失した。ここでは、宮城中軸（報告：中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊 1989、楊換新 1994a・b など）（図 23 下右）上に位置する建造物の発掘成果を中心に整理しておく。

まず、唐代洛陽城の宮城正門は三出闕を有する一門三道の過梁式門：応天門である（洛阳市文物工作队 1988、中国社会科学院考古研究所洛陽唐城工作队 2007、報告：中国社会科学院考古研究所 2014、中国社会科学院考古研究所洛陽唐城工作队等 2019、洛阳市文物考古研究院编 2022）。隋則天門・唐応天門は、開元年間に五鳳樓と改称されて北宋西京に継承されるが、その構造は北宋東京宣徳門（三門道から五門道に改修される）に影響を与えた点が指摘されている（韓建华 2016a）。正殿は隋乾陽殿・唐乾元殿から明堂へと変遷したが、1986 年の発掘調査で巨大な 4 つの礎石を設置した八角形の礎石据付坑と、隋乾陽殿上層に八角形の基壇（東西 87.5m・南北 72m）が検出されて位置が判明した（報告：中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊 1988）（図 26 上左）。文献史上、武則天明堂は「上円下方」とされているため、八角基壇は天堂であり、その南側で検出されている基壇を明堂とすべきなどの疑義が呈されたが（辛徳勇 1989・余扶危・李徳方 1989）、考古学の立場から位置・構造などから改めて明堂の可能性が指摘され（王岩 1993）、現在は明堂と確定している（韓建华 2019）。中国史上、明堂は「天円地方」を表現する「上円下方」の構造を基本とするため（王世仁 1963、楊鴻勛 1998・2012、中国社会科学院考古研究所 2003・2010b、南澤 2018）（図 25）、韓建华は漢代に見られる「亜字形」明堂の変体として武則天の八角形明堂を位置付けている（韓建华 2019 p. 118 図 7）（図 26 上右・中）。ちなみに、高宗永徽 2 年（651）の明堂案も八角とされており（傅熹年主编 2009 p. 435 図 3-3-2）（図 26 下左）、上円下方の概念と八角形基壇の構造は矛盾するものではない（図 26 下右）という姜波の重要な指摘もある（姜波 1996 p. 442）。武則天が「自我作古、用適于事」（『旧唐書』卷二二、礼儀志二）の決意のもとに造営した明堂の歴史性は、様々な角度からその意義が論じられている（楊鴻勛 2001・南澤 2010、王貴祥 2011・呂博 2015・大西 2020）が、金子修一が指摘するように「明堂は単に武周の政治的象徴としての役割を果たしていたのではなく、事实上の正殿としての役割を果たしていた」（金子 2001a p. 270）点が重要である。「宮廟合一」によって特殊な構造と儒教的來歴を持つていたとしても、武則天の明堂は神都洛陽の宮城正殿として建造され、その役割を果たしていたのである。また、1973～79 年に洛陽博物館が、明堂の北西側、中軸から西へ 100m の位置で直径 64.8m の大型円形建物を検出した。中央には 3 つの石を組み合わせた巨大な礎石を設置した八角形の礎石据付坑が確認され、中心礎石の周囲には礎墩（4 つの石を組み合わせた基礎）が内圈 12 基、外圈 20 基巡ることが確認された（報告：洛阳市文物考古研究院 2016）。円形基壇の外側には、東西 69m・南北 78m の方形基壇も確認されており、白馬寺の僧・薛懷義が主体となって造営した天堂と考えられるに至っている（図 27）。石自社は、天枢・明堂の八角形、天堂の上円下方など、

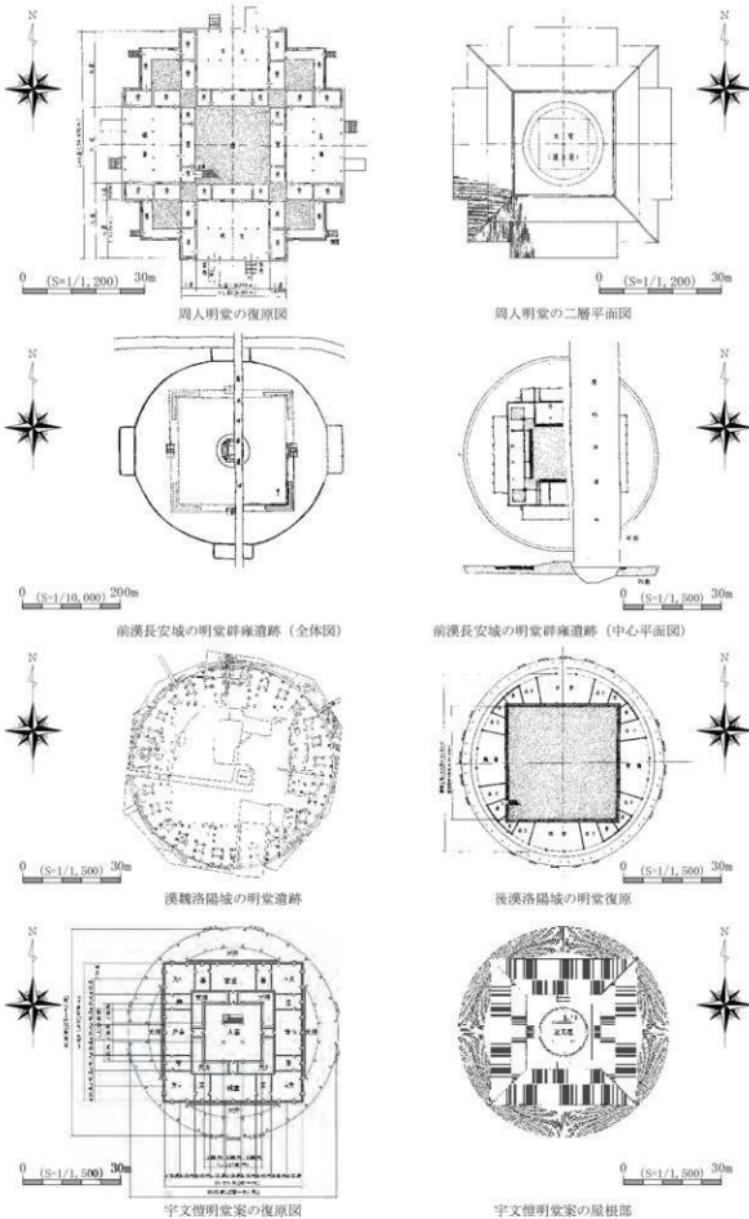


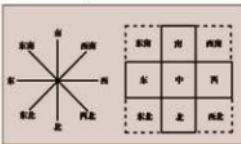
図 25 楊鴻勦による明堂の諸例



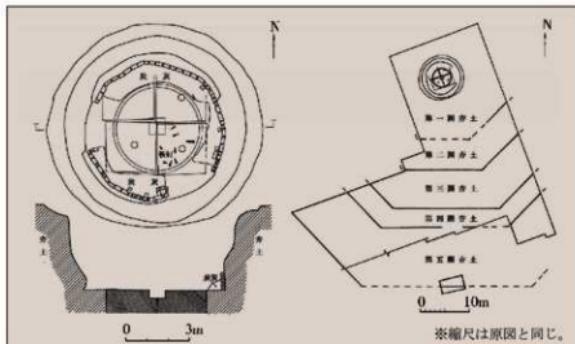
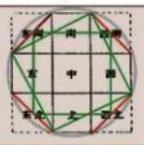
率縮尺は任意。



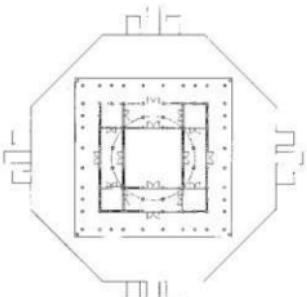
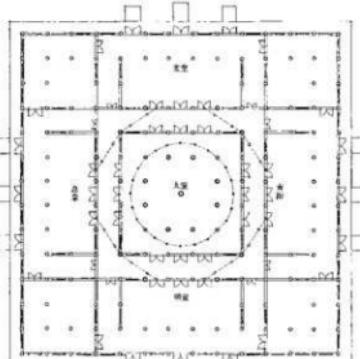
明堂・天堂・天枢の位置（模式図）



韓建华による明堂間連図

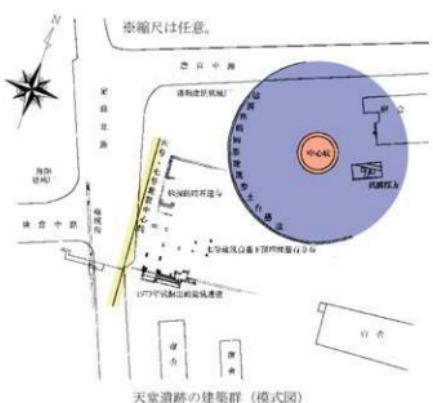


1986年に発掘された明堂の平面図



傅熹年による唐永徽明堂方案の復原図
0 100 唐尺

図 26 唐洛陽城における武則天明堂関連の資料



天堂遺跡の建築群（模式図）



天蠍の中心坑



天堂の中心礎石に見られる刻印

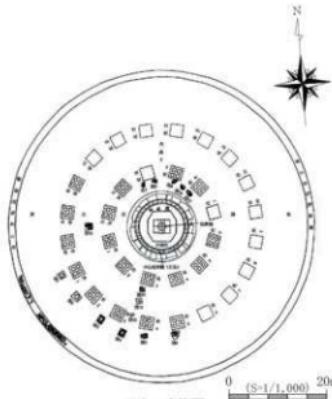
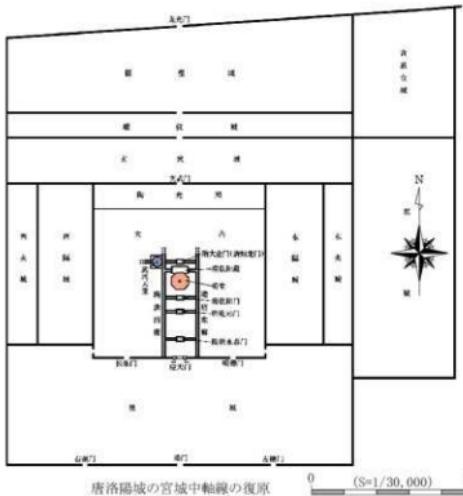


図27 唐洛陽城における天堂の位置と発掘成果

いずれも中国古代の天円地方に基づく宇宙觀や哲学思想を表現した武則天の政治性の強い象徴的建造物である点を指摘している（石自社 2021 p.98）。なお、これら宮城中枢部の西側に位置する隔域では、皇家苑林として著名な九洲池も発掘されている（韓建華 2018）。

唐代洛陽城宮城中枢部の軸線が北宋期にどのように変化していくのか、も重要な論点である。社会科学院考古研究所洛陽唐城隊のポーリング調査によって、唐宋期の中軸上の主要宮殿の変遷が推定されている（報告：中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1989 p. 247 図 9、楊煥新 1994b p. 154 図 1）。その後、近年の発掘成果も踏まえて、韓建华・石自社が軸線の変容過程とその意義を整理している（韓建华 2016b・c、石自社 2016）（図 29 上）。韓建华の復原図（韓建华 2016a p. 267 図 12）によると、北宋は唐の中軸線を沿用しており、主に乾元殿・明堂跡地より北側に正殿である太極殿を置くことで、左右廊（千歩廊）で囲まれた「前庭」空間を広く設定したとされる。中軸建物は、南から五鳳樓・太極門・太極殿・天興殿であり、特に正殿



王书林による唐洛陽城中枢部の復原

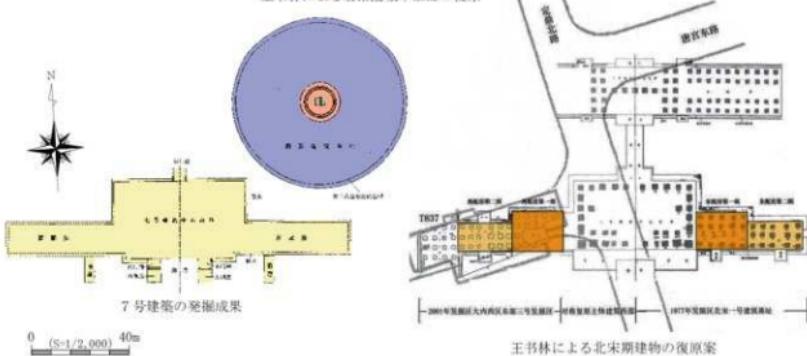


図28 唐東都洛陽城武成殿・北宋西京洛陽城文明殿とされる遺構

である太極殿は前殿と後閣が「柱廊」で結ばれる「工字形」の「前後二殿」形式である点が注目できる。宮城全体の構造を見ると、『河南志』附録にある「唐西京城図」(図29中右)で知られるように宮城を皇城が包摂する「回字形」構造をしている。韓建华は、北宋初期には下向きの凸形を呈する宮城(唐の大内・東隔城・西隔城を含む)から、宋徽宗の時期の大規模改修で北側に広がった点を想定している(韓建华 2016c p. 116-117 図1～3)(図29下)。基本的には宮城・皇城の「回字形」構造、正殿(太極殿)の「工字形」前後二殿構造が北宋期の大きな特徴といえる。また、中軸西側部分に大型の宮殿遺構が多数検出されている点も重要である(韓建华 2016c p. 118 図4など)。特に天堂の西南側で検出された北宋期の1・2号建築(報告: 洛阳市文物考古研究院 2016)が注目できる。1号建築は前面に月台、左右に配房を持つ大型基壇で、柱廊を通じて後閣である2号建築と連接する「工字形」建築である。唐代の大型宮殿を改修している点から、陈

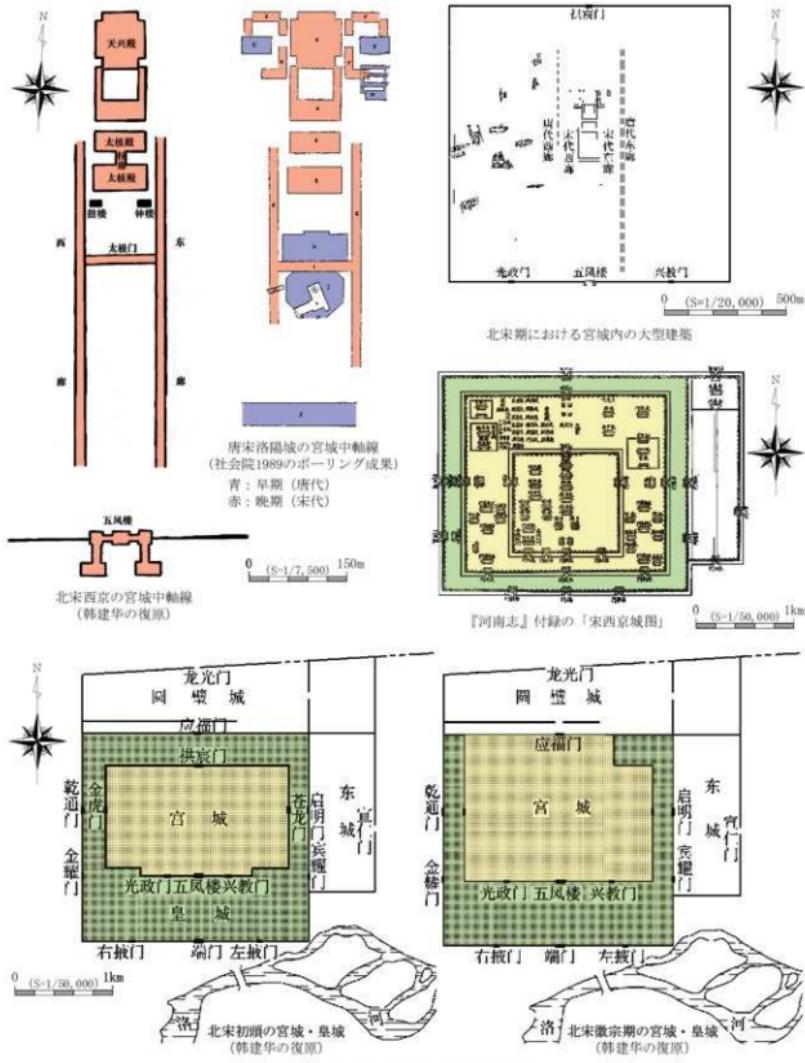


図29 北宋西京洛陽城の宮城復原

良伟は中軸西侧に存在した唐宣政殿・宋文明殿の可能性を指摘しており（陈良伟 2016 p.144）、王书林も唐武成殿・北宋文明殿と位置付けている（王书林 2020 p.129、王书林・徐新云 2022）（図28）。

なお、北宋西京洛陽城の中軸、および西側の2つの軸線の問題については、文献史研究の立場から注目されてきた現象である。例えば、北宋東京開封城では、中軸の大慶殿（正殿／正月元旦・冬至の大朝会の場）・紫宸殿（望日視朝の場）に対して、西側に文徳殿（正衙／常朝の場）・垂拱殿（毎日の前殿視朝の場）が位

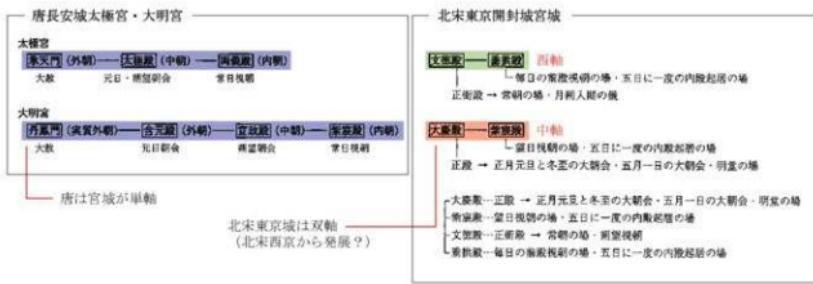


図30 松本保宣による唐宮城（左）と北宋宮城（右）の比較



図31 北宋東京開封城の重圓構造（左）と宮城復原（右）

置する二軸構造が知られている（松本 2020 p.172 図5・6）（図30・31）。王书林は、「中軸・西輔軸」と呼称する（王书林 2020 p.110 表3-3）。松本保宣は、鈴木亘・傅熹年の研究（鈴木 1980・傅熹年主編 2009）を整理しつつ、東京開封城の東西二軸構造は隋唐五代の洛陽宮を媒介にしたもので、その淵源は武則天の明堂・天堂にある点を指摘した（松本 2020）。すなわち、武則天期に洛陽宮城西側の政治空間化が進み、延英殿での議政の開始（松本 1993・2006・2013など）などに影響を与えたと考えたわけである。北宋東京城の宮城については、発掘によって中枢部の構造が判明しているわけではないが、文献史料・絵画資料を通じた宮城の復原研究が蓄積されている（劉春迎 2004、久保田 2007、報告：孟凡人 2019、久保田和男著・郭万平译 2021など）。今後は、北宋西京・東京の比較分析も進んでいくと思われる。

以上、唐宋期の宮城中枢部の研究状況について、整理した。特に唐代都城中枢部の研究は、長安城大明宮を中心に進んできたが、近年、唐都洛陽城の中軸線の様相と北宋西京への変遷過程が判明しつつあることで、唐から北宋に向けた都城の発展に大きな関心が向けられている状況にある。北宋都城は、遼金元の草原都城への展開においても重要であり、都城の大きな変革期に位置すると思われる。すなわち、①宮城・皇城の「回字形」構造、②宮城内の東西二軸構造、③「工字形正殿」の二殿構造など、新しい構造的特徴が生まれる時

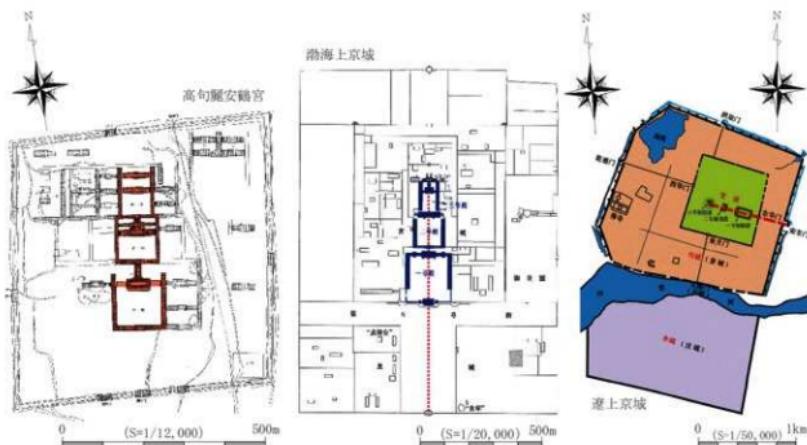


図32 刘露露により系譜関係が指摘される高句麗・渤海・遼の都城

期で、それらの要素が武則天期の唐洛陽城宮城中枢部から生まれている点は非常に重要な論点である。①はもともと魏晋南北朝都城における宮城・内城の関係性、②も同じ時期の「駢列制・双軸制」と関わる可能性があり、今後、更なる検討が必要な分野である。また、③については、後述するように明清期の「三殿制」へと発展する要素であると同時に、高句麗・渤海・日本などでは唐代には既に認められる特徴でもある。北宋都城は、唐までの「封閉式里坊」から「開放的街巷制」への過渡期（久保田 2018・石自社 2016）に位置付けられるなど、様々な点から見て、都城発展史上の大きな画期と把握することが出来るだろう。

遼・金・元の都城中枢部の研究 契丹の遼、女真の金、モンゴルの元、各王朝が造営した都城に関しては、文献史料を中心に研究が進められてきた。しかし、近年では遼上京城（報告：董新林 2019 など）・金上京城（報告：黑龙江省文物考古研究所 2017 / 2019・2023）・元上都（報告：魏坚 2008）・元中都（報告：河北省文物研究所 2012）などの中枢部の発掘調査が蓄積され、北方・草原地帯に位置する遼・金・元都城の考古学的研究が急速に進んでいる。ここでは、中枢部の調査研究事例を中心に研究史を整理しておく。

遼初代の耶律阿保機が造営した遼上京城（臨潢府）は、内蒙古巴林左旗に位置する。北側の皇城・南側の漢城の二城構成で、皇城（内城）中央やや東に位置する宮城が東向きである点が判明している。発掘によつて宮城東門の東華門が、一門三道の殿堂式門と判明し（中国社会院考古研究所内蒙第二工作隊等 2017）、その西側に1・2・3号院が徐々に規模を減じながら主軸構造が明らかになった（報告：董新林 2019 など）。刘露露は、このような宮城構造、殿堂式城門構造、瓦当などから渤海上京城の影響を指摘している（報告：刘露露 2022）（図32）。また、董新林は皇城（内城）・漢城（外城）の接続構造を北方少数民族が漢族を統治する体制で生まれる構造として「日字形／遼上京規制」と定義した。その上で、中原の北宋東京城に見られる宮城・内城・外城の三重圈構造を伝統的な様式と捉えて「回字形／北宋東京模式」として対置し、両者が明清北京城で統合されていく過程を論じた（報告：董新林 2019）。北方遊牧民族が中原都城をモデルにしながらも、新しい都城を造営していく過程は歴史学でも注目される分野であり（郝紅暖・吳宏岐 2009 など）、建築史学の立場からも遼・金・元都城の構造を通時的に分析する優れた研究も存在する（诸葛淨 2016）（図33）。北方遊牧民族が活躍したこの時期の都城は、明清北京城への過渡期でもあり、考古学・文献史学・建築史学などの成果を網羅した孟凡人の体系的研究もある（孟凡人 2013、報告：孟凡人 2019）。

金代前半期に造営された金上京城（会寧府）は、黒龍江省ハルビン市阿城区に位置する。曲尺状を呈し、北城・南城の二城で構成され、南城西側に中枢域の皇城が坐北朝南する（報告：黒龍江省文物考古研究所 2017 な

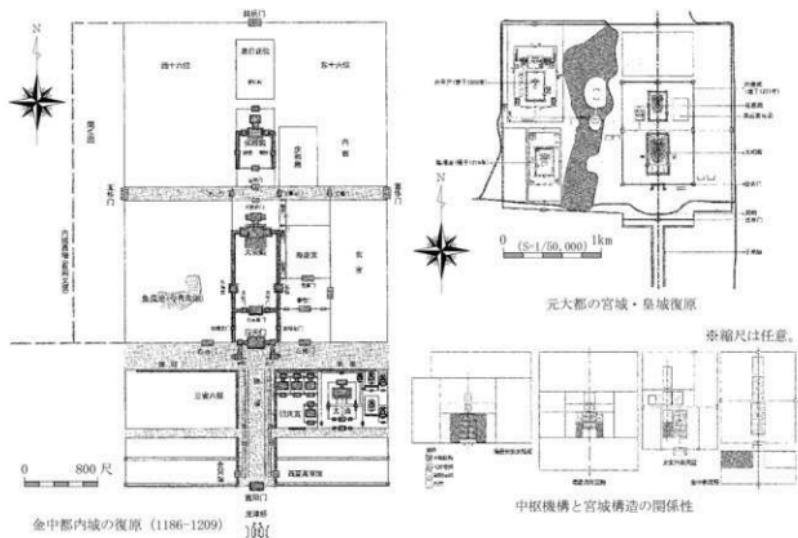


図33 諸葛淨による唐宋～遼金元都城の空間構造の変遷

ど)。東西500m・南北645mの皇城中軸上には、正門の午門から中軸上に1～5号基壇が確認され、特に4号宮殿が「工字形」を呈する（報告：孟凡人2019 p.183）。一方、金が現在の北京市に营造した金中都に関しては、中枢部の発掘は行われていないものの、文献史料・絵画資料から詳細な復原が行われている。宮城は大きく南の前朝、北の後寝で構成され、宮城正門の応天門は闕門で、その前に御道と左右千歩廊がある（図33左）。前朝前面の大朝殿は「工字形」の大安殿、前朝後方の常朝殿がやはり「工字形」の仁政殿である（諸葛淨2016 p.35図3-4）。金中都の構造は、北西に場所を変えて元大都に継承されることになる（傅熹年1993・渡辺2017など）。元大都の宮城は明清期の紫禁城へと発展するが、文献史料によると宮城には前面の大明殿建築群、後方の延春閣建築群、ともに「工字形」の建築群で構成される。宮城正門は、双闕式五門道の崇天門で、その姿はアメリカのネルソン・アトキンス美術館所蔵の元人『官述図』にも描かれている（林梅村2011 p.19図7）。元大都宮城中枢部の「工字形」正殿の在り方は、明清の外朝「三大殿」（清の太和殿・中和殿・保和殿）へと発展していくことになる。このように見てくると、北宋東京・西京で成立した「工字形」正殿のあり方が、北方都城を経て明清北京城の紫禁城へと発展していく過程を理解できる。

なお、金中都・元大都から明清北京城へと繋がる系譜とは別に、元には上都・中都が存在しており、発掘調査が進展している点が注目できる。フビライが营造した元上都は、内蒙古正藍旗に位置する（報告：魏堅2008）。宮城・皇城・外城の三重圓構造で、宮城中央の1号下層遺構がフビライ建造の正殿・大安閣とされる。大ハーンの即位空間でもあった大安閣は、金南京（北宋徽宗の潜邸にあった熙春閣）から移築されたものとされる（久保田2019 p.14）が、現存する遺構は東西36.5m・南北30mと規模が小さい。文献史料からは、七層にも及ぶ「多層樓閣」建築が想定されており（冯恩学2008）、大都以降には元朝皇帝の夏の離宮として利用された上都の特殊性を物語る。一方、宮城内最大の建造物は、北壁中央に位置する東西130m×南北60mの開式主殿（陸思賢1999、報告：内蒙古师范大学等2014）で、文献史料の穆清閣と考える意見が多い（久保田2019 p.13図15など）。元中都は、第7代皇帝の武宗カイシャン（中国名：海山、在位4年）が营造した未完成の都城とされ、河北省張北県に位置する（報告：河北省文物研究所2012）。元上都→元大都→元中都の順に营造されたが、明清期の改築によって原型を失っている大都の宮城中枢部を考える上で重要

な都城である。宮城・皇城・郭城の三重構造で、宮城中央に1号宮殿が位置する。1号宮殿は、正殿（前面に月台）と寢殿（東西に夾室・北に香閣）が柱廊で結ばれる「工字形」正殿で、文献史上の元大都大明殿建築群との高い共通性が指摘されている。また、航空写真のソイルマーク、ボーリング成果から宮城内の平面配置を復原した陈筱は、モンゴル高原のカラコルム（白石 2022）や瀋陽故宫との共通性を指摘し、草原都城に見られる民族的特色を想定している（陈筱 2016、陈筱等 2018、陈筱・孙华 2018）。

以上、遼金元代の草原都城に関しては、従来、文献史料・絵画資料を基にした研究が進んできたが、近年の発掘調査の進展によって、実際の遺構レベルで宮城中枢部を把握できるようになっていく点が注目できる。特に、北宋東京・西京で出現した「工字形」正殿が草原都城でも受け継がれ、明清北京城における紫禁城の三殿式へと発展していく過程が考古学的にトレースできる点は非常に重要である。

渤海都城と中原都城の比較研究 713年に大祚榮が唐玄宗に「渤海郡王」に冊封された渤海国は、五京制を採用した。中京顯德府（西古城）・上京龍泉府（上京城）・東京龍原府（八連城）・西京鶴綠府・南京南海府である（宋玉彬 2009 など）。首都（京師）は、「旧国」（教化）時代から中京→上京→東京→上京と変遷し、150年以上は上京城を中心としていた。近年、上京城（報告：黑龙江省文物考古研究所 2009）、西古城（報告：吉林省文物考古研究所等 2007）、八連城（報告：吉林省文物考古研究所等 2014）の発掘報告書が刊行されたことで、渤海都城の構造研究、および中原や高句麗・日本都城との比較研究が急激に蓄積されている。

まず、渤海都城が唐長安城の影響を強く受けている点は、多くの研究で指摘してきた点だが、その前後の系譜、すなわち高句麗都城（安鶴宮など）が渤海都城に与えた影響、渤海都城が遼都城（上京城など）に与えた影響が、議論されている点も注目しておきたい。例えば、平壠遷都以降の後期高句麗における宮殿遺構とされる安鶴宮（報告：朴灿圭 2015）に関していえば、その年代は不明な部分が多かったが、近年では出土土器を検討した王飛峰により6世紀後半～高句麗滅亡（668）の年代が考えられており（王飛峰 2015）、その構造が南北朝期の中原都城と共通する点も指摘されている（ヤン・ジョンソク 2012・王飛峰 2020 など）。魏存成は、高句麗安鶴宮の南宮・中宮・北宮が並ぶ中軸構造について、北魏洛陽・北齊鄆城へ隋唐長安城の「前朝後寝」の構造的影響を受けているとし（魏存成 2003・魏 2004）、南宮を「前朝の外朝」、中宮を「前朝的内朝」と位置付けた（魏存成 2016 p. 298）。高句麗後期の都城である安鶴宮に関しては、丸都山城などの中期高句麗とは相違点が多く、隋・唐長安城などの影響を受けており、渤海海上京城に展開したとする説もある（張明皓 2019）。なお、渤海都城から遼都城への影響に関しては、遼上京城の宮城構造（「三院落」構造）に渤海海上京城の宮城中軸線の影響を考える説もある（報告：劉露露 2022）（図 32）。渤海都城前後の系統性は、今後、研究の深化が期待される分野である。

さて、発掘調査の進展によって、渤海都城の研究は急激に進んでいる。考古学の成果を踏まえた専門書（劉曉東 2006、魏存成 2008・2015、報告：趙虹光 2012 など）も多く刊行されているが、ここでは宮城中枢部の問題に限って、研究史を簡単に整理しておく。前述したように渤海都城は、中京→上京→東京→上京と変遷したと考えられているが、最も長い歴史を持つ上京城のみが、唐長安城を模倣した宮城・皇城・外郭城を備えた都城とされる。西古城・八連城は、上京城の宮城部分のみで構成されるため、上京城が段階的に整備されたとする説（劉曉東・魏存成 1991、趙哲夫 2015 など）もあるが、未解決の部分も多い。上京城の宮城中軸線は、南から宮城正門・1～5号宮殿、宮城正北門で構成され、北側には唐長安城大明宮の北門建築群・唐洛陽城宮城北の円壁城と共通する空間がある（趙虹光 2009、報告：趙虹光 2012 p. 117 など）。西古城・八連城には、上京城の1・2号宮殿が存在しない構造となるが、王培新は、前者は最初の渤海王城であるため、後者は離宮・陪京の性格のためと想定している（王培新 2014）。三都城の関係性については、今後の発掘による遺構の前後関係の確認や遺物の型式学的分析の進展で更に研究が深化していくと思われる（図 34）。

このように、渤海都城では上京城龍泉府が、唐長安城の忠実な模倣形とされており、それゆえに唐宮城に見られる「三朝制」の概念で比較研究が蓄積してきた。詳しくは劉曉東・李陳奇が研究史をまとめている（劉曉東・李陳奇 2006）が、唐長安城の太極宮を模倣対象とするか、大明宮を模倣対象とするか、によって上京城宮城中枢部の理解が異なる点が注目される。太極宮を模倣していると考えるのが、劉曉東・李陳奇である。劉曉東らは、3・4号宮殿を寢殿と捉え、2号宮殿を内朝、1号宮殿を中朝、宮城正門前を外朝と考えた。



図34 渤海都城（上京城・西古城・八連城）の中枢部比較

宮城正門前はT字形の広場となっているが、承天門の制度を模倣した外朝大典空間としている。外朝・中朝・内朝と南から北に向けて広場・庭院は狭くなるが、殿堂の桁行は大きくなる（正南門：9間／1号宮殿：11間／2号宮殿：19間）点も注目し、唐長安城含元殿・麟德殿、あるいは北宋正殿が桁行11間で最高ランクである点から、1・5号宮殿（11間）の格式が高く、2号宮殿（19間）が特殊である点を整理した（劉曉東・李陳奇 2006）。ちなみに、劉曉東は、都城全体の構造に関しては唐洛陽城→唐長安城と影響が変化する点を指摘し、日本も唐洛陽城の影響を受けた前期難波宮・藤原京から、唐長安城の影響を受けた平城京へと変化するとし、渤海・日本都城が連動すると考えた（劉曉東 1999）。前述した上京城の模倣を太極宮と見る説に対して、大明宮を想定するのが魏存成である。魏存成は、上京城段階造営説に立ち、第一次上京時代に

表2 渤海上京城の宮城構造と三朝制諸説

研究者	渤海海上京城			
	宮城正門（第5号街上）	1号宮殿	2号宮殿	3・4号宮殿
劉曉東・李陳奇 2006	外朝 (太極宮承天門)	中朝 (太極宮太極殿)	内朝 (太極宮內儀殿)	寢殿
王維坤 2008	—	大明宮含元殿	—	—
今井晃樹 2012	—	外朝 (太極宮承天門) (大明宮含元殿)	中朝 (太極宮太極殿) (大明宮宣政殿)	内朝 (太極宮內儀殿) (大明宮紫宸殿)
	平城宮			
魏存成 2016	中央区朝堂院南門	中央区太極殿院 中央区朝堂院	東区太極殿院下層建物 東区朝堂院下層	内裏
	外朝 (大明宮丹鳳門～含元殿)	中朝 (大明宮宣政殿)	内朝 (大明宮紫宸殿)	

3・4号宮殿が造営（西古城・八連城の1・2号宮殿部分と同じ）され、第二次上京時代に大明宮の影響を受けて1・2号宮殿が増設されたと考え、宮城正門～1号宮殿が外朝（丹鳳門～含元殿）、2号宮殿が中朝（宣政殿）、3・4号宮殿が内朝（紫宸殿）に対応する点を指摘した（魏存成 2016）。唐・渤海海上京城・平城宮の宮城中枢部の比較では「三朝制」に基づく視点が多く、今井晃樹・王維坤も渤海海上京城の1号宮殿を含元殿の模倣と考えており、殿前に龍尾道（壇）を持つ平城宮中央区太極殿との共通性を指摘している（今井 2012・王 2008a）（表2）。

以上、渤海都城は上京城・西古城・八連城の発掘調査で研究が飛躍的に深化しており、高句麗からの系譜、遼への系譜が議論になるとともに、上京城の宮城構造が唐長安城、あるいは日本平城宮と比較対象になっている。その場合でも、渤海都城中枢部の相互の関係性、あるいは系譜に関しても太極殿・大明宮など諸説あり、定説を得るには至っていない状況である。

小結 中国都城の中枢部に関する研究史を整理した。特に、2000年以降の発掘調査の進展によって、研究が劇的に進展している点がわかる。中枢正殿を通時的に見れば、秦始皇帝の阿房宮に始まる秦漢の「前殿」、曹魏明帝の洛陽宮に始まる魏晉南北朝の「太極殿・東西堂」、唐の「太極殿（唐初～）」「含元殿（高宗～）」「明堂（武則天期）」の3つの正殿、北宋西京洛陽城・東京開封城に始まる「工字形正殿」、明清期の「三殿（三台）」へと変遷した点が整理できる。重要なのは、中枢正殿の多くが、文献史料としての存在だけでなく、発掘遺構など考古学的に把握できる状況になりつつある点である。

従来は、このような宮城正殿の構造に関する通時的な変遷を踏まえた上で、正殿自体の系統性や礼制建築との関係性、あるいは同時代における周辯国への伝播の問題などを扱う研究が存在していなかった。魏晉南北朝～唐代を中心に周辯国（高句麗・渤海・日本など）に伝播した都城中枢部を考える際にも、あくまでも中国都城の通時的変遷を踏まえて議論すべきだと考える。さらに、正殿の国際比較の際にも、唐の「三朝制」など思想的な背景が主な論点となってきたが、考古学的な発掘調査で確認している正殿自体の構造的な比較が進んでいない点も課題である。漢代前殿の「前朝後寢」構造、魏晉南北朝期の太極殿・東西堂の東西軸構造、北宋以降の「工字形」正殿と明清期の「三殿」構造など、考古学が得意とする構造的な分析が必要だと考える。なお、研究史上、魏晉南北朝における宮城の「駢列制」が議論の対象となってきたが、近年では北宋西京・東京でも確認されるように、宮城中枢部における双軸（東西、あるいは南北）構造も、時空間を超えて存在する中国都城の特色である可能性も出てきた。いずれにしても、長い歴史をもつ中国都城の宮城中枢部の分析において、隋大興城・唐長安城を完成形とみる視点だけでは、中枢正殿が持つ根源的意味を解き明かすことは出来ない。あくまでも通時的な空間・構造分析に基づいて、中国都城の発展や伝播を考究する必要があると考える。

1-4 論点と課題

ここまで多くの紙幅を費やし、東アジア都城の宮城中枢部、およびその正殿の研究史について、整理してきた。筆者の力量の限界から新疆、朝鮮半島、あるいは中央アジア、北アジア、東南アジアなどの動向をまとめることが出来なかつたが、日中両国で蓄積されてきた膨大な研究の一冊は個別トピック毎に論点を整理できたと考える。中原を中心に発達した都城制、特にその中枢部の根幹的な構造を理解するためには、通時的な分析、国際的な比較分析が必要である。そのためには、文献史学・建築史学・歴史地理学・考古学などの様々な分野の研究動向を多言語で涉獵する作業は避けて通れない。1-1から1-3までの小結で、問題点などは整理してきているが、最後に東アジア都城中枢部、特に正殿の構造的な分析に際しての論点と課題を簡潔に整理しておく。

都城中枢部の研究に関しては、高度経済成長期以降の日本で発掘調査が蓄積され、詳細な研究が積み重ねられてきた。その比較対象として中国都城中枢部の研究が日本人研究者によって行われてきたが、90年代、あるいは2000年以降には中国の急激な経済発展に伴って発掘調査が蓄積され、都城中枢の構造が徐々に明らかになりつつあり、従来の都城研究の「定説・認識」も大きく変わっている。これまでの都城研究は、文献史学を中心進められてきたが、発掘による遺構・遺物の検出によって、考古学的情報を文献史料と突き合せつつ、どのように解釈していくか、が課題になってきている。いずれにしても研究の核心は、長い歴史を持つ中国都城の中枢部の構造認識にある。各王朝が創始する都城、その遷都とはすべからく画期であり、中国都城においても1つとして同じ形の都城は存在しない。北方異民族や西域商業民など多様な影響を受けつつ成立していく中原地域の伝統的な都城から、北方遊牧民族の遼・金・元などの草原都城を経て、明清期に完成していく都城の構造と諸制度は、その通時的な分析こそが重要と考える。このような中国都城の通時的な分析を中心据えつつ、各王朝単位での周辺地域への伝播を明らかにする必要がある。特定の時代における特定要素を抜き出して、その国際的な影響関係を論じても、それが都城制のどのような本質を反映しているのか、理解することは難しい。

このように都城制研究においては、中国都城の通時的な分析に立脚すべきと考える。特に、考古学分野の研究に関していえば、急速に蓄積される発掘資料を基にして、史料批判とは異なる角度から発掘遺構を構造レベルで分析する作業が重要だと考える。「周礼」「三朝制」などの思想的背景の追究はもちろん重要な分野ではあるが、宮城中枢部の空間構造、あるいは正殿の構造比較など考古学が得意とする分析を蓄積することが、現在もっとも重要な視点だと考える。特に、中国都城中枢部の正殿に関しては、漢代の前殿、魏晋南北朝の太極殿・東西堂、そして唐の太極殿・含元殿・明堂へと発展した。すなわち、高句麗・渤海・日本など東アジア諸国への都城の伝播の最盛期である唐代においても、模倣対象となり得る正殿が少なくとも三殿存在する点は注意する必要がある。また、北宋期に誕生した「工字形」正殿は、遼・金・元の都城を経て明清期の「三殿制」へと発展するが、北宋を廻る段階の高句麗・渤海・日本などでは同様の構造を持った正殿が出現している点も注意が必要である。各王朝における都城中枢部の設計論理を読み解きつつ、正殿の構造を通時的・国際的に分析する視点が重要だと考える。

2. 東アジア古代都城の遺構比較に関する方法論

2-1 比較視座と方法論

1章では、東アジア古代都城の中枢部に関する研究史を整理した。発掘された遺構・遺物、文献史料、絵画資料などを対象に、膨大な研究が積み重ねられてきた。本書では発掘された中国、日本の正殿遺構の分析を行うが、ここではその際の比較視座と方法論を整理しておく。

研究史を踏まえた論点と課題は、1-4で整理しているが、従来の研究では中国都城の正殿を通時的に分析対象とする研究視点がなかった。また、「周礼」や「三朝制」などの思想的背景と実際の都城中枢部の配置を検証することで、国際的な比較をする視点は存在したもの、中国都城における正殿の構造変化を踏まえた上で、遺構レベルで国際比較する作業は「龍尾道(壇)」などの特徴的な構造比較を除けば、ほとんど存在してこなかった。その理由としては、①中国都城における発掘で正殿の検出例が少なかった点、②建築

様式の大きく異なる東アジア各国の正殿遺構を直接比較するのは難しいと認識されていた点、大きく2点が挙げられる。しかし、研究史でまとめたように、90年代以降、中国国内の発掘調査の進展によって、正殿の検出事例は劇的に増加しており、正殿の構造を考古学的・通時的に分析することが可能な研究状況となっている。また、前稿の都城門の国際比較（[城倉 2021](#)）でまとめたように、同じ機能を持つ遺構であれば、建築様式は異なっていたとしても構造的な比較は十分に可能である。都城中枢部の研究では、常に文献史学の「機能論」が中心となってきたが、本書は考古学的な「構造論」によって、中国都城中枢部の変遷と展開に関する歴史的な意義を追究することを目的とする。

なお、従来の東アジア都城の国際比較では、特定都城の発掘成果を踏まえた上で、その源流を探るために特定の中原都城の中枢部と比較を行い、その共通性・非共通性から国際的な影響関係を議論する研究が主体だった。しかし、中国諸王朝の長い歴史の中で発展した思想空間である都城を、その平面形にのみ着目して国際的に比較する手法には限界がある。あくまでも中原都城、草原都城、そして明清都城へと連続と蓄積された思想・構造を通時的に分析し、その特性や変化の方向性などを総合的に把握した上で、魏晋南北朝へ唐など特定の時期に各国に伝播した都城を比較する方法が有効だと考えている。隋唐期など短い特定期間のみを取り上げて都城の「源流」を追究する視点は、本来は非常に複雑に展開した都城の歴史性や、当時の国際関係を部分的・一面的に評価してしまう危険性もある。中国都城中枢部におけるダイナミックな動態を考古学的・通時に把握した上で、その根幹部分が同時代の東アジア都城にどのように影響を与えたのか、受け取る側の論理も踏まえて分析する視点が重要だと考える。

以上、理論的な比較視座を提示したが、次には具体的な方法論を整理しておく。本書の方法論は、非常にシンプルである。秦漢・魏晋南北朝・隋唐・北宋の中原都城、遼・金・元の草原都城の発掘された正殿遺構を集めて、文献・建築史学などの分野も参考にしながら、発掘遺構を構造的に位置付ける。この作業によつて、都城中枢部の正殿に見られる構造的特徴や通時的な変化の方向性を明らかにしたうえで、特に魏晋南北朝へ隋唐期に都城制が伝播した高句麗、渤海、日本都城との比較を行う。国際比較の際には、各国都城中枢部の中で正殿がどのように位置付けられるのか、また各國の中でどのように正殿が変遷するのか、も重要な分析視点となる。なお、本書が目的とするのは、各国における都城の受容実態を明らかにすることではなく、中国で発展した都城制の根源的な意義、その展開の歴史性を追及することである。その目的のために、特に3つの正殿（太極殿・含元殿・明堂）が共存した特異な時期である唐に注目し、東アジアにおける展開の動態を把握する作業を通じて、その歴史性について考究してみたい。

2-2 分析対象遺構

本論で分析対象とする発掘遺構について、以下に整理しておく。次章では、3-1で中原都城（秦・前漢・後漢・魏晋南北朝・隋唐・北宋）、3-2で草原都城（遼・金・元）、3-3で明清都城、3-4で高句麗・渤海都城、3-5で日本都城の正殿遺構の図面を提示し、発掘報告書の記載を中心として現状の成果を整理する。なお、基本的には発掘された遺構を分析対象とするが、正殿が発掘されていない都城に関しては、文献史料や測量・ボーリング調査などに基づく復原図を提示しながら、補足する。なお、3章では正殿に関連する重要な周辺遺構についても、実測図を提示しながら整理をしていく。

中国都城で分析対象とするのは、秦阿房宮（前殿）、前漢長安城（未央宮前殿）、後漢洛陽城（南宮前殿）、曹魏鄆北城（文昌殿）、曹魏・西晉・北魏洛陽城（太極殿）、東魏北齊鄆城（太極殿）、西魏北周長安城（樓閣台遺跡）、唐長安城（太極宮太極殿・大明宮含元殿・興慶宮勤務本樓）、唐洛陽城（明堂）、北宋京城（太極殿）、北宋東京城（大慶殿）、遼上京城（名称不明）、金上京城（名称不明）、金中都（大安殿）、元上都（大安閣）、元中都（名称不明）、元大都（大明殿）、明清北京城（皇極殿・太和殿）である。実際に発掘調査されている正殿遺構は限られているが、文献史料や現存遺構も含めると正殿の通時的な変遷は十分に整理することができる。

高句麗都城は、山城・平地城がセットになるが、中枢部の様相がわかるのは後期高句麗の安鶴宮に限られる。一方、渤海に関しては、上京城を中心として、中京城（西古城）・東京城（八連城）を分析対象とする。

日本都城では、前期難波宮：難波長柄豊崎宮（内裏前殿 SB1801）、近江大津宮（内裏正殿 SB015）、飛鳥宮：飛鳥淨御原宮（内郭前殿 SB7910・エビノコ郭正殿 SB7701）、藤原宮（大極殿）、平城宮（中央区大極殿 SB7200・東区大極殿 SB9150）、恭仁宮（大極殿 SB5100）、後期難波宮（大極殿 SB1321）、長岡宮（大極殿）、平安宮（大極殿・豊楽殿）を対象とする。特に内裏前殿・大極殿を分析対象とするが、龍尾道（壇）や後殿などの附属施設、および周辺櫻閣なども遺構を提示し、正殿との関係性を整理する。

以上、本稿で分析対象とする遺構に関しては、表3に整理した。便宜的に中国都城は「前殿→太極殿→工字形正殿→三台」、日本都城は「成立期→発展期→成熟期」の段階を設定している。表3のように中国都城（No. 1-21）、高句麗・渤海都城（No. 1-4）、日本都城（No. 1-9）でそれぞれ番号を付け、3章での記載、および巻末の「東アジア正殿の報告書（中・日文）」で使用した。宮城名がわかる都城に関しては記載し、それ以外は都城名を掲載した。各都城の正殿に関する記載を含む論文・報告書は膨大になるが、ここでは3章での記載で原典となったものに限って掲載した（報告書は巻末に整理したので、文章中では引用を省略）。建物規模は、正殿の総間数を桁行・梁行の順序で記載（中国では一般的に「通面闊」「通进深」と呼称する）した。各都城の正殿の情報は、表3の図版番号・報告書番号を見れば確認できるようしているが、本書で示した実測図の引用元に関しては図表出典一覧で引用頁・図版番号を明記した。なお、3章は基礎資料の提示を主目的とするため、主観的な記述は極力避けて、報告書に基づく情報を丁寧に記載する。その上で、4章において基礎資料の提示を踏まえ、いくつかのトピックを設定して考察を深める。

3. 中国都城（中原・草原地域）、高句麗・渤海都城、日本都城における正殿遺構

3-1 中原都城（秦・前漢・後漢・魏晉南北朝・隋唐・北宋）の正殿遺構

（1）秦阿房宮（図35）（報告書1-a, b）

戦国期には七雄の1つとされた秦は、本拠地である雍城からBC383年に桺陽城（中国社会科学院考古研究所等 2020・2022）、BC350年には咸陽城（報告：陝西省考古研究所 2004）に遷都した。BC221年に始皇帝が全土を統一するとBC220年には渭水の南に甘泉宮前殿、BC212年に阿房宮前殿を造営した（吉田 2021）。阿房宮前殿は、前漢未央宮前殿・後漢洛陽城南宮前殿・曹魏洛陽宮太極殿へと続く、史上初、そして未完の正殿である。図35上にあるように、咸陽宮・阿房宮は前漢長安城の北側、西南側にそれぞれ位置している。

咸陽宮はこの時期の秦の宮殿建築を知るうえで、非常に重要な遺跡である。宮内では33カ所の基壇遺構がボーリング調査で確認されており、主体建築ではないものの、残りの良い1号宮殿が発掘されている。1号宮殿（図35中左）は、東西177m・南北45mを測り、逆四字形の平面形を呈する。東西対称の建造物が中央の「飛閣復道」で連接される構造で、春秋戦国期に流行した「両観形式」とされる遺構である。西側建物だけが発掘されているが、版築基壇の上に多くの部屋が多層的に存在し、周囲には回廊が巡る（図35中右）。巨大な版築上に重層的・複合的な建造物を構築する秦代の様相がわかる事例である。

秦阿房宮前殿は、始皇帝が渭水南の上林苑内（中国社会科学院考古研究所 2018）に建造した正殿で、文献上は東西500歩・南北50丈とされる。地元で「郿郿嶺」と呼ばれる巨大な版築が残存しており（図35下）、ボーリングや部分的な発掘が行われている。残存する版築基壇は東西1119m・南北400m・高さ7-9mで、ボーリング調査の復原値によると東西1270m・南北426m（面積54万m²）、高さは秦代地面から最大12mとされ、歴史上最も大きな版築遺構である。発掘調査では、基壇上面で秦代の宮殿遺構は検出されず、基壇・北壁・東壁・西壁で構成され、前殿は未完成とされる。この点は、『史記』や『漢書』の記載とも一致する。完成していれば、咸陽宮1号宮殿のように基壇上に複合的な建造物群が存在する構造を呈したものと推測できる。

（2）前漢長安城未央宮（図36）（報告書2-a）

前漢長安城の中軸は、西南部に位置する未央宮である。未央宮は、東西2150m・南北2250mを測り、ほぼ中心に阿房宮前殿を継承した「大朝正殿」である前殿が位置する（図36左）。前殿は、東西200m・南北400mの長方形を呈し、最南端の高さ0.6mから北端の高さ15mまで徐々に高度を上げる構造を呈する。基壇上には南部・中部・北部に3つの宮殿建築があり、いずれの前面にも庭院が確認されている（図36右）。なお、南部・中部宮殿の間には東西長廊、中部・北部宮殿の東西には南北長廊が検出されている。

表3 東アジア都城の正殿遺構（分析対象一覧）

段階	年代	都城	名称	建物規模		図版	報告書
				東西	南北		
前殿	秦	1. 阿房宮	南殿	—	—	図35	1-a
		参考：成陽宮	1号宮殿	—	—		1-b
	前漢	2. 長安城太央宮	南殿	—	—	図36	2-a
後漢		3. 洛陽城南宮	南殿	—	—	図39	—
太極殿	曹魏・西晉・北魏	4. 洛陽城（宮城）	太極殿（東堂・西堂）	12（→13）間	5間	図37	4-a, b, c
	東魏・北齊	5. 鄭州（宮城）	太極殿（東堂・西堂）	—	—		5-a, b
	北周	6. 長安城（宮城）	麟闕台遺跡	—	—	図38	6-a
		7. 長安城太廟宮	太極殿	12間？（文献）	5間？		—
	唐	8. 舊安城大明宮	含元殿（理政閣・華麗閣・龍尾道・納納）	13間 11間	5間 5間	図39	8-a, b
工字形正殿		9. 長安城興慶宮	勤政閣本格・花萼相輝樓	5間	3間	図40	9-a
		10. 洛陽城（宮城）	明堂・天堂	—	—	図41	10-a, b, c
	北宋	11. 西京洛陽城（大内）	太極殿・文明殿？	—・9間	—・5間	図42	11-a, b, c, d, e
		12. 東京開封城（大内）	太極殿・天祐殿	9間	—		12-a
	遼	13. 上京城（宮城）	—	—	—	図43	13-a, b
金		14. 中京城（宮城）	—	—	—		14-a
		15. 上京城（宮城）	—	—	—	図44	15-a
		16. 中都（宮城）	大安殿・仁政殿	11間・9間	—・—	図45	16-a
元		17. 上都（宮城）	大安閣・裕固閣	9間・—	5間・—	図46	17-a, b
		18. 中都（宮城）	1号宮殿	7間	5間	図47	18-a
		19. 大都（宮城）	大明殿・垂參閣	11間・9間	7間・—	図48	19-a
明		20. 北京城（禁城）	皇極殿（中極殿・建極殿）	9間？	5間	図49	20-a
	清	21. 北京城（禁城）	太和殿（中和殿・保和殿）	11間	5間		21-a

分析対象遺構一覧（高句麗・渤海）

南北朝・唐	高句麗	1. 安鶴宮	内殿（内殿・寝殿）	11間	4間	図50	1-a
		2. 上京城	1号（2・3・4・5号）宮殿	11間	4間	図51	2-a, b
渤海	高句麗	3. 西古城	1号（2・3・4・5号）宮殿	7間？	4間？	図52	3-a
		4. 八達城	1号（2号）宮殿	7間？	4間？	図53	4-a

分析対象遺構一覧（日本）

成立期	難波・長柄登呂御所	1. 順期難波宮	内裏座殿SB1603 内裏面殿SB1801	9間	5間	図54	1-a
		2. 近江大津宮	内裏正殿SB0115	7間？	4間？	図55	2-a
飛鳥・伊勢原宮	3. 順鳥宮（墨期）	内裏面殿SB0710	—	4間	—	図56	3-a, b
	672-	4. 藤原宮	大極殿（藤原SB11650） (東壁SB1530)	9間（9間） 9間	4間（2間） 4間	図57	4-a, b, c, d, e
奈良期	694-	5. 平城宮	中央大極殿SB17200（後殿SB0120） (中央区基壇揮拂SB36600・木造SB36601)	9間（9間） —	4間（4間） —	図58	5-a, b, c, d
	710-		東区下層大極殿SB0140（後殿SB10050） 東区上層大極殿SB0150（後殿SB10000） 東区東櫻庭SB700	7間（16間） 9間（9間） 4間	4間（2間） 4間（2間） 6間		
成熟期	740-	6. 勝仁宮	大極殿SB1590 (西壁SB11000)	9間	4間	図59	6-a, b, c
	744-	7. 後奈良宮	大極殿SB1321 (後殿SB1326)	9間（不明） 7間以上	4間（不明） 4間	図60	7-a
成熾期	784-	8. 長岡宮	大極殿（長廊） (西壁SB11000)	9間（7間）	4間（2間）	図61	8-a
	794-	9. 平安宮	大極殿（平安殿） (諸帝堂)	11間（9間） 9間（7間）	4間（2間） 4間（2間）	図62	9-a, b, c, d

※日本都城の年代は、文献史料に基づく一般的な遷都年代を日安として記載した。

前殿の最南端には版築に挟まれた門と思われる遺構を検出している。その北側に位置する南部宮殿は東西79m・南北44mを測る。北側中央に門と思われる遺構を検出しており、西側は刀の把のように細い構造をしている。南部宮殿の北には、東西134m・南北12-15mを測る東西方向の長廊がある。中部基壇は東西121m・南北72mを測り、西北隅は西側に続く慢道もしくは門道に連結している。その北側の北部宮殿は東西118m・南北47mを測り、中央が南に凸形に突出する。中部・北部宮殿の東西には、南北方向の長廊も検出されている。前漢長安城は「坐西朝東」の都城とされるが、未央宮は「坐北朝南」し、前殿は巨大な版築上に大型の宮

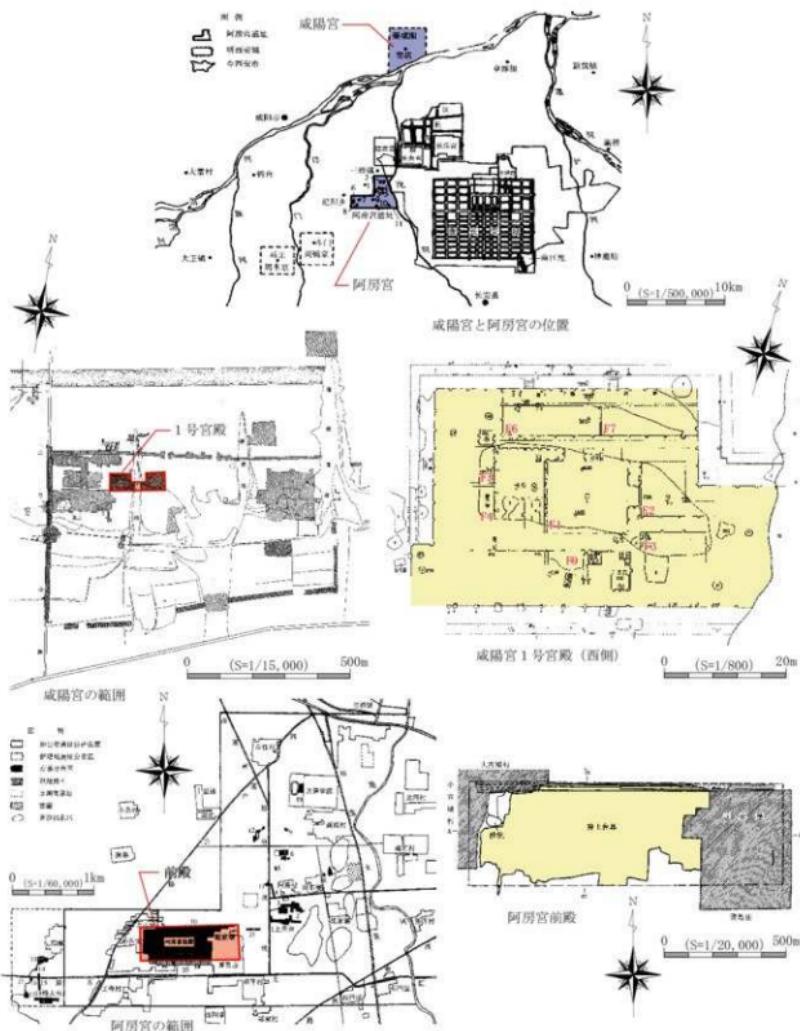


図 35 秦咸陽宮 1号宮殿と阿房宮前殿

殿が南北に 3 基連なる複合的な建造物であることがわかる。秦阿房宮前殿の系譜を引きながら、宮城中軸上に大型宮殿を連続的に配置する新しい思想が見られる点が重要である。

(3) 後漢洛陽城南宮 (図 20)

後漢の建武 14 年 (38) に光武帝が洛陽城南宮正殿として建造したのが、前殿である。後漢洛陽城には北宮・南宮が並び立つ構造が文献史料から復原されている（[钱国祥 2022a など](#)）が、後漢前殿の位置や構造については考古学的に確認されたことはなく、詳細は不明である。

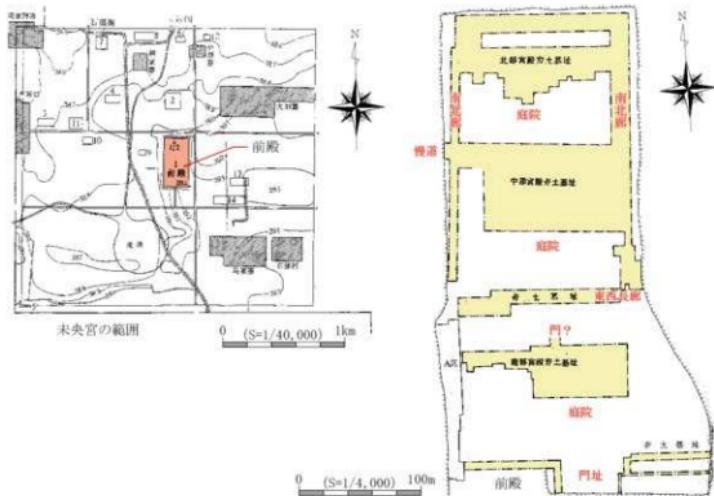


図 36 前漢長安城未央宮の前殿

(4) 曹魏・西晋・北魏洛陽城（図 37）（報告書 4-a, b, c）

まず、この時期の洛陽城の宮城構造を考える上で重要な鄴北城について、言及しておく。鄴北城は、三国魏の曹操が造営した都城で、図 21 左に示した徐光翼の復原図が著名である（徐光翼 1993）。中軸正門の中陽門上に位置するのは外朝正殿である文昌殿で、東側の内朝（中朝）主殿は日常公務の場：聽政殿である。聽政殿の南側には主要な官署が位置しており、東西二軸構造を特徴とする。一方、洛陽城は近年の発掘調査の進展により、後漢の北宮部分を中心として曹魏に单一宮城が成立し、西晋・北魏と沿用されたと考えられるようになっている。曹魏・西晋・北魏洛陽城の宮城正殿は、青龍 3 年（235）に曹魏明帝が造営した太極殿（東堂・西堂）である。曹魏洛陽城で成立した太極殿は、魏晋南北朝～唐まで宮城正殿として継承される。

漢魏洛陽城の宮城は、大きく南北に分かれており、太極殿はやや西側に偏った位置の宮城正門：闕闔門の軸線上に存在する（図 37 ①左）。国家的な儀礼の場である太極前殿の東西には、東堂（皇帝の日常聽政空間）、西堂（皇帝の居住空間）が位置し、その後方に「昭陽殿（2 号宮殿）」の存在が想定されている。近年、太極殿の東半分、および東堂が発掘調査され、様相が明らかになりつつある。太極殿の基壇は、東西 98-102m・南北 59-62m で、断ち割り調査によって早期（曹魏・西晋）、中期（北魏）、晚期（北周）の 3 時期に区分されている。なお、晚期の太極殿の修築は未完成である点が確認されており、北周宣帝の「洛陽宮」の造営に関する文献記載と符合する点が指摘されている。図 37 ②下のように、早期の太極殿基壇は中期に北側へ 7.9m、晚期に南側へ 18m 扩張されており、南側で 2 列（17 基）の礎石据付穴を検出している。特に南側の 14 基は、芯々距離 6.75m で整然と並んでおり、晚期太極殿の桁行が 13 間である点がわかる。基壇南面には東西に階段（建物東西端から各 3 間位置）が確認でき、東階段は幅 5.2m で残長 10.1m を測る。一方、基壇北面中央には東西 51m・南北 3m の突出部があり、その両端に東西方向の階段（幅 2.5m・残長 5.6m）が確認できる。なお、東堂との間の中央部分には、南北方向の門遺構（東闕門）を検出している。東西方向の隔壁の南北に各 4 基の礎石があり、桁行 3 間・梁行 2 間（日本語では八脚門）の宮門である。

以上、北周の未完成の太極殿は桁行 13 間と判明したが、陳建军らの整理によると文献史料上は魏晋洛陽城の太極殿は桁行 12 間で「1 年 12 カ月」を表象したものだという（報告：陳建军・余冰 2019）。曹魏・西晋の 12 間の太極殿は南朝でも継承されたが、梁武帝が閏月を加えた 13 間（東西堂は 7 間）に改築した。し

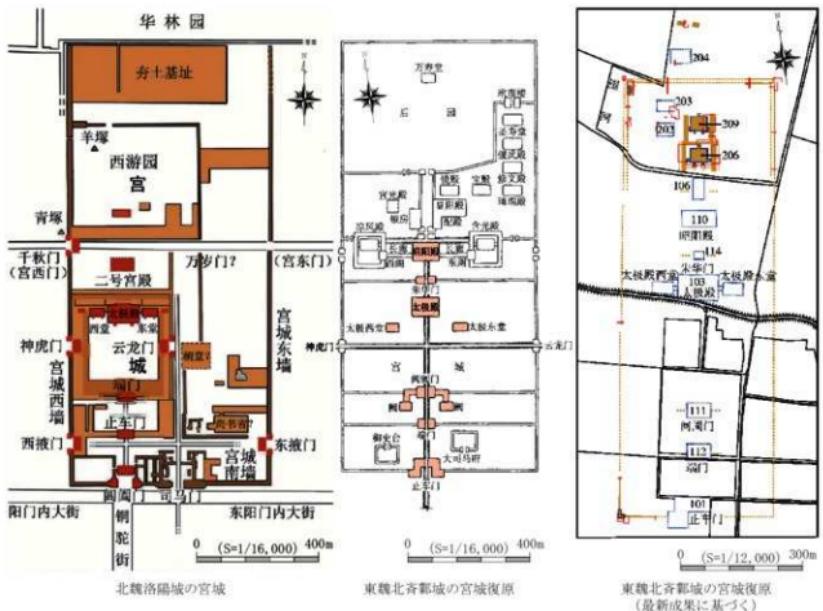


図37 北魏洛陽城と東魏北齊鄆城の宮城と太極殿①

かし、陳では再び12間に戻され、隋唐に継承された。洛陽城の北周期の太極殿は南朝梁で見られた桁行13間を採用したものと思われ、柱間6.75m×13間=87.75mとなり、北朝期の1尺長を29.6cmほどと考えると、300尺の近似値となる。一方、梁行の根拠はないが、5間とされる（報告：陳建軍・余冰 2019 p.40 図6）。

太極殿の東西堂はボーリング調査でほぼ同規模と判明しているが、東堂の発掘によって全体像が判明した。太極殿と東堂は東西の軸線を揃えており、両者の間は14mを測る。東堂の基壇は、東西48m・南北22mで、南面に東西階段（東階段は幅3.5m・長さ12m）が検出されている。東堂の北4mでは、幅3.4mの東西方向の埠敷御道を検出しており、その北側には大型の廊房建築と院落が附属する。太極殿前が広大な殿前広場であるのに対して、太極殿・東西堂より北側が一的な空間として存在していた点が伺われる。

このように魏晋南北朝期の宮城正殿である太極殿が、桁行12（13）間・梁行5間の建造物で、基壇南面に東西2階段を持つ構造である点、規模の小さい東西堂もやはり南面2階段を持つ点、太極殿と東西堂の間には南北方向の東西闕門が存在する点、太極殿・東西堂は北側の廊房建築・院落と密接した構造である点、などが漢魏洛陽城の発掘調査によって判明した意義は大きい。

（5）東魏・北齊鄆城（図37）（報告書5-a, b）

北魏の分裂後、534年に東魏は鄆南城に遷都したが、北魏洛陽城の構造をほぼ継承した点が知られている。宮城は、ボーリング成果と文献史料の整理によって、殿名比定した徐光翼の研究が引用されることが多い（徐光翼 2014）。図37①中のように、主軸上の基壇構造は、南から101号（止車門）・112号（端門）・111号（閻闔門）・103号（太極殿／殿前東西に東堂・西堂）・114号（朱華門）・110号（昭陽殿／東西に含光殿・涼風殿）にそれぞれ比定している。「外朝正殿」である太極殿とされる103号基壇は東西80m・南北60mで、北魏洛陽城太極殿よりも東西が20mほど小さい。一方、「内朝主殿」の昭陽殿とされる110号基壇もほぼ同じ規模で、東西は飛廊を通じて配殿へと接続している。「前朝後寝」の前朝は太極殿・昭陽殿の前後構造を呈するのが

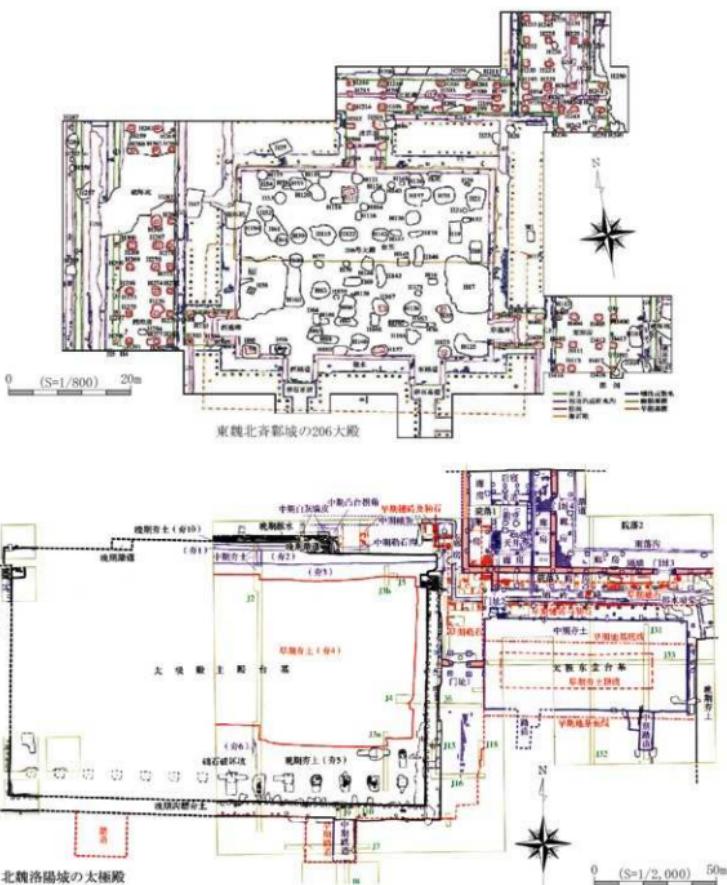
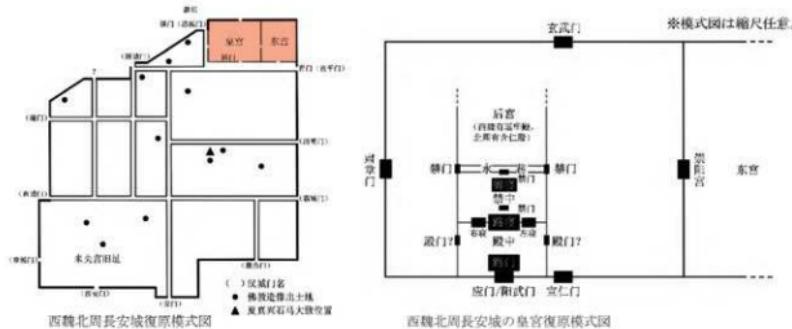


図37 北魏洛陽城と東魏北齊鄆城の宮城と太極殿②

魏晋南北朝期の特徴とされ、前者は国家的な儀礼の場、後者は日常的な政務に使用されるなど両殿が深く結びつく形で機能した点が推定されている（郭济桥 2001 など）。昭陽殿の発掘事例がなく、具体的な構造は不明だが、太極殿は東西堂だけでなく、後方の昭陽殿と深く結びつく形で機能したと考えられる。

なお、東魏北齊鄆城に関しては、2023年に公表された宮城中軸線上の北部に位置する206・209大殿の発掘事例が非常に重要である（報告：中国社会科学院考古研究所等 2023）（図37①右）。外朝正殿ではないが、東アジアの高句麗・渤海・日本都城との比較でも重要な論点を含むため、発掘成果を整理しておきたい。

図37①右のように、最新のボーリング・発掘成果によると「第一重宮城」は東西 346・366m・南北 1050m で、その外側にも宮城区の範囲は広がるようである。宮城の「前朝」部分は太極殿（東西堂）・昭陽殿の南北二殿を中心とするが、その北側の「後寝」部分で東西の廊房建築で連接された 206・209 大殿が発掘調査された。206 大殿の基壇は、東西 40.6m・南北 33.5m・残高 0.5m を測り、南面の東西に 2 階段、東・西・北には「連廊」が位置する（図37②上）。基壇上の礎石据付穴、および南面階段の位置から桁行 7 間（5.2m 等間）の



西魏北周長安城の皇宮復元模式図
東大寺大黒天位置

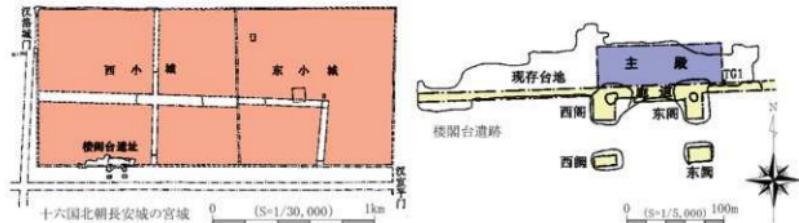


図 38 十六国北朝長安城の樓閣台遺跡

建物が想定されている。連廊の基壇は、北連廊（東西 6.58m・南北 9m）、東連廊（東西 8.46m・南北 6.43m）、西連廊（東西 8.27m・6.44m）を測り、それぞれ桁行 2 間・梁行 2 間である。東西に位置し、南北方向に続く廊状建築は「廊房」と呼称され、東廊房の基壇は東西幅 10.36m・残高 0.5m を測る。廊房は東西 3 間（西 2.2m・4.5m・2.2m 東）で、中央が広く東西端が狭いため「單間廊房」と推定されている。南北方向の柱間は東西連廊との接続部分のみ 5.2m で、その他は 4.2m 幅である。なお、西廊房もシンメトリーな構造である。北連廊は東西方向の「複廊」（基壇の南北幅 6.3m・残高 0.3-0.6m / 連廊北側のみ柱間 5.2 × 2.2m で、その他は 4.7m × 2.2m）に連接し、複廊は東西で 206 の東西廊房北側、および 209 の東西廊房の南側と連接する構造を呈する。大殿周囲には、「卵石堆」が等間隔に巡り、大殿南面の東西階段の南には「卵石甬道」が検出されている。

上記 206・209 大殿に関しては、出土遺物から北斎の時期の建造物と考えられている。北斎期の昭陽殿より北側の後宮では、文献史上、「顯陽殿・宣光殿」が主要宮殿（帝后寝宮）として知られているが、206・209 は中軸上で宮城北側の主要殿であり、今後は殿舎名比定も含めて議論が進むと思われる。

(6) 北周長安城 (図38) (報告書6-a)

十六国～北朝の宮城は、前漢長安城北東部に位置する点が想定されており、特に西小城の南城壁上に位置する樓閣台遺跡が注目できる（図38下左）。樓閣台遺跡は、西小城の南城壁、やや西寄りに位置する。独立した両闕、東西閣とそれを繋ぐ廊道、主殿で構成される（図38下右）。両闕間の距離は74mで、西闕（東西32m×南北20m、高さ5.4m）、東闕（東西28m×南北22m、高さ6m）を測る。両闕は両闕の位置と対応し、西闕（東西22m×南北34m、西闕まで36m）、東闕（東西18m×南北36m、東闕まで30m）を測る。廊道は両闕よりも低い位置にあり、東西長72m、南北幅12-16mを測る。東西闕・東西閣・廊道で囲繞された部分は、広場とされる。その北側に東西長128m、南北幅41mを測る主殿が検出されている。ボーリング調査に基づく成果ではあるが、報告では、東宮は太子宮、西宮は皇宮で、西宮の樓閣台遺跡は、前・後秦の太極前殿、北周期の「路寝」であり、両闕間の広場を「路門」と想定している。

なお、文献史料による限り少なくとも十六国時代の宮城は長安城南部に位置する可能性が高い点から、樓

閣台を含めた北東部の遺構を北朝の宮城と見る説には慎重な立場もある。村元健一は、文献史料の分析からも「西魏・北周の宮城構造に画期性を見出すのは困難」(村元 2022 p. 43) としている。しかし、西小城・東小城を結ぶ一門道の宮門の発掘により、十六国～北朝・隋までの変遷が明らかになり（中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊 2023）、近年では中国の研究者も十六国～北周期の長安城の存在とその歴史的意義を積極的に評価し、復原研究が進められている（図 38 上）（史勰忻 2023）。

（7）唐長安城太極宮（図 39 ①）

唐長安城太極宮は、北宋呂大防の『唐長安城图』（図 23 上）や文献史料に基づいて復原された唐熹年の圖が著名である（唐熹年主编 2009 p. 385 図 3-2-2 など）（図 23 下左）。中軸上に承天門（外朝）・太極殿（中朝）・両儀殿（内朝）が並ぶ構造は判明しているが（図 39 ①上左）、大規模な発掘調査はほとんど行われておらず、考古学的な情報は非常に限られている。

（8）唐長安城大明宮（図 39 ①②）（報告書 8-a, b）

大明宮は唐長安城北東部に位置し、高宗以降は実質的な宮城として機能した。大規模なボーリングや発掘調査が行われ、現在は「国家遺跡公園」として整備されている。中軸上に丹鳳門・含元殿（外朝）、宣政殿（中朝）、紫宸殿（内朝）が並ぶ基本構造（図 39 ①上右）は、太極宮と共に通する（図 19）。

外朝正殿が「殿門融合形式」とも表現される含元殿で、元会儀礼など外朝大典の中心的舞台空間である。殿堂（図 39 ①中）、左右門、左右角樓、飛廊、両閣（図 39 ①下）、龍尾道、殿前広場、朝堂（図 39 ②上）、肺石・登聞鼓などで構成される建築群の総称である。大明宮の正門は丹鳳門だが、含元殿は太極宮正門：承天門の構造・機能・系譜を継承する開式正殿である。殿堂基壇は外装石の範囲で東西 76.8m・南北 43m を測り、周囲には散水がめぐる。基壇上には、礎石据付穴下層に4つの方形石を平置きした「承础石（承礎石）」（清代の王森文が命名／唐九成宮 37 号宮殿などでも検出されている）が存在し、その位置から柱配置が復原されている。基壇中央には、桁行9間（柱間 5.35m・東西両端間 5m）・梁行1間（柱間 9.7m）の柱痕跡（報告では「金柱」「内柱」）がある。この柱痕跡の三方を囲繞するように北壁（幅 1.3m）、東西壁（幅 1.5m）があり、金柱と壁の芯々距離は北で 4.85m、東西で 5.3m を測る。さらに、北壁から北の檐柱列までは芯々 4.25m、金柱南列から南檐柱列までは 9.2m である。建物四周の壁体～檐柱（側柱）部分は、「副階」と呼ばれる。基壇北側には東西 2 つのスロープがあり、基壇東西端には東の翔鸞閣・西の棲鳳閣に接続する飛廊が取り付く。

左右両閣は、母闕に 2 つの子闕が附帯する三出闕形式を呈する。『唐六典』によると、閣下には朝堂（馬得志 1987）・肺石・登聞鼓が配され、承天門の制度と共に通するとある。残存する東側の飛廊は曲尺形を呈し、屈曲部では東西 22.4m × 南北 16.8m の角楼を検出し、主殿との間には通乾門が位置する。含元殿東西の通乾門と親象門は、皇帝が宣政殿で常朝に臨む際に文武百官が両門前に序班し入門したと言われる。通乾門の版築は、東西 7.7m × 南北 1.1m で建物構造は不明だが、1 門道と推定できる。

含元殿に関しては、2 回の発掘調査（馬得志 1961・中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊 1997）の成果を踏まえて、郭叉孚・傅熹年・楊鴻勛らが復原案を公表している（郭叉孚 1963、傅熹年 1973・1998a、楊鴻勛 1989・1997・2013 など）。しかし、図 39 ②下を見てわかる通り、研究者によって復原案が若干異なっている。建物の殿身（身舎）に該当する北・東・西壁に囲まれた部分に関して、郭叉孚・楊鴻勛は南側の位置に礎石の存在を想定するのに対して、傅熹年はレーダー探査の成果で承礎石が確認できない点から、減柱されたと考えている（図 39 ②下図面中の青丸部分）。この点に関して、傅熹年は東壁・西壁南端のみ礎石が存在する点を重視する。すなわち、外檐角柱と金柱列外端柱を繋ぐ線の中点に位置するこの柱によって、身舎南面が減柱されていると考え、この「45° 角柱中点加柱支承の做法」を、北魏洛陽城永寧寺塔（中国社会科学院考古研究所 1996）、隋仁寿宮・唐九成宮 37 号宮殿（中国社会科学院考古研究所編著 2008）（図 39 ②下の右下）などの系譜を引く建築技法と位置付けた。その上で、後述する大明宮麟德殿前殿、あるいは渤海・上京城 1 号宮殿などで見られる「斗底槽」が新しい建築様式であるのに対して、含元殿の事例は北朝の古い伝統を引き継ぐものと指摘した（傅熹年 1998a p. 425）。今、傅熹年の復原案に基づいて、建物の柱間寸法を示すとすれば、殿身（身舎）が桁行 11 間（西 5.3/5.3 × 7.5/5.3m 東）・梁行 3 間（北 4.85/9.7/4.85m 南/南列は減柱するので実際には南金柱と南檐柱の間は 9.2m）となり、四周副階（廂）の 1 間分（4.25m）

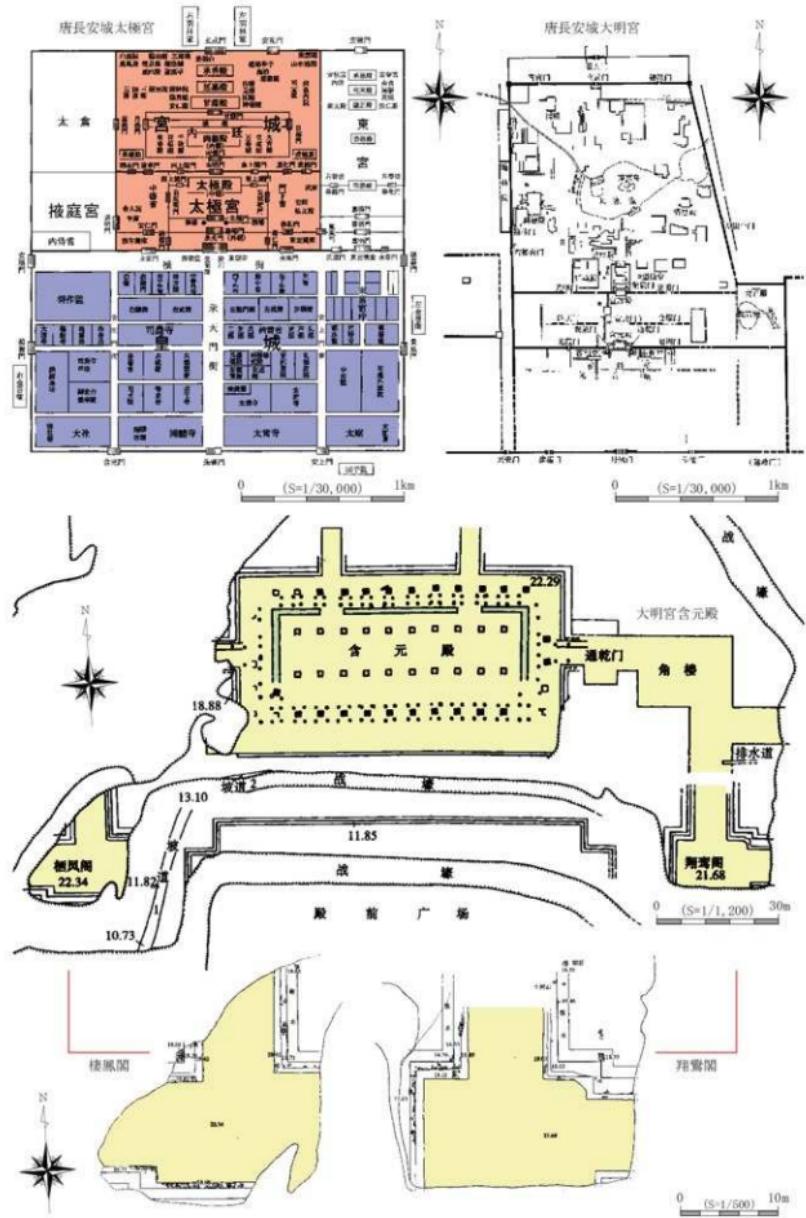
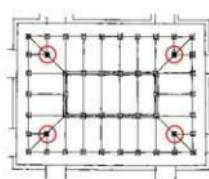
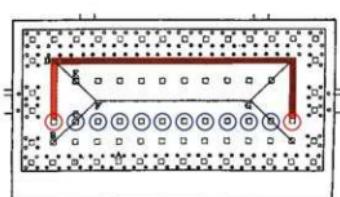
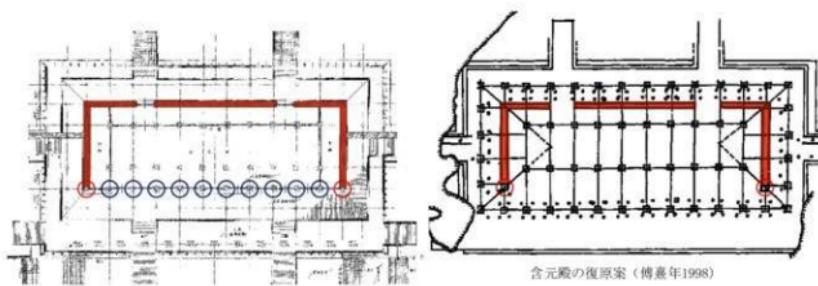
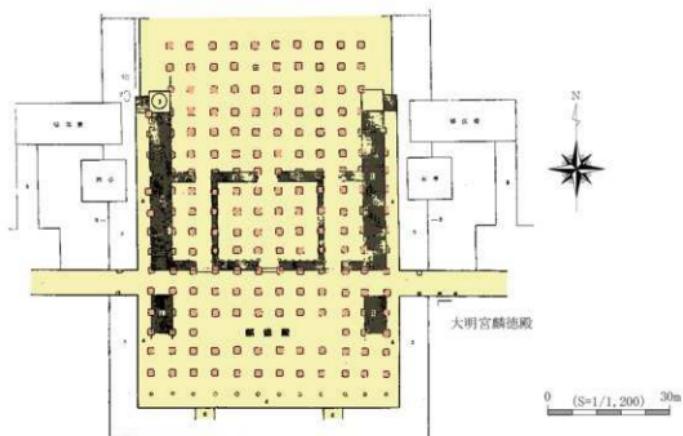
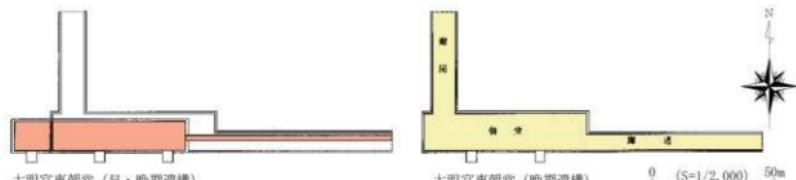
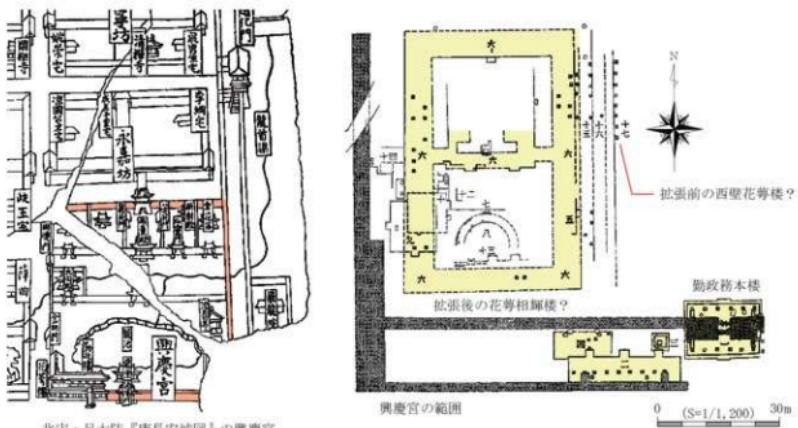


図39 唐長安城太極宮（太極殿）と大明宮（含元殿・朝堂・麟德殿）①



0 (S=1/1,500) 30m

図39 唐長安城太極宮（太極殿）と大明宮（含元殿・朝堂・麟德殿）②



北宋・呂大防『唐長安城図』の興慶宮

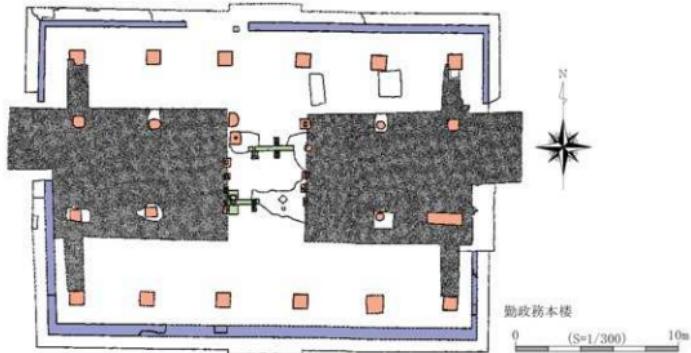


図 40 唐長安城興慶宮（勤政本樓・花萼相輝樓）

を含め、全体では桁行 13 間・梁行 5 間の建造物ということになる。なお、唐長安城太極宮太極殿の構造は考古学的には明らかになっていない(文献では桁行 12 間)が、大明宮含元殿が魏晉南北朝を通じて主流であつた太極殿の桁行 12 間ではなく、南朝建康の梁武帝期・北朝洛陽の北周宣宗期太極殿の桁行 13 間を継承する点も傅熹年の指摘と整合性を持つ可能性がある。

大明宮内の北西部に位置し、外国使節を迎える際の宴会の場として著名な麟德殿も発掘調査されている(図 39 ②中)。基壇は南北 130.4m・東西 77.6m を測る大明宮最大の宮殿で、基壇南面には東西階、東西側面には楼閣・亭が位置し、基壇は大きく上下二層構造を呈する。建物は前殿・中殿・後殿の三殿構造で、東西には幅 1 間の南北方向の山壁(山牆)が存在する。やはり、複数の研究者による復原案(劉致平等 1963・傅熹年 1998b・楊鴻勛 1987・2013)が存在するものの、ここでは楊鴻勛の復原案(楊鴻勛 2013 p. 281 図 5-10)に基づいて構造を整理しておく。前殿は桁行 9 間(東西山壁を含めると 11 間)・梁行 4 間で、手前には 1 間分の土麻状の柱痕跡が確認できる。中殿は、桁行 9 間(東西山壁を含めると 11 間)・梁行 5 間で、前壁、後壁、隔壁によって 3 室に分かれる。後殿は、桁行 9 間・梁行 6 間で、やはり 3 室に分割されている。南北に大型宮殿が並ぶ巨大な建造物である麟德殿の壯観な姿に、外国使節が圧倒された点は容易に想像できる。同様の施設としては、唐長安城興慶宮の花萼相輝楼などが挙げられる。

(9) 唐長安城興慶宮 (図 40) (報告書 9-a)

玄宗皇帝以降に三大内 (図 23 上) の 1つ、南内と呼ばれた興慶宮 (東西 1080m・南北 1250m) は、北宋呂大防碑でおよその構造が把握できる (図 40 上左)。南西部の発掘調査によって、勤政務本樓・花萼相輝樓と想定される遺構が検出されている (図 40 上右)。

勤政務本樓は城門建築でありながら、玄宗が政務を執った興慶宮の主殿とされ、大明宮含元殿の影響を受けたと思われる「殿門融合形式」である。興慶宮の南壁は大明宮北壁と同じ夾城の構造を呈し、内重壁幅 5m・外重壁幅 3.5m で、両者の間は 20m を測る。西城壁から東へ 125m、内重壁上に 1 号建築、すなわち勤政務本樓が位置し、一門道の殿堂式門 II A(1) である (図 40 下) (城倉 2021 p. 100)。長方形の基壇上には、桁行 5 間 (総長 26.5m)・梁行 3 間 (総長 19m) の礎石建物があり、東西各 2 間分が宮城壁と連接している。中央の門道幅は 4.9m で、門道左右の城壁に接する場所で各 8 個の礎石がある。城門自体は殿堂式だが、中央門道は過梁構造を持つ特殊な形式である。門道には 2 つの門扉施設と車両の轍痕跡が確認されている。

勤政務本樓の北西側には、「日字形」回廊とされる 6 号基壇があり、もともと西壁上に存在していた花萼相輝樓 (17 号遺構とされる) に対して、拡張後の 726 年に再建が始まり、736 年に完成した花萼相輝樓とされる。東西 63m・南北 92m の範囲で、東西廊はそれぞれ幅 10m を測る。中央には横廊が東西に貫通し、横廊の南側には左右階が確認できる (図 40 上右)。多くの建物が重複するため全体像は不明だが、建築史分野では積極的に復原が試みられている (楊鴻勛 2009 p. 475 図 418、窦培德・羅宏才 2006 p. 13 図 10 など)。

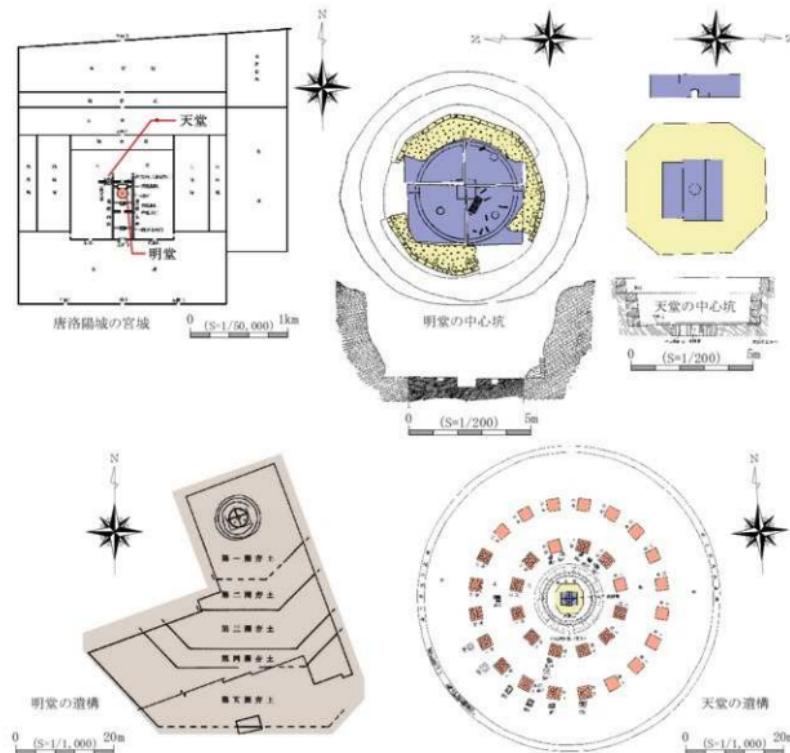


図 41 唐洛陽城の明堂・天堂

(10) 唐洛陽城（図41）（報告書10-a, b, c）

高宗・武則天期に最盛期を迎える唐洛陽城は、文献史料に基づいて復原が行われてきたが（図23下右など）、近年の発掘調査の進展により、宮城中軸線の構造が明らかになった（図41上左）。宮城正殿は、隋乾陽殿→唐乾元殿→武則天明堂（万象神宮→通天宮）と変遷し、玄宗期に明堂上層が撤去されて乾元殿・含元殿と名稱変更され、安史の乱で焼失した。明堂の北西側には、やはり武則天が造営した天堂が位置する。

武則天明堂の基壇検出範囲は東西54.7m・南北45.7mと限られているが、ボーリング成果も併せて、八角形の基壇を持つ点が明らかになった（図41下左）。八角形基壇の中心には、円形の「柱坑」があり、底部内径9.8mの深部には4つの大型青石を組み合わせた巨大な礎石が確認されている（図41上右）。1個の青石は2.3~2.4m四方で、厚さは1.5mを測る。中心には方形の柱槽（一辺0.78m・深さ0.4m）があり、その外側には二重の円形線刻（外圈直径4.17m・内圈直径3.87m）が認められ、四方には方位を示す線刻もある。北西・東南・西南の青石の中央には円孔があり、大型礎石を再利用したものと思われる。「柱坑」底面の周囲には、浅い八角形の埠積もある。「王者の殿堂」とも呼ばれ、皇帝の德治を示す礼制建築である明堂が、宮城正殿として建造された特殊な事例とされるが、発掘によってその構造が明らかになっている意味は大きい。

天堂は、明堂の北西、中軸線から西側100mの位置に確認されている。唐武成殿とされる7号建築の北東部で直径64.8m・残高0.5~1.2mの巨大な基壇が確認されている（図42下右）。円形基壇の周囲には、埠積外装の基槽（幅1.4m・深さ0.5m）が検出され、範囲が確定している。円形基壇の中央には、「柱坑」が確認されており、底部は4m四方の正方形の角が取れた八角形を呈する（図42上右）。中央部分には、3つの石（3.83×1.2m/3.93×1.13/3.71×1.15m、厚さ0.8m）を組み合わせた大型礎石が検出されている。中央には直径0.32mの柱槽があり、それを中心として直径1.78mの陰刻線（柱の直径か？）がある。また、円を中心として十字が切られ、円刻の外側には円を12等分する「刻度線」が描かれている（図27上右）。なお、円形基壇の上には、中心の「柱坑」の外側で二重の礎壇（礎石据付穴）が確認されている。内圈礎壇は中心点から13.4m、内圈と外圈礎壇の間は9mを測る。内圈礎壇は12基、外圈礎壇は20基を数える。礎壇は、基壇上に一辺2.5m四方の堅穴を掘り込んだもので、規格の揃った4つの青石が据えられている。これとは別に、埠を使った礎石据付穴が不規則な位置に確認されており、報告では、円形建築を造営する際に西南方向に傾きが生じたため柱を補足した「加固定柱」と考えている。

(11) 北宋西京洛陽城（図42）（報告書11-a, b, c, d, e）

北宋期に西京として栄えた洛陽城については、唐の宮城中軸線との関係性がボーリング調査の成果から整理されており（図29上左）、明堂の北側で2つの基壇が柱廊で結ばれた「工字形」の太極殿が確認されている。唐代長安城・洛陽城では存在していない正殿の様式であり、北宋期が正殿を含む宮殿建築の大きな画期である点が読み取れる。なお、北宋西京洛陽城の太極殿はボーリング調査のみで発掘が行われていないため詳細は不明だが、中軸線西側の天堂西南部分で「工字形」を呈する1・2号宮殿が検出されており、北宋期の文明殿と想定されている点は重要である（図28・図42上左）。図42下の1・2号建築は、もともと唐代の天堂西南に位置する凸形基壇の7号建築から始まっている。8号建築は東西に配房を持ち、南側に幅14mの御道と側道を持つなど、唐代の武成殿と考えられている。その後、天堂と近い時期に6号建築へと改築され、唐中晚期には3号建築となり、北宋期の1号建築へと変遷した。1号建築は新たに建造された2号建築と柱廊で結びつく「工字形」建築となつたが、その年代は発掘で出土した錢貨から北宋徽宗以降とされる。北宋徽宗は西京洛陽城の宮城の大きな改変を行つた点が指摘されている（図29下）が、この時期以降に宮城内の重要建築の1つの様式として「工字形」建築が主流となり、後の時代に継承されていくことになる。

1号建築（7号→6号→3・4号→1号へ）は、中心基壇が東西89m・南北50mの凸形を呈し、南側には月台が存在する。基壇上で検出されている礎壇から、中心建物は桁行9間・梁行5間で東西に配房を持つことがわかっている。幅8mの柱廊で北側の2号建築と連結されている。2号基壇は全体発掘が行われていないため、基壇規模は確定していないが、やはり中心建物・東西配房で構成される。中心建物は東西両端に南北方向2列各10基、中央に東西5基の礎壇が確認される特殊な柱配置である。1・2号の「工字形」宮殿に関しては、王书林らが北宋文明殿の可能性を指摘しているが（王书林・徐新云2022）、北宋西京洛陽城

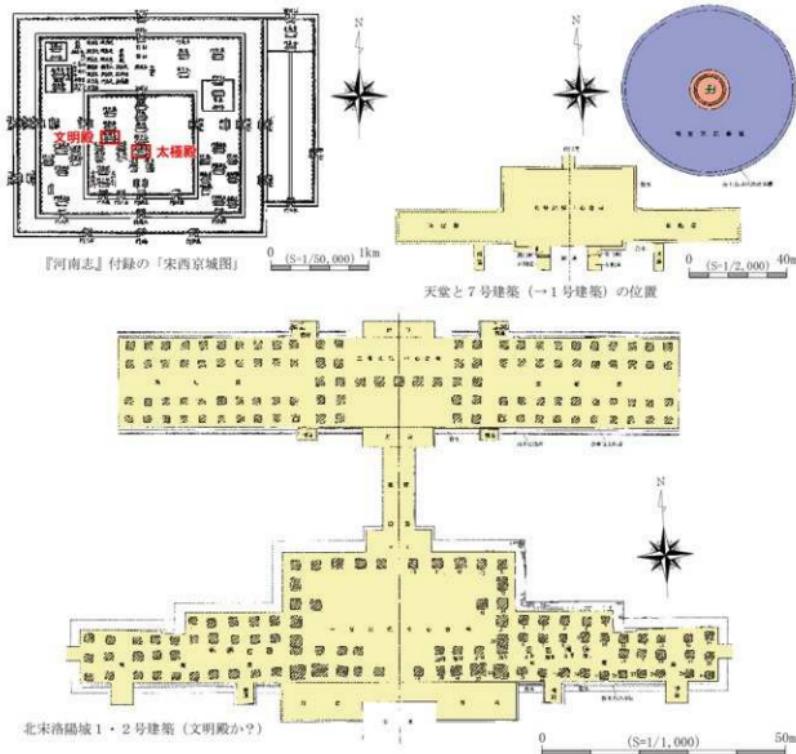


図42 北宋洛陽城の宮城と1・2号建築遺構

で認められる双軸構造が唐武則天期の明堂・天堂の2つの軸線の系譜を引き、北宋東京開封城の双軸構造（大慶殿・文徳殿）へと発展した可能性は非常に高い（松本2020）。唐洛陽城・北宋西京洛陽城の宮城中枢部の発掘調査によって、唐から北宋への発展過程の具体像が明らかになりつつある点は非常に重要で、「工字形」正殿、宮城の双軸構造など、草原都城から明清都城へと継承される諸要素の画期が北宋期にある点がわかる。

(12) 北宋東京開封城（図43）（報告書12-a）

北宋東京開封城は、中枢部の発掘調査がほとんど行われていないため、考古学的情報は少なく、主に文献史料から復原が進んできた（図31）。宮城は東西華門を結ぶラインを境に南の「外朝」、北の「内廷」に分かれる。外朝正殿は大朝会など国家的儀礼の場である中軸上の大慶殿で、外朝正衙殿は日常的な政務空間である西軸上の文徳殿である（図43上左）。北宋宮城における「双軸構造」は、北宋西京洛陽城から発展したものと考えられる（図30）。

外朝正殿の大慶殿は、桁行9間で東西に配殿（桁行各4間）があり、柱廊によって後閣（齋衛殿）と連接する。殿庭には、鼓樓・鐘楼を置き、基本的な構造は、ボーリング調査で判明している北宋西京洛陽城の「工字形」太極殿（図29上左）とはほぼ同じである。一方、西軸の常朝正衙殿とされる文徳殿も「工字形」を呈し、殿庭左右に鼓樓・鐘楼を置き、左右には東西上閨門、後方には閣を置く。前述した北宋西京洛陽城の1・2号建築に近い構造をしていたものと推定できる。

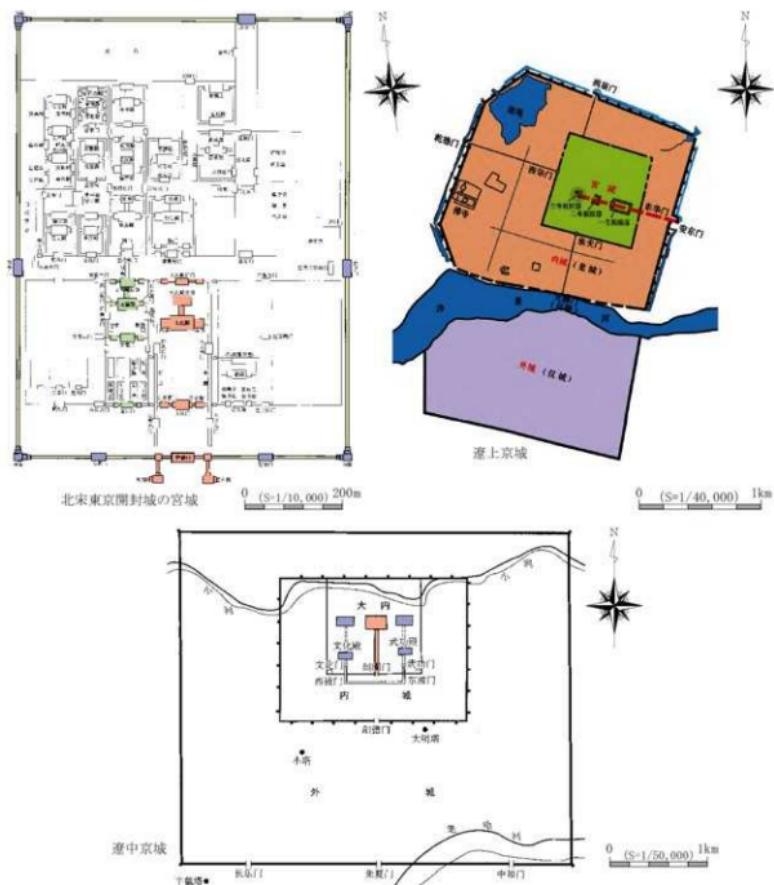


図43 北宋東京開封城と遼上京城・中京城

3-2 草原都城（遼・金・元）の正殿遺構

(13) 遼上京城（図43）（報告書13-a, b）

遼初代の耶律阿保機が造営した上京城は、北の皇城と南の漢城に分かれる「日字形」を呈する（図43上右）。北側の皇城の中央東よりに宮城が存在する。東西740m・南北770mで、近年の発掘調査の進展により「坐西朝東」する点が確認された。東から西に向かって、1号院・2号院・3号院と院落が位置する点が判明している。渤海や中原の影響を受けつつも、東向きの都城を造営するなど、契丹族の独自の形式が読み取れる。

(14) 遼中京城（図43）（報告書14-a）

遼中京城も発掘が進んでいないため、全体像は不明な部分が多い。宮城（皇城・大内）は、内城の中央北側に位置し、1km四方の正方形を呈する（図43下）。中軸上に「坐北朝南」する形で大型宮殿が配置されており、北宋東京開封城・西京洛陽城の影響を受けているとされる。

(15) 金上京城（図44）（報告書15-a）

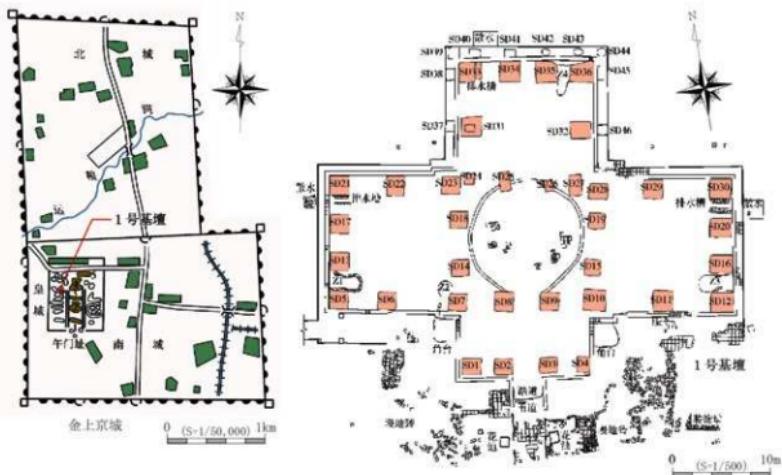


図44 金上京城の宮城内建物（1号基壇）

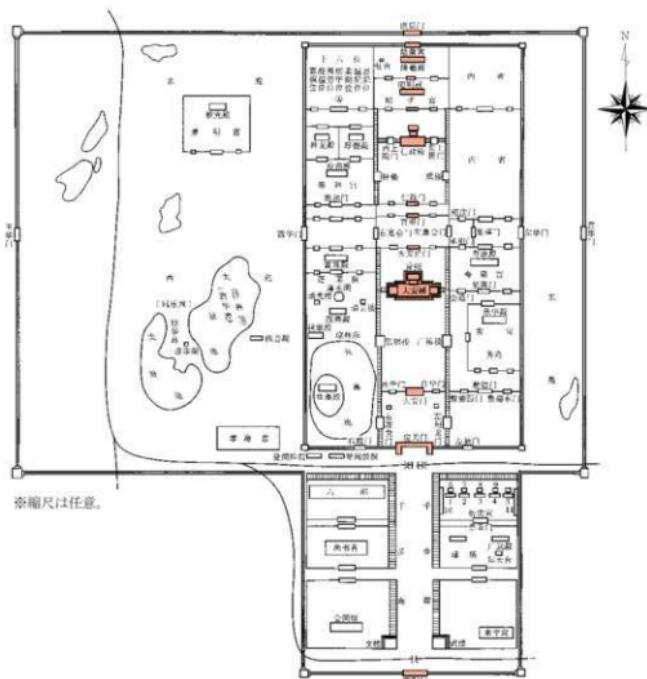


図45 金中都の皇城・宮城の復原

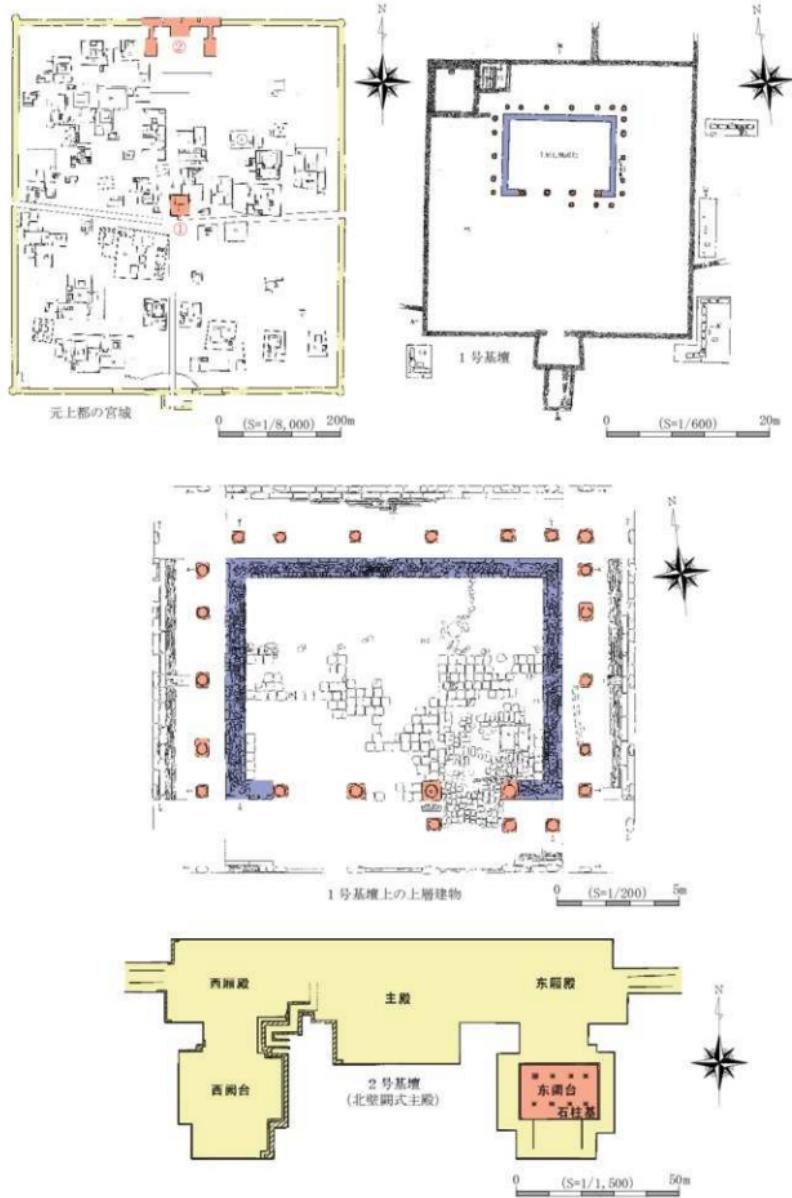


図46 元上都の宮城と正殿

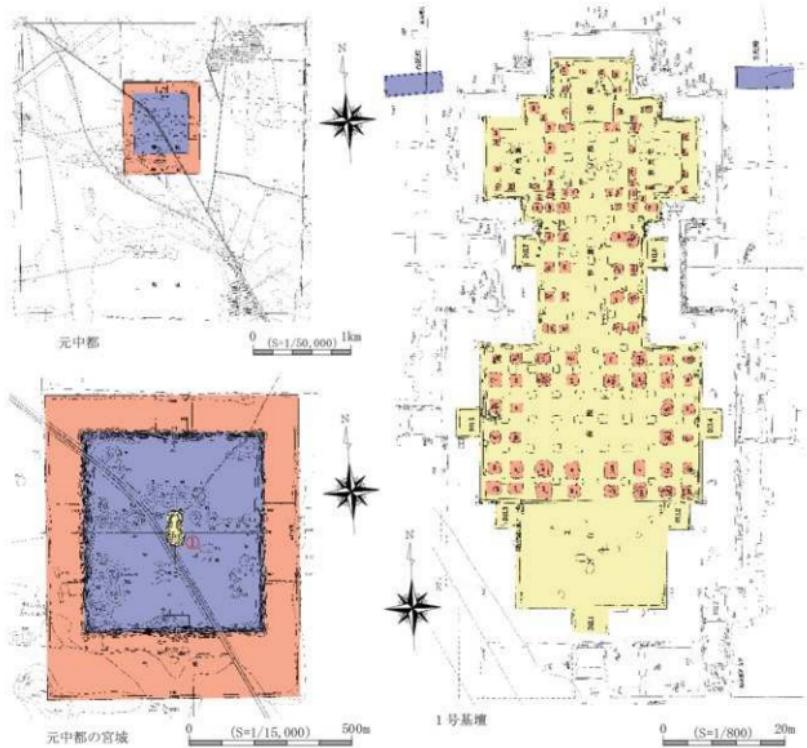


図47 元中都の宮城と正殿

金は、渤海・遼と同じく「五京制」を採用したことが知られる。前半期の都城が、金上京城で、北城・南城が「曲尺形」に配置される（図44左）。宮城（皇城・大内・大内所）は、南城の西側に位置し、東西500m・南北645mを測る。東西に位置する南北廊に挟まれた中軸上に5基の基壇が南北に並び、そのうち4号建築が最大規模の「工字形」基壇である（報告：孟凡人2019 p.184図4-2など）。中軸上の基壇は未発掘のため詳細は不明だが、近年、西軸の1号基壇が発掘調査されている。

1号基壇（図44右）は、東西41m・南北33mの「十字形」の基壇で、上面に36基の磉墩を確認している。中央の浅い円形の溝が巡る部分が主殿と考えられており、東西の「挟屋」、北の「後闇」、南の「前序」が附屬する非常に独特な形式の建造物である。なお、近年には宮城北東部で廊廡構造を持つ附属建築も検出されており、1号基壇と同時期とされている（黒龍江省文物考古研究所2023）。

（16）金中都（図45）（報告書16-a）

金中都は、文献史料から復原されている（図45）。宮城正殿は太安殿（桁行11間）で、東西には「珠殿」（桁行5間）が位置し、後方に「香閣」（皇帝が大臣などと議事をする場）が位置する。北側には、第二の大殿である仁政殿（桁行9間）があり、東西には上閨門が位置する。建築物の構造については不明な部分が多いものの、主殿・東西配殿・後閣で構成される「工字形」正殿が継承されている点が注目される。

（17）元上都（図46）（報告書17-a, b）

フビライが造営した元上都の宮城は東西542m・南北605mを測る（図46上左）。宮城内には「T字形」に

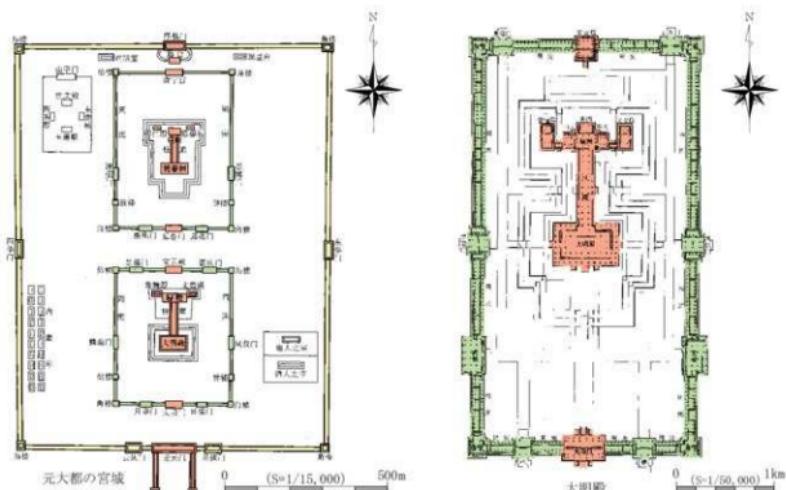


図48 元大都の宮城と正殿

道路が走り、その中央北側に1号基壇（図46上右）、北壁中央に2号基壇（闕式主殿）（図46下）が位置する。1号基壇を大安閣、2号基壇を穆清閣と考える説が有力とされる（報告：魏堅2008）。元上都の宮城正殿は、大安閣で大都の大明殿に相当する。金中都の大安殿を継承するものだが、金南京開封城（もともとは北宋東京開封城）の熙春閣が移築されたものである（冯恩学2008・久保田2019など）。中央が5間四方・4層の樓閣建築で、左右に各2間の「耳構」があり、桁行は9間とされる（王貴祥2017）。

1号基壇の上層には、桁行7間・梁行6間の元誠亡後のラマ廟建築が確認されている（図46上右・中）。大安閣とされる樓閣建築遺構は検出されていないが、下層基壇の四隅で検出した白玉角柱の存在から元代の大安閣の基壇と想定されている。基壇は東西33.3m・南北34.1mを測り、南側に全長9.1mの突出するスロープが取り付く。

一方、宮城内最大の建造物は、北壁中央に位置する東西130m・南北60mの「闕式宮殿」の2号基壇で、穆清閣と考えられている（図46下）。主殿（東西67m×南北40m）・東西廄殿（25m四方）・廊道・闕台（東西24m×南北16m）・スロープ・殿前広場で構成される。闕台と西側スロープが発掘調査されている。廟殿と闕台は廊道で結ばれており、闕台は南向きに突出する凸形を呈する。版築と二重の外装塙で構築される。東闕台上には、各4個の2列の覆盆式の礎石が残存しており、礎石間の距離はおよそ3mを測る。闕台の南には、明台（東西10m・南北4m残存）がある。西闕台の北東側には、主殿側面に繋がるスロープを検出している。地面は塙で舗装されており、何度か屈曲しながら主殿へ登る構造となっている。闕式宮殿は、北壁と同時に造営されており、1256-1258年のフビライ即位前の時期と想定されている。その構造的特徴から、唐長安城大明宮含元殿など中原の様式を採用しながら、草原部都城特有の発展を遂げた形式と理解されている。

(18) 元中都（図47）（報告書18-a）

元武宗カイシヤンの造営した中都は、1308年から造営が開始されたが、わずか数年で造営停止となつた。宮城の中心部分に正殿である1号基壇（図47左上・左下）が位置しており、全面が発掘調査されている稀有な事例である。元大都の大明殿に該当する「工字形」正殿で、基壇は上層・下層の二段築成となっている（図47右）。上層は南から月台・前殿・柱廊・寝殿・東西夾室・香閣で構成される。月台は前面に位置し、東西24.8m・南北17.5mを測る。前殿は、柱痕跡から桁行7間（総長36.36m/元尺31.62mなら115尺）・梁行5間（総

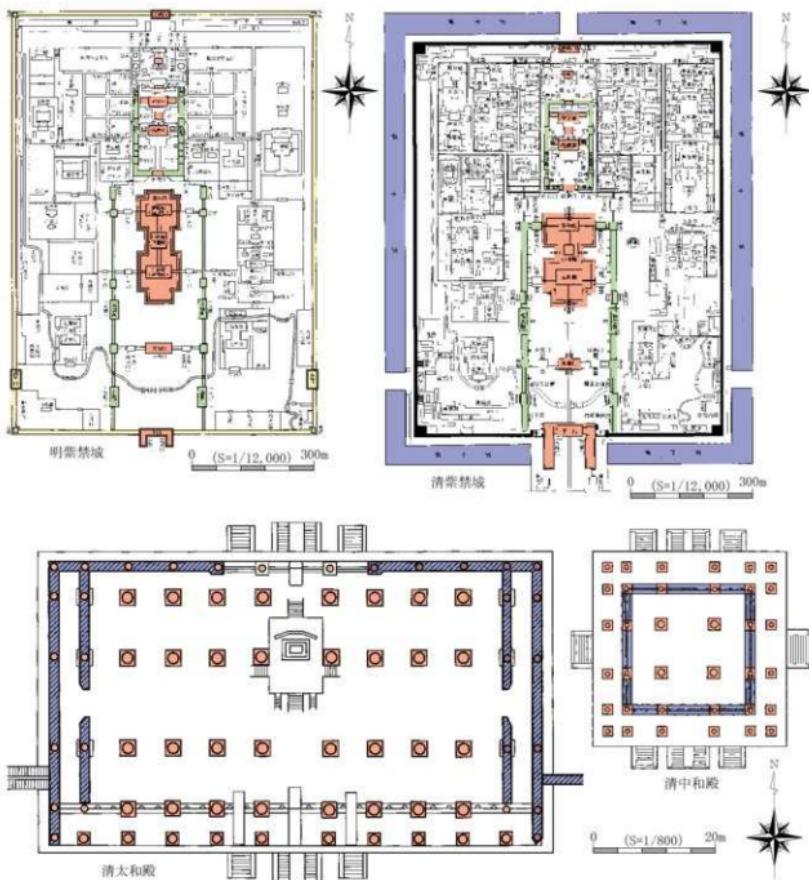


図49 明清北京城の紫禁城と正殿

長 26.06m/82 尺 の建物と判明している。前殿は北側の柱廊（東西 3 間・南北 4 間）を通じて、寝殿と接続する。寝殿は桁行 3 間・梁行 3 間で、東西夾室と香閣も柱間は狭いものの桁行 3 間・梁行 3 間である。上層基壇への階段は 7 カ所で、月台の東・西・南、前殿の東・西、柱廊の東・西に位置する。下段基壇外の東西には、東西配殿も存在する。後述する元大都の宮城正殿である大明殿は文献史料でしか復原できないが、中都の 1 号基壇は大明殿の基本構造を反映していると考えられており、非常に重要な発掘事例となる。

(19) 元大都（図 48）（報告書 19-a）

元大都の宮城は、南の「大明殿建築群」と北の「延春閣建築群」で構成される（図 48 左）。正殿は大明殿で、文献史料によると元中都 1 号基壇と共に「工字形」と判明している（図 48 右）。前殿は桁行 11 間（200 尺）・梁行 7 間（120 尺）で、中都 1 号基壇の前殿よりも規模はかなり大きい。柱廊は南北 7 間、寝殿は桁行 5 間、東西夾室は桁行各 3 間、香閣は桁行 3 間とされる。なお、寝殿の東には文思殿、西には紫壇殿が附属する。一方、延春閣も「工字形」で、桁行は 9 間と大明殿よりも一回り規模が小さい。

3-3 明清都城の正殿

(20・21) 明清北京城(図49)(報告書20-a/21-a)

最後に明清北京城の宮城正殿について、まとめておく。清紫禁城は、明代の構造を継承したもの(図49上)で、外朝には三台(三殿)が位置する。元大都大明殿の「工字形」を継承する基壇ではあるが、柱廊ではなく東西130m・南北227.7mの巨大な基壇上に太和殿・中和殿・保和殿の3大殿が独立して存在する形式へと変化している。現存する太和殿は、康熙34年(1695)以降のもので、桁行11間(総長60.1m)・梁行5間(総長33.33m)である(図49下)。

北宋東京開封城の「工字形」正殿: 大慶殿の建築様式は、金中都大安殿・元大都大明殿へと継承されたが、明清期には「工字形」基壇の上に三殿が並ぶ「三台」の様式へと発展した点が整理できる。

3-4 高句麗・渤海都城の正殿遺構

(1) 高句麗安鶴宮(図50)(報告書1-a)

高句麗安鶴宮は一辺622mの歪んだ方形(図50上左)で、中軸上に南から外殿(南宮・正殿)、内殿(中宮・日常政務)・寝殿(北宮・王の居住空間)が並ぶ。各宮殿前には殿庭が広がり、それを囲む「コの字」状回廊によって院落を構成する。後述する渤海都城の宮城に見られる「廊廡建築」に系譜的に繋がる要素である。

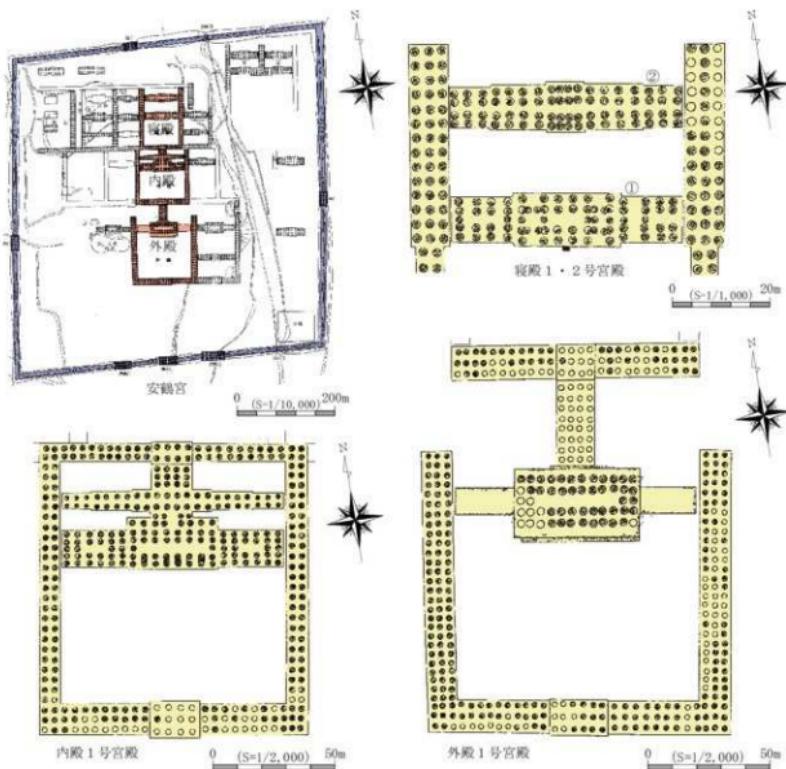


図50 高句麗安鶴宮の宮城と正殿

残念ながら報告は非常に簡易で、各宮殿の様相を把握することは難しいが、外殿・内殿・寝殿の実測図を基に整理しておく。

外殿 1号宮殿（図 50 下右）は、桁行 11 間・梁行 4 間の建物で、東西に配殿があり、北側は廊道によって内殿回廊へと接続している。一方、内殿 1号宮殿（図 50 下左）は、桁行 7 間・梁行 5 間で東西配殿（桁行 5 間・梁行 4 間）を持つ。北側では、南北方向の廊道と東西方向の廊道が交差する特殊な構造を呈する。このように高句麗安鶴宮の廊道は、北宋期以降に主流となる中原・草原都城の「工字形」宮殿の柱廊とは異なる構造をしている。宮殿相互が結びついているわけではなく、宮殿建築は回廊（廊廻）と結びつく点が特徴である。なお、寝殿 の 1・2 号宮殿（図 50 上右）もそれぞれ東西の回廊（廊廻）と連接している。

（2）渤海海上京城（図 51）（報告書 2-a, b）

渤海海上京城の宮城は、東西 620m・南北 720m の範囲で、中軸上に南から 1～5 号宮殿が確認されている（図 51 上左）。ここでは、1～5 号の順番で各宮殿の様相を整理する。

1号宮殿は、報告書が刊行されておらず、著作・論文中に引用されている（図 73 上中）（報告：趙虹光 2012 p.17 図 3・傅熹年 1998a p.425 図 8 など）。基壇は東西 56m・南北 27m、高さ 3.1m を測り、南面東西に 2 階段（幅 3.8m・長さ 5.4m）、北面中央に 1 階段（幅 3.5m・長さ 5m）が取り付く。基壇上の礎石から、桁行 11 間・梁行 4 間と判明しており、傅熹年が唐長安城大明宮麟德殿前殿との共通性を指摘する「斗底槽形」（傅熹年 1998a）の柱配置を呈する。東西の「慢道建築」と報告される建物によって南向きの「コの字形」を呈する廊廻（長廊）に接続する。なお、「慢道建築」とされる建物の東西には、南北方向の門遺構も確認されている。宮城正門との間の殿庭空間は、大明宮丹鳳門へ含元殿の空間と共通する点が指摘されている。

2号宮殿は、南側に位置する北向きの「コの字形」廊廻で囲まれた院落を構成する。基壇は東西 92m・南北 22.5m の大型の長方形で、南面東西に 2 階段、北面中央に 1 階段が取り付く（図 51 下）。基壇上面の残りは悪く、原位置を保つ礎石は存在しない。しかし、芯々 4.5m として、桁行 19 間・梁行 4 間の大型建造物が想定されている。なお、南面階段は、東西端からそれぞれ 6 間目に位置する。2 号基壇の東西には、東掖門・西掖門がある。

3・4号宮殿は、南側の 3 号宮殿と廊道で接続された北側の 4 号宮殿、その左右の 4-1・4-2 宮殿で構成される。3 号宮殿は「朝堂的功能」、4 号宮殿（4-1・4-2 含む）は「渤海王宮の生活区」と報告書では想定されている（図 51 中）。まず、3 号宮殿の基壇は、東西 32.8m・南北 21m、高さ 1.6m を測り、南面東西に 2 階段が取り付く。基壇上面の礎石は残りがよく、桁行 7 間・梁行 4 間（それぞれ 4m 等間）で、東西の廊道、北側の廊道に接続している。東西廊道部分には、南北方向の門遺構も検出されている。北側廊道は、南北 7 間の單廊だが、中央部分に桁行 3 間・梁行 1 間の建物が確認できる。一方、4 号宮殿は東室・西室（それぞれ東西 8m・南北 8.7m）の 2 室構造で、「中央廊」と周囲には「回廊」（廂）が巡る。北側には 2 基のオンドル、東西には 3×3 間の配殿も存在する。このように、渤海 3・4 号宮殿は、北宋期以降の中原・草原都城の中樞正殿のような機能を分掌する前・後殿が柱廊で結ばれた「工字形」ではなく、渤海王の居住空間と日常的な政務空間が結ばれた構造を呈する点が重要である。

ところで、1・2・3 号宮殿の基本構造は共通しており、南面東西の 2 階段、基壇東西の 2 階段の存在によって、中心権力の隔絶性を表現している。この基本構造は、唐長安城大明宮含元殿の影響を受けたものと思われる（城倉 2021 p.174 図 45）。

5号宮殿は、宮城最北に位置する東西 40.4m・南北 20.4m、高さ 0.4-0.5m の大型基壇である（図 51 上右）。いわゆる総柱構造で、桁行 11 間・梁行 5 間、身舎外周に壁体が見られ、四面に回廊（廂）が確認できる。報告書では、1～3 号宮殿と異なり、中央を「減柱」してないため、2 層構造の樓閣建築とする。また、宮城北側で最も高い建造物であるため、宮城北側を警戒する機能を持ったと想定されている。この点は、西古城 5 号宮殿の記載部分で、改めて言及する。

（3）渤海西古城（図 52）（報告書 3-a）

西古城の内城は、東西 187m・南北 306-311m で、中軸上に南から 1・2 号宮殿（上京城の 3・4 号宮殿）、5 号宮殿（上京城の 5 号宮殿）が確認できる（図 52 上左）。内城正殿の1号宮殿は、東西 41m・南北 22.5-

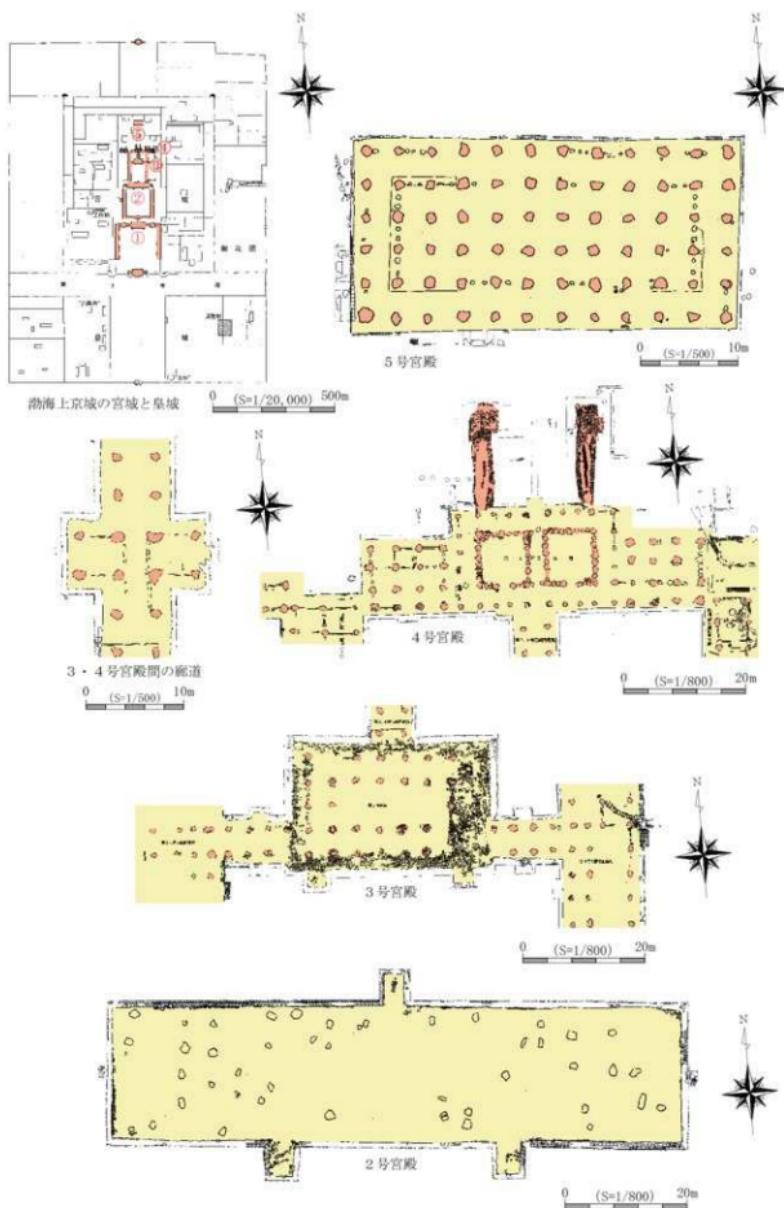


図 51 渤海上京城の宮城と正殿

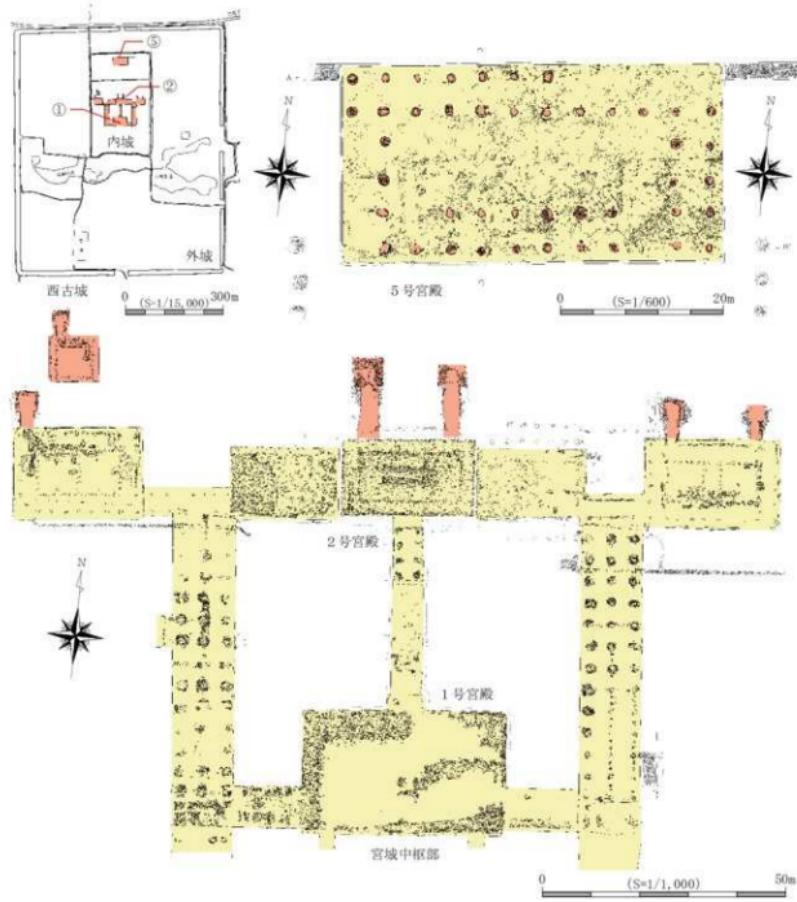


図 52 渤海西古城の宮城と正殿

25.5m、高さ 0.7-1.1m の基壇で、南面東西に 2 階段が取り付く。東西は廊道により南北方向の廊廻に接続し、北は廊道で 2 号宮殿に接続する。基壇上面の残りは悪いものの、上京城 3 号宮殿と同規模とすれば桁行 7 間・梁行 4 間の建造物が想定できる。北側に接続する 2 号宮殿は、東西 27m・南北 15m、高さ 0.15-0.3m の基壇で、北に 2 基のオンドルが取り付く。東西には配殿が存在するが主殿も含めて柱配置は不明である。更に東には 3 号宮殿、西には 4 号宮殿が位置し、上京城 3・4 (4-1/4-2) 宮殿と基本構造は同じである (図 52 下)。

5 号宮殿は、やはり内城最北に位置する東西 46.7m・南北 24.5m の基壇で、基壇上には礎石、礎石据付穴が残存し、柱配置が判明している (図 52 上右)。桁行 11 間・梁行 5 間で、中国では「斗底槽形」と呼ばれる四面廊建物である。前述した上京城の 5 号宮殿の基壇とはほぼ同じ位置・規模・構造であるため、總柱か否かの建物構造の違いはあっても、機能は共通する可能性が高い。渤海上京城が唐長安城大明宮の影響を強く受けている点は明らかであり、宮城・内城深部に位置する 5 号宮殿は、麟德殿に共通する饗宴施設 (劉大平・孙志敏 2018) の可能性が高いと考えている。なお、この論点に関しては、第 4 章の考察部分で言及する。

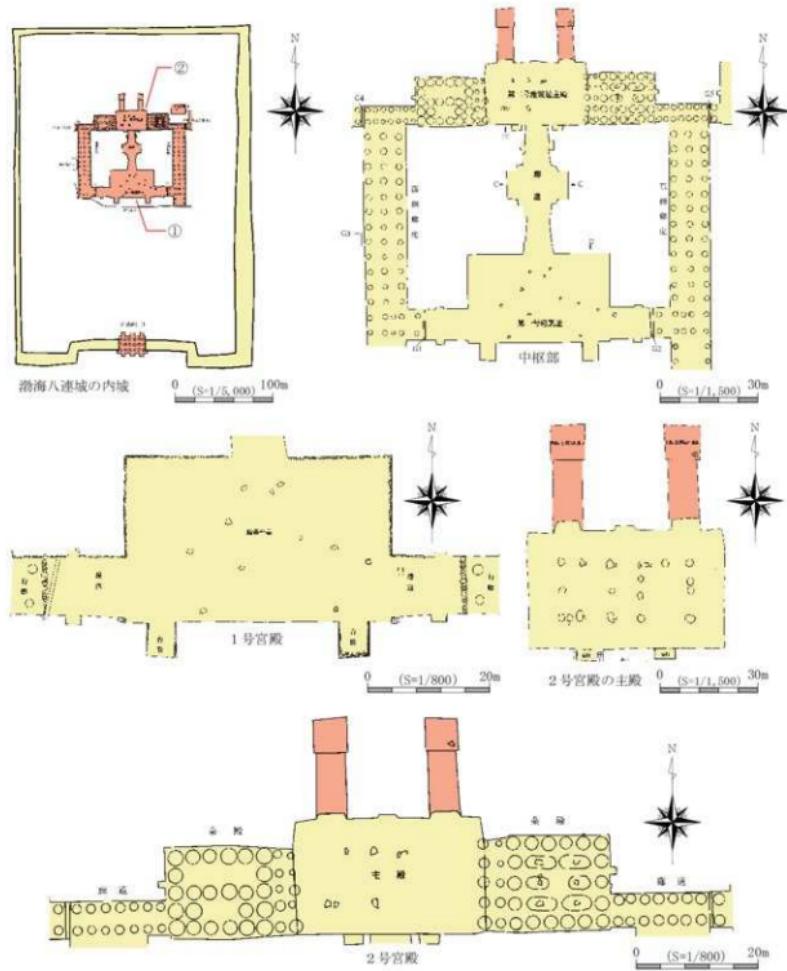


図 53 渤海八連城の宮城と正殿

(4) 渤海八連城 (図 53) (報告書 4-a)

八連城の内城は、東西 216-219m・南北 313-316m で、基本的な構造は西古城内城と一致する。しかし、5号宮殿に該当する基壇は確認されていない (図 53 上左)。中心は、1・2号宮殿 (上京城の3・4号宮殿) である (図 53 上右)。

1号宮殿は、東西 42.4m・南北 26.3m、高さ 2-2.2m の基壇で、南面東西に 2 階段 (東: 幅 4.2m・長さ 5.2m/西: 幅 4.2m・長さ 5.3m) が取り付く。東西は慢道・廊道によって廊廡に接続し、北は廊道によって 2 号宮殿と接続する。東西慢道の外側には、南北方向の階段も確認できる。北の廊道は「中字形」に中央が膨らみ、何らかの建物が想定される。北側に接続する 2 号宮殿は、東西 30.6m・南北 18.5m、高さ 1m の基壇で、南面

中央の廊道の左右に2階段が取り付く。主殿はやはり2室構造を呈するが詳細は不明で、北には2基のオンドル、東西には桁行7間・梁行4間の配殿（塀殿）が存在する（図53中・下）。

最後に、渤海都城の宮城・内城構造で特徴的な「廊」について言及しておく。渤海都城中枢部は、「コの字形」の回廊（「廊廻」と呼称される）と南北に連なる宮殿によって殿堂を持つ院落構造が形成される点に特徴がある。「廊廻」は通常、幅2~4間で、いわゆる「複廊」構造を基本とする。一方、宮殿相互を前後に結び付ける、あるいは宮殿と東西の廊廻を結びつける役割を果たすのが「廊道」（飛廊・行廊・連廊とも呼称される）である。これは幅1間の「単廊」構造を基本とする。このように渤海都城では、中軸上の各宮殿が、東西の廊廻建築と結びつくとともに、上京城3・4号宮殿、西古城1・2号宮殿、八連城1・2号宮殿のように、前後の宮殿が廊道で結びつき、「工字形」に近い構造を呈する場合がある。非常に特徴的な構造だが、中原で北宋以降に登場する「工字形」正殿のように機能を分掌する前殿・後殿が柱廊で結びつく形式とは明らかに異なる構造で、渤海王の居住空間と日常的な政務を行う宮殿が結びつく「工字形」の平面形は、高句麗の系譜を引き、渤海の特徴的な構造と考えられてきた。しかし、2023年に公表された北齊鄆城の宮城北側で検出された後寝の206・209大殿（報告：中国社会科学院考古研究所等 2023）は、その祖型と思われる構造を呈する。魏晉南北朝→高句麗→渤海という系譜を考慮する必要があると同時に、唐長安城・洛陽城の後寝部分の構造を渤海が模倣した可能性もある。今後、研究の進展が期待される領域である。この問題については東アジア都城における前殿・後殿の問題と併せて、考察部分（4章）で取り上げ、詳しく整理する。

3-5 日本都城の正殿遺構

（1）前期難波宮（図54）（報告書1-a）

孝徳朝難波長柄豊崎宮とされる前期難波宮は、内裏前殿SB1801と後殿SB1603が軒廊SC1701で結ばれている（図54左）。

内裏前殿SB1801は、桁行9間（総長36.65m = 125.5尺 / 西13・13・14・15・15.5・15・14・13・13尺東）・梁行5間（総長18.98m = 65尺 / 13尺等間）の四面廊、掘立柱建物である（図54右）。側柱の外約1mに「小柱穴」が巡り、木製基壇とされる。軒廊SC1701は単廊で、南北9間である（図54中）。内裏後殿SB1603は、部分的な発掘調査だが、桁行9間（総長34.31m）・梁行5間（総長14.6m）と推定されている。

なお、最新の発掘調査では、内裏後殿の北方に大型の内裏正殿を想定できる成果があり（図54左上）（大

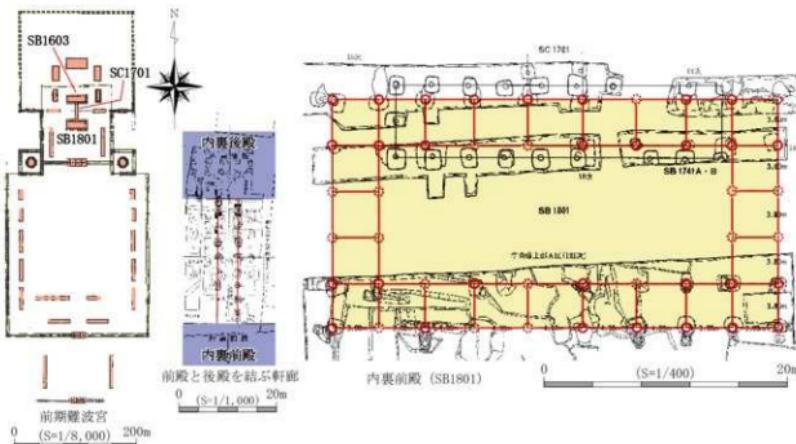


図54 前期難波宮の内裏前殿（SB1801）

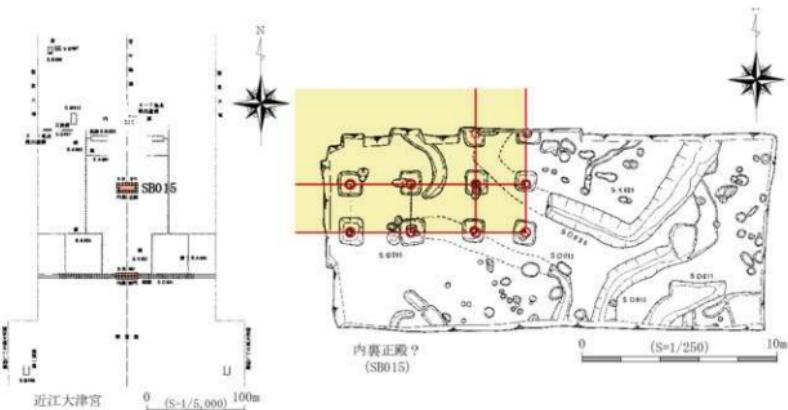


図 55 近江大津宮の内裏正殿 (SB015)

阪市教育委員会事務局文化財保護課 2023・積山 2023)、今後の調査の進展と日本都城における内裏構造の発展に関する研究の進展が期待される。

(2) 近江大津宮 (図 55) (報告書 2-a)

天智朝の近江大津宮では、想定中軸上で内裏南門 SB001 と内裏正殿 SB015 が確認されている (図 55 左)。内裏正殿 SB015 は、桁行 3 間分 (西 3.11m・3.33m・2.6m 東)・梁行 2 間分 (南 2.5m・2.7m 北) を検出しており、四面廊の掘立柱建物と推定されている (図 55 右)。柱穴は一辺 1.1~1.3m、深さ 0.45~0.65m で、柱の直径は 0.35m 前後である。SB015 は内裏南門 SB001 の真北に存在し、両者の東側柱列の位置が一致することから、SB001 と同じ桁行 7 間を想定している (SB001 は五間門との説もある)。報告書では、桁行 7 間 (総長 21.3m)・梁行 4 間 (総長 10.4m) の四面廊建物と推定している (報告: 滋賀県教育委員会文化財部文化財保護課ほか 1992 p. 178 模式図)。

(3) 飛鳥宮Ⅲ期 (図 56) (報告書 3-a, b)

飛鳥宮Ⅲ期の遺構としては、内郭前殿 SB7910 とエビノコ郭正殿 SB7701 が注目できる (図 56 上左)。内郭前殿 SB7910 は、西側半分を発掘しているが、北東隅の石敷きも確認しており、規模が判明している。それによると、桁行 7 間 (総長 20m)・梁行 4 間 (総長 11.2 m) (身舎 10 尺 / 廊 9 尺) の四面廊、掘立柱建物である (図 56 下)。柱穴は一辺 1.8m、深さ 1.3m で、柱の直径は 0.6m ほどとされる。本来は基壇上の高まりがあったと推定されているが、削平されており、周囲 (側柱より 1.2m の位置) 四面を囲むように石敷 SX7916 が検出されている。

エビノコ郭正殿 SB7701 は、北側の側柱一列分のみ未検出だが、桁行 9 間 (総長 29.2m/11 尺等間)・梁行 5 間 (身舎 10 尺 / 廊 11 尺) の四面廊、掘立柱建物である (図 56 上右)。柱穴は一辺 1.2m、深さ 1.1m ほどで、柱はいずれも抜き取られている。柱の直径は、推定 0.5m ほど。明確な基壇は確認されていないが、側柱より外側の東・南側には川原石の石敷が検出されている。

(4) 藤原宮 (図 57) (報告書 4-a, b, c, d, e)

藤原宮 (図 57 上左) は、近年の発掘調査により大極殿院の様相 (図 57 上右) が明らかになりつつある。ここでは、大極殿、後殿 SB11650、東樓 SB530 に注目する。

大極殿は、日本古文化研究所の調査で桁行 7 間・梁行 4 間と復原された (報告: 日本古文化研究所 1936) が、近年は測量調査の成果を踏まえて再検討が行われている (図 57 下左)。現状の基壇遺構は水田耕作により大きく改変されているが、測量図と礎石据付穴の位置を踏まえて、桁行 9 間・梁行 4 間 (身舎桁行 17 尺等間・梁行 18 尺等間 / 廊 15 尺) の四面廊、礎石建物を想定する小澤毅の復原案 (小澤 1993) が追認された。

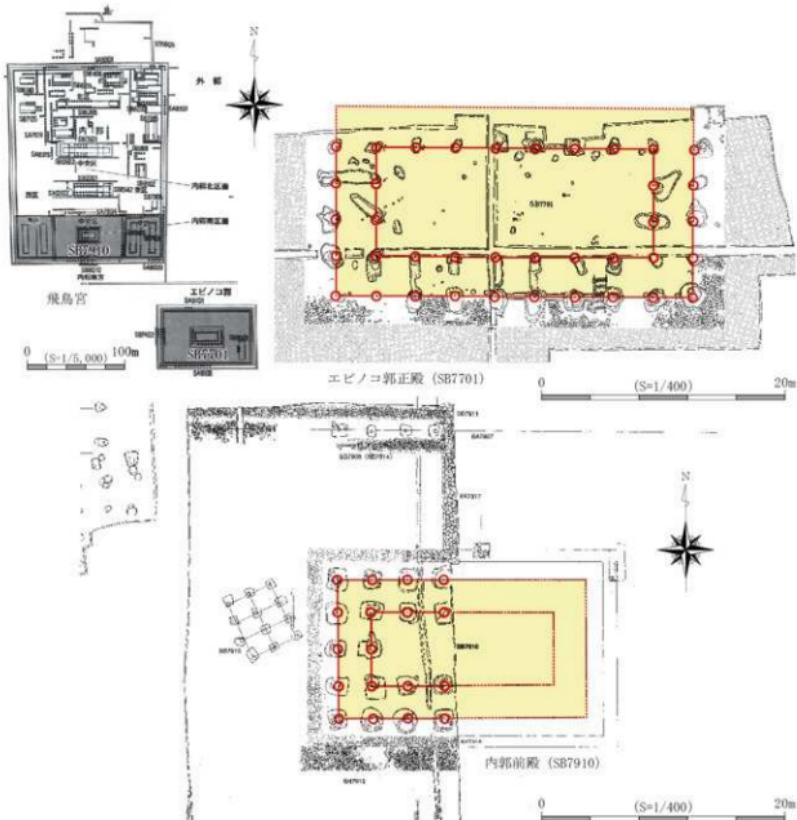


図56 飛鳥宮の内郭前殿（SB7910）とエビノコ郭正殿（SB7701）

基壇規模は不明だが、南北面に各3基、東西各1基の階段が想定されている。

大極殿後殿 SB11650は、近年の発掘調査で検出された遺構である（報告書：奈良文化財研究所 2022・2023、岩永 2023）（図57中）。基壇規模は東西 50.8m・南北 16.4mで、建物の痕跡は削平されていたが、東西棟の礎石建物が想定されている。東西で後方東回廊 SC11540・西回廊 SC11640と接続している。

東櫓 SB530は、大極殿院東面南回廊の東で検出した東西棟建物である（図57下右）。桁行9間（総長42m/140尺）・梁行4間（総長18m/60尺）（身舎16尺・扉14尺）の四面廂、礎石建物である。宮内では大極殿に次ぐ規模を持つ大型建築で、文献上の「東櫓」に比定されている。

(5) 平城宮（図58①②③）（報告書5-a, b, c, d）

平城宮は、奈良時代前半と後半で平面配置が大きく変化した点が知られる（図58①上）。正殿である大極殿は、奈良時代前半は朱雀門軸線上の中央区大極殿院（第一次大極殿院）、後半は壬生門軸線上の東区大極殿院（第二次大極殿院）に位置していた。なお、奈良時代前半の東区正殿は、国家的儀礼の場としての中央区大極殿に対して、日常的な政務空間として機能したと考えられているが、本論では大極殿を分析対象とする。対象とするのは、図58①中にあるように中央区大極殿院（大極殿 SB7200・後殿 SB8120・埠積據壁

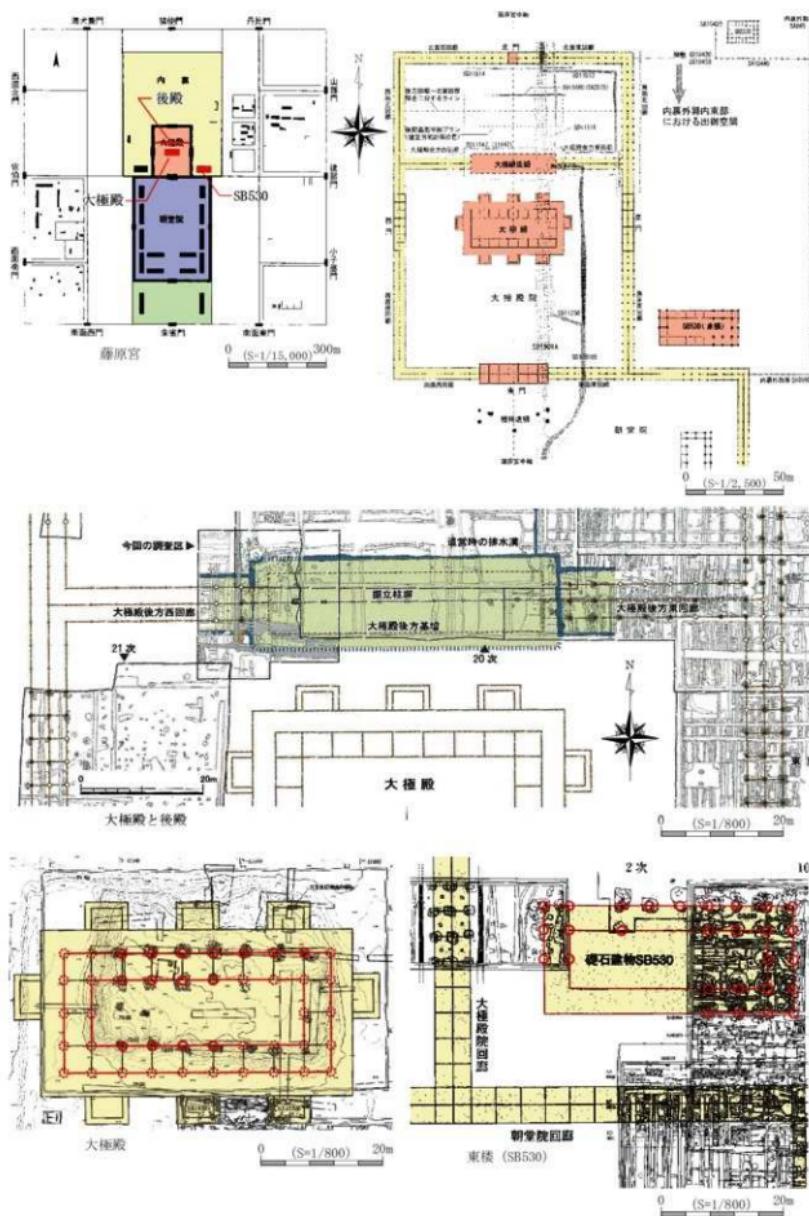


図 57 藤原宮の大極殿・後殿・東楼

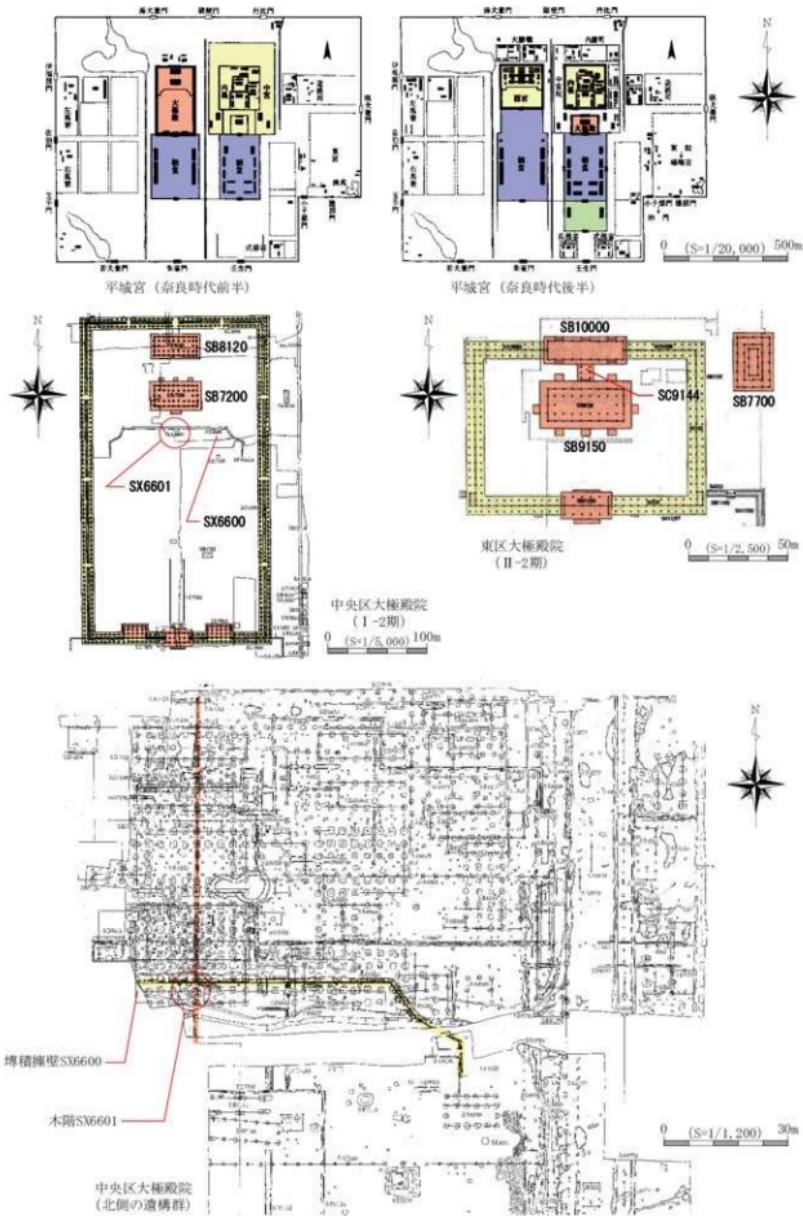


図58 平城宮の中央区大極殿（SB7200）と東区大極殿（SB9150）①

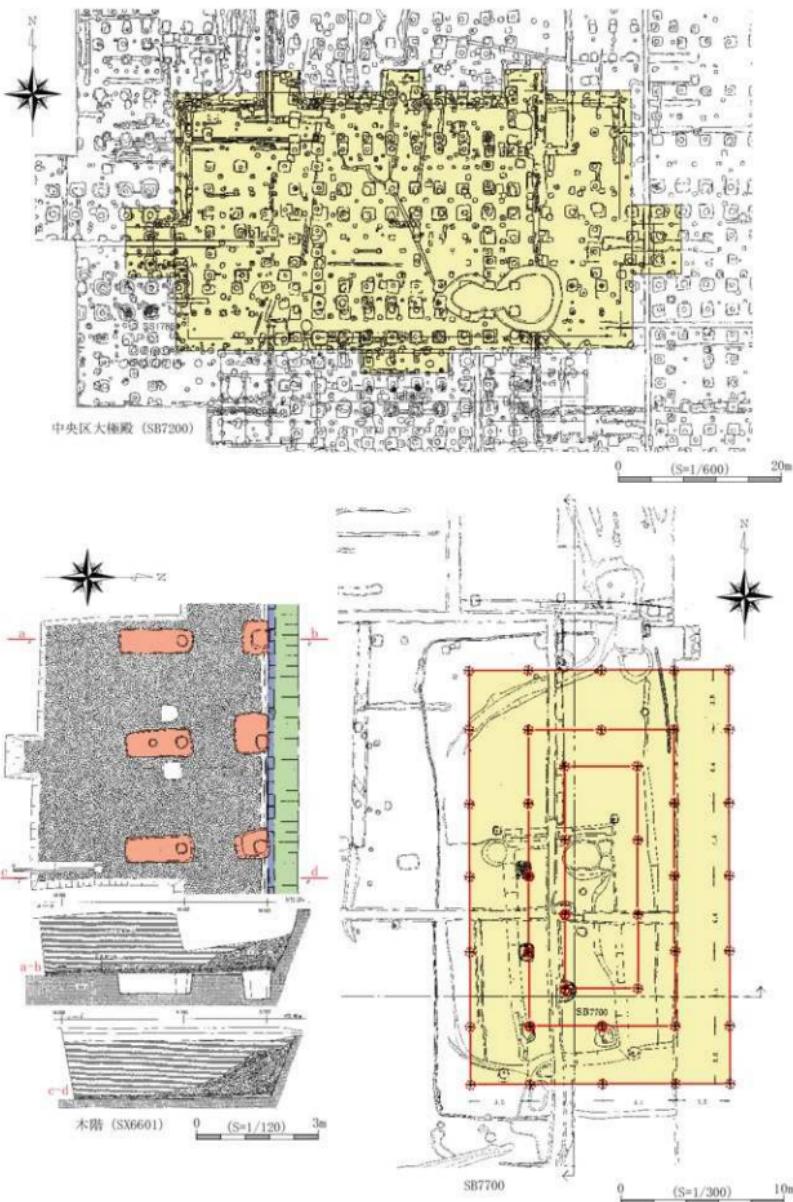


図58 平城宮の中央区大極殿 (SB7200) と東区大極殿 (SB9150) ②

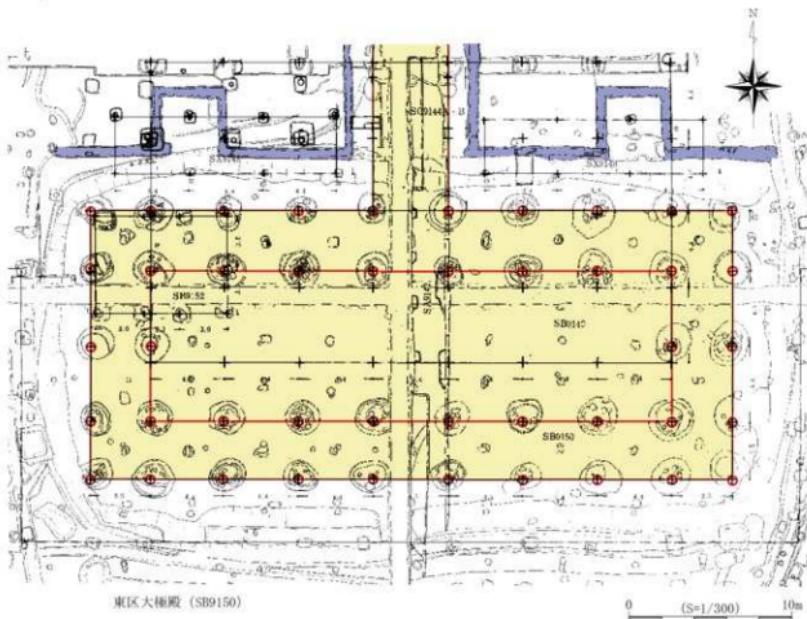
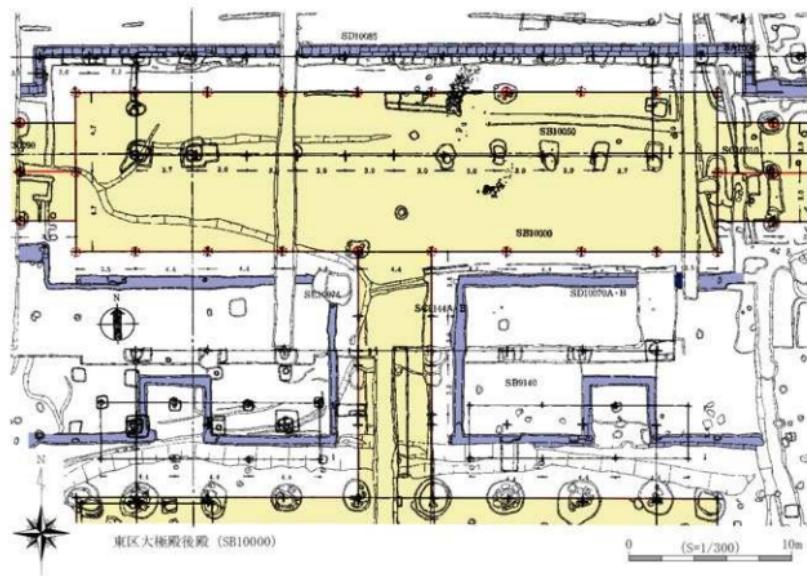


図58 平城宮の中央区大極殿 (SB7200) と東区大極殿 (SB9150) ③

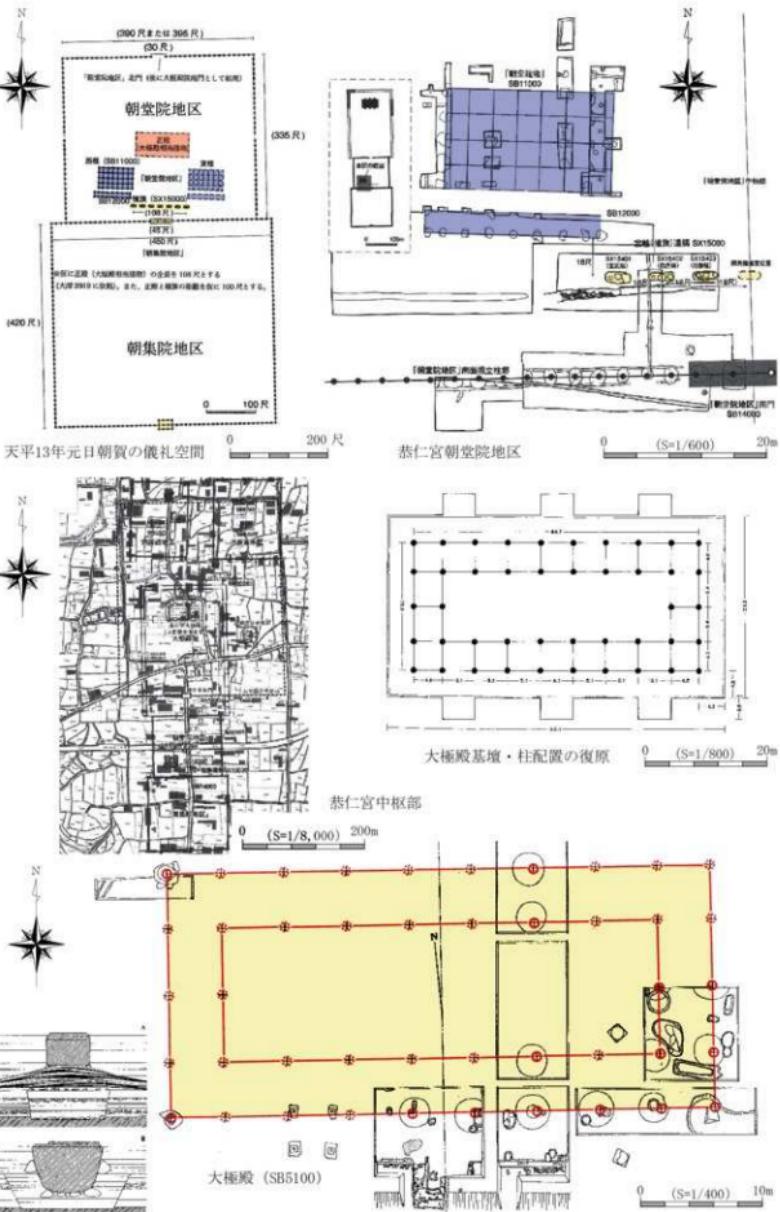


図59 恭仁宮の大極殿（SB5100）

SX6600・木階 SX6601)、東区大極殿院(大極殿 SB9150・後殿 SB10000・軒廊 SC9144)である。

中央区大極殿 SB7200 は、II・III期の遺構で基壇がほぼ削平されている。そのため、1982年の学報XIでは、北面地覆石抜取痕跡 SD7165 と南面地覆石割付痕跡 SD7167 から、東西 35m 以上・南北 29.5m の基壇を想定し、南北面に各 3 基の階段を想定した。桁行 9 間(総長 45.1m)・梁行 4 間(総長 20.7m)(身舎桁行 17 尺等間・梁行 18 尺等間/幅 17 尺)の四面廊、礎石建物と復原した。建物復原を踏まえて、基壇規模も東西 53.1m(180 尺) × 南北 29.5m(100 尺)と復原された。一方、2011年の学報VIIでは、基壇が東西 53.2m(180 尺) × 南北 28.7m(97 尺)、階段が北面 3 基、南面 1 基、東西各 1 基と解釈が変更された。建物規模に関しても、桁行 9 間・梁行 4 間(身舎の桁行 17 尺・梁行 18 尺/幅 15 尺)と廊の出が変更されている(図 58 ②上)。なお、南面階段については、研究史で整理したように、小澤毅が造営時の 3 階段から 1 階段への改造を指摘している(小澤 2020)。また、二重基壇の可能性が想定されている点も重要である(報告:奈良文化財研究所 2009)。

中央区大極殿後殿 SB8120 は、大極殿と同じく基壇がほぼ削平されているが、北面回廊に繋がる軒廊の地覆石割付痕跡・雨落溝(SD244・SD242)、および基壇北側の雨落溝(SD8103)の存在から、東西 49.7m × 南北 25m と想定されている。建物規模は全く不明だが、大極殿 SB7200 と同規模の桁行 9 間・梁行 4 間と推定されている(図 58 ①中左・表 3)。なお、小澤毅は藤原宮大極殿後殿の調査成果、その他の大極殿後殿の事例も踏まえて、桁行 9 間・梁行 2 間(149 尺 × 34 尺)に復原している(小澤 2023b p. 277)。

中央区大極殿前の埠積擁壁 SX6600・木階 SX6601 は、大極殿 SB7200 に附属する施設として重要である(図 58 ①下)。唐長安城大明宮含元殿の龍尾道を模倣した埠積擁壁 SX6600 の直下、バラス敷の下で検出した階段遺構が SX6601 である(図 58 ②左下)。東西 2 間(5.5m)・南北 1 間(1.69m)だが、バラス敷下での検出遺構のため、報告書では建設時の仮設的木階の可能性も指摘されている。しかし、平城宮中央区大極殿院南門には、天皇が饗宴の際に出御した点が知られており、その際に利用した階段という説が有力である。

東区上層正殿: 大極殿 SB9150 は、基壇周囲が削られた状態だが、残高 1.3~1.5m で基壇上面は残存状況が

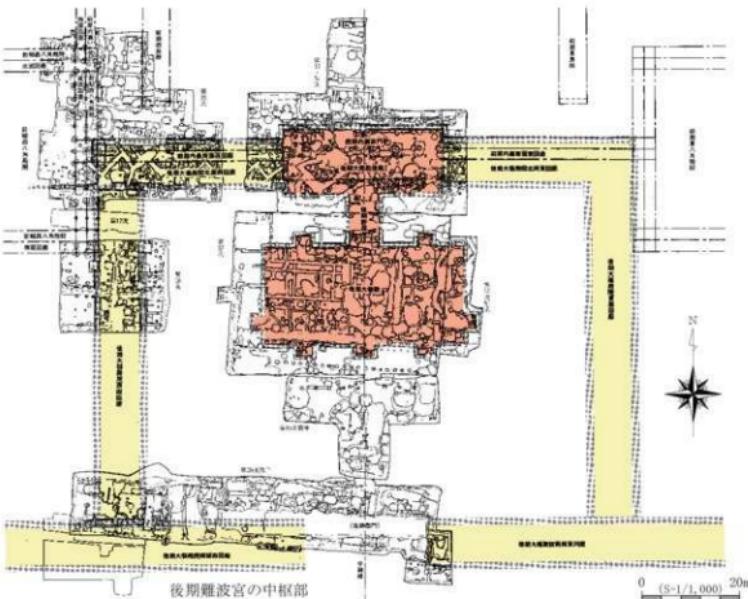


図 60 後期難波宮の大極殿(SB1321)と後殿(SB1326)①

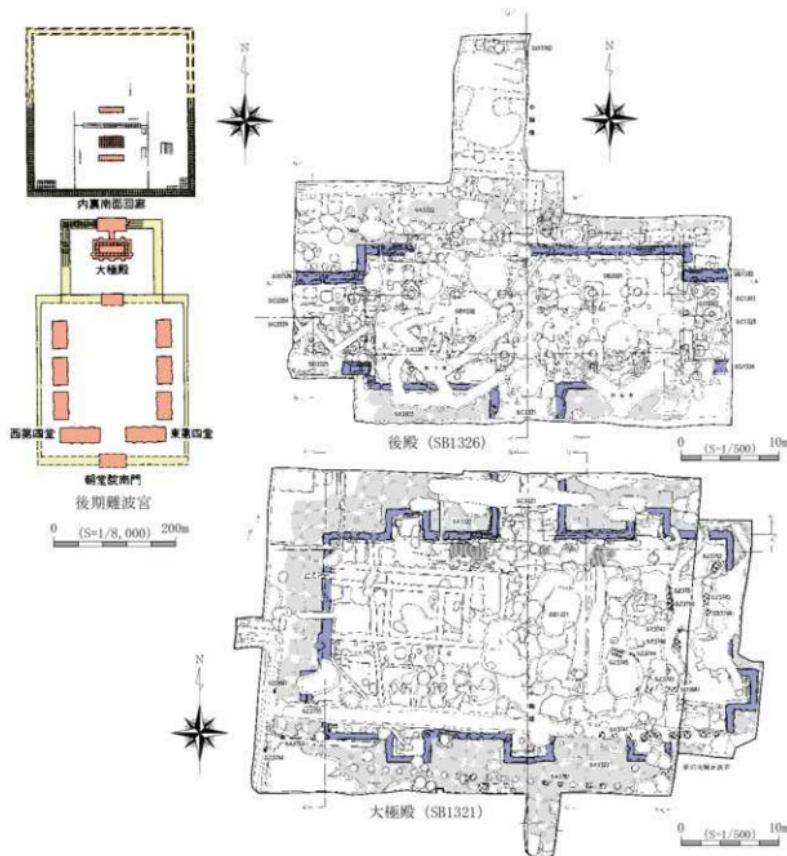


図 60 後期難波宮の大極殿 (SB1321) と後殿 (SB1326) ②

良好で、44カ所すべての礎石据付穴が残存していた（図 58 ③下）。礎石据付穴は一辺 2.5m 前後の円形・隅丸方形を呈する。桁行 9 間（総長 38m/129 尺）・梁行 4 間（総長 15.9m/54 尺）（身合 15 尺等間・廂 12 尺・基壇の出 13 尺）の四面廂、礎石建物である。基壇は凝灰岩切石による壇正積で、南面には中央間と東西から各 3 間目の位置に幅 15 尺（4.45m）・出 12 尺（3.55m）の 3 階段、北面にも東西に対応する位置に 2 階段、東西は南から 2 間目に各 1 階段、合計 7 基の階段が確認・想定されている。

東区上層大極殿 SB9150 と後殿 SB10000 を結ぶ軒廊 SC9144 は、2 時期に分かれる。SC9144A は、南北長 10m・東西幅 3.8m だったが、SC9144B では基壇幅が 27 尺（8.0m）に拡張されている。桁行 2 間・梁行 1 間（15 尺等間）に復原されている（図 58 ③上）。

東区上層大極殿後殿 SB10000 は、凝灰岩の壇正積基壇で、基壇北側の雨落溝（SD10084-86）が完存しており、南側の外装石の抜取り痕跡も明瞭なため正確な範囲が確定できる（図 58 ③上）。基壇は東西 140 尺（41.3m）・南北 46 尺（13.6m）で、階段は北面 3 か所、南面 2 か所で確認されている。階段は基壇外に張り出さず、内側に入り込む特殊な構造を呈する。北面 3 か所の位置は、軒廊 SC9144A と SB9150 の北面東西階段の位置と

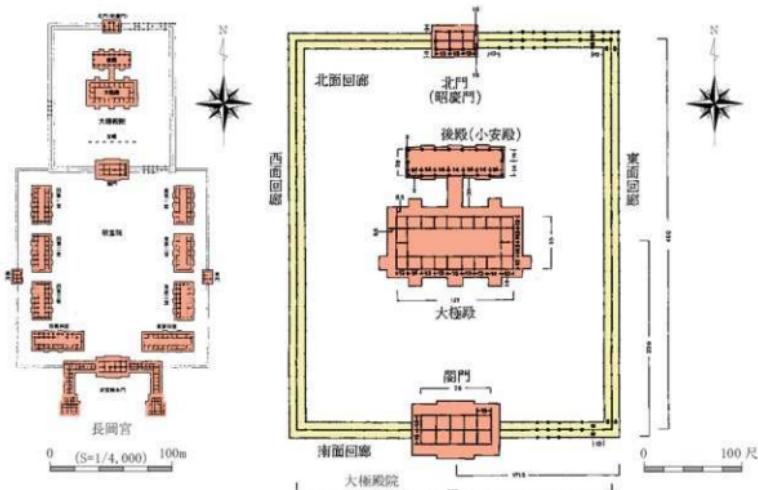


図 61 長岡宮の大極殿

対応し、東西回廊との接続点にも存在する。基壇上の削平は著しいが、南北2か所の礎石据付穴から、桁行9間（総長38.7m/129尺/中央7間15尺/両端間12尺）・梁行2間（総長9.4m/32尺/16尺2間）、基壇の出は南北7尺（2.1m）、側面5.5尺（1.6m）、切妻造の礎石建物に復原されている。

なお、東区下層正殿SB9140・下層後殿SB10050についても簡単に整理しておく。下層正殿・後殿は、上面遺構の保護のため、完全には発掘されていないが、SB9140は桁行7間（総長31m/105尺）・梁行4間（総長17.7m/60尺）（15尺等間）の四面廂、掘立柱建物に復原されている。一方、SB10050は、桁行10間（総長31m/105尺/中央8間10尺/両端間12.5尺）・梁行2間（総長5.9m/20尺/10尺2間）の切妻造、掘立柱建物に復原されている。

最後に東区大極殿東棟SB7700は、大極殿の東83mに位置する樓閣建築である（図58①中右・図58②下右）。基壇の掘込地業は、東西21m・南北29.5mで、桁行6間・梁行4間の組合せで、身舎内に柱配置が復元されている（図59中右）。報告では、桁行9間（総長149尺/身舎17尺等間/廂15尺）・梁行4間（総長66尺/身舎18尺/廂15尺）とされる。しかし、小澤毅は報告書の単位尺0.3mではなく、0.2953-0.2955mとし、桁行総長44.0m・梁行総長19.5mに復原している（小澤1993）。基壇は瓦積みで、北面・南面に各3基の階段を想定している。現在までに、大極殿後殿は確認されていない。

（6）恭仁宮（図59）（報告書6-a, b, c）

恭仁宮には、平城宮中央区の大極殿SB7200が移建された点が知られている。大極殿（図59中左）の北部に位置する大極殿SB5100は、残存する礎石、および抜取痕跡（図59下）の発掘調査から柱配置が復元されている（図59中右）。報告では、桁行9間（総長149尺/身舎17尺等間/廂15尺）・梁行4間（総長66尺/身舎18尺/廂15尺）とされる。しかし、小澤毅は報告書の単位尺0.3mではなく、0.2953-0.2955mとし、桁行総長44.0m・梁行総長19.5mに復原している（小澤1993）。基壇は瓦積みで、北面・南面に各3基の階段を想定している。現在までに、大極殿後殿は確認されていない。

なお、近年では、SB5100を中心とする大極殿の南の「朝集院地区」「朝堂院地区」で新しい発見が報告されている。朝堂院地区（図59上左）では、桁行7間以上・梁行4間（10尺等間）の組合せで、柱配置が復元されている（図59上右）。報告では、桁行8間・梁行1間（10尺等間）の東西棟掘立柱建物SB11000、その南の桁行8間・梁行1間（10尺等間）の東西棟掘立柱建物SB12000などが検出された。さらに両建物の東南側では、幡旗遺構SX15000（18尺等間）が検出された（図59上右）。幡旗遺構は2回の樹立痕跡が認められるため、天平13・14年の元日朝賀（天平15年は大極殿SB5100で開催）のための仮設建物

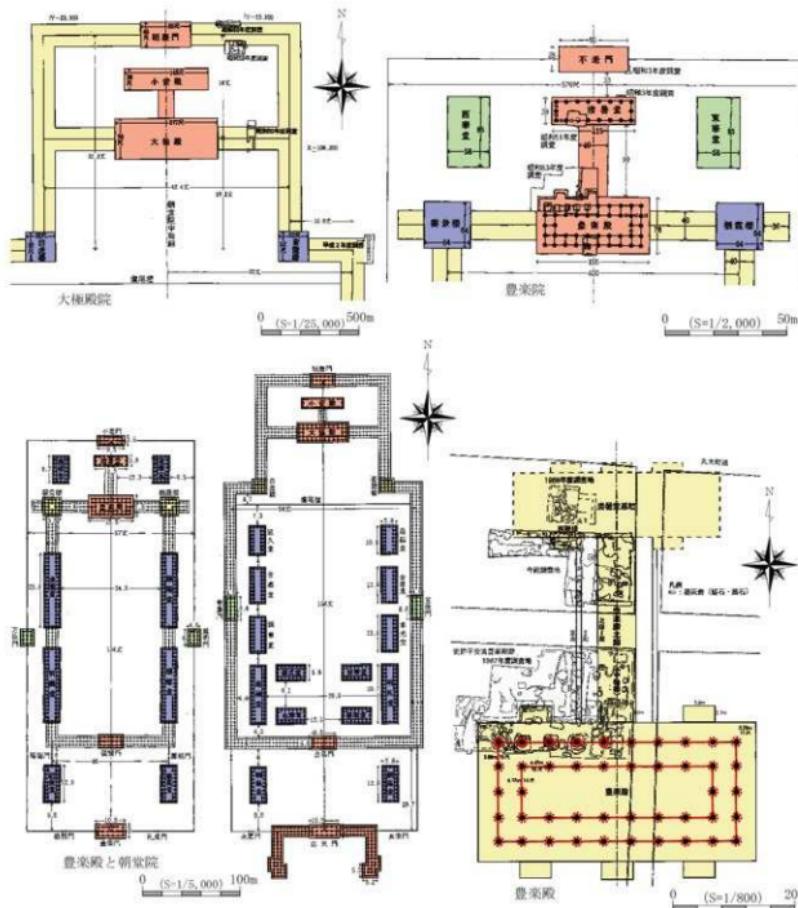


図 62 平安宮の豊楽殿と大極殿

が SB11000・12000 に該当する可能性が指摘されている（報告：古川 2020b）。

ところで、恭仁京に統いて遷都された紫香楽宮では、大極殿は建造されなかつたが、中枢建物の様相が報告されている（甲賀市教育委員会 2023）。

(7) 後期難波宮（図 60 ①②）（報告書 7-a）

後期難波宮（図 60 ②左）では、正殿の大極殿と後殿、それを結ぶ廊柱が発掘調査されている（図 60 ①）。

大極殿 SB1321 の基壇は削平のため礎石・据付穴などは残存していないかったが、基壇周囲の地覆石や階段の抜取り痕跡などが残っており、およその輪郭を把握できる（図 60 ②右下）。基壇は東西 41.4m（141 尺）・南北 21.16m（71.5 尺）を測り、階段は 7 力所で確認されている。南面には中央（幅 15 尺・4.44m / 出 8 尺・2.37m）、東西より各 3 間目の位置に 2 階段（幅 13.5 尺・3.99m / 出 8 尺・2.37m）があり、北面にも南面東西階段と対応する位置に存在する。東西各面には南から 1 間目の位置に階段（幅 11 尺・3.25m / 出 8 尺・2.37m）が

ある。北側中央には軒廊SC3321（南北9.5m・東西6m）があり、後殿SB1326と接続する。SB1321は凝灰岩切石による壇正積基壇で、柱間寸法は桁行9間（総長35.2m・119尺／西11・13.5×2・14・15・14・13.5×2・11尺東）・梁行4間（総長14.79m・50尺／南11・14×2・11尺北）と推定されている。

後殿SB1326も壇正積基壇であるが、階段などの構造は不明。同じく地覆石の抜取り痕跡によって、大きさが判明している（図60②右上）。基壇規模は、東西32.5m・南北13.7mを測る。

（8）長岡宮（図61）（報告書8-a）

長岡宮（図61左）の大極殿は、1961年に発掘が行われているが、詳細な報告書などは刊行されていない。基壇は東西41.4m（138尺）・南北21.6m（72尺）で、周囲には小石敷が確認された（図61右）。基壇南面に3か所、北面に2か所の階段（幅4.6-4.9m・14-15尺／出2.7m・9尺）が確認されており、東西面にも階段の存在が推定されている。建物痕跡は既に削平されていたが、桁行9間（西13・14・13×2・15・13・14・13尺東）・梁行4間（南13・14.5×2・13尺北）の柱間寸法が推定されている。

後殿は1960年に発掘されており、基壇は東西31.2m（104尺）・南北13.5m（45尺）と判明している。基壇南面に2か所、北面に3か所の階段（幅4.25m・14尺／出6m・2尺）が確認され、軒廊は幅3.6m（12尺）・長さ9m（30尺）に復原されている。建物は推定ではあるが、桁行7間・梁行2間（14尺等間）の切妻、もしくは寄棟造りとされる。長岡宮大極殿の後殿は、初めて回廊から独立した構造を呈する点が特徴である。なお、後期難波宮・長岡宮の大極殿・後殿は、基壇規模がほぼ同じであるため、前者から後者へと移建されたと考えられている（報告：向日市史編さん委員会1983 p.366）。

（9）平安宮（図62）（報告書9-a, b, c, d）

平安宮では、東に朝堂院、西に豊楽院が並列する（図62下左）。朝堂院北側に位置する大極殿・小安殿は発掘されていないため、考古学的な情報はないものの、絵画資料・文献史料から構造が復原されている（図62上左）。大極殿は桁行11間・梁行4間の四面廂、礎石建物である。一方、後殿である小安殿は桁行9間・梁行2間と判明している。

一方、豊楽院の豊楽殿は1987年に発掘調査が行われており、凝灰岩切石の壇正積基壇と判明している（図62上右・下右）。発掘では、北面西階段と5カ所の礎石据付穴を検出しておらず、文献史料と合わせて、桁行9間（身舎15尺・4.5m等間／廂13尺・3.9m／基壇の出12尺・3.28m）・梁行4間（身舎14尺・4.17m等間／廂13尺・3.9m／基壇の出12尺・3.28m）に復原されている。2007年には、清暑堂の南面西階段（幅5.2m・出1.5m）と豊楽院と清暑堂を繋ぐ軒廊の一部も検出されている。清暑堂は、桁行7間（15尺等間）・梁行2間（14尺等間）に復原されている。

4. 中国都城における正殿の発展と唐代における東アジアへの展開

ここまで研究史の整理を踏まえた論点と課題の抽出、分析方法の提示、正殿遺構の図面集成を示した。最後に考察として、中国都城における正殿の発展、および唐代における東アジア各国への展開に関して、いくつかのトピックに分けて議論を深める。2-1の「比較視座と方法論」で示したように、本論では中国都城の宮城中枢正殿の遺構を構造的に分析すると同時に、3つの正殿：太極殿・含元殿・明堂が併存した特異な時期である唐代の長安城・洛陽城が東アジア各國にどのような影響を与えたのか、を議論する。なお、本研究の目的は、中国都城の発展に関する歴史的位置付けと、同時代における都城の展開のメカニズムの分析を通して、「中国都城とは何か」という根源的問題にアプローチする点にある。中国における各王朝が造営した都城の個別的な位置付け、あるいは高句麗・渤海・日本など各國における都城導入の具体的様相を追究することが目的ではない。それゆえに、秦・漢・魏晉南北朝・唐宋の中原都城から、遼・金・元の草原都城を経て明清都城へと発展する、時代を越えた正殿遺構の通時的比較という縦軸の分析、および中国都城が最も影響力を持って周辺国に伝播した唐代における東アジアへの展開過程という横軸の分析、この2つの時空間を超えた比較を行う学問的な課題を設定した。

以上の前提に立ち、考察の議論を進める。まずは、4-1で中原都城から草原都城を経て明清都城へと発展する正殿について通時的に整理する。特に、従来はあまり注目されてこなかった唐代における3つの正殿

の併存現象、あるいは北宋期における工字形正殿の出現などの論点を掘り下げる。次には、4-2で魏晋南北朝～唐代に、高句麗・渤海へと展開した正殿の様相を整理する。近年、北魏洛陽城・東魏北齊鄆城など、南北朝期の中原都城の様相が明らかになった点により、高句麗都城の再評価が必要となっているのに加えて、高句麗と渤海の繼承関係についても議論が蓄積されているため、これらの論点を深める。4-3では、中原・草原都城、高句麗・渤海都城における正殿の発展を踏まえた上で、日本都城における正殿の様相を整理する。日本都城は非常に古い時期から多くの発掘調査の成果が蓄積されており、分析対象となる要素も多く、当然ながら論点も多い。ここでは、大極殿の系統性・朝堂の意義・八角殿と樓閣建築の関係性・後殿の発展など、中枢部に関連する複数の論点を取り上げる。4-4では、唐代に絞って東アジアに展開した正殿の規模と構造を比較し、都城の国際的な階層性について議論する。最後に、4-5では、唐代に展開した東アジア都城の意義について、儀礼・饗宴空間としての中枢部の視点から位置付けを行う。

4-1 中原都城における正殿の発展と草原・明清都城への継承

(1) 前殿から太極殿への発展過程

中国都城の正殿は、秦始皇帝が阿房宮に造営した前殿から始まる（吉田 2021）。阿房宮前殿（図 35 下）は未完成とされるが、その系譜は前漢長安城未央宮前殿・後漢洛陽城南宮前殿へと継承される。この中で、建造物の平面配置が判明しているのは、前漢長安城未央宮前殿だが、南北に三殿が並ぶ構造をしており（図 36 右）、最も南側（前面）に位置する建造物を前殿として復元する説（楊鴻勛 2009 p. 235 図 227・王貴祥 2017 pp. 15-23）が主流を占める。後漢洛陽城南宮前殿に関しては、考古学的な情報はなく、その位置が文献史料から推定されている（図 20 左）。その後、曹操が造営した鄆北城で、文昌殿（国家的儀礼空間）・聰政殿（日常的政務空間）の双軸構造（駢列制）（図 21 左）が出現するものの、前殿を継承する国家的な儀礼空間は、曹魏明帝の青龍 3 年（235）の太極殿（図 37 ②下）で大きな画期を迎える。單一宮城制の成立時期、あるいはその過程については未だ不明な部分も多いが、正殿の発展史において曹魏洛陽城の太極殿の成立が最も大きな画期となっている点は、発掘された遺構の規模や構造からみても明らかである。

曹魏に創建された太極殿は、発掘によりいくつかの大きな改築があった点が判明しており、曹魏・西晉（早期）→北魏（中期）→北周（晚期）へと継承された。洛陽城太極殿は、基壇を有する単独の建造物で南面に東西 2 階段が取り付く。ちなみに、南面の東西 2 階段は、北魏平城の中枢建物でも確認されており（山西省考古研究所等 2005）、隔絶した中心権力を可視化する機能が想定できる。洛陽城太極殿は、後方の昭陽殿、および左右に位置する東西堂と深く結びつく一体的な構造体であった点も判明している。また、曹魏・西晉の太極殿は、1 年を象徴する桁行 12 間（梁行 5 間）の建造物（報告：陳建军・余冰 2019）だったが、南朝梁武帝が造営した閏月を加えた桁行 13 間の太極殿（王貴祥 2017 p. 32 図 1-51）を継承する形で、北周期に桁行 13 間へと改築された。しかし、未完成のまま終わったことが確認されている。魏晋洛陽城の太極殿は、南朝の太極殿（図 17・22 右）に影響を与える（錢國祥 2010）と同時に、北魏・北周洛陽城、あるいは東魏・北齊鄆城（図 37 ①右）を経て唐長安城太極宮太極殿へと継承していくことになる（錢國祥 2016）。なお、唐長安城太極殿は桁行 12 間とされる（報告：陳建军・余冰 2019）が、隋洛陽城の乾陽殿・唐洛陽城の乾元殿は桁行 13 間とされており（王貴祥 2012）、魏晋南北朝～唐では 12・13 間が最高格式と意識された点が分かると共に、前面中央に柱が配置される個数間（12 間）も存在し得たことが読み取れる。

(2) 唐長安城・洛陽城における 3 つの正殿：太極殿・含元殿・明堂

魏晋南北朝の洛陽城太極殿の構造が発掘で確認された意味は非常に大きく、関連研究が急激に活性化している。一方、当該期の東西堂・昭陽殿と深く結びつく太極殿の構造的特徴が、唐長安城太極宮太極殿にどのような形で継承されたかについては、発掘が行われていないため不明である。しかし、唐高宗以降に元会などの国家的舞台となる大明宮含元殿に関しては、全掘調査が行われており、様相が判明している（図 39 ①中）。含元殿の遺構としての成立過程については、前稿で整理した（城倉 2021 pp. 166-168）が、隋仁寿宮仁寿殿・唐九成宮 1 号宮殿の開式主殿の系譜を引きながら、外朝大典空間である宮城正門の機能が正殿と合体した殿門融合形式である点に特徴がある。魏晋南北朝期の中央を隔絶する南面 2 階段の太極殿の系譜を引

く形で、左右翼廊・左右閣（棲鳳閣・翔鷺閣）に囲繞される殿前空間に巨大な龍尾道を整備し、その前面には承天門の制度を維承する東西朝堂・登聞鼓・肺石が位置する。主殿の基壇規模は、魏晉南北朝の洛陽城太極殿よりも小規模だが、太極殿の中央を隔絶する基本構造を引き継ぎながら、宮城正門の構造的特徴と融合することで非常に特徴的な形式へと発展したことが伺える。主殿の建築物自体に注目すると、いくつかの復原案があるものの、傅熹年の研究成果に基づけば、魏晉南北朝の建築様式（減柱方式）を引き継いでおり（傅熹年 1998a p. 425）（図 39 ②下）、桁行 13 間・梁行 5 間に復原できる。魏晉南北朝を通じて主流であった桁行 12 間の太極殿ではなく、南朝梁武帝期・北周宣宗期の桁行 13 間の太極殿を維承した可能性もある。

唐長安城大明宮含元殿は、殿門融合形式という特徴的な構造、および後述するように渤海海上京城・日本平城宮などに強い影響を与えた点が知られており、唐の宮城正殿の「完成形」と把握されてきた。しかし、その構造的特徴は、太極宮の正門：承天門、正殿：太極殿の融合に由来するものであり、唐王朝の国家的儀礼空間の象徴的な場所ではあっても、系譜的にはあくまでも太極殿の「派生形」である点には注意が必要である。実際に、図 63 の変遷で示したように、含元殿の構造は北宋以降の正殿には継承されておらず、元上都北壁主殿（図 46 下）など復古的な事例（報告：内蒙寧师范大学等 2014）を除けば、後世に与えた影響は極めて限定的である。北宋の西京洛陽城太極殿・東京開封城大慶殿に継承されたのは、唐長安城太極宮太極殿の系譜である点は明らかで、秦漢～魏晉南北朝における前殿・太極殿の系譜が、北宋以降の正殿に引き継がれた点（図 63 の赤トーンの系譜）は、遺構の構造的な特徴からも明確である。すなわち、中国都城の宮城中枢部で 2000 年以上に渡って継承されたのは、あくまでも前殿・太極殿の系譜なのである。

以上の太極殿・含元殿と並んで、武則天期に神都洛陽で正殿として造営されたのが明堂（図 26）である。武則天は、本来、南郊に位置する礼制建築（姜波 2003）であり、王者の德治を象徴する明堂を「万象神宮・通天宮」と称して、宮城中軸上に位置する正殿：乾元殿の場所に造営した。「宮廟合一」とも呼ばれるこの手法は、中国都城の歴史上、武則天期以外には認められない稀有な現象である。明堂の遺構は、巨大な礎石を設置した礎石据付坑・隋乾陽殿・唐乾元殿上層の八角基壇が検出されて特定された（図 41 上右・下左）（報告：中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1988）が、文献史料上、基壇は上円下方の可能性が高いとの反論（辛德勇 1989 など）があるなど、その構造の特異性に起因する議論があった。明堂の北西側、中軸から西に 100m の位置では、直径 64.8m の円形基壇とその周囲の方形基壇で構成される天堂（図 27・図 41 下右）が確認されており、明堂・天堂の基壇平面形に表現された象徴性が議論の対象となってきた。しかし、唐高宗の永徽 2 年（651）、總章 2 年（669）に検討された明堂方案では、八角形の基壇の存在が明記されており（図 26 下左・図 70 上左）、上円下方の概念と八角基壇の構造は矛盾するものではなく（姜波 1996 p. 442）、天枢・明堂の八角形、天堂の上円下方など、いずれも中国古代の宇宙観や哲学思想を表現した武則天の政治性の強い象徴的建造物と考えられるに至っている（石自社 2021 p. 98）。中国史上唯一の女帝として、武則天が自らの統治の正当性を内外に示すために、儒教（明堂）・仏教（天堂）・道教などあらゆる信仰を総動員した点が伺われる（妹尾 2003）。

このように見えてくると、日本が藤原宮の造営（694）後に、大宝遣唐使（王仲殊 2000 など）を派遣した時期（702-704）は、唐の最盛期であると同時に、長安城・洛陽城に模倣対象となりうる 3 つの正殿（太極殿・含元殿・明堂）が並び立つ特異な時期だったことがわかる。栗田真人を執節使とする大宝遣唐使は、702 年に長安入りし、武則天によって麟德殿で招宴されただけでなく、南郊祭天儀礼への参加を含む数々の儀礼に参加したと推定されており（妹尾 2020b）、遣唐使の優遇は武則天にとって皇帝の威光が遠い国々まで及ぶことを内外に示す機会だったと推定されている（金子 2009）。武則天明堂は、玄宗期には上層が撤去されて乾元殿・含元殿と改称され、安史の乱で焼失するため、比較的短い期間に存在した正殿ではあるが、後述するように宮城中枢部に明堂・天堂が並び立つ洛陽宮城中枢部の構造は、北宋宮城に強い影響を及ぼすなど、近年ではその存在の再評価の機運が高まっている点も注目できる。なお、玄宗は唐長安城興慶宮の勤政務本樓で執務し、花萼相輝楼（図 40）を饗宴空間として利用したが、興慶宮に関しては、後の時代や同時代の東アジアへの影響力は認められない。

以上、唐長安城・洛陽城では、特に高宗一武則天の時期に、太極殿・含元殿・明堂の 3 つの正殿が並びた

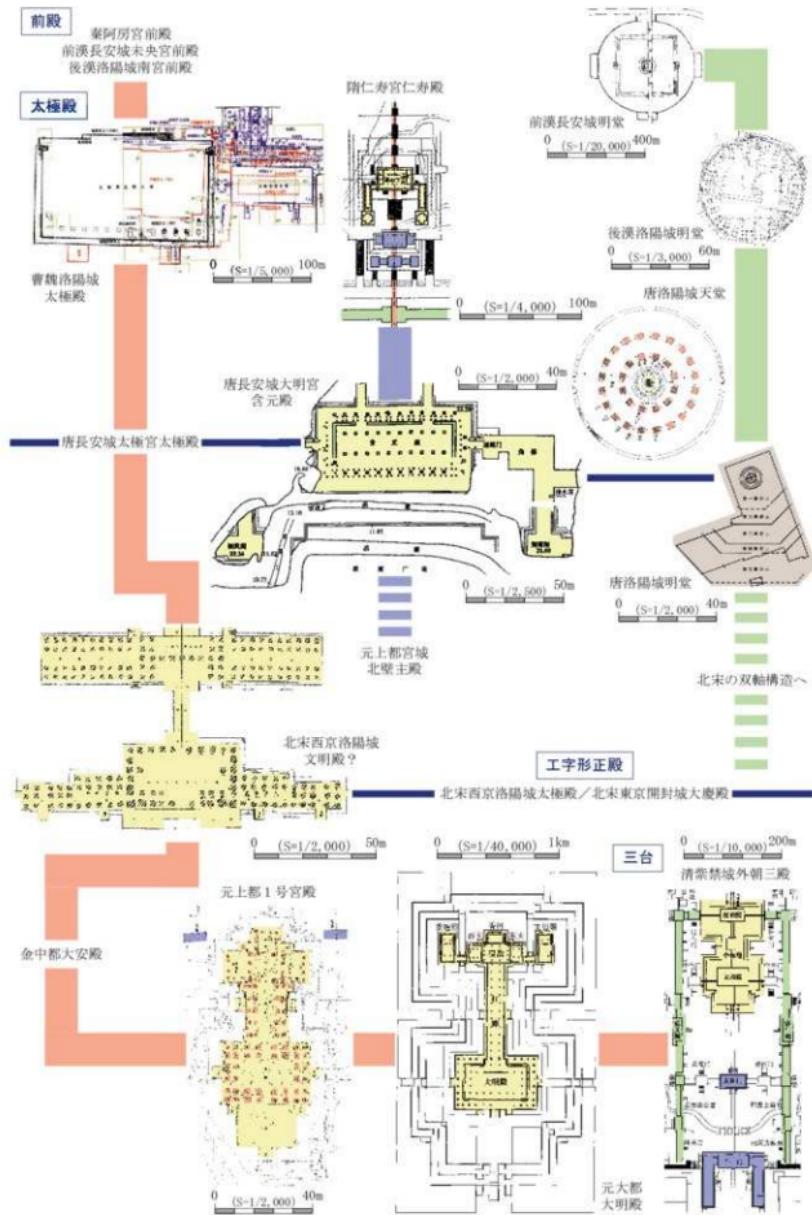


図 63 中国都城における正殿造構の変遷

つ特異な時代が存在していた。3つの正殿は、後の時代、あるいは同時代の周辺国へ、それぞれ異なる形で展開することになるが、このような視点で遺構の構造を比較する分析は今までの研究ではほとんど注目されてこなかった。その理由は、唐王朝を象徴する国家的儀礼空間としての含元殿を「完成形」と把握する見方、あるいは特異な歴史的背景で出現した明堂の存在を不規則な存在として把握する見方、などが研究の主流にあった点に起因する。しかし、魏晉南北朝の洛陽城太極殿の発掘によって太極殿の系譜が再評価される同時に、隋唐洛陽城における中枢部の発掘が進み、北宋以降への展開過程が明らかになってきたことにより、既存の枠組みに囚われない分析が必要となっている。ここまで見てきたように、唐長安城・洛陽城の完成期である「初唐」の時期は、3つの正殿が存在する特異な時期である。その中にあっても、正殿の中心的存在は、あくまでも秦漢前殿・魏晉南北朝太極殿の系譜を引く太極宮太極殿であり、高宗以後の含元殿、武則天の明堂は、長い中国都城の発展史上においては「刹那的」類型である点を考慮する必要がある。以上の視点に立ち、以降の考察ではこの3つの正殿の存在を深める形で、時空間を越えた比較を試みる。

(3) 北宋期における双軸制・工字形正殿の出現と草原都城・明清都城への継承

唐長安城・洛陽城では、高宗-武則天の時期に、3つの宮城正殿が並び立つ最盛期を迎えるが、その中でも中心にあったのは常に太極殿だった。この点は、唐代の即位儀礼が大明宮含元殿ではなく、唐末に至るまで嘉禮である冊・寶の伝達（第二次即位）が太極殿で行われていたように（金子 1994）、機能的な侧面からも確認できる。唐長安城太極宮太極殿の実際の遺構が確認されていないものの、『大唐開元礼』（池田 1972など）に記載される元会の空間配置（図12・13上左）からすると、含元殿は承天門の機能を融合した特殊な構造であったとしても、あくまでも宮城正門-太極殿の空間から生まれた「派生形」である点が読み取れる。特に、基壇南面中央に階段を設けず、皇帝権力の隔絶性を表現する基本構造は、明らかに魏晉南北朝から唐の太極殿に引き継がれたもので、含元殿の龍尾道もその基本構造を発展させたものである。実際に含元殿の殿門融合形式という特徴的な構造は後世に受け継がれておらず、前殿の「末裔」である太極殿こそが、中国歴代王朝が継承したただひとつの正殿であった点が読み取れる。

一方、武則天明堂は玄宗期に上層が解体され、安史の乱で焼失していくが、武則天が造営した洛陽宮の明堂・天堂という二軸構造は、魏晉南北朝の駢列制とは異なる系譜の双軸構造を生み出すことになる。この点は研究史1-3部分で詳細をまとめているが、松本保宣は北宋開封城に見られる双軸構造（中軸の大慶殿・

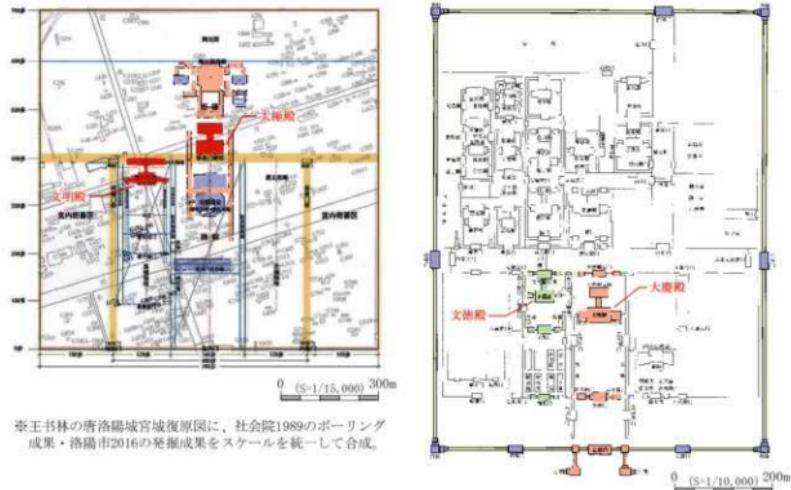


図64 北宋西京洛陽城（左）と北宋東京開封城（右）の双軸構造

紫宸殿／西軸の文徳殿・垂拱殿)が、隋唐五代の洛陽宮を媒介にして生まれたもので、その淵源を武則天の明堂・天堂の双軸構造に求めている(松本2020)。唐長安城の太極宮・大明宮はいずれも單軸構造(図30左)を基本としたが、図64右にあるように北宋東京開封城は、宮城正門の宣德門の中軸上には正殿:大慶殿(大朝会などの国家的儀礼を実施)が位置し、西軸には正衛殿:文徳殿(常朝の場)が位置する。この双軸構造は、武則天の天堂造営など宮城西側の政治空間化が進み、唐代後半期の延英殿での議政の開始(松本2006)などにも影響を与え、洛陽宮を媒介として北宋東京東京城で完成した様式とされる。

なお、北宋期の宮城中枢部の建造物に関する個別の要素に注目すると、東京開封城宮城正門の宣德門が西京洛陽城宮城正門の応天門(五鳳樓)に系譜を持つ点(韓建華2016a・城倉2021)、東京開封城の大慶殿などの工字形正殿が西京洛陽城の太極殿(図29上左)に系譜を持つ点が注目できる。東京開封城の正殿:大慶殿、正衛殿:文徳殿の発掘調査は行われていないが、文献史料から主殿が柱廊によって後闇と結びつく工字形を呈する点が知られている。この構造は、西京洛陽城宮城の太極殿のボーリング調査で確認されているだけでなく、西軸、すなわち天堂の南西側で検出された1・2号宮殿(図42)でも確認されている。陈良伟・王书林らは、唐宣政殿・武成殿／北宋文明殿の遺構と考えているが(陳良伟2016・王书林2020)(図64左)、いずれにしても北宋期の宮城中枢部の双軸構造・工字形正殿、あるいは宮城・皇城・外郭城の回字形構造などの都城の大きな変革が、唐東都洛陽城・北宋西京洛陽城を媒介として生まれた点を想定している点が特筆できる。その場合でも、北宋西京洛陽城の宮城中心で、武則天明堂の北側に位置する太極殿(図29上左)、および西軸の天堂の南西側に位置する文明殿が、大きな変革期の中心にある点が重要である。中国都城正殿はあくまでも前殿から続く太極殿の系譜であり、その存在が武則天明堂・天堂で生み出された双軸構造と融合する形で北宋期の新しいスタイルへと変革している点が読み取れる。唐代第三の正殿である明堂は、建造物としての直接的な系譜では後世に繋がらないものの、北宋以降の中枢部において新しい形の双軸構造を生み出す重要な契機となったのである。一方、唐代第二の正殿である含元殿は、中央を隔絶する殿門融合式の闕式主殿自体が継承されることなく、元上都の穆清閣とされる宮城北壁主殿(図46下)など、復古的な様式としてのみ残存することになる。

以上、北宋期における宮城中枢部の双軸制の成立、南面中央に階段を持つ工字形正殿の出現が、曹魏明帝の太極殿登場に次ぐ大きな画期となっていることがわかる。北宋は、唐東都洛陽城・北宋西京洛陽城を媒介として、唐の都城制を継承し、新たなスタイルを創出したのである。北宋の都城制は、同時代の遼中京(図43下)などに影響を与え、南宋を滅ぼした金へと継承されていくことになる。発掘はされていないものの、金中都の大安殿・仁政閣の南北構造(図45)は、北宋期の双軸構造が南北に転換したものと考えられ、元大都の大明殿建築群・延春閣建築群へと継承される(傅熹年1993)(図48)。この時期の正殿遺構の発掘事例としては、元武宗カイシャンが1308年に造営した元中都の1号宮殿(図47右)が知られている。北宋期では、主殿と後闇が幅の狭い柱廊によって結ばれる形式だったが、柱廊部分が大型化し、前殿と寢殿(後方香閣・東西挟室)を結ぶ一体化した建造物へと発展している点が読み取れる。一方、元は上都の正殿:大安閣として、樓閣建築である北宋東京開封城・金南京開封城の熙春閣を移築したとされ(冯恩学2008・久保田2019など)、同じく中原の宮城正殿の復古的な様式として唐長安城大明宮含元殿を模倣した北壁闕式主殿(穆清閣)を採用した可能性も考えられる。しかし、前殿・太極殿の系譜を継承する金中都大安殿・元大都大明殿の系譜は、着実に明清都城へと継承され、清紫禁城の三台(太和殿・中和殿・保和殿)(図49)へと結実する。すなわち、北宋の双軸構造は、金中都において南北構造へと変化したが、明清期に至って内廷・外朝構造へと定式化し、工字形正殿も巨大な工字形基壇の上に三殿が並び立つ構造へと変化したのである。建造物としての正殿の発展過程からすると、明清期の三台の成立が北宋期に続く画期といえる。

ここまで、秦～清までの正殿の変容過程を、遺構の構造を中心に整理してきた。図63にその変遷過程を示し、表3に要素を整理したが、中国都城の中枢正殿には大きく4つの段階が認められる。秦・前漢・後漢の前殿、魏晋南北朝～唐の太極殿、北宋～元の工字形正殿、明清の三台である。各王朝において、この主系列の「派生形」が出現することはあっても、あくまでもその根幹に秦阿房宮で創出された前殿の系譜が一系列的に継承されている点が重要である。中国の歴代王朝で継承される一系列的な正殿こそが、国家的儀礼を

通じて皇帝権力を創出する主要な装置であったことがわかる。以上の中国都城中枢部における正殿の系統論を踏まえなければ、魏晋南北朝～唐代に東アジア各国に伝播した都城の本質を見極めることは難しい。4-1での整理を踏まえて、次には高句麗・渤海・日本との比較へと議論を進めたい。

4-2 高句麗・渤海都城における正殿の構造とその特色

(1) 渤海都城の正殿

中原・草原都城における正殿の遺構変遷を踏まえた上で、高句麗・渤海都城の正殿の構造とその特色について整理してみたい。まずは、年代的には逆になるが、渤海都城について言及する。

渤海都城については、上京城が宮城・皇城・外郭城を完備しており、唐長安城の強い影響を受けた都城とされている。前稿では、唐長安城・渤海上京城の中軸上の正門・建造物を比較する図版を作成(城倉 2021 p. 174 図 45)して、その特徴を整理した。渤海上京城は、宮城の正南門・正北門で類例の非常に少ない「二門道」を採用しており、1・2・3号宮殿も唐長安城太極殿・大明宮含元殿などと同じで基壇南面に東西階段を持つ「中心を隔絶する」構造である点を指摘した。図 65 左にあるように、渤海上京城の中軸上の建造物は、1・3号宮殿など、南面の東西階段が建造物の両端間部分に取り付く構造(2号宮殿は中央から東西に向かって各 4 間目)となっており、唐長安城大明宮含元殿の龍尾道の強い影響が認められる(王 2008a・今井 2012・魏存成 2016 など)。唐宮城における三朝との対応関係については諸説あるものの(表 2)、劉大平らの整理によれば、大きさは宮城正門前を外朝とするか、宮城正門～1号宮殿までを外朝とするか、の 2 説に集約することができ、前者は太極宮、後者は大明宮を模倣対象と考えるため立場が異なる(劉大平・孙志敏 2018 p. 104)。劉大平らは現在までの議論を踏まえて後者の説を採用しているが、前稿(城倉 2021 p. 174 図 45)で議論した中軸上の建造物が中心の隔絶性を反復明示する構造的な特色を考えても、やはり大明宮含元殿の影響を強く受けた可能性が高いと判断する。特に、魏存成が整理した宮城正門～1号宮殿の閉鎖空間が大明宮における丹鳳門～含元殿の外朝空間に該当するという説(魏存成 2016)は、後述する日本の平城宮中央区太極殿院という閉鎖空間を考える上でも示唆的な指摘である。

以上、渤海上京城では、宮城正門と左右廊廡によって囲繞された規模の大きな閉鎖空間を前庭として持つ1号宮殿が国家的な儀礼空間、すなわち正殿である可能性が高いと思われる。その空間は、承天門前を外朝空間とする太極宮ではなく、明らかに大明宮含元殿の強い影響を受けている。一方、渤海都城の基本構造として注目されるのが、上京城3・4号宮殿である。2基のオンドルが設置された東西2室構造の主殿に左右配殿が附属する渤海王の居住空間(4号宮殿)と、廊道によって南側に位置する日常の政務空間(3号宮殿)が連接される「工字形」に近い構造を呈し、劉大平らは中原の「前朝後寝」制度の模倣と位置付ける(劉大平・孙志敏 2018 p. 70)。ここでは、この工字形の南北宮殿部分を渤海都城の「基本構造」と呼称しておく。この基本構造は、西古城1・2号宮殿、八連城1・2号宮殿と一致しており(図 65 中)、上京城には、その南側に1・2号宮殿が附加されたことがわかる。つまり、西古城・八連城では、1号宮殿が日常政務の空間であると同時に、国家的な儀礼空間として正殿の役割果たした可能性が高く、上京城ではその更に南側に2つの閉鎖空間が附加された構造を呈することになる。

このように見てくると、渤海都城において中原都城、特に唐長安城・洛陽城におけるすべての要素(宮城・皇城・外郭城の三重圓構造)を完備するのは上京城のみで、西古城・八連城で見られた工字形の基本構造の南側に、大明宮を意識した1・2号宮殿の閉鎖空間が配置されたことが分かる。渤海都城に見られる「基本構造+含元殿模倣空間」という空間構成については、後述する日本都城でも共通した現象、すなわち(平城宮)=(東区:藤原宮の基本構造)+(中央区太極殿院:含元殿模倣空間)+(中央区朝堂院:麟德殿模倣空間)が認められる点は重要である。いずれにしても、渤海上京城の南北に3つの空間(宮城正門～1号宮殿/2号宮殿/3・4号宮殿)が配置される構造は、唐長安城大明宮の丹鳳門～含元殿、宣政殿、紫宸殿の空間配置を強く意識している可能性が極めて高い。一方、廊廡によって閉鎖的空間を構成する方式、あるいは工字形を呈する後寝空間などは、高句麗安鶴宮とも共通しており、その系譜を引く可能性が高い点も注意しておく必要がある。

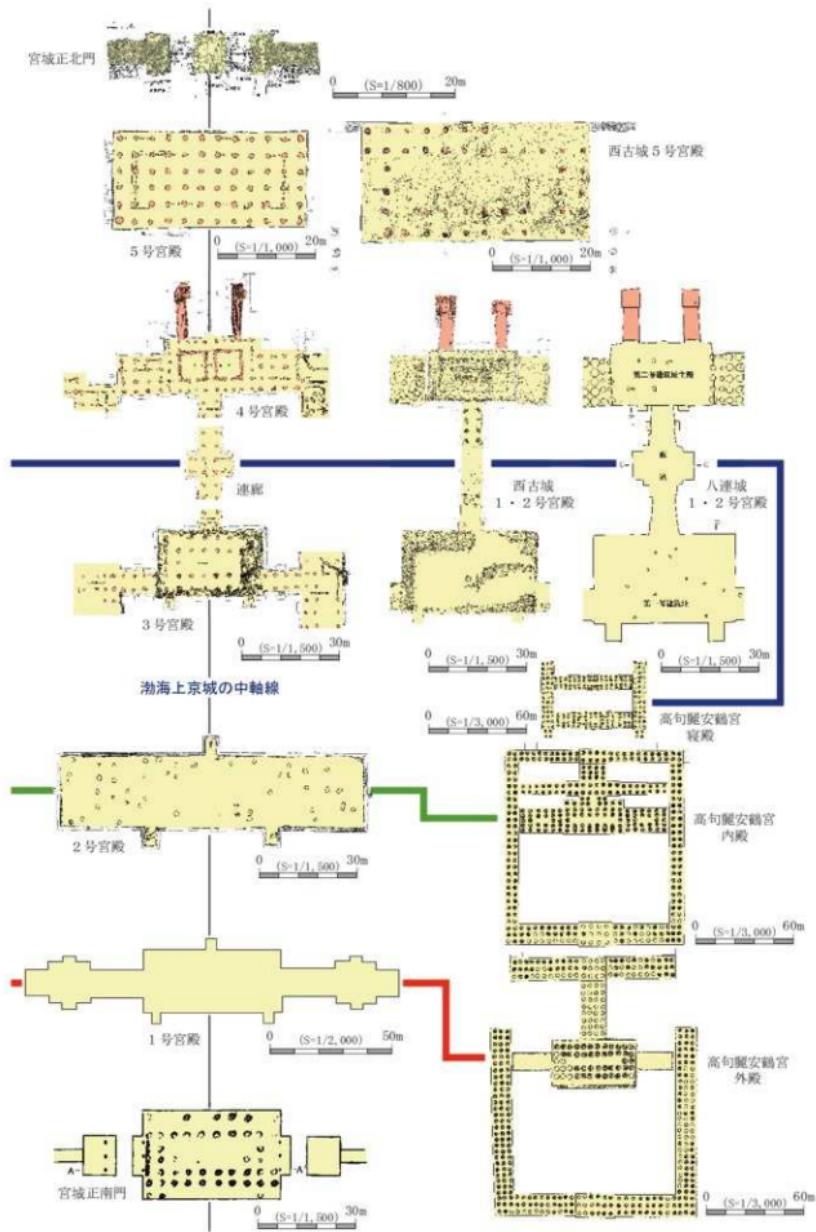


図 65 高句麗・渤海都城における正殿・寝殿の構造

(2) 高句麗・渤海都城の共通性と後寝の系譜

渤海都城では、工字形を呈する基本構造（上京城の3・4号宮殿／西古城・八連城の1・2号宮殿）が存在し、上京城では大明宮含元殿を模倣した空間がその南側に配置された点を整理した。注目すべきは、後期高句麗の安鶴宮でも、外殿・内殿・寢殿の3つの空間が南北に並ぶ構造（図50）が認められる点である。特にコの字形の廊廊により、閉鎖空間を作り出す方式は渤海都城へ継承された可能性が高い。近年は、外殿1号宮殿（南宮正殿）を中原都城の正殿の影響を受けた建造物と考える説（ヤン・ジョンソク 2012・張明皓 2019 pp. 103-108など）もある。確かに、安鶴宮外殿1号宮殿の桁行11間・梁行4間の建物規模は、渤海海上京城1号宮殿と一致しており、桁行11間を最高格式の正殿として認識していた可能性がある（図65下）。また、渤海海上京城の2号宮殿は、報告書で桁行19間・梁行4間の特殊な大型建造物（図51下）と想定されているが、高句麗安鶴宮の内殿1号宮殿（図50左下）の東西に配殿（桁行5間・梁行4間）が取り付く主殿（桁行7間・梁行5間）を1つの基壇上で表現したと考えれば、その系譜を説明できる可能性がある（図65中）。

なお、前述した渤海海上京城の後寝（3・4号宮殿）部分、すなわち、渤海都城の基本構造に関しては、高句麗安鶴宮の寢殿など南北二殿構造（図50右上）に対応することになるが、唐代の長安城・洛陽城でいわゆる内朝にあたる部分が発掘された例はなく、具体的な構造の系譜に関しては不明な部分が多かった。しかし、近年に発掘調査され、2023年に概報が刊行された東魏北齊都城の206・209大殿の成果は、高句麗・渤海都城における後寝（王の居住空間と日常政務の空間）の系譜を考える上で、重要な成果だった（報告：中国社会科学院考古研究所等 2023）。以下、この点について言及する。

図66左に示したように、東魏北齊都城の宮城南側では、太極殿と東西堂、およびその北側に位置する昭陽殿が前朝部分に該当し、その主軸北側に位置する206・209大殿（図37②上）が後寝に該当する。南北に並ぶ両大殿は、東西に存在する南北の連房、および両殿の間にある東西方向の複廊を通じて相互に接続されている（図66中）。図66右で示した渤海海上京城3・4号宮殿のように十字廊廊によって南北殿が直接繋がっているわけではないものの、その共通性から渤海の基本構造の系譜が中原都城の後寝部分にある点は十分に想定できる。東魏北齊都城の後寝部分の構造が、隋唐期にどのように継承されたのか、中原地域の発掘事例

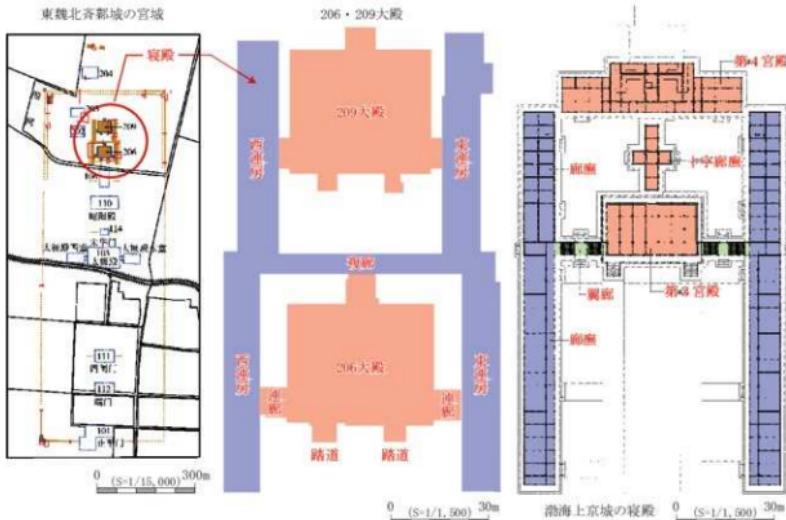


図66 東魏北齊都城の後寝（206・209 大殿）と渤海海上京城の後寝（3・4号宮殿）の比較

がないため不明だが、同様の構造が後述する日本都城の前期難波宮（内裏後殿 SB1603／前殿 SB1801）などにも認められる点（図 54 左）は重要である。渤海を廻る時期の高句麗安鶴宮の寝殿 1・2 号宮殿（図 50 上右）も、東魏北齊鄆城 206・209 大殿とよく似た平面形状を呈する。高句麗安鶴宮の年代に関しては、土器を検討した王峰が、6 世紀後半～高句麗滅亡の 688 年と想定しており（王峰 2015）、南北朝～隋唐の影響を受けて成立している可能性が高い。すなわち、渤海海上京城の基本構造も高句麗の系譜を引きつつ、唐長安城・洛陽城における宮城北側の後寝部分の影響を受けて成立した可能性が高いと考える。現状では、唐長安城・洛陽城の宮城建築で同様の形式は発掘調査では確認されていないが、日本前期難波宮・渤海海上京城（西古城・八連城）が南北朝期の宮城構造の系譜を引いてそれぞれ独自な形式を生み出したと考えるよりは、同時期の中華都城の宮城構造（特に長安城太極宮）に何らかのモデルが存在した可能性を想定するのが妥当ではないかと考える。以上、上京城・西古城・八連城で共通する基本構造が、太極殿を中心とする東魏北齊鄆城の宮城、その後寝部分と高い共通性が見られる現象からすると、この基本構造こそが唐長安城太極宮の要素を模倣したものであり、上京城においてのみ大明宮の要素が前面に付加されたと考えることも出来る。このように考えると、渤海都城と日本都城の発展過程における共通性を見出すことができると言える。

（3）渤海海上京城の饗宴施設－5号宮殿の役割－

ところで、他にも渤海都城の宮城建築の注目される要素として、上京城 5 号宮殿（図 51 上右）、西古城 5 号宮殿（図 52 上右）が挙げられる。5 号宮殿は宮城最北部に単独で存在する大型宮殿で、桁行 11 間・梁行 5 間、上京城では「満堂柱建築（総柱建物）」、西古城では「斗底槽形建築（四面廂建物）」である。上京城の報告書では、総柱構造である点から二層の樓閣建築とされ、宮城北側を警戒する機能を持った点が想定されている（報告：黒龍江省考古研究所 2009 p. 486）。しかし、宮城内で全く同じ位置・規模・構造の基壇を持つ西古城では、内部が減柱される通常の宮殿建築であり、建築様式が異なっていても両者は同一の機能を持つ宮殿と想定できる。劉大平らは、上京城 5 号宮殿に関して、「満堂柱建築」すなわち総柱建築の形式が、唐大明宮麟德殿、新羅期雁鴨池の臨海殿、朝鮮期景福宮の会慶殿などと共に通する点を指摘し、賓客をもてなす饗宴空間として重層の樓閣を復原した（劉太平・孫志敏 2018 pp. 182-188）。西古城は、柱配置から樓閣建築ではないと思われるが、その機能はやはり饗宴施設の可能性が高い。

なお、渤海海上京城の主軸上の門構造を検討した前稿でも、宮城正南門・正北門（黒龍江省文物考古研究所 1985・2015）で中央を隔離する意識が明示されており、5 号宮殿は北側からのアプローチの際に中心の隔離性が表現された点を指摘し、防御などの機能ではなく、その位置からも大明宮麟德殿と共に通する機能を想定した（城倉 2021 pp. 174-175）。以上、渤海海上京城では 1（2）号宮殿で含元殿、5 号宮殿で麟德殿など、唐長安城大明宮の強い影響が認められる点が重要である。この点は日本平城宮中央区で認められる要素と共に通しており、東アジア世界の中で運動する現象と考えるが、4-4 部分で論点を更に深めてみたい。

4-3 日本都城における正殿の構造とその特色

（1）大極殿の系統と発展

日本都城の正殿である大極殿の分類に関しては、研究史でまとめたように鬼頭・吉田・積山が分類案を提示している（鬼頭 1978・2000、吉田 2006、積山 2013）。積山が内裏正殿（前殿）から成立した大極殿が朝堂院との結びつきを強める方向性から 6 分類してたのに対して、鬼頭は中國都城の正殿との比較から前期難波宮型、平城宮第一次大極殿型、藤原宮大極殿型の 3 分類（図 9）を示した。なお、天皇の出御方法も踏まえて、大極殿を後殿との関係性から分類した吉田もほぼ同じ分類を示している。本論では、中国正殿との比較から分類を行った鬼頭の研究を踏襲するが、前節までの中国正殿の大きな流れを踏まえるならば、正殿の発展史上の根幹にあるのは常に太極殿であり、唐代の一時期のみ含元殿が内外に強い影響力を持った点を前提に分類を行う必要がある。4-2 の渤海でも魏晉南北朝の太極殿を継承する唐長安城太極宮の影響を受けた基本構造に、上京城において宮城前面に大明宮の要素が附加されたと把握したが、日本でも同じ現象が存在すると考える。そのため、鬼頭の分類を継承し「太極殿型大極殿」（図 67 青系統）、「含元殿型大極殿」（図 67 赤系統）を設定する。中国における正殿の変遷の中心には常に前殿・太極殿の系譜があり、唐代の一時

唐長安城太極宮の影響

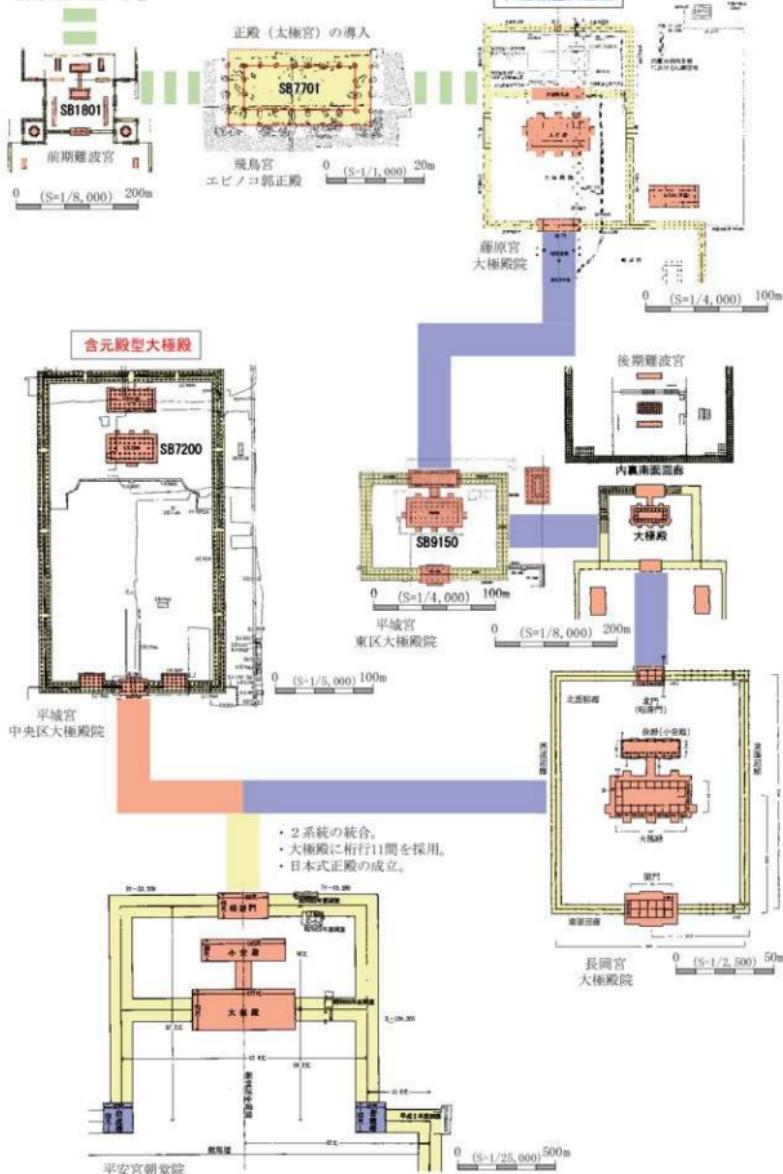


図 67 日本都城における正殿：大極殿の系統と変遷

期のみ太極殿・含元殿・明堂が併存した特殊な時期が存在した点は明らかなので、特殊な発展を遂げた明堂(本来は礼制建築)を除く太極殿・含元殿を対置的に把握することで、唐・渤海・日本の都城を同一の基準で比較できると考える。すなわち、太極殿・含元殿型の二分類による分析は、東アジア都域を比較するための技術的な「系統把握」であり、必要であれば細部の構造で類型を細分して段階を設定するのが現実的だと考える。ただし、都城の歴史的性質上、新たな正殿の造営はすべからく画期であり、その年代が確定できる以上、細かい段階設定をする意義については疑問も残る。

以上の前提を踏まえて、図67を基に日本都城における太極殿の発展過程を整理しておく。まず、前期難波宮が唐長安城太極宮を模倣している点は、中尾・積山・村元が整理した通り(中尾1995a・積山2013a・村元2022)で、太極宮の逆凸字形構造が反映されていると考える積山(図1上)の見解に基づけば、内裏後殿(SB1603)と前殿(SB1801)が軒廊で連接される状況は、魏晋南北朝へ唐の影響を受けた高句麗安鶴宮・渤海海上京城の後寝構造と同様の位置付けが可能である。すなわち、唐長安城太極宮が発掘されていないため詳細は不明だが、魏晋南北朝の宮城における太極殿北側の後寝構造(皇帝の居住空間と日常政務の空間が連房・複廊を介して結ばれる構造)が、何らかの形で唐長安城太極宮に継承されており、それゆえに高句麗・渤海・日本などで共通した構造が現出した可能性が高い。一方、日本における単独正殿の成立は、やはり、飛鳥宮エビノコ郭正殿(SB7701)が画期と思われる(重見2023)、藤原宮大極殿院は前期難波宮の平面配置を基本として設計された(図1下)ものの、太極殿としての系譜はエビノコ郭正殿を継承し、初めての太極殿型太極殿である藤原宮大極殿が成立したとみることができる。なお、前期難波宮内裏前殿SB1801・エビノコ郭正殿SB7701は、梁行3間の四面廂建物だが、山本忠尚は「梁間3間庇付建物」を7世紀の正殿、8世紀以降の天皇の内裏・御在所正殿と位置付けた上で、藤原宮大極殿以降の画期を指摘しており(山本尚2004)、非常に示唆的である。前期難波宮と飛鳥宮内郭・エビノコ郭との関係性は、今後、更なる議論が期待されるが、いずれにしても両者の構造的融合が藤原宮大極殿の成立に繋がった点は明らかである。

日本における太極殿型太極殿の特徴は、単独の院落を構成し、その後方に回廊と接続する後殿を配置する(後に回廊から独立する)点にある。中国都城の後寝構造に由来する特徴を持つ前期難波宮中枢部(内裏前殿・後殿)だけでなく、エビノコ郭正殿の系譜を考えなければ成立し得ない特徴である。また、大極殿門を介して12朝堂(前期難波宮は14朝堂/後期難波宮・長岡宮は8朝堂)と連接する日本都城の「基本構造」が藤原宮で完成している点も重要である。すなわち、前期難波宮で導入されたのは太極宮の基本構造ではあったが、それは魏晋南北朝の宮城構造を継承する後寝部分であり、前朝にあたる太極殿の構造はエビノコ郭正殿で初めて導入されたと考える。前期難波宮の宮城構造を基本としながら、エビノコ郭正殿の構造を導入して、両者を融合させた藤原宮大極殿院こそが日本最初の中国式都城であり、その成立の背景に中国都城の発展過程の中心に位置する唐長安城太極宮(太極殿)が強い影響を与えた点を想定しておく。

藤原宮で確立した太極殿型太極殿の基本構造は、以後の日本都城で継承していくことになるが、大宝の遣唐使(王仲殊2000・妹尾2006b・井上2008・金子2009など)が持ち帰った情報により、大明宮の情報が日本都城において新たに「付加」されることになる。すなわち、平城宮中央区大極殿院・朝堂院である。平城宮中央区大極殿院が大明宮含元殿の影響を強く受けている点は、多くの研究者によって指摘してきた(狩野1975・鬼頭1978・浅野1990など)。福田・浅川は、大宝遣唐使がもたらした情報に基づく平城宮の造営に関して、「朱雀門正面にあった從來の大極殿・朝堂院地区は壬生門の正面に追いやられ、朱雀門の正面には含元殿を意識した第一次大極殿院がなかば強引に割り込んできた」(福田・浅川2002 p.47)と表現したが、まさに的確に平城宮の造営理念を表現するものと考える。藤原宮で成立した日本都城の基本構造(太極殿型太極殿)は、平城宮では東側にスライドされ(城倉2021 p.185)、南北の長大な閉鎖空間、および龍尾道を基本とする含元殿型太極殿が中央に配置されたのである(図67中左)。

以上のように、日本都城では藤原宮で成立した太極殿型太極殿が中心的類型として継承されるものの、平城宮中央区においてのみ含元殿型太極殿が「付加」される点に特色がある。この点は、中国の中原都城においても前殿・太極殿の系譜が中心になり、唐代の限られた期間にのみ含元殿が現れる状況と一致する。また、渤海都城における太極宮系統と思われる基本構造に、上京城で1・5号宮殿など大明宮(含元殿・麟德殿)

の影響が「付加」される点も共通する。すなわち、構造的な観点から巨視的に東アジア都城を見渡すと、唐・渤海・日本都城の正殿の変遷は明らかに連動していると思われるのである。

このように日本都城では、藤原宮で成立した太極殿型大極殿と平城宮中央区で「付加」された含元殿型大極殿の2系統が存在していたが、奈良時代後半の平城宮東区で両者は集約され、平安宮に至って完全に統合されていく。平安宮朝堂院では、長岡宮までの工字形の大極殿の南側に位置する閑門が消失する形で龍尾道(壇)が設けられ、桁行11間の大極殿が成立するなど、両系統の融合によって日本独自の様式が成立した点が読み取れる。以上の視点で日本都城の画期を考えるとすれば、太極殿型大極殿が成立した藤原宮、そして日本独自の大極殿が成立した平安宮、大きく2つ転換点を見出すことが可能である。

(2) 儀礼的宮城正門と朝堂

日本都城の大極殿に太極殿模倣、含元殿模倣の2型式が存在する点を指摘した鬼頭清明の先駆的研究(鬼頭 1978・2000)、および先学の優れた研究を整理した上で、最新の中原都城・渤海都城の発掘成果を踏まえて、日本都城における正殿の系統と変遷を整理した。膨大な発掘資料と分析が蓄積されてきた都城研究という性質上、屋上屋を架す作業にならざるを得ない部分もあるが、現段階における調査研究の成果を総括する形で、遺構を中心に東アジアレベルで国際的に比較する作業は重要だと考える。ここまで日本都城の正殿の発展を整理したため、次には、いくつかの論点に絞って更に考察を深めていきたい。

まずは、前稿(城倉 2021)で整理した儀礼的宮城正門、そして日本都城の朝堂について議論する。日本都城では前期難波宮で初めて出現する朝堂(14朝堂)は、内裏南門SB3301の前面に位置する(図54左)。前期難波宮が唐長安城太極宮を模倣した点は研究史上で指摘されてきたが、内裏南門が太極宮正門である承天門を意識した点は中尾芳治・佐竹昭の研究(中尾 2014・佐竹 1988)でも明らかになっている。前稿では唐長安城・洛陽城の宮城正門を志向した日本都城の門を「儀礼的宮城正門」と呼称し、内裏南門一大極殿院南門一朝堂院南門一朝集院南門と徐々に南下する点を指摘した(表4)(城倉 2021)。前期難波宮内裏南門SB3301は、発掘で確認された最初の儀礼的宮城正門である。その東西において門と回廊で接続する東西八角殿は闕(閣)に相当する樓閣施設と考える。長安城太極宮正門の承天門も左右に闕を有する(罗瑾歆 2019)が、その前面左右には東西朝堂が位置する。承天門の機能を継承した大明宮含元殿前の東西朝堂(図39②上)も、同じ位置である。日本の朝堂は小畠田宮の「庭」と「序」から発達したと考える説(岸 1975など)もあるが、前期難波宮が太極宮の模倣であるとするならば、儀礼的宮城正門の内裏南門SB3301前面にある朝堂、中でも最北に位置する東西の第一堂は、唐長安城の朝堂を強く意識した空間配置の可能性が高い。東西第一堂を唐都城の朝堂に由来すると位置付ける視点は、日本朝堂を中国都城と比較して位置付けた秋山日出雄が古くに指摘しており(秋山 1981)、中尾芳治も前期難波宮の第一堂が本来の朝堂であり、第二堂以下が日常政務の「序」に該当すると指している(中尾 1995a)。なお、前期難波宮・藤原宮・平城宮東区下層の朝堂において第一堂が別格であり、平城宮東区上層・長岡宮・平安宮と朝堂全体が均質化する点は橋本義則・寺崎保広が整理しており(橋本 1986・寺崎 2006b)、第一堂こそが中国朝堂を模倣した本来的な朝堂である可能性は極めて高い。奈良時代後半における平城宮東区の上層朝堂の均質化と儀礼的宮城正門の南下は連動する現象であり、前期難波宮・藤原宮・平城宮下層段階で強く意識されていた「宮城正門」と「朝堂(東西第一堂)」との関係性が崩れしていく過程を示すものと考える。

以上、図68で示したように、唐都城の宮城正門前の東西朝堂は、前期難波宮・藤原宮段階では内裏南門、平城宮東区下層段階では大極殿院南門という儀礼的宮城正門前の第一堂に表現されていると思われる。第二堂以下は、必然的に佐藤武敏が指摘したように外朝・皇城を加えた空間(佐藤 1977)ということになる。なお、近年、中尾芳治は第一堂を本来の朝堂と見る説を撤回し、前期難波宮前殿東西の南北長殿(西SB1101／東SB1001)(図1上)を東西朝堂とし、朝堂院全体を皇城空間と捉えているが(中尾 2014)、同様の視点に立つ文献史研究者も多い(山元 2010・市 2020など)。しかし、日本都城における儀礼的宮城正門の空間配置を考えれば、第一堂が本来的な朝堂であり、第二堂以下が皇城に該当する可能性が高いと考える。この点は藤原宮段階の幢旗列(天皇と臣下の境界)が大極殿院南門前に置かれていたのに対して、平城宮東区大極殿院では南門の北側に移動していく(図10)現象とも連動すると考える。つまり、儀礼的宮城正門と本来の

表4 日本古代都城における「儀礼的宮城正門」と「空間的皇城正門」

都城門(規模)		前期難波宮	藤原京	平城京		長岡京	平安京	
				中央区	東区(上層)		紫宸院	朝堂院
内裏南門	造営番号	SB3301	—	—	SB3700	—	—	承明門
	構造	西様 東様SB37541			西様 東様SB3600	—		—
	桁行(尺×間数)	7(16×7)			1(7)	5(13×5)?		?
	梁行(尺×間数)	2(21×2)			2(7)	2(14×2)?		?
	基準規模(m)	?			?	?		?
大極殿南門	造営番号	SB16700	—	SB7801	SB1200	SB38450	—	—
	構造	西様 東様SB3530		西様SB18300 東様SB7802	西様 東様SB7700	—		
	桁行(尺×間数)	7(17×7)		5(?)	5(15×5)	5(15×5)		
	梁行(尺×間数)	2(17×2)		2(7)	2(15×2)	2(15×2)		
	基準規模(m)	40.1×14.4		27.8×16.2	26.1×13.8	?		
朝堂院南門	造営番号	SB4501	—	SB9200	SB17000	SB40900	廣寛門	会昌門
	構造・開	—		—	西面殿SB17060 東面殿SB17050	西面殿SB44404 東面	—	—
	桁行(尺×間数)	5(15×5)		5(?)	5(10+15×3+10)	5(10+15×3+10)?	5(?)	5(?)
	梁行(尺×間数)	2(15×2)		2(?)	2(15×2)	2(12×2)	2(?)	2(?)
	基準規模(m)	?		?	26.0×16.0	22.3×10.7	?	?
新集院南門	造営番号	—	—	—	SB18409	—	紫宸門	応天門
	構造				—		—	権貴殿構風櫻
	桁行(尺×間数)				?		5(?)	5(?)
	梁行(尺×間数)				?		2(?)	2(?)
	基準規模(m)				26.4×13.2		?	?
宮正門	造営番号	朱雀門SB591	—	朱雀門SB500	朱雀門SB1800	壬生門SB9500	—	朱雀門
	桁行(尺×間数)	5(16×5)		5(17×10)	5(17×10)	5(?)		7(?)
	梁行(尺×間数)	2(15×5)		2(17×2)	2(17×2)	2(?)		2(?)
	基準規模(m)	?		?	31.9×16.6	28.8×14.0		?
	造営番号	—	—	—	難城門SB700	—	難城門	難城門
	桁行(尺×間数)				7(17×7)		7(?)	7(?)
	梁行(尺×間数)				2(17×2)		2(?)	2(?)
	基準規模(m)				41.5×16.4		?	?
京正門	造営番号	—	—	—	—	—	—	—
	桁行(尺×間数)							
	梁行(尺×間数)							
	基準規模(m)							

※緑トーンは、各都城の最大規模を持つ門。黄トーンは、東西櫻・闕など附帯施設を持つ門を示す。

※赤枠は想定される「儀礼的宮城正門」。青枠は想定される「空間的皇城正門」。

※寸は、1尺=0.3m前後の唐大尺を示す。門号は通説に従つて表示すると同時に、発掘された門は各報告書に基づく造営番号で表示した。

朝堂の空間的配置が崩れていくことで、天皇権の象徴である儀礼的宮城正門は南下し、朝堂院は本来の構造から離れて均質化すると同時に、天皇と臣下の境界が大極殿前に再設定されるという変化の方向性が読み取れる。そして、平安宮段階に至り大極殿院南門は意義を失い、正殿である大極殿が朝堂第一堂（延休堂：親王／昌福堂：太政大臣と左右大臣）と龍尾道（壇）を隔てて対置される構造へと発展したのである（図6右）。

一方、含元殿型大極殿を採用した平城宮中央区の4朝堂は、上記の藤原宮で完成した太極殿型大極殿に付随する朝堂とは異なる機能を持った可能性が高い。やはり、儀礼的宮城正門の系譜を引く中央区大極殿院南門SB7801は、天皇が饗宴のために出御する「閨門出御型」の空間（図3）で、その南に位置する4朝堂は麟德殿など唐皇帝の饗宴施設を志向した空間と考える。大明宮正殿である含元殿を中央区大極殿院で表現したとすれば、国家的な儀礼空間とセットになるのは天皇が行う饗宴空間であり、その特別な空間として4朝堂が東区朝堂とは別に設計された可能性が高い。後述するように、都城中枢部の正殿を中心とした儀礼空間は構造的な共通性をもって東アジアに展開したのに対しても、饗宴空間は渤海都城の5号宮殿のように各国の特色を持って展開した点に歴史性が見いだせる。これは唐玄宗皇帝が造営した興慶宮の勤政務本樓とセットになる花萼相輝楼も非常に特徴的な独自の饗宴空間である点とも符合する。平城宮では東区の実務空間としての12朝堂に対して、中央区の4朝堂は国家的な儀礼空間、特に饗宴儀礼の場として設計された可能性が

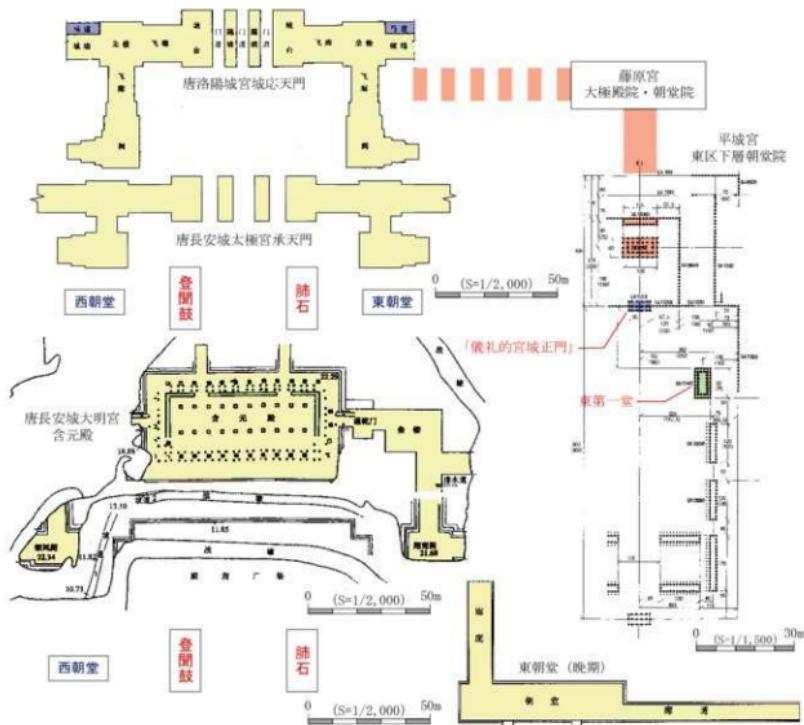


図 68 唐長安城太極宮・大明宮の朝堂と日本都城の朝堂（第一堂）

高く、その構造は平安宮豊楽院の承觀堂・顯陽堂・明義堂・觀徳堂の4堂（図6左）へと継承される（橋本1986）である。福田美徳・浅川滋男は建築史学の立場から、平城宮中央区が大明宮の模倣であり、奈良時代後半の西宮に麟徳殿の影響が見られるると指摘（福田・浅川2002）し、王仲殊も中央区西宮・平安宮豊楽院のモデルを麟徳殿と考えた（王仲殊2001b）が、中央区4朝堂こそが日本的に「解釈」された麟徳殿由来の饗宴空間だったと考える。平城宮中央区大極殿院で採用された含元殿型大極殿・大極殿院南門での「間門出御型」儀礼・平安宮豊楽院4堂への系譜的展開を踏まえれば、当然導き出されるべき結論である。

（3）前期難波宮の八角殿院と藤原宮以降の楼閣建築

日本都城における太極殿・含元殿の影響に関しては既に整理したが、八角形の巨大な基壇を持つ武則天明堂に関しては、周辺諸国へのどのような影響が考えられるだろうか。前述したように、武則天明堂は中国においても直接的な建造物として後の時代の正殿に影響を与えることはなかったが、天堂・明堂の空間配置は北宋宮城の新たな双軸構造を生み出し、後の時代に大きな影響を与えた。例えば、平城宮造営の直接の契機とされる大宝遣唐使が深く関わった武則天が造営した明堂は、日本に影響を与えたのだろうか。

中国都城の歴史上、礼制建築である明堂が宮城中枢正殿となつた事例、あるいは巨大な仏殿（天堂）が中枢部に建造された事例も武則天期のみである。日本都城の宮城中枢部で八角形の建造物としては、前期難波宮の内裏南門東西に位置する八角殿院（西SB4201／東SB875401）がある。唐代における八角形の建造物は、武則天明堂や九洲池八角亭（傅熹年主编2009 p. 395・韓建华2018など）など非常に類例が少ない。東

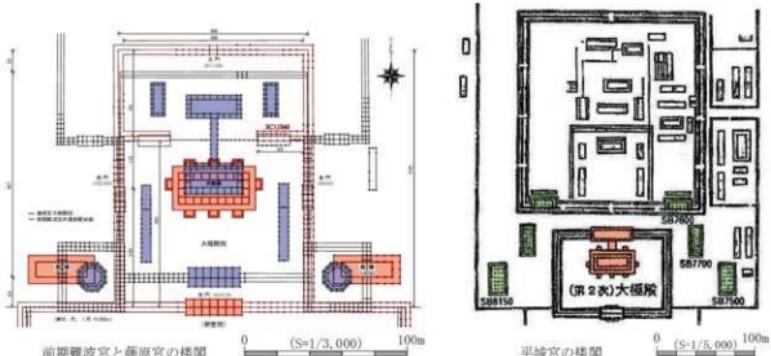


図 69 前期難波宮八角殿と樓閣建築の展開

アジアでは高句麗・新羅・日本の山城や寺院に類例が多く（李 2014）、高句麗丸都山城（吉林省文物考古研究所等 2004）の事例が最も古いとされる。丸都山城の宮城部分に存在する八角形の 2・3 号建築に関しては、王飞峰が慕容皝の攻撃（342）から平壌遷都（427）までの時期と位置付け、河西回廊に展開した仏塔が中原を経ずに直接伝播したと指摘した（王飞峰 2014）。前期難波宮の八角殿に関しても、仏殿と考える説が根強い（古市 2004 など）。しかし、前期難波宮の模倣対象である唐長安城太極宮では八角形の建造物は知られておらず、中原都城中枢部で存在するのは洛陽の武則天明堂（688-738）のみである。武則天明堂の八角形に関しては、漢～南北朝の明堂が「天圓地方」を表現する上円下方を基本とし、文献史料上の武則天明堂も上円下方とされるため、発掘当初は仏殿である天堂と考える説があった（辛徳勇 1989 など）。実際に発掘によって明堂・天堂の遺構（両者の中心坑はいずれも八角形）の比定が確定してからも、明堂の仏教的側面を強調する視点も根強い（王貴祥 2011 など）。しかし、金子修一が明堂の正殿としての機能を強調した（金子 2001a）ように、礼制建築としての儀禮的側面、あるいは儀礼に認められる仏教的側面があったとしても、武則天明堂は国家的な儀礼空間である宮城正殿として建造された点に歴史的意義が見いだせる。実際に、石自社は、明堂・天枢の八角形、天堂の上円下方形など、いずれも中国古代の宇宙観や哲学思想を表現した武則天の政治性の強い建造物と位置付けている（石自社 2021 p. 98）。すなわち、八角形という平面形をもつて都城中枢部の建造物を直ちに仏教的性格と位置付けることは出来ないと考える。

例えば、7世紀の日本で採用された八角墳に関してても、網干善教は仏教に関連づける通説に疑義を呈し、「八角形の造形（建築）は仏教にもあるのであって仏教のみにあるものではな」く、「その根本の思想は中国における政治、祭儀の儒教思想から出発し、仏教もその影響を受けている」と極めて的確にその歴史性を指摘している（網干 1979 p. 208・225）。和田栄も朝賀・即位儀の際に天皇が出御する八角形の高御座（図 14 下右・図 15）に関して、「天皇による日本全土の支配を象徴する」（和田 1995 p. 185）ものと位置付けており、同様の視点に立つ。以上の視点からすると、前期難波宮の八角殿も必ずしも仏教に関連するものではなく、天皇権力を象徴する建造物と把握できるのではないかだろうか。その際に注目されるのは、やはり、武則天明堂との関連性である。唐睿宗垂拱 3 年（688）に乾元殿跡地に建造された明堂（万象神宮）に対して、650 年前後の造営（市 2014）が想定される前期難波宮の系譜として武則天明堂は全く想定されてこなかった。しかし、唐高宗の永徽 2 年（651）・總章 2 年（669）の明堂方案では、八角形基壇の存在が明記されており（図 26 下左）、前期難波宮の同時代の唐では既に八角形の明堂が構想されていた。また、唐武則天の明堂に関するても、八角形の建造物を想定しない複数の説があるのも事実だが、現在は郭黛姮の八角基壇・八角建物の復原案が有力視されている（洛阳市文物局 2017 p. 24）。なお、最新の調査で確認されている唐の北郊方丘

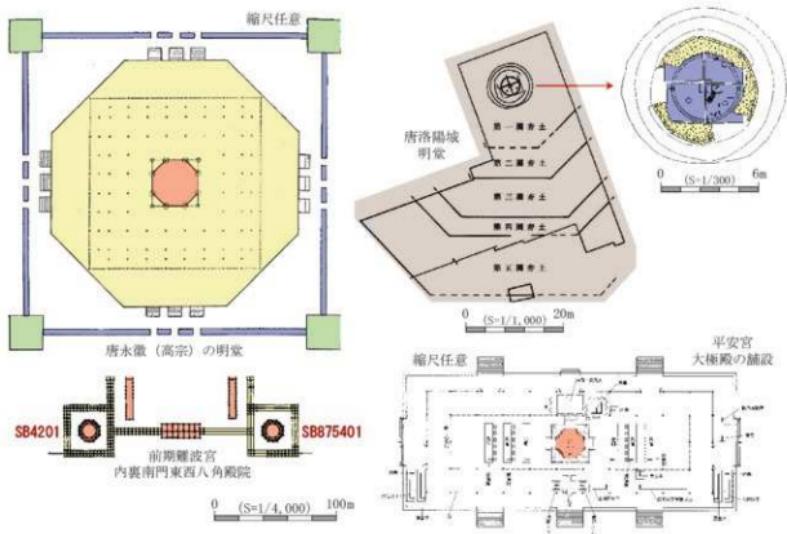


図 70 東アジア都城中枢部に見られる八角形の系譜

も八角基壇の可能性が指摘されており、北周・唐では文献史上も礼制建築の方丘に八角形が採用された点が確認されている（張建林 2023）。すなわち、前期難波宮の八角殿は唐（高宗～武則天期）における最新の礼制建築など、儒教的な思想の影響を受けている可能性がある（図 70）。武則天明堂は直接的に日本都城に影響を与えることはなかったが、唐高宗～武則天期に存在した八角形建物の象徴性が日本に影響を与え、天皇権力の象徴として八角基壇や高御座、あるいは八角墳として展開した可能性を考える必要があるのではないか。もちろん、「八角形」の系譜を一元的に把握する視点への批判もあると思われるが、日本の都城・寺院・墳墓などの多要素に「横断的に」採用された点に意味を見出す視点（網干 1979）も重要だと考える。

以上の視点に基づき、前稿では前期難波宮の東西八角殿を「礼制建築（明堂）の影響を受けた内裏南門を莊厳化する左右楼閣」と位置付けた（城倉 2021 p. 181）。唐長安城・洛陽城の宮城正門（承天門・応天門）を志向した日本都城の儀礼的宮城正門は、いずれも左右に闈、あるいは闕を有する（表 4 赤枠）。前期難波宮の内裏南門は八角殿院を左右楼閣にもつ特殊な事例だが、中尾芳治が指摘するように八角殿院は藤原宮の大極殿院東西楼（東樓 SB530）へと受け継がれる（図 69 左）（中尾 2014）。藤原宮大極殿院東西楼（東樓 SB530）も、平城宮東区大極殿院の東西楼（東樓 SB7700）に系譜的に展開すると思われる（図 69 右）（上野 2010）。前稿では、日本都城中枢部に位置する「楼閣建築」を、I・II・III類に分類したが（城倉 2021 p. 181 図 48）、III類（藤原宮 SB530・平城宮東区 SB7700）は I a (前期難波宮八角殿) から派生したものであり、宮城正門の附帯施設から大極殿院自体の莊厳化へと変化し、平安宮に至って朝堂院・豐樂院に取り込まれ、II類（大極殿白虎樓・蒼龍樓／豊樂院霽景樓・栖霞樓）が成立するのである。前稿では中軸からの距離で I・II・III類を設定したが、系譜的な展開からすると I → III → II が想定できる。すなわち、前期難波宮八角殿から始まった宮城中枢部の楼閣は、儀礼的宮城正門を莊厳化する左右楼閣（I類）として平安宮まで存続しながら、藤原宮・平城宮において大極殿院東西の楼閣（III類）という派生形を生み出し、平安宮に至って朝堂院・豐樂院に取り込まれて回廊屈曲部に位置する楼閣（II類）へと変化したと考えられる。儀礼的宮城正門の左右楼閣・闈である I類を除くと、III・II類の機能は不明な部分が多いものの、構造物の系譜関係を整理した上で、機能的な側面についても議論を深めていく必要があると考える。

(4) 東アジア都城における「後殿」の位置付け

日本都城の内裏前殿・太極殿に関しては、正殿後方に後殿が存在する点が大きな特徴とされる。平安初頭の『内裏儀式』によると、元日朝賀・即位儀の当日、天皇は太極殿と後方の「後房」(小安殿・後殿)の間に軒廊に敷かれた四幅布单上を、冕服を着用して自ら歩き、高御座に着座する(図14上左)。一方、『大廣開元礼』では、皇帝は輿で閑門を出て、太極殿内の西房を経由して御座へ着き、儀式終了後には東房を経由して退殿する(図71中右)(吉田2006)。吉田歎は、正殿と「後房」が別棟である点が日本太極殿の最大の特徴とし、主殿と後閣が「柱廊」で結ばれる北宋以降の「工字形正殿」の出御方式と共に通するが、中国の模倣ではなく日本独自で生み出された形式とする(吉田2006 p.15)。後殿に関する研究史上的議論は少ないが、平城宮学報14では、藤原宮段階の大極殿回廊に開く門から、平城宮で発展し、長岡宮で単独の殿舎となる変化が指摘されている(報告:奈良国立文化財研究所1993)。近年では、藤原宮大極殿の後方に東西回廊と連接する後殿とされる遺構が検出され(図57中)(報告:奈良文化財研究所2023)、前期難波宮→藤原宮→平城宮東区への後殿の系譜が想定されている(図71下)(廣瀬2023)。小澤毅は、藤原宮大極殿の後殿が、平城宮中央区大極殿の後殿へと移建された可能性も指摘している(小澤2023b)。

なお、太極殿・後殿については、吉田歎が分類を行っている。すなわち、①内裏正殿と後殿が結合するもの(前期難波宮)、②後殿が太極殿回廊に取り付くもの(藤原宮・平城宮東区・後期難波宮)、③後殿が回廊から独立するもの(平城宮中央区・長岡宮・平安宮)の3分類である(吉田2006 p.17)。吉田は日本の後殿に関して、北宋を遡る時期の日本独自の形式と考えているが、前述したように渤海都城でも「工字形」の類型が存在しており、注意が必要である。劉大平らは、渤海海上京城3・4号宮殿を「前朝後寝」の形式と位置付け、唐代にはまだ普遍的な存在ではなかったものの、北宋以降に工字形に定式化し、高麗など周辺にも影響を与え、後世の元・明・清へと発展した点を強調した(劉大平・孫志敏2018 p.116-119)。このように、中国・渤海・日本都城の「工字形正殿」の問題は、各國単位で議論されているが、東アジア全体で見ると、明らかにいくつかの異なる系譜の類型が存在しており、それらが峻別されることなく議論されている点が問題だと思われる。そのため、東アジア全体での遺構の構造的な分類作業が必要だと考える。以下、東アジア都城中枢部の正殿・正衙殿・寝殿の連接形式をI~IIIに3分類した上で、細分案も提示する(図71上)。

I類】中原から草原都城へと継承される前殿・太極殿の系譜 太極前殿・東西堂が北側の「昭陽殿」と深く結びつく形式から発展する。北宋以降は、前殿と後閣が柱廊で結びつき、明清都城では巨大な基壇上に三殿が南北に並ぶ構造へと変化する。後閣は、皇帝の待機・更衣・饗宴空間など機能が多様化していく。

(I-A) 魏晋・北魏洛陽城、東魏北齊鄆城の太極殿・東西堂と昭陽殿。太極前殿は単独殿。

(I-B) 北宋西京洛陽城太極殿・東京開封城大慶殿と後閣。正殿・後閣は柱廊で結ばれる工字形。

(I-C) 明清期、紫禁城の太和殿・中和殿・保和殿の三台。巨大な工字形基壇上に三殿が位置する。

II類】宮城北方の後寝建築の系譜 皇帝・王・天皇の居住する大殿と日常政務の大殿を東西に存在する南北連房・廊廻によって連接する、あるいは南北大殿が廊道によって直接接続する。東魏北齊鄆城で確認されているが、唐代都城では未確認。しかし、高句麗・渤海・日本などで同様の形式が認められる。

(II-A) 東魏北齊鄆城の寝殿206・209大殿。両者は直接ではなく、左右の南北連房で接続する。

(II-B) 高句麗安鶴宮の内殿・寝殿。東西の南北方向廊廻により、内殿・寝殿の3つの殿が接続する。

(II-C) 渤海上京城3・4号宮殿・西古城1・2号宮殿・八連城1・2号宮殿。渤海王の居住空間と日常政務の大殿が、左右に存在する南北廊廻によって結びつくと同時に、南北殿が廊道(單廊)によって直接接続する。内裏の後殿・前殿が結びつく前期難波宮は、この類型に該当する。

III類】日本の太極殿と小安殿の系譜 出御の際に天皇が身支度する後房と太極殿が結びつく。唐長安城太極殿の正殿内に存在した西房・東房が、後方において独立する形式。藤原宮から成立するが、II類と同じく回廊と連接される建造物から、徐々に独立した後房へと発展する。

(III-A) 藤原宮大極殿・平城宮中央区大極殿・平城宮東区大極殿・後期難波宮大極殿の後方に位置する後殿。太極殿院の回廊と結びつく形式から、軒廊によって太極殿との結びつきを強める形式へと変化する。

(III-B) 長岡宮大極殿・平安宮大極殿の後殿。回廊からは完全に独立する。

率縮尺は任意。正殿の横幅を統一して提示。



I A (曹魏洛陽城太極殿)



I B (北宋西京洛陽城文明殿)



I C (清紫禁城三台)



II A (東魏北斉都城寝殿)



II B (高句麗安鶴宮寢殿)



II C (渤海海上京城寢殿)



III A (平城宮東区太極殿)



III B (長岡宮太極殿)



唐太極殿内の東房と西房 (吉田2006)

IA—太極殿と後方の昭陽殿。

IB—北宋～元の工字形正殿。

IC—清代の三台（三殿）。

IA—中原の宮城後方に所在する寝殿。

IB—高句麗の寝殿。

IC—渤海の寝殿。

III A—日本の太極殿と回廊に接続する「後殿」。

III B—太極殿と回廊から独立した「後殿」。

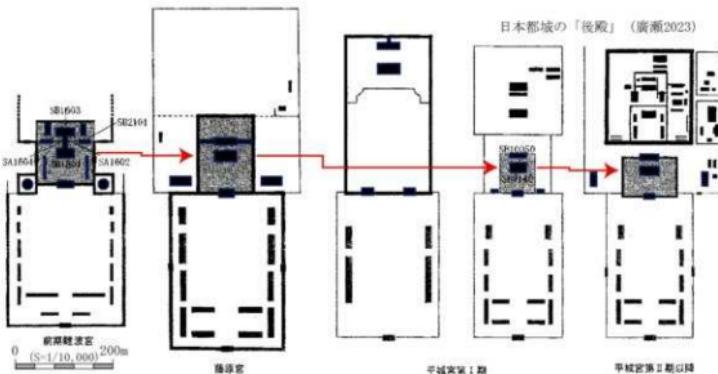


図 71 東アジア都城における「後殿」の分類

以上を踏まえて、東アジア全体の流れを整理する。まず、中原の魏晋南北朝期に太極殿・東西堂と後方の昭陽殿が結びつく（機能的な連接であり、物理的な連結ではない）形式（I A）が成立する。残念ながら唐代の太極殿の様相は不明だが、北宋西京洛陽城の太極殿・東京開封城の大慶殿で正殿と後閣が結びつき、工字形正殿（I B）が成立する。北宋の工字形正殿は、金・元など北方都城に引き継がれ、明清北京城の三台（I C）へと発展する。I 類こそは、前殿・太極殿と後方の殿（後閣）が融合する中枢の類型といえる。

一方、東魏北齊都城など魏晋南北朝の宮城北方における後寝の大殿が日常的な政務空間と結びつく形式（II A）は、高句麗安鹤宮（II B）や渤海海上京城・西古城・八速城（II C）に強い影響を与える。日本の前期難波宮も、新発見の「正殿」との関係性は不明なもの、藤原宮以降の大極殿院のような独立した院落は存在しておらず、内裏前面において「後殿」が最も南の「前殿」と結びついており、構造上は II C 類に該当する。唐長安城・洛陽城の宮城後寝部分が明らかにならないため、系譜関係は不明だが、皇帝・王・天皇の居住空間と日常政務の空間を結びつける II 類の思想は、中原都城にその起源がある可能性が高い。日本の前期難波宮では II C 類が採用されたが、続く藤原宮では、エビノコ郭正殿の系譜を引く単独院落：大極殿（太極殿型大極殿）が創始され、その後方に回廊と接続する後殿が位置する新形式（III A）が生まれた。本来は太極殿内に存在した東西房を独立させた点では日本独自の形式だが、日本の後殿は大極殿を囲繞する回廊に接続しており、系譜上は II C 類から派生した可能性が高い。日本では、平安時代以降、大極殿に対して「小安殿・後殿」と呼ばれる（「小安殿」の史料上の初出は 809 年、以降は「後殿」とも呼称される／[小澤 2023b 註 9](#)）が、中国の I 類、すなわち前殿・太極殿に対する後閣とは全く系譜が異なる点を考慮に入れれば、本来は『儀式』など日本の文献上でも見られる「後房」（吉田 2006 p.2・堀内 2011）と呼ぶべき建造物である。

このように、高句麗・渤海・日本において、中原よりも早く正殿と後閣（後殿）が柱廊によって結びつく I 類の工字形正殿が成立したとは言い難く、東アジアに展開したのは中原都城における宮城後方の後寝建築の影響を受けた形式（II・III 類）である可能性が高い。もちろん、高句麗・渤海・日本など各国が独自性の強い中枢部を造営した点は事実だが、東アジアレベルでの構造的な系譜の検討なくして、各國単位において分類をし、その独自性を強調するだけでは、都城の歴史性を見誤る可能性もある。

4-4 唐代東アジア都城の正殿遺構—規模と構造の比較—

（1）唐・渤海・日本都城の正殿遺構

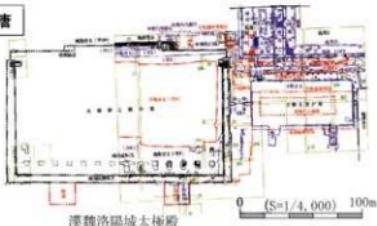
ここまで中原・草原都城、高句麗・渤海都城、日本都城の正殿に関する変遷と論点の整理を行った。4-4 では、時代を絞って、唐・渤海・日本都城の発掘された正殿遺構に関して、規模・構造に着目して比較してみる。[図 72](#) には、元会（元日朝賀）・即位など国家的儀礼の舞台空間となった各国の正殿遺構を示した。

まず、唐長安城太極宮太極殿は、漢代の前殿・魏晋南北朝の太極殿の系譜を引く、まさに中枢の正殿だが、残念ながら遺構の状況は不明である。ここでは、隋大興城大興殿・唐長安城太極殿の祖型となった北魏～北周の洛陽城太極殿の図面を示した。魏晋南北朝の太極殿には東西堂があり、太極殿は南面左右に 2 階段が取り付く。本来は桁行 12 間（1 年 12 カ月）を基本としたが、南朝梁や北周には 13 間（閏月を加えた 13 カ月）の太極殿が採用された。中央階の存在しない南面左右 2 階段は皇帝権力の隔絶性を象徴的に示しており、太極殿の桁行にも観念的な意味が込められていた点が重要である。唐長安城太極殿の構造は不明（文献上は、桁行 12 間）だが、魏晋南北朝の太極殿の構造的特徴を継承した点は間違いない。

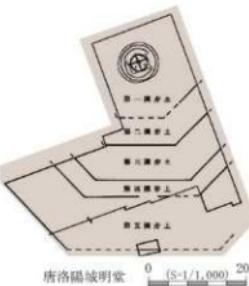
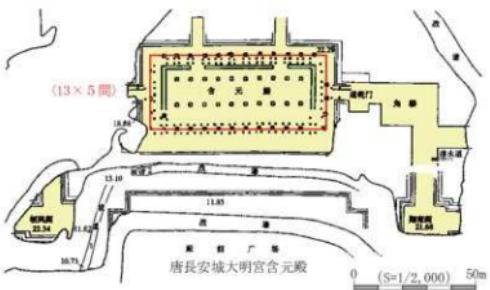
高宗以降に中心的な宮城となる大明宮の含元殿は、太極殿（正殿）・承天門（正門）の制度・構造を継承し、新しく創造された殿門融合の闕式正殿である。構造的には唐九成宮 1 号宮殿などの両翼を持つ正殿の影響を受けて成立した革新的構造を持つ建造物ではあるが、傅熹年が指摘したように、北魏洛陽城永寧寺・唐九成宮 37 号宮殿に見られる特徴的な減柱方式（[図 39 ②下右](#)）、あるいは 37 号宮殿の礎石下に見られる「承础石（承礎石）」（[中国社会科学院考古研究所 2008 p.57](#)）の存在など、伝統的な技法を継承している点が重要である（[傅熹年 1998a](#)）。南北朝太極殿の系譜を繰ぐ桁行 13 間、南面左右 2 階段を構造的に発展させた龍尾道など、皇帝権力の隔絶性を象徴的に示す舞台空間である。渤海・日本に強い影響を与えた特徴的な建造物ではあるが、あくまでも太極殿から派生した類型であり、北宋以降には継承されない点は前述した通りである。

魏晋南北朝～唐

(13×5.7間)



(13×5間)



渤海

(11×4間)

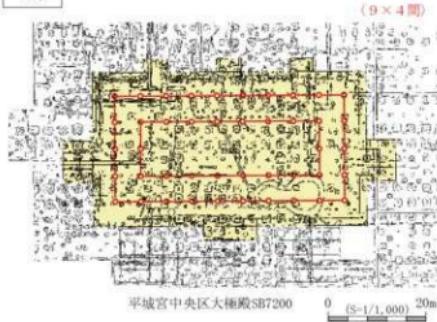


(19×4間)



日本

(9×4間)



(9×4間)

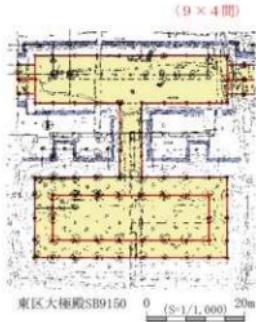


図72 唐代東アジア都城の正殿とその比較

武則天が神都とした洛陽城において、隋乾陽殿・唐乾元殿の場所に造営された宮廟合一の礼制建築・正殿が明堂である。巨大な八角基壇という特殊な構造ではあるが、天円地方など中国の伝統的な思想に基づいて造営された武則天の宮城正殿である。含元殿とは異なり、前殿・太極殿から派生した建物ではなく、礼制建築から生まれた点に特色があるものの、太極殿・含元殿と並んで武則天期には正殿として機能した点が重要である。構造的に言えば、後世に直接的な影響を与えない点は含元殿と同じだが、武則天が洛陽に造営した明堂・天堂は、北宋以降の宮城における新しい双軸構造を生み出すなど、大きな画期となった。

次に、同時代の渤海都城を見てみると、渤海海上京城では宮城正門と「コの字状」廊廡、および1号宮殿で構成される広大な空間が国家的な儀礼の場となつた点が注目できる。研究史上も指摘されてきたように、唐長安城大明宮の丹鳳門～含元殿の空間が表現された可能性が高い（表2）（魏存成 2016）。1号宮殿は、桁行11間で唐長安城大明宮の含元殿よりも2間分小さく設計されているが、基壇南面の東西両端間の位置に左右2段階が取りつき、やはり渤海王の権力の隔絶性を表現したものと思われる。一方、2号宮殿は渤海海上京城の独自性が表現された部分だと思われる。東西92mという極めて広い基壇の上面には、桁行19間・梁行4間の長大な單層建築が想定されている（劉太平・孙志敏 2018 p.169 図5.26）。これは、高句麗安鶴宮の内殿1号宮殿（図65下右）など地域的に展開した様式に系譜を持つ可能性高い。

最後に日本都城の正殿では、前期難波宮内裏前殿SB1801・飛鳥宮エビノコ郭正殿SB7701の桁行9間・梁行5間を祖型として、藤原宮大極殿（9×4間）が成立した。藤原宮大極殿が移建されたと考えられている平城宮中央区大極殿・恭仁宮大極殿（小澤1993）に対して、平城宮東区大極殿・後期難波宮大極殿・平安宮大極殿と徐々に建物規模は縮小する（平澤2002）が、平安宮に至って桁行11間の日本の大極殿へと発展した（家崎1993）。日本大極殿の特徴としては、南面に3段階が取り付く点、後方に「後房（小安殿・後殿）」が存在する点が挙げられる。特に、正殿の南面中央に段階が存在する点は、唐・渤海の都城正殿には認められない大きな特徴といえる。この点は、『儀式』にみえる元日朝賀の奏賀において、皇太子が大極殿中段階を利用する場合（図13下左）に加えて、閑門出御型の饗宴儀礼の際に天皇が南面中央段階を利用した（小澤2020）点に起因する構造の可能性が高い。後述するように唐・渤海正殿における中央の隔絶性は、唐皇帝・渤海王の饗宴儀礼の場が、宮城後方に位置する点と関連すると思われる。すなわち、国家的儀礼の舞台となる正殿と皇帝・王・天皇の饗宴の場との空間的な関連性が、各國正殿の基壇構造（段階位置）に反映されていると考えられる。その意味において、南面中央に段階が取り付く日本大極殿は、同時代の東アジア世界でも特殊な事例であり、それは大極殿前に閑門・朝堂からなる饗宴空間を設定した点に起因すると考える。

さて、このように唐・渤海・日本都城の正殿における構造・規模を整理すると、唐皇帝の正殿（桁行13間）、渤海王の正殿（桁行11間）、日本天皇の正殿（桁行9間）と、同時代における国際的な階層性を読み取ることができる（図72）。ちなみに、後期高句麗の平壤に位置する安鶴宮の外殿1号宮殿も桁行11間で、唐を中心とした国際的な関係性が、正殿の桁行規模に反映されている可能性が高い。このような階層性は、唐と各國との関係性の「遠近」に基づくものと思われ、国際的な階層秩序から脱して日本が独自の正殿を造営し始めるのが、平安宮大極殿（桁行11間）以降である点も興味深い。

（2）東アジアにおける正殿の二系統—太極殿型・含元殿型正殿の展開

唐・渤海・日本の正殿における規模・構造の比較に統いて、東アジア全体の中で正殿の系譜を位置付けてみたい。具体的には、太極殿・含元殿の二系統の正殿が渤海・日本に与えた影響を考えてみる。

中国都城の中核正殿には大きく4つの段階がある。すなわち、①前殿、②太極殿、③工字形正殿、④三台である（表3）。この中国歴代王朝で継承される一連の正殿の存在に対して、唐では含元殿、明堂をえた3つの正殿が併存する特殊な時代があった。特に、高宗以降に元会儀礼の主要な舞台空間となった含元殿が、渤海・日本都城に大きな影響を与えた点は、多くの研究によって指摘されてきたところである。ここでは、太極殿・含元殿の二系統の影響に論点を絞り、渤海・日本都城の正殿に関して整理を試みる。

4-2で議論した通り、渤海海上京城3・4号宮殿・西古城1・2号宮殿、八連城1・2号宮殿の構造は、中原都城の宮城北部の後寝建築に由来しているものと思われ、これを「基本構造」と呼称した。それに対して、上京城1（2）号宮殿が唐長安城大明宮含元殿の影響を受けた構造と推定でき、特に宮城正門～1号宮殿の

空間は丹鳳門～含元殿の空間を強く意識して設計されている点は空間構造上も明らかである。つまり、渤海都城においては明確な形で太極殿型の影響を把握することは出来ないが、少なくとも中原都城に影響を受けて成立した基本構造に、上京城においてのみ含元殿模倣空間が前面に付加された点が読み取れる。

一方、日本都城では前期難波宮段階では長安城太極宮を強く意識しながらも、その正殿は渤海都城の基本構造（II C類）と共に通するよう、唐の太極殿の構造的特徴を発現させたものではなかった。しかし、飛鳥宮エビノコ郭正殿で太極殿を意識した単独院落を構成する正殿が初めて造営され、藤原宮において前期難波宮の宮構造、飛鳥宮エビノコ郭の正殿を融合する形で新しい「大極殿院」の構造が誕生した。前述した通り、藤原宮大極殿こそが日本最初の太極殿型大極殿であり、それ以降の日本都城の「基本構造（内裏十大極殿院+朝堂院）」となる。すなわち、中国都城と同じく日本においても太極殿型大極殿が中枢の系統を占めたわけだが、平城宮段階において大宝遣使からもたらされた情報によって、中央区大極殿院で含元殿型大極殿が成立することになる。渤海都城においては、基本構造の南側に含元殿模倣空間が成立したが、日本の場合は中央に含元殿模倣空間が配置されたことで基本構造が東側に再配置されることになった（福田・浅川 2002）。平城宮の朱雀門上に位置する中央区は、大極殿院で丹鳳門～含元殿の空間、4朝堂院で麟德殿の空間が表現されたものと思われ、両者を繋ぐ存在として儀礼的宮城正門である大極殿院南門 SB7801 が建造された。前稿でも指摘した通り、中央区大極殿院南門 SB7801 は、空間的皇城正門である朱雀門との関係においては「承天門」（罗瑾歆 2019）、大極殿との関係においては「丹鳳門」（中国社会科学院考古研究所西安唐城队 2006）、すなわち大極宮・大明宮両者の正門の役割を継承したのである（城倉 2021 p. 185）。

以上、渤海・日本における中枢部の空間構造は、唐の動きに連動していることがわかる。すなわち、前殿・太極殿の系譜を引く唐長安城太極宮（太極殿）を基本とし、そこにある段階で大明宮（含元殿）の要素が付加される変遷過程である。その場合でも、東アジア都城の中枢に位置したのは中国都城の長い歴史の中で一系列的に発展した前殿・太極殿の系譜であり、唐前半期における太極殿・含元殿・明堂の3つの併存現象が、東アジア都城において様々な形で発現したことにより、各国で多様な形式の中枢部が生み出されたものと推定できる。武則天明堂のみは、東アジア世界において構造的な影響というよりは、思想的な影響を与えた点が特徴だが、太極殿・含元殿はまさに直接の模倣対象として強い影響力を持った点が明らかである。

4-5 儀礼・饗宴空間としての都城中枢部と東アジアへの展開

中国都城の中核正殿における変遷と唐代における東アジアへの展開について、発掘遺構の考古学的な分析を基に整理してきた。最後に、中国都城における正殿を含む中枢部の構造が、どのような経緯で東アジア各国に伝播したのか、唐代並行期の渤海・上京城・日本平城宮を例に考えてみたい。各国がどのような過程を経て中原都城の中枢部の構造を導入するのかを考究する作業は、中国歴代王朝がどのように思想的な空間を継承しつつ革新・創造を繰り返していくのか、を検討する上で非常に重要な知見をもたらす。時空間を越えて継承される要素こそが、都城の本質に近い部分と考えられるからである。

以下では、唐長安城・洛陽城の中枢部が、渤海・日本都城にどのように伝播し、どのように変容したのかを、①国家的儀礼空間としての正殿、および、②皇帝・王・天皇が関わる饗宴空間の2つの要素から考古学的に考えてみたい。

（1）国家的儀礼空間としての正殿

中国都城の宮城中枢部の正殿として存在した太極殿における中心的儀礼は、冬至もしくは元日の朝に、在京九品以上の官僚、地方・外国からの使節団が参加する「元正冬至大朝会」である。特に、元正（1月1日・元日・元旦）の元会が中心となる（渡辺 1996 p. 107）。渡辺信一郎によると、元会は朝（朝賀儀礼）と会（会儀）に分かれるという。朝賀儀礼は、①上公1人による皇帝への賀詞と皇帝からの答礼、②諸州からの上表文・瑞祥物の奏上、③諸州貢物・諸蕃貢物の貢納、を内容とする。一方、会儀は上寿酒礼・饗宴・芸能を内容とする（渡辺 1996 pp. 168-169）。『大唐開元礼』卷九七「皇帝元正冬至受群臣賀」（池田 1972）には、太極殿における元会儀礼の詳細が記されている（図12）が、実際には玄宗以降、唐末に至るまで大明宮含元殿で開催されたと考えられている。元会は太極殿・含元殿の正殿を中心とした「閉じられた空間で挙行され

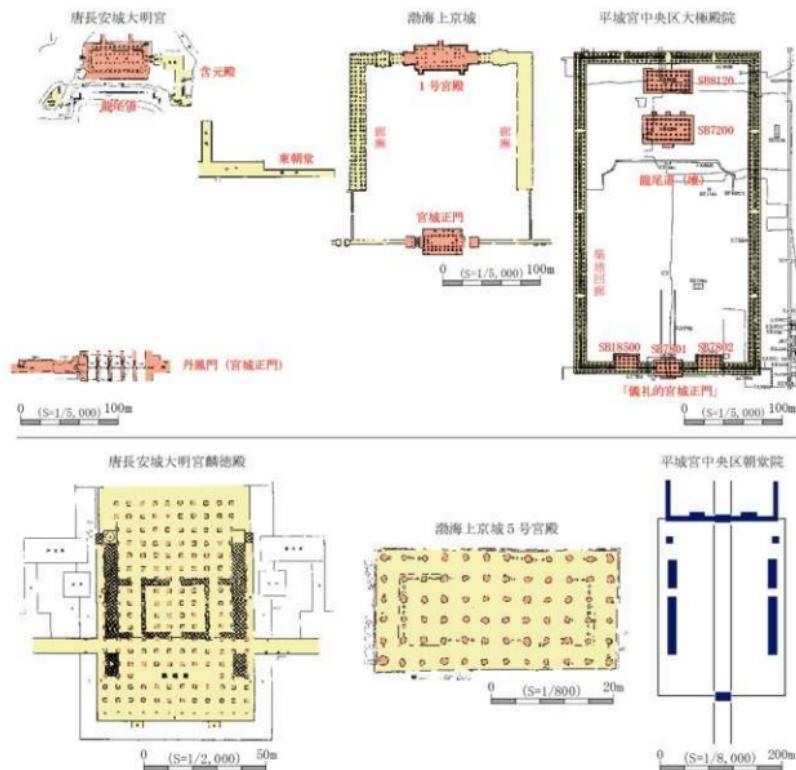


図 73 唐代都城の国家的儀礼空間（上）と饗宴空間（下）の比較

る儀礼」（渡辺 1996 p.168）とされ、日本の『儀式』でも、元日朝賀儀は平安宮大極殿を中心とした朝堂院内で開催された（図 13 上）。大明宮含元殿での元会儀礼の様相は明らかではないものの、太極宮太極殿に倣うものとされ、丹鳳門～含元殿までの閉鎖空間が舞台となったと思われる（図 24 左）。この空間を模倣したのが、平城宮中央区（大極殿院＝南門～大極殿）、および渤海海上京城 1 号院（宮城南門～1 号宮殿）である点は、研究史上でも明らかである（魏存成 2016 p.300・村元 2022 p.178 など）。今、図 73 上に三者を比較した図を提示したが、①宮城正門～正殿までが回廊によって閉じられた空間を構成する点、②正殿の南面が東西階段や龍尾道（壇）により中央を隔絶する構造となっている点、など大明宮含元殿の思想に基づき、渤海・日本で中枢空間が再構成されている点が読み取れる。

では、これら 2 例を含めて、太極殿型・含元殿型の正殿が各国に導入される契機とは何だろうか。例えば、各国正殿の衍行規模に、唐（13 間）・渤海（11 間）・日本（9 間）といった国際的な階層性が認められるように、中国側から何らかの規模に関する要請や設計図の共有のような現象があったと考えられなくもない。しかし、設計思想や空間構造は唐の中枢正殿を模倣していても、その設計のあり方は各国単位で強い独自性が表現されており、建造物や附属施設（龍尾道・廊廻・回廊・閣樓・幡旗など）の個別の建築様式も大きく異なり、唐の直接的な影響下に成立したものとは思えない。正殿の衍行規模に階層的な差が認められるのは、各国が唐の正殿規模に対して「自らを位置付けた結果」と思われ、唐帝国、あるいは唐皇帝との関係性の「遠

近」を各国が意識した結果と考えられる。このように、都城中枢部の展開に関しては唐側が積極的に関与する「直接的な」伝播ではないと思われるが、各国の中叔正殿に元会（元日朝賀儀礼）における「儀礼の舞台空間」としての高い共通性（図73上）が認められる点は非常に重要である。この点は、設計図などの「ハーデ」による模倣によって各国の中枢部が現出したのではなく、各国から派遣された使節が儀礼に参加するという「ソフト」面での体験に基づく模倣の可能性を示唆していると考える。

例えば、日本平城宮中央区の成立は、太極殿型の藤原宮大極殿を採用していた日本にとって重要な転換期となるが、その造営には栗田真人を執節使とする大宝遣唐使の持ち帰った情報が大きな役割を果たしたと想定されている（井上2008・小澤2023aなど）。つまり、遣唐使の「諸蕃」としての元会への参加体験が、日本での都城中枢正殿の模倣空間が生まれる契機となっている可能性が高い。この点は、日本以外の東アジア各国に関しても同様の経緯が想定できる。すなわち、唐皇帝を中心とする国内の君臣秩序、あるいは国際的階層性を、正殿を中心とする儀礼によって1年に1度更新する元会を各国が模倣し、その空間を独自に再現することによって、二次的に新たな思想空間が創造されていくのが都城中枢部の伝播の実態だと思われる。このような伝播過程において、西嶋定生が想定した「冊封体制」（西嶋2002）などの官位は介在しておらず、唐皇帝が主催する国家的儀礼への参加体験というある意味では「個別の体験」が中枢部伝播の背景にあったと考える。以上、各国使節による儀礼体験とその舞台空間の再創造・再創出こそが、各国において独自色の強い中枢正殿の模倣形態を生み出す背景にあったと想定できる。ちなみに、このような視点は、既に村元健一がその著作の「序章」の中で、「日本政権内で一定の地位にあり、政治的影響力をもつ人物が中国の宮城中枢部に入り、宮城空間を実見し、そこで行われた宫廷儀礼を体験したこと」が宮城構造の受容の契機だったとの確にまとめている（村元2022 p.8）。漢籍などの書物の思想的な解釈によって再現したものではなく、「実際に宮殿や宮城の姿を見た遣唐使たちのもたらした情報が日本宮城の造営にあたっても中国宮城の姿を再現する上で大きな根拠となつた」という考え方である（村元2020a p.252）。この点に関しては、西本昌弘が孝徳朝難波長柄豊磐宮に関して、朝庭に百官や外国使客を会集して行われる元日朝賀の創始に伴って朝堂区を設けた点を強調しており（西本1998）、儀礼空間、特に元会空間の再創造こそが新しい宮城構造を生み出す原理となっている点を読み取れる。

このように、実際に存在する唐の宮城中枢部の情報は遣唐使からもたらされたと思われるが、特に大きな画期となったのは大宝の遣唐使（王仲殊2000）である。栗田真人ら遣唐使を接待した唐の高官：杜嗣先の墓誌の分析から、金子修一が指摘するように、武則天は皇帝の威光が遠い日本まで及ぶことを内外に示すため、遣唐使をかなり優遇したとされる（金子2009）。さらに、大宝遣唐使の足跡を詳細に検討した妹尾達彦によれば、栗田真人らは南郊祭天を含む數々の儀礼に参加し、武則天より前後に例がないほど厚遇を受けたという（妹尾2020）。元会儀礼や南郊儀礼への参加、『旧唐書』『新唐書』にも記載のある大明宮麟德殿での饗宴への参加など、かれらの「儀礼体験」が平城宮中央区の設計の根幹となつた点は疑いない。なお、外国使節の皇帝謁見儀礼に関しては、謁見と宴会がセット関係になる点が指摘されている（石見1995-1998）が、国家的な儀礼空間と共に饗宴空間が合わせて模倣対象となる点も重要である。

以上は日本の大宝遣唐使の事例ではあるが、唐皇帝の儀礼の中心舞台となった太極殿・含元殿（明堂）が各国の模倣対象となったのは、その空間が「諸蕃」も含めた帝国の国際的な階層秩序を儀礼によって可視化する巨大な舞台装置であったためであり、その儀礼体験を通じて各国に情報がもたらされ、それぞれの空間の再現方法の差異によって東アジアに都城が多様な形で展開したと考えられる。唐皇帝にとっては、儀礼を通じて国内の階層秩序に諸外国を組み込むことで「中華・王化思想」が東アジア世界において具現化されることになる。一方、各国は使節を通じて唐皇帝を中心とする階層秩序の更新儀礼に関わることで、二次的な階層秩序の「創出役」を意識的・無意識的に担っていくことになる。このような過程は、渡辺信一郎が「帝国オイコス」と呼称した中央一地方、中華一夷狄を貫く中華皇帝を中心とする貢納原理を基本としている（渡辺1996・2003）（渡辺信一郎著／徐沖洋2021）。中華の皇帝を中心とする階層秩序は、天命に基づく宇宙論（妹尾1998）、あるいは昊天上帝を祀る祭典儀礼（金子1982・2001、妹尾1992）と結びつきながら、宮城正殿で開催される国家的な儀礼によって可視化されることで、象徴的な権力が現実世界で具現化されていたの

である。社会人類学では、クリフォード・ギアツの劇場国家「ヌガラ」など、王や貴族が民衆に代わって儀礼を主催するという国家論（クリフォード・ギアツ 1990）もあるが、古代東アジアの専制国家においては、皇帝・王・天皇が自らの正当性を天命、あるいは祖先祭祀による血統によって内外に示し、その正当性を証明し続けることが重要だった。中国歴代王朝は、①受命と血統による権力の正当性を祖先祭祀・祭天儀礼（陵園または太廟・郊壇）によって示し、②支配・被支配の関係性を即位・元会儀礼（中枢正殿）によって更新したが、いずれにおいても儀礼が皇帝権力を可視化し、恒常化させる機能を果たした。軍事力、経済力、それらを支える行政的な官僚機構などと共に、思想的に設計され、周到に準備された舞台空間で行われる皇帝による儀礼は、まさに国家の根源を支えたのである。

このように、唐の皇帝権力の中核である正殿の構造が各国に伝播した背景には、漢籍による思想的情報や中国側からの設計図の提示などがあったわけではなく、使節による「儀礼体験」という毎回条件の異なる個別的な体験に基づいていた可能性が高い。その場合においても、各国の支配システムに合致する形で中枢部の構造が再創造され、地域色の強い空間が生み出されることになった。この点に関しては、中国の歴代王朝が伝統的な思想を継承しながら、革新・創造を繰り返して中枢部の構造を変化させたあり方とは、根本的に異なる展開過程と考えることも出来る。例えば、日本天皇は血統によって支配の正当性・必然性が証明される歴史的発展があり、天智・天武系の「皇統の転換」などの時期を除いて円丘祭祀などの儀礼が根付くことはなかった。東アジアに展開した都城は、常に受容側の実態に合わせて柔軟に変化したのである。すなわち、中原都城から草原都城へと発展した中国歴代王朝の都城が「思想の継承」であったのに対して、隋唐期を中心に東アジアに伝播した都城制は、国家間の高度な意思疎通を前提にしたものではなく、受容側の自律的な「選択模倣」によって異なる思想空間を再現した点に歴史的意義を読み取ることができる。

（2）皇帝・王・天皇の饗宴空間にみられる多様性

中国都城の宮城中枢正殿が、外国使節の儀礼体験によって各国に模倣空間を生み出した点を整理したが、国家的な儀礼空間としての正殿と並び、注目されるのが饗宴空間の模倣である。中国では、外国使節の皇帝謁見儀礼では、謁見と宴会が必ずセット関係になっていた（石見 1995・1998）。唐長安城大明宮では含元殿と麟德殿、興慶宮では勤政殿本樓と花萼相輝楼など、正殿と饗宴空間がセットになる事例が判明している。では、大明宮含元殿の影響を受けた点が確実な渤海海上京城・平城宮中央区では、含元殿型正殿とセットでどのような饗宴空間が採用されたのだろうか。

図 73 下では、唐大明宮麟德殿の系譜を引くと思われる渤海海上京城・日本平城宮の饗宴空間を示した。渤海海上京城 5 号宮殿は、西古城 5 号宮殿と同じ桁行 11 間×梁行 5 間の建造物である（図 65 上）。前者は総柱建物、後者は四面廊建物だが、前述の通り、近年の研究では渤海海上京城 5 号宮殿を麟德殿の影響を受けた重層の樓閣を持つ饗宴施設を見る説が有力である（劉太平・孙志敏 2018 pp. 182-188）。含元殿型正殿である渤海海上京城 1 号宮殿と同じ桁行 11 間の建造物で、両者は宮城北側と南側に対置されるセット関係にある可能性が高い。一方、日本平城宮では奈良時代後半の中央区大極殿跡に建てられた西宮を麟德殿の模倣とする説（報告：奈良国立文化財研究所 1982 p. 234-235 / Fig110、王仲殊 2001b、福田・浅川 2022 など）が主流である。あるいは、麟德殿と平城宮北方の松林苑内の内郭（松林宮）の共通性を指摘する意見もある（今井 2023）。しかし、平城宮中央区大極殿跡が含元殿空間の模倣であるとすれば、栗田真人ら大宝遣唐使が武則天の饗宴に招かれた麟德殿の模倣空間が近接した位置関係で表現されている可能性は十分にある。その際に注目されるのが、中央区大極殿跡南門に天皇が出御し、4 朝堂院で実施される「閑門出御型」の饗宴儀礼である（橋本 1986、今泉 1989・山下 2018 など）。平城宮中央区の 4 朝堂院は、藤原宮の太極宮型大極殿に附属する 12 朝堂院から発展した東区朝堂院とは系譜が異なり、含元殿型大極殿である中央区大極殿跡の南に位置し、その機能や性質が大きく異なる。中央区 4 朝堂院は、平安宮豊楽院の 4 堂形式（出御場所は閑門→豊楽殿）へと発展したと想定でき（橋本 1986）、麟德殿との建築様式の共通性は低くても、正殿と饗宴施設が近接した場所でセット関係になる点では一致する。長安城の興慶宮花萼相輝楼や曲江池、渤海海上京城 5 号宮殿などを見ても、饗宴空間は各国の独自色が非常に強く表出する部分と考えられる。例えば、奈良時代末の光仁朝の平城宮では、正月節会の饗宴儀礼において国家の空間（東区大極殿閑門+朝堂）、天皇の私的空

間（内裏）、中間的空間（東院・楊梅宮）という複数の饗宴空間が使い分けられていた可能性が指摘されており（吉川 2003）、近年では詳細な遺構研究の立場からも追認されている（小田 2021）。今後は、各国都城における饗宴空間の機能や構造などの多様性に關しても、更なる研究が進むことが期待される。

以上、渤海海上京城5号宮殿、平城宮中央区朝堂院が唐長安城大明宮麟德殿を模倣・志向した饗宴空間だった可能性を指摘した。建築構造は異なっていても、含元殿型正殿に「対置」される点において、空間構造上の共通性が見いだせる。各国都城では建築様式や歴史的背景が異なる点からすれば、建築構造のみの国際比較には限界もある。思想的背景を踏まえた都城の「空間構造の分析」による系譜論が重要だと考える。

おわりに

本論では、都城の宮城中枢部における正殿遺構に注目し、秦～北宋までの中原都城、遼・金・元の草原都城、明清都城までの発展過程を整理した上で、唐高宗～武則天期の長安城・洛陽城に存在した3つの正殿が高句麗・渤海・日本都城にどのように影響を与えたのか、を考古学的に検討した。研究史上、都城の宮城正殿は様々な角度から論じられてきたが、現在までの発掘調査の成果を整理し、時空間を越えた総合的な比較を試みた研究は存在していなかった。本論では、東アジア都城における宮城正殿の変遷・展開に関する全体像を示すことが出来たと考る。「都城門」の分析（城倉 2021）に続き、本論では「正殿」の時空間を越えた比較を試みたため、論点多岐にわたった。最後に、考察でのトピックをまとめて、成果としたい。

- ①中原都城の宮城正殿は、秦阿房宮前殿・前漢長安城未央宮前殿・後漢洛陽城南宮前殿から、曹魏洛陽城太極殿へと発展した。魏晉南北朝の太極殿には東西堂があり、その北方には昭陽殿が太極殿と機能を分掌する形で存在していた。
- ②初唐（高宗～武則天期）には、長安城太極宮太極殿・長安城大明宮含元殿・洛陽城宮城明堂の3つの正殿が併存する特殊な状況が成立した。また、唐の正殿は大明宮（含元殿／麟德殿）、興慶宮（勤政務本樓／花萼相輝樓）のように、必ず正殿と饗宴施設がセット関係を持っていた。
- ③唐の3つの正殿の中でも、あくまでも中枢の系譜に位置するのは太極殿だった。含元殿は太極殿の派生形であり、明堂は礼制建築に系譜を持つ。太極殿は、明清期に至るまで一系列的に継承されたが、含元殿は元上都北壁闕式主殿など復古的な類型としてのみ残存し、明堂は天堂との関係で成立した双軸構造として、北宋以降に残存した。含元殿・明堂ともに、長い中国都城史上においては「刹那的」類型であった。
- ④北宋期には、武則天が造営した明堂・天堂の系譜を引く西京洛陽城の宮城構造を媒介として、東京开封城に工字形正殿と双軸構造という特徴的な様式が成立した。魏晉南北朝の駢列制とは異なる形の北宋期の双軸構造は、金代に南北の空間構成へと変化を遂げ、明清期の内廷・外朝構造へと発展した。
- ⑤中国都城の中枢正殿には、大きく4つの段階が認められる。秦・漢の前殿、魏晉南北朝～唐の太極殿、北宋～元の工字形正殿、明清の三台である。中国歴代王朝は、秦阿房宮前殿から続く一系列的な正殿の系譜を継承しており、正殿は国家的な儀礼を通じて皇帝権力を創出する主要な装置として機能し続けた。
- ⑥渤海都城では、上京城の3・4号宮殿の「基本構造」が、西古城・八連城と共に通している。渤海王の居住空間と日常公務の正殿を連接した特徴的な構造だが、上京城でのみ、その前面に含元殿空間を模倣した1（2）号宮殿が存在していた。
- ⑦渤海都城で見られる「基本構造」は、高句麗安鶴宮とも共通しており、東魏北齊鄆城206・209大殿など、中原都城の宮城北側における後寝の構造と類似する。唐長安城・洛陽城における宮城後寝部分の様相は明らかではないが、中原都城の後寝建築が高句麗・渤海に影響を与えた可能性高い。
- ⑧渤海海上京城・西古城5号宮殿は、唐長安城大明宮麟德殿の影響を受けた饗宴施設の可能性が高い。
- ⑨日本都城では、唐長安城太極宮の影響を受けた前期難波宮、初の単独正殿を採用したエビノコ郭正殿などの試行錯誤を踏まえ、藤原宮で本格的な太極殿型大極殿が成立した。この系統は、平城宮東区・後期難波宮・長岡宮へと引き継がれた。一方、平城宮中央区では含元殿型大極殿が採用された。両系統は平安宮で統合され、平安宮では今までの規模を越えた桁行11間の日本の大極殿が成立した。

- ⑩日本都城において唐の宮城正門を模倣した「儀礼的宮城正門」は、内裏南門→大極殿院南門→朝堂院南門→朝集院南門と南下した。その位置関係から考えて、藤原宮大極殿院南門前の朝堂院では、東西の第一堂が唐を模倣した本来の朝堂と思われ、第二堂以下は皇城に該当する可能性が高い。12朝堂院における第一堂の本来的な意味は、平城宮東区以降に薄れて朝堂院全体が均質化すると同時に、儀礼的宮城正門との空間配置も崩れていく。一方、平城宮中央区の4朝堂院は全く異なる系譜で、閣門出御型の饗宴空間から平安宮豊楽院へと発展する。平城宮で併存した12朝堂院・4朝堂院は、その系譜が大きく異なる。
- ⑪前期難波宮の内裏南門東西の八角殿は、宮城正門を荘厳化する闕と同じ役割を果たし、その機能は藤原宮大極殿院東西の樓閣、平城宮東区大極殿院の東西樓閣へと継承される。八角形は仏教に由来するわけではなく、中国の皇帝権力を象徴する構造（上円下方・八角形）など儒教的な概念に由来すると思われる。武則天明堂を直接的な系譜に持つわけではないが、高宗一武則天期における礼制建築の最新の概念を導入して構想された可能性がある。
- ⑫中国を中心とする東アジア各国の都城では、正殿・寝殿において、前後の大殿が「廊」によって連接される工字形建築が見られる。しかし、系譜的な峻別が行われていない点に問題があると考え、東アジア全体で分類を行った。I類は太極殿と機能を分掌する後閣が結合していく形式で、中国都城における中枢の類型となる。II類は中原都城の後寝建築を見られる連房が皇帝の居住空間と日常政務空間を結びつける類型で、高句麗・渤海、あるいは日本の前期難波宮などに影響を与えた。III類は、本来、太極殿内に存在する皇帝の更衣の施設（房）が日本の工字形正殿の系譜に見られる連房を通じて太極殿と後方の後房が接続する形式である。以上の整理によって、東アジア都城における工字形正殿の系統関係を把握することができた。
- ⑬唐・渤海・日本の同時期の正殿を比べると、唐皇帝の正殿（桁行13間）、渤海王の正殿（桁行11間）、日本天皇の正殿（桁行9間）と国際的な階層秩序が認められる。このような階層性は、唐と各国の関係性の「遠近」が表現されているものと思われ、日本は平安宮段階で桁行11間の独自の正殿を造営した。
- ⑭唐宮城における3つの正殿の併存という現象は、東アジア都城の正殿に多様性を生み出す原因となった。しかし、基本的には太極殿を中心とする唐の動きと連動しており、その系譜が高句麗・渤海・日本においても主流を占めたが、渤海海上京城1（2）号宮殿や日本平城宮中央区などで含元殿の様式が採用された。
- ⑮唐の宮城中枢部の空間が、各国でその模倣形を生んだ背景には、各国の施設が「諸蕃」として元会儀礼に参加した個別的な体験があり、その情報に基づいて各国で二次的に空間が再創造された可能性が高い。各国は唐帝国との高度な意思疎通によって都城という思想空間を導入したのではなく、「儀礼体験」に基づいて自律的に選択模倣したものと考える。
- ⑯中国の宮城正殿は、必ずセットになる饗宴空間を持つ。長安城大明宮における含元殿・麟德殿のセット関係は、渤海海上京城1・5号宮殿、平城宮中央区大極殿・4朝堂で空間的に表現された。正殿に関してはかなり忠実な空間構造の模倣が認められるのに対して、饗宴施設は各国の多様性が生み出されやすい空間だったと思われる。

以上が、本論の成果である。正殿に関する個別の論点を深めることができたのに加えて、都城という思想空間の中核に位置する正殿の時空間を越えた動態を示した点が本研究の最大の成果である。本論では、都城門（城倉2021）に統く遺構研究として、正殿を分析対象とした。しかし、中国都城におけるもう1つの中枢である礼制建築の分析が未完である。また、外郭城（里坊）に関しても、分析をする予定である。今後も科研報告書として分析を重ね、「都城門」「正殿」「礼制建築」「外郭城」の各要素に分解した考古学的分析を総合化して、都城とは何か、その本質的意義を考究してみたい。考古学の遺構研究は、発掘報告書によって広く共有されている情報を基に、研究史を悉皆的に批判し、独自の視点と方法で特定の対象を分析し、その歴史性を追求する作業を基本とする。対象遺構の構造的特徴をどのように掘り下げるか、時空間を超えた比較によってその特徴をいかに相対化していくか、が重要だと考える。都城研究においては、文献史学・建築史学・歴史地理学などの隣接分野の成果も吸収して考察を進める必要もあり、国際的・学際的な視点も求められる。今後も考古学的視点からみた東アジアの都城制の歴史的意義を追究していきたい。

引用文献・東アジア正殿の報告書・図表出典一覧・索引の凡例

※引用文献は、日本語と中国語に分けて記載をした。中国語の文献は、原文のまま簡体字で表記した。

※本文中で、日本語文献の引用は（相原 2010）、中国語文献の引用は（安家瑠 2001）など区別した。中国の研究者が日本語で発表している論文は、（王 1984）という表記になる。

※日本語は MS明朝で表記したが、中国語は表記できない場合があるので Sim Sun にフォントを統一した。

※第3章での正殿の記載に関連する報告書は、表3に整理した上で、①中原・草原都城、②高句麗・渤海都城、③日本都城に分けて、東アジア正殿の報告書として掲載した。

※東アジア正殿の報告書を本文中で引用する場合は、（報告：孟凡人 2019）など「報告」を付記した。

※東アジア正殿の報告書で提示した文献は、引用文献の中では記載を省略した。

※図表出典一覧は、引用文献・東アジア正殿の報告書における当該文献の頁数、図版番号を記載した。

※発掘構造の図面は、他の論考で再トレースして使用される場合や、予稿集などで再集成される場合などがある。ここでは、本書で直接使用した図版の引用元を図表出典一覧で明記した。

※索引は、発掘構造に関連する重要な用語をピックアップして、五十音順に整理して作成した。

引用文献（日文）※五十音順、MS明朝で表記。

相原嘉之 2010 「我が国における宮中枢部の成立過程」『明日香村文化財調査研究紀要』9

青木 敏 2022 「奈良時代における大嘗宮の変遷とその意義」『人・墓・社会－日本考古学から東アジア考古学へ－』雄山閣
秋山日出雄 1981 「八省院=朝堂院の祖型」『難波宮址の研究7 論考編』大阪市文化財協会

秋山日出雄 1982 「日本古代都城の原型」『神女大史学』2

浅野 充 1990 「古代天皇制国家の成立と宮都の門」『日本史研究』338

阿部義平 1974 「平城宮の内裏・中宮・西宮考」『研究論集II』奈良国立文化財研究所

阿部義平 1984 「古代宮都中枢部の変遷について」『国立歴史民俗博物館研究報告』3

網干善教 1979 「八角方墳とその意義」『樋原考古学研究所論集』5

安家瑠 1998 「含元殿遺跡の発掘に関する誤認を解く」『佛教藝術』238

安家瑠 2003 「唐大明宮含元殿遺跡の再発掘と再検討」『東アジアの古代都城』奈良文化財研究所

家崎孝治 1993 「平安宮大極殿の復原」『平安京歴史研究』杉山信三先生来寿記念論集刊行会

家原圭太 2020 「前期難波宮の変遷と小柱穴」『難波宮と古代都城』同成社

池 浩三 1981 「大嘗宮正殿の宝・堂の性格－中国古代の宗廟形式との比較において－」『日本建築学会論文報告集』308

池田 温（解題）1972 『大唐開元禮譜：附大唐郊祀記』汲古書院

石川千恵子 2010 『律令国家と古代宮都の形成』勉誠出版

石川千恵子 2020 「平城宮の二つの「大極殿」」『難波宮と古代都城』同成社

市 大樹 2014 「難波長柄豊碑宮の造営過程」『交錯する知－衣装・信仰・女性－』思文閣出版

市 大樹 2020 「難波長柄豊碑宮の革新性」『難波宮と古代都城』同成社

市 大樹 2021 「門の呼称からみた日本古代王宮の特質と展開」『古代日本の政治と制度』同成社

井上和人 2005 「渤海海上京龍泉府形制考」『東アジアの都城と渤海』東洋文庫

井上和人 2008 『日本古代都城制の研究』吉川弘文館

井上和人 2021 『日本古代国家と都城・王宮・山城』雄山閣

今井晃樹 2012 「唐・日本・渤海の外朝」『文化財論叢VI』奈良文化財研究所

今井晃樹 2023 「大明宮北半部と平城宮松林苑」『文化財論叢V』奈良文化財研究所

今泉隆雄 1980 「平城宮大極殿朝堂考」『日本古代史研究－閑見先生還暦記念－』吉川弘文館

今泉隆雄 1984 「律令制都城の成立と展開」『講座日本歴史2 古代2』東京大学出版会

今泉隆雄 1989 「再び平城宮の大極殿・朝堂について」『律令国家の構造』吉川弘文館

今泉隆雄 1993 『古代宮都の研究』吉川弘文館

- 今泉隆雄 1997 「権力表記の場としての古代宮都」『国立歴史民俗博物館研究報告』74
- 岩永省三 1996 「平城宮」『古代都城の儀礼空間と構造』奈良国立文化財研究所
- 岩永省三 2006a 「大嘗宮移動論—幻想の氏族合議制—」『九州大学総合研究博物館研究報告』4
- 岩永省三 2006b 「大嘗宮の付属施設」『喜谷美宜先生古希記念論集』喜谷美宜先生古希記念論集刊行会
- 岩永省三 2008 「日本における都城制の受容と変容」『九州と東アジアの考古学 上』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会
- 岩永省三 2019 「古代都城の空間操作と莊嚴」すいれん舎
- 岩永 琳 2023 「藤原宮大極殿院の調査成果」『条里制・古代都市研究』38
- 石見清裕 1995 「唐代外国使節の宴会儀礼について」『小田義久博士還暦記念 東洋史論集』龍谷大学東洋史研究会
- 石見清裕 1998 「外国使節の皇帝謁見儀式復元」『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院
- 上野邦一 1993 「平城宮の大嘗宮再考」『建築史学』20
- 上野邦一 2010 「古代宮殿における中心建物周辺の莊嚴空間」『古代学』2 奈良女子大学古代学学術研究センター
- 内田和伸 2002 「平城宮第一次大極殿院内の磚積擁壁の平面形について」『文化財論叢III』奈良文化財研究所
- 内田和伸 2011 「平城宮大極殿院の設計思想」吉川弘文館
- 内田昌功 2004 「魏晉南北朝の宮における東西構造」『史朋』37
- 内田昌功 2009 「北周長安宮の空間構成」『秋大史学』55
- 内田昌功 2010 「北周長安城の路門と唐大明宮含元殿」『歴史』115
- 内田昌功 2013 「隋唐長安城の形成過程—北周長安城との関係を中心にして」『史朋』46
- 海野 啓 2014 「平城宮における幢旗の遺構の発見」『古代文化』66-2
- 王維坤 1997 「中日の古代都城と文物交流の研究」同志社国際主義教育委員会
- 王維坤 1999 「唐長安城における大明宮含元殿の発掘と新認識」『同志社大学考古学シリーズVII』
- 王維坤 2008a 「唐長安城大明宮含元殿の発掘と龍尾道の復元」『古代東アジア交流の総合的研究』国際日本文化センター
- 王維坤 2008b 「中国の都城のプランからみる日本の都城制の源流」『王權と都市』国際日本文化研究センター
- 王仲殊 1983 「日本の古代都城制度の源流について」『考古学雑誌』69-1
- 王仲殊 1994 「第七次遣唐使のいきさつについて」『就実女子大学史学論集』9
- 王仲殊 2004 「唐長安城および洛陽城と東アジアの都城」『東アジアの都市形態と文明史』国際日本文化研究センター
- 大阪市教育委員会事務局文化財保護課 2023 「前期難波宮の内裏の発掘調査で重要な区画を発見!」『華火』210
- 大澤正吾 2019a 「平城宮第一次大極殿院の幢旗遺構」『奈良文化財研究所紀要 2019』
- 大澤正吾 2019b 「宮殿における幡轔（旗）遺構の展開」『条里制・古代都市研究』34
- 大西磨希子 2020 「則天武后的明堂と嵩山封禪」『隋唐洛陽と東アジア』宝蔵館
- 岡田精司 1983 「大王就任儀礼の原形とその展開—即位と大嘗祭—」『日本史研究』245
- 尾形 勇 1982 「中国の即位儀礼」『東アジアにおける日本古代史講座 第9巻』学生社
- 小澤 裕 1988 「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」『楳原考古学研究所論集』9
- 小澤 裕 1993 「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』潮見浩先生退官記念論文集
- 小澤 裕 1997a 「飛鳥淨御原宮の構造」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- 小澤 裕 1997b 「古代都市「藤原京」の成立」『考古学研究』44-3
- 小澤 裕 2003 「日本古代宮都構造の研究」青木書店
- 小澤 裕 2011 「七世紀の日本都城と百濟・新羅王京」『日韓文化財論集II』奈良文化財研究所
- 小澤 裕 2012 「平城宮と藤原宮の「重闕門」」『文化財論叢VI』奈良文化財研究所
- 小澤 裕 2020 「平城宮中央区大極殿の南面階段」『難波宮と古代都城』同成社
- 小澤 裕 2023a 「総論 藤原京から平城京へ」『考古学ジャーナル』778
- 小澤 裕 2023b 「古代大和の王宮と都城」同成社
- 小田裕樹 2021 「平城宮東院6期遺構群の復元と構造」『持続する志 下 岩永省三先生退職記念論文集』中国書店
- 郭曉涛・錢國祥・劉濤 2021 「漢魏洛陽城跡北魏宮城の考古学的新展開と意義」『アジア流域文化研究』12

- 金子修一 1982 「中国一郊祀と宗廟と明堂及び封禪ー」『東アジアにおける日本古代史講座 第9巻』学生社
- 金子修一 1994 「唐の太極殿と大明宮ー即位儀礼におけるその役割についてー」『山梨大学教育学部研究報告』44
- 金子修一 2001a 『古代中国と皇帝祭祀』汲古書院
- 金子修一 2001b 『隋唐の国際秩序と東アジア』名著刊行会
- 金子修一 2006 『中国古代皇帝祭祀の研究』岩波書店
- 金子修一 2009 「則天武后と杜嗣先墓誌—栗田真人の遣唐使と関連してー」『国史学』197
- 金子修一 2010 「東アジア世界論」『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』吉川弘文館
- 金子修一 2019 『古代東アジア世界史論考』八木書店
- 金子裕之 1996 「朝堂院の変遷に関する諸問題」『古代都城の儀礼空間と構造』奈良国立文化財研究所
- 金子裕之 2002 「平城宮の宝輦遺構をめぐってー宝輦遺構に関する吉川説への疑問ー」『延喜式研究』18
- 金子裕之 2007 「長岡京会昌門の樓閣遺構とその意義」『古代都市とその形制』奈良女子大学古代学術研究センター
- 狩野直高 1931 「我朝に於ける唐制の模倣と祭天の礼」『德雲』2-2
- 狩野 久 1975 「律令国家と都城」『大系・日本国家史1 古代』東京大学出版会
- 亀田 博 1987 「七世紀後半における宮殿の形態」『横田健一先生古稀記念 文化史論叢 上』創元社
- 亀田 博 2000 『日韓古代宮都の研究』学生社
- 加茂正典 1999 「『儀式』から見た平安朝の天皇即位儀礼ー践祚儀・即位式・大嘗祭ー」『日本古代即位儀礼史の研究』思文閣出版
- 岸 俊男 1974 「平城京へ・平城京から」『日本文化と淨土教論叢』井川博士喜寿記念出版部
- 岸 俊男 1975 「朝堂の初步的考察」『権原考古学研究所論集 創立35周年記念』吉川弘文館
- 岸 俊男 1976 「日本の宮都と中国の都城」『都城ー日本古代文化の探求・都城ー』社会思想社
- 岸 俊男 1977a 「難波の都城・宮室」『難波宮と日本古代国家』塙書房
- 岸 俊男 1977b 「難波宮の系譜」『京都大学文学部研究紀要』17
- 岸 俊男 1988 『日本古代宮都の研究』岩波書店
- 魏存成 2004 「渤海都城プランの発展およびその隋唐長安城との関係」『東アジアの都市形態と文明史』国際日本文化研究センター
- 鬼頭清明 1978 「日本における大極殿の成立」『古代史論叢 中巻』吉川弘文館
- 鬼頭清明 1984 「日本における朝堂院の成立」『日本古代の都城と国家』塙書房
- 鬼頭清明 2000 『古代木簡と都城の研究』塙書房
- 京都市文化市民局 2019 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』
- 国下多美樹 2014 「長岡京遷都と後期難波宮の移建」『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 久保田和男 2007 『宋代開封の研究』汲古書院
- 久保田和男 2018 「五代・北宋における都城洛陽の追揚」『東洋史研究』76-4
- 久保田和男 2019 「大元ウルスの都城空間と王権儀礼をめぐってー宋遼金都城と元大都の比較史的研究の試みー」『長野工業専門学校紀要』53
- クリフォード・ギアツ（小泉潤二訳）1990 『スマラーグー19世紀パリの劇場国家ー』みすず書房
- 甲賀市教育委員会 2023 『史跡紫香楽宮（宮町地区）発掘調査報告書 I -朝堂区画・内裏区画の調査-』
- 黄仁鎬 2011 「新羅王京の整備における基準線と尺度」『日韓文化財論集II』奈良文化財研究所
- 河内泰人 1996 「大宝律令の成立と遣唐使派遣」『統日本紀研究』305
- 河内泰人 2000 「日本古代における吳天祭祀の再検討」『古代文化』492
- 小島 裕 1989 「郊祀制度の変遷」『東洋文化研究所紀要』108
- 小島 裕 1991 「天子と皇帝ー中華帝国の祭祀体系ー」『王權の位相』弘文堂
- 柴原永遠男 2003 「天武天皇の複都制構想」『市大日本史』6
- 柴原永遠男 2019 「複都制」再考「大阪歴史博物館研究紀要」17
- 佐川英治 2010 「曹魏太極殿の所在について」『六朝・唐代の知識人と洛陽文化』岡山大学文学部プロジェクト研究報告書15

- 佐川英治 2016『中国古代都城の設計と思想－円丘祭祀の歴史的展開－』勉誠出版
- 佐川英治 2017『都城に見る都城制の転換』『魏晋南北朝史のいま』勉誠出版
- 佐川英治 2018『六朝建康城と日本藤原京』『東アジア古代都市のネットワークを探る』汲古書院
- 椎生 衡 2019『古代大嘗宮の構造と起源－祭式と考古資料から考える祭祀の性格－』『神道宗教』254・255
- 佐竹 昭 1988『藤原宮と朝庭の祓有儀礼』『日本歴史』478
- 佐竹 昭 1998『古代王權と恩赦』雄山閣出版
- 佐竹 昭 2020『桓武・平城朝の政治と文化－郊祀と朝旦冬至、及び大同改元－』『難波宮と古代都城』同成社
- 佐藤 隆 2022『前期難波宮造営過程の再検討－飛鳥宮跡との比較を中心にして－』『大阪歴史博物館研究紀要』20
- 佐藤武敏 1976『唐長安の宮城について』『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術編』山川出版社
- 佐藤武敏 1977『唐の朝堂について』『難波宮と日本古代国家』培書房
- 佐藤武敏 2004『長安』講談社学術文庫
- 佐野真人 2009『日本における吳天祭祀の受容』『続日本紀研究』379
- 澤村 仁 1995『後期難波宮大極殿の建物はか二・三の問題』『難波宮址の研究10』大阪市文化財協会
- 重見 泰 2020『日本古代都城の形成と王權』吉川弘文館
- 重見 泰 2020b『天武朝の複都構想』『難波宮と古代都城』同成社
- 重見 泰 2023『大極殿の誕生－古代天皇の象徴に迫る－』吉川弘文館
- 志村佳名子 2015『日本古代の王宮構造と政務・儀礼』培書房
- 志村佳名子 2019『宫廷儀礼と轄轍－儀仗制との関わりから－』『条里制・古代都市研究』34
- 城倉正祥 2017『中原都城と草原都城の構造比較』『中国都城・シルクロード都市遺跡の考古学的研究』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- 城倉正祥 2021『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- 白石典之 2022『モンゴル考古学概説』同成社
- 新蔵正道 1995『大宝の遣唐使派遣の背景』『続日本紀研究』293
- 菅谷文則 1987『飛鳥京第III期遺構と掘立柱建築の諸条件考』『横田健一先生古希記念 文化史論叢 上』創元社
- 鈴木 亘 1980『中国の官殿建築における前殿および朝堂（Ⅰ）』『QUADRATO』II
- 鈴木 亘 1982『古代官殿建築における前殿と朝堂』『日本建築学会論文報告集』312
- 鈴木 亘 1990『古代官殿における前殿と朝堂』『平安宮内裏の研究』中央公論美術出版
- 妹尾達彦 1992『唐長安城の儀礼空間－皇帝儀礼の舞台を中心に－』『東洋文化』72
- 妹尾達彦 1998『帝国の宇宙論－中華帝国の祭天儀礼－』『王權のコスモロジー』弘文堂
- 妹尾達彦 2001『長安の都市計画』講談社
- 妹尾達彦 2009『中国都城の沿革と中国都市図の変遷－呂大防『唐長安城圖碑』の分析を中心にして－』『古代都城のかたち』同成社
- 妹尾達彦 2014『太極宮から大明宮へ－唐長安における宮城空間と都市社会の変貌－』『近世東アジア比較都城史の諸相』白帝社
- 妹尾達彦 2020a『東アジアの複都制』『アフロ・ユーラシア大陸の都市と社会』中央大学出版部
- 妹尾達彦 2020b『長安 702年：武則天と倭国朝貢使』『難波宮と古代都城』同成社
- 妹尾達彦 2023『中国史上ただ一人の女性皇帝』『アジア人物史 第3巻 ユーラシア東西ふたつの帝国』集英社
- 閻 晃 1997『律令国家と天命思想』『日本古代の国家と社会』吉川弘文館
- 閻野 貞 1907『平城京及大内裏考』東京帝国大学紀要工科第3冊
- 積山 洋 2002『難波長柄豊碑宮と飛鳥淨御原宮－大極殿の成立をめぐって－』『市大日本史』5
- 積山 洋 2009『大極殿の成立と前期難波宮内裏前殿』『都城制研究2』奈良女子大学古代学術研究センター
- 積山 洋 2010『中国古代都城の外郭城と里坊の制』『歴史研究』48
- 積山 洋 2013a『大極殿の成立と前期難波宮内裏前殿』『古代の都城と東アジア』清文堂
- 積山 洋 2013b『大極殿の展開と後期難波宮』『古代の都城と東アジア』清文堂

- 積山 洋 2023 「前期難波宮と飛鳥宮、藤原宮」『ヒストリア』300
- 外村 中 2009 「賀公彦『周礼疏』と藤原京について」『古代学研究』181
- 外村 中 2010 「魏晋洛陽都城制度考」『人文学報』99 京都大学人文科学研究所
- 外村 中 2011 「唐の長安の西内と東内および日本の平城宮について」『佛教藝術』317
- 瀧川政次郎 1967a 「革命思想と長岡遷都」『法制史論叢 第2冊 京制並びに都城制の研究』角川書店
- 瀧川政次郎 1967b 「複都制と太子監国の制」『法制史論叢 第2冊 京制並びに都城制の研究』角川書店
- 竹内 亮 2009 「藤原宮大極殿をめぐる諸問題」『都城制研究2』奈良女子大学古代学術研究センター
- 竹森友子 2015 「元日朝賀儀・即位式と隼人」『日本古代のみやこを探る』勉誠出版
- 館野和己 2010a 「日本古代の複都制」『都城制研究4 東アジアの複都制』奈良女子大学古代学術研究センター
- 館野和己 2010b 「天武天皇の都城構想」『律令国家史論集』塙書房
- 田中一輝 2017 「西晉時代の都城と政治」朋友書店
- 鶴見泰寿 2023 「飛鳥宮と空間構成」『飛鳥の儀礼と空間構成』東京大学史料編纂所
- 寺崎保広 1984 「平城宮大極殿」『仏教芸術』154
- 寺崎保広 2006a 「朝堂院の朝政に関する覚書」『古代日本の都城と木簡』吉川弘文館
- 寺崎保広 2006b 「平城宮大極殿の検討」『古代日本の都城と木簡』吉川弘文館
- 豊田 久 1980 「周王朝の君主権の構造について」『西周青銅器とその国家』東京大学出版会
- 豊田裕章 2020 「唐の宮室の中心的殿舎の多様化と日本の宮室構造との関わりについて」『難波宮と古代都城』同成社
- 直木孝次郎 1973 「大極殿の起源についての一考察」『人文研究』25-1
- 直木孝次郎 1975 「大極殿の門」『飛鳥奈良時代の研究』塙書房
- 直木孝次郎 1995 「難波宮大極殿の成立」『難波宮址の研究10』大阪市文化財協会
- 直木孝次郎 2005 「天武朝の国際関係と難波宮」『日本古代の氏族と国家』吉川弘文館
- 中尾芳治 1972 「前期難波宮をめぐる諸問題」『考古学雑誌』58-1
- 中尾芳治 1981 「前期難波宮内裏前殿SB1801をめぐって」『難波宮址の研究7 (報告篇)』大阪市文化財協会
- 中尾芳治 1995a 「前期難波宮と唐長安城の宮・皇城」『難波宮の研究』吉川弘文館
- 中尾芳治 1995b 「後期難波宮大極殿院の規模と構造について」『難波宮址の研究10』大阪市文化財協会
- 中尾芳治 2014 「難波宮から藤原宮へ」『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 中村太一 1996 「藤原京と『周礼』王城プラン」『日本歴史』582
- 奈良国立文化財研究所 1985 『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良国立文化財研究所 1986 『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 奈良文化財研究所 2003 『大極殿関係史料(稿)1 儀式書編』
- 奈良文化財研究所 2005a 『大極殿関係史料(稿)2 編年史料』
- 奈良文化財研究所 2005b 『中央区朝堂院の調査-第367・376次-』『奈良文化財研究所紀要2005』
- 奈良文化財研究所 2006a 『中央区朝堂院の調査-第389次-』『奈良文化財研究所紀要2006』
- 奈良文化財研究所 2006b 『朝集殿院の調査-第394次・第399次-』『奈良文化財研究所紀要2006』
- 奈良文化財研究所 2010a 『官衙と門』報告編・資料編 第13回古代官衙・集落研究会報告書
- 奈良文化財研究所 2010b 『図説 平城京事典』株黒社
- 奈良文化財研究所 2019 『特別史跡平城宮跡 大嘗宮』
- 奈良文化財研究所 2020 『藤原宮大極殿院の調査-第200次-』『奈良文化財研究所紀要2020』
- 西嶋定生 1975 「漢代における即位儀礼」『権博士遷贈記念東洋史論叢』山川出版社
- 西嶋定生 2002 「東アジア世界と冊封体制-6~8世紀の東アジア」『西嶋定生東アジア史論集 第3巻』岩波書店
- 西本昌弘 1998 「元日朝賀の成立と孝德朝難波宮」『古代中世の社会と国家』清文堂出版
- 西本昌弘 2004 「孝謙・稱徳天皇の西宮と宝輦遺構」『続日本紀の諸相』塙書房
- 西本昌弘 2008 「七世紀の王宮と政務・儀礼」『日本古代の王宮と儀礼』塙書房
- 西本昌弘 2014 「大藤原京説批判」『飛鳥・藤原と古代王権』同成社

- 西本昌弘 2015 「平城宮第一次太極殿と長安城太極殿・洛陽城乾元殿」『日本古代のみやこを探る』勉誠出版
- 西本昌弘 2017 「日出處・日本の元日朝賀と鯛鳥轆」『日本的时空觀の形成』思文閣出版
- 仁藤教史 1998 「複都制と難波宮」『古代王權と都城』吉川弘文館
- 仁藤教史 2022 「再論・藤原京の京城と条坊」『律令制国家の理念と実像』八木書店
- 橋本義則 1984 「平安宮草創期の農業」『日本政治社会史研究』塙書房
- 橋本義則 1986 「朝政・朝儀の展開」『日本の古代 第7巻 まつりごとの展開』中央公論社
- 馬場 基 2018 「門の格からみた宮の空間」『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館
- 林 博通 2001 「大津京跡の研究」思文閣出版
- 林部 均 1998 「飛鳥淨御原宮の成立ー古代宮都変遷と伝飛鳥板蓋宮跡ー」『日本史研究』434
- 林部 均 2001 「古代宮都形成過程の研究」青木書店
- 林部 均 2005 「古代宮都と天命思想ー飛鳥淨御原宮における太極殿の成立をめぐってー」『律令国家と古代社会』塙書房
- 平澤麻衣子 2002 「平城宮第一次太極殿の基壇と屋根形態」『文化財論叢III』奈良文化財研究所
- 廣瀬 覚 2023 「藤原宮中権部の構造」『考古学ジャーナル』778
- 福田美徳・浅川滋男 2002 「含元殿と麟德殿(唐長安城宮殿の構造と影響)」『建築雑誌』1488
- 福山敏男 1957 「日本における太極殿の起源」『太極殿の研究』平安神宮
- 藤森健太郎 2000 「古代天皇の即位儀礼」吉川弘文館
- 古市 晃 2004 「孝徳朝難波宮と仏教世界ー前期難波宮内裏八角殿院を中心にー」『大阪における都市の発展と構造』山川出版社
- 古川 匠 2020a 「恭仁宮の構造と造営順序」『条里制・古代都市研究』35
- 古瀬奈津子 1992 「儀式における唐礼の継承—奈良末~平安初期の変化を中心にー」『中国礼法と日本律令制』東方書店
- 古瀬奈津子 1998 「日本古代王權と儀式」吉川弘文館
- 堀内和宏 2011 「平城宮太極殿院の空間と儀礼」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56
- 堀 敏一 2006 「東アジア世界の形成ー中国と周辺国家ー」汲古書院
- 松浦千春 1993 「漢より唐に至る帝位繼承と皇太子」『歴史』80
- 松本保宣 1993 「唐代の側門論述について」『東方学』86
- 松本保宣 2006 「唐王朝の宮城と御前会議」晃洋書房
- 松本保宣 2013 「朝堂から宮門へー唐代直訴方式の変遷ー」『外交史料から 10 ~ 14世紀を探る』汲古書院
- 松本保宣 2020 「隋・唐・五代洛陽宮の政治空間について」『隋唐洛陽と東アジア』宝蔵館
- 南澤良彦 2010 「唐代の明堂」『中国哲学論集』36
- 南澤良彦 2018 「中国明堂思想研究ー王朝をささえ Cosmologische 宗廟」岩波書店
- 向井佑介 2012 「曹魏洛陽の宮城をめぐる近年の議論」『史林』95-1
- 村田治郎 1951 「前殿の意味」『日本建築学会研究報告』16
- 村元健一 2010 「後漢雒陽城の南宮と北宮の役割について」『大阪歴史博物館研究紀要』8
- 村元健一 2014 「中國宮城の変遷と難波宮」『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 村元健一 2016 「漢魏晋南北朝時代の都城と陵墓の研究」汲古書院
- 村元健一 2017 「隋唐初の複都制ー七世纪複都制解明の手掛かりとしてー」『大阪歴史博物館研究紀要』15
- 村元健一 2019 「隋洛陽城の成立過程ー恭仁京との比較のためにー」『条里制・古代都市研究』35
- 村元健一 2020 「前期難波宮と唐の太極宮」『難波宮と大化改新』和泉書院
- 村元健一 2020b 「魏晋洛陽宮城の構造」『難波宮と古代都城』同成社
- 村元健一 2022 「日本古代宮都と中国都城」同成社
- 安田二郎 2006 「曹魏の明帝の「宮室修治」をめぐって」『東方学』111
- 山崎道治 1996a 「漢唐間の朝堂について」『古代都城の儀礼空間と構造』奈良国立文化財研究所
- 山崎道治 1996b 「中国朝堂関係史料」『古代都城の儀礼空間と構造』奈良国立文化財研究所
- 山下信一郎 2018 「古代饗宴儀礼の成立と藤原宮太極殿門」『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館

- 山田邦和 2007 「桓武朝における樓閣附設建築」『国立歴史民俗博物館研究報告』134
- 山田邦和 2016 「日本古代都城における複都制の系譜」『日本古代・中世都市論』吉川弘文館
- 山中 章 1997 「長岡宮宝幢遺構」『考古学ジャーナル』418
- 山中 章 2011 「日本古代宮都の羅城をめぐる諸問題」『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会
- 山中俊史 1986 「律令国家の成立」『岩波講座日本考古学』6
- 山元章代 2010 「古代日本の朝堂と朝政・朝參」『ヒストリア』221
- 山元章代 2015 「古代日本の大極殿と「大安殿」」『日本古代のみやこを探る』勉誠出版
- 山元章代 2020 「饗宴と朝堂」『難波宮と古代都城』同成社
- 山本 崇 2004 「御斎会とその施設」『奈良文化財研究所紀要 2004』
- 山本 崇 2012 「平安時代の即位儀とその儀仗—文安御即位調度図考一」『立命館文學』624
- 山本忠尚 2004 「祭殿から内裏前殿へ—梁間三間四面廂付建物の意義ー」『古代文化』56-5・6
- 山本幸男 1988 「聖武朝の難波宮再興」『続日本紀研究』259
- ヤン・ジョンソン 2012 「古代東アジアにおける宮殿の系譜—高句麗と渤海を中心にー」『周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」—歴史学・考古学研究からの視座ー』関西大学文化考証学教育研究拠点
- 楊寬 1987 『中国都城の起源と発展』学生社
- 楊鴻勛 1998 「明堂泛論—明堂の考古学研究ー」『東方学報』70 京都大学人文科学研究所
- 吉江 崇 2003 「律令天皇制儀礼の基礎的構造—高御座に関する考察からー」『史学雑誌』112-3
- 吉川 晃 2003 「文献資料より見た東院地区と東院庭園」『平城宮発掘調査報告書 15』奈良文化財研究所
- 吉川真司 1996 「宮廷儀礼と大極殿・朝堂院ー朝堂の機能を中心につてー」『古代都城の儀礼空間と構造』奈良国立文化財研究所
- 吉川真司 1997 「難波長柄豈破宮の歴史的位置」『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版
- 吉川真司 1999 「長岡宮時代の朝庭儀礼一宝幢遺構からの考察ー」『年報 都城 10』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 吉川真司 2005 「王宮と官人社会」『列島の古代史 3 社会集団と政治組織』岩波書店
- 吉川真司 2007 「大極殿儀式と時期区分論」『国立歴史民俗博物館研究報告』134
- 吉田 歆 2002 「日中宮城の比較研究」吉川弘文館
- 吉田 歆 2006 「大極殿と出御方法」『ヒストリア』201
- 吉田 歆 2021 「古代中国の前殿の創出」『古代日本の政治と制度』同成社
- 吉水眞彦 2020 「近江大津宮中根部の復元について」『難波宮と古代都城』同成社
- 李成市 2000 『東アジア文化圏の形成』山川出版社
- 李成市 2004 「新羅文武・神文王代の集権政策と骨品制」『日本史研究』500
- 李陽浩 2014 「古代東アジアにおける八角形建物とその平面形態ー前期難波宮東・西八角殿研究への予察ー」『難波宮と都城』吉川弘文館
- 和田 葦 1980 「服飾と儀礼」『講座日本の古代信仰 第3巻』学生社
- 和田 葦 1995 「タカミクラーー朝賀・即位式をめぐってー」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰 上』塙書房
- 渡辺晃宏 2003 「平城宮第一次大極殿の成立」『奈良文化財研究所紀要 2003』
- 渡辺晃宏 2006 「平城宮中根部の構造ーその変遷と史的位置ー」『古代中世の政治と権力』吉川弘文館
- 渡辺晃宏 2009 「平城宮大極殿の成立と展開」『都城研究 2』奈良女子大学古代学術研究センター
- 渡辺晃宏 2020 「日本古代国家建設の舞台 平城宮」新泉社
- 渡辺健哉 2017 「元大都形成史の研究ー首都北京の原型ー」東北大出版会
- 渡辺信一郎 1996 「天空の玉座」柏書房
- 渡辺信一郎 2000 「宮闈と園林」『考古学研究』47-2
- 渡辺信一郎 2003 『中国古代の王権と天下秩序』校倉書房
- 渡辺信一郎 2009 「六朝隋唐期の大極殿とその構造」『都城研究 2』奈良女子大学古代学術研究センター
- 渡辺直彦 (校注) 1980 『神道大系 朝儀祭祀編 1 儀式・内裏式』精興社
- 渡邊裕智 2014 『後漢政治制度の研究』早稲田大学出版部

引用文献（中文）※ピンインのアルファベット順、Sim Sun で表記。

- 安家瑶 2001「西安隋唐圜丘的考古发现」『文物天地』2001-1
- 安家瑶 2002「唐长安城的圜丘及其源流」『21世纪中国考古学与世界考古学』中国社会科学出版社
- 安家瑶 2005a「唐大明宫含元殿遗址的几个问题」『论唐代城市建设』陕西人民出版社
- 安家瑶 2005b「唐大明宫含元殿龙尾道形制的探讨」『新世纪的中国考古学』科学出版社
- 陈嫡 2020「对平京城第一次大极殿受唐长安城大明宫含元殿影响的探讨」『山西青年』2020年8月上
- 陈建军・周华・扈晓霞 2020「曹魏洛阳宫太极殿起建位置再探」『许昌学院学报』39-4
- 陈良伟 2016「隋唐东都宫院遗址的发现与研究」『扬州城考古学术研讨会论文集』科学出版社
- 陈苏镇 2021「魏晋洛阳宫的形制与格局」『考古学报』2021-3
- 陈兢 2016「元中都内城所反映的汉地城市与草原城市规划思想初探」『东亚都城和帝陵考古与契丹辽文化国际学术研讨会论文集』科学出版社
- 陈兢 2021「中国古代的理想城市—从古代都城看《考工记》营国制度的渊源与实践」上海古籍出版社
- 陈兢・孙华 2018「中国今古新建都城的形态与规划—从元明中都的考古复原和对比分析出发一」『城市规划』2018-8
- 陈兢・孙华・刘诗秋 2018「元中都考古调查与复原试探—兼谈中国今古都城市发展史的研究」『中国历史地理论丛』2018-8
- 施培德・罗宏才 2006「唐兴庆宫勤政务本楼华萼相辉楼复原初步研究（上）（下）」『文博』2006-5・6
- 渡边信一郎 2021「中国古代的王权与天下秩序」上海人民出版社
- 杜文玉 2012a「唐大明宫含元殿与外朝朝会制度」『唐史论丛』15
- 杜文玉 2012b「唐大明宫宣政殿与唐代中朝制度研究」『乾陵文化研究』7
- 杜文玉・赵水静 2013「唐大明宫紫宸殿与内朝朝会制度研究」『江汉论坛』2013-7
- 冯恩学 2008「北宋熙春阁与元上都大安阁形制考」『边疆考古研究』7
- 傅嘉年 1973「唐长安大明宫含元殿原状的探讨」『文物』1973-7
- 傅熹年 1993「元大都大内宫殿的复原研究」『考古学报』1993-1
- 傅嘉年 1995「隋唐长安洛阳城规制手法的探讨」『文物』1995-3
- 傅嘉年 1998a「对含元殿遗址及原状的再探讨」『文物』1998-4
- 傅熹年 1998b「麟德殿复原的初步研究」『傅熹年建筑史论文集』文物出版社
- 傅熹年 1998c「隋、唐长安、洛阳城规划手法的探讨」『傅熹年建筑史论文集』文物出版社
- 傅熹年主编 2009「中国古代建筑史 第二卷 三国、两晋、南北朝、隋唐、五代建筑」中国建筑工业出版社
- 郭湖生 1981「魏晋南北至隋唐宫室制度沿革兼论日本平城宫的宫室制度」『中国古代科学史论 续篇』京都大学人文科学研究所
- 郭湖生 1990「魏晋南北朝至隋唐宫室制度沿革」『东南文化』1990-21
- 郭湖生 2003「中华都城」空间出版社
- 郭济桥 2001「邺南城昭阳殿考略」『河北省考古文集』2
- 郭济桥 2013「邺南城的宫城形制」『殷都学刊』2013-2
- 郭义孚 1963「含元殿外观复原」『考古』1963-10
- 韩建华 2016a「北宋西京宫城五凤楼研究」『扬州城考古学术研讨会论文集』科学出版社
- 韩建华 2016b「北宋西京洛阳宫皇城形制布局初探」『东亚都城和帝陵考古与契丹辽文化国际学术研讨会论文集』科学出版社
- 韩建华 2016c「试论北宋西京洛阳宫城，皇城的布局及演变」『考古』2016-11
- 韩建华 2018「唐宋洛阳宫城御苑九洲池初探」『中国国家博物馆馆刊』2018-4
- 韩建华 2019「东都洛阳武则天明堂初探」『中原文物』2019-6
- 郝红暖・吴宏岐 2009「辽、西夏，金都城建设对中原制度的模仿与创新」『中南民族大学学报』2009-3
- 黑龙江省文物工作队 1985「渤海海上京宫城第2、3、4号门址发掘简报」『文物』1985-11
- 黑龙江省文物考古研究所 2015「黑龙江宁安渤海海上京城宫城北门址发掘简报」『文物』2015-6
- 黑龙江省文物考古研究所 2019「哈尔滨市阿城区金上京南城南垣西门址发掘简报」『考古』2019-5
- 黑龙江省文物考古研究所 2023「黑龙江哈尔滨市阿城区金上京皇城东部建筑址 2016-2017年发掘简报」『北方文物』2023-5
- 何岁利 2019「唐大明宫“三朝五门”布局的考古学观察」『考古』2019-5

- 贾鸿源 2017「唐长安三朝五门布局考」『唐史论丛』25
- 姜波 1996「唐东都宫城中轴线布局初探」『考古求知集』中国社会科学出版社
- 姜波 2003『汉唐都城礼制建筑研究』文物出版社
- 吉林省文物考古研究所·吉林市博物馆编 2004『丸都山城』文物出版社
- 金子修一 2018『中国古代皇帝祭祀研究』西北大学出版社
- 久保田和男 2021『宋代开封研究』上海古籍出版社
- 林梅村 2011「元大都的凯旋门」『上海文博论丛』2011-2
- 刘春迎 2004『北宋东京城研究』科学出版社
- 刘大平·孙志敏 2018『渤海国建筑形制与上京城宫殿建筑复原研究』哈尔滨工业大学
- 刘敦桢 1996『中国古代建筑史』明文书院
- 刘敦桢 1982「六朝时期之东西堂」『刘敦桢文集(3)』中国建筑工业出版社
- 刘庆柱 2000『古代都城与帝陵考古学研究』科学出版社
- 刘庆柱主编 2016『中国古代都城考古发现与研究』社会科学文献出版社
- 刘晓东 1999「日本古代都城形制渊源考察—兼谈唐渤海国都城形制渊源」『北方文物』1999-4
- 刘晓东 2006『渤海文化研究—以考古发现为视窗』黑龙江人民出版社
- 刘晓东·李陈奇 2006『渤海海上京城“三朝”制建制的探索』『北方文物』2006-1
- 刘晓东·魏存成 1991「渤海海上京主体格局的演变」『北方文物』1991-1
- 刘思忠·杨希义 2009「唐大明宫含元殿与外廊听政」『陕西师范大学学报(哲学社会科学版)』2009-1
- 刘叙杰主编 2009『中国古代建筑史 第一卷 原始社会, 夏, 商, 周, 秦, 汉建筑』中国建筑工业出版社
- 刘振东 2006「西汉长安城的沿革与形制布局的变化」『汉代考古与汉文化国际学术研讨会论文集』齐鲁书社
- 刘致平·傅熹年 1963「麟德殿复原的初步研究」『考古』1963-7
- 吕博 2015「明堂建设与武周的皇帝像」『世界宗教研究』2015-1
- 罗瑾歆 2019「唐长安城太极宫承天门形制初探」『考古』2019-12
- 陆思贤 1999「关于元上都宫城北墙中段的阙式建筑台基」『内蒙古文物考古』1999-2
- 洛阳市文物工作队 1988「隋唐东都应天门遗址发掘简报」『中原文物』1988-3
- 洛阳市文物考古研究院编 2022「隋唐洛阳城城门遗址研究」三秦出版社
- 洛阳市文物局 2017『图说明堂天堂』文物出版社
- 马得志 1961「1959-1960年大明宫发掘简报」『考古』1961-7
- 马得志 1982「唐长安与洛阳」『考古』1982-6
- 马得志 1987「唐长安城发掘新收获」『考古』1987-4
- 马得志 2005「唐大明宫含元殿的建筑形成及其源流」『新世纪的中国考古学』科学出版社
- 姚尾达彦 2012『长安的都市规划』三秦出版社
- 姚尾达彦 2019『隋唐长安与东亚比较都城史』西北大学出版社
- 孟凡人 2013『明朝都城』南京大学出版社
- 聂晓雨·程有为 2017「汉魏洛阳城宫城形制及其影响」『中州学刊』2017-8
- 钱国祥 2002「汉魏洛阳故城沿革与形制演变初探」『21世纪中国考古学与世界考古学』中国社会科学出版社
- 钱国祥 2003「由闕闈门谈汉魏洛阳城宫城形制」『考古』2003-7
- 钱国祥 2010「魏晋洛阳都城对东晋朝建康都城的影响」『考古学集刊』18
- 钱国祥 2016「中国古代汉唐都城形制的演进—由曹魏太极殿谈唐长安城形制的渊源」『中原文物』2016-4
- 钱国祥 2019a「北魏洛阳内城的空间格局复原研究」『华夏考古』2019-4
- 钱国祥 2019b「北魏洛阳外郭城的空间格局复原研究」『华夏考古』2019-6
- 钱国祥 2020「北魏洛阳宫城的空间格局复原研究」『华夏考古』2020-5
- 钱国祥 2022a「东汉洛阳都城的空间格局复原研究」『华夏考古』2022-3
- 钱国祥 2022b「汉魏洛阳城的祭祀礼制建筑空间」『中原文物』2022-4

- 山西省考古研究所等 2005「大同操场城北魏建筑遗址发掘报告」『考古学报』2005-4
- 陕西省文物管理委员会 1958「长安城地基初步探测」『考古学报』1958-3
- 史书记 2023「十六国北朝时期长安城平面布局蠡测」『考古与文物』2023-2
- 石自社 2009「隋唐东都形制布局特点分析」『考古』2009-10
- 石自社 2016「北宋西京洛阳城形态分析」「东亚都城和帝陵考古与契丹辽文化国际学术研讨会论文集」科学出版社
- 石自社 2021「隋唐东都武周天堂遗址试析」『南方文物』2021-3
- 宋玉彬 2009「渤海都城故址研究」『考古』2009-6
- 宿白 1978「隋唐长安城和洛阳城」『考古』1978-6
- 王飞峰 2014「九都山城宫殿址研究」『考古』2014-4
- 王飞峰 2015「安鹤宫年代考」「庆祝魏存成先生七十岁论文集」科学出版社
- 王飞峰 2020「高句丽大型建筑址试论」『北方文物』2020-1
- 王贵祥 2011「唐洛阳宫武氏明堂的建构性复原研究」『中国建筑史论汇刊』2011-4
- 王贵祥 2012『古都洛阳』清华大学出版社
- 王贵祥 2017「消逝的辉煌」清华大学美术出版社
- 王培新 2014「渤海王城址布局比较分析」「东北亚古代聚落与城市考古国际学术研讨会论文集」科学出版社
- 王世仁 1963「汉长安城南郊礼制建筑（大土门村遗址）原状的推測」『考古』1963-9
- 王书林 2020「北宋西京宫城皇城复原」「北宋西京城市考古研究」文物出版社
- 王书林·徐新云 2022「洛阳宫唐武城宫院—宋文明宫院格局探微看一」『南方文物』2022-4
- 王维坤 1990「隋唐长安城与日本平城京的比较研究」『西北大学学报』1990-1
- 王维坤 1991「日本平城京模仿中国都城原型探求」『西北大学学报』1991-2
- 王维坤 1992「日本平城京模仿隋唐长安城原型初探」『文博』1992-3
- 王维坤 2002「论 20 世纪的中日古代都城研究」『文史哲』2002-4
- 王岩 1993「关于唐东都武则天明堂遗址的几个问题」『考古』1993-10
- 王仲殊 1982「中国古代都城概说」『考古』1982-5
- 王仲殊 1983「关于日本古代都城制度的源流」『考古』1983-4
- 王仲殊 1999「论日本古代都城宫内大极殿龙尾道」『考古』1999-3
- 王仲殊 2000「关于日本第七次遣唐使的始末」『考古与文物』2000-3
- 王仲殊 2001a「关于中日两国古代都城，宫殿研究中的若干基本问题」『考古』2001-9
- 王仲殊 2001b「试论探长安城大明宫麟德殿对日本平城京、平安京宫殿设计的影响」『考古』2001-2
- 王仲殊 2002「试论唐长安城与日本平城京及平安京何故皆以东半城（左京）为更繁荣」『考古』2002-11
- 王仲殊 2003「中国古代宫内正殿太极殿的建置及其与东亚诸国的关系」『考古』2003-11
- 王仲殊 2004「论唐长安城圆丘对日本交野圆丘的影响」『考古』2004-10
- 魏存城 2003「渤海都城的布局发展及其与隋唐长安城的关系」『边疆考古研究』2
- 魏存成 2008『渤海考古』文物出版社
- 魏存成 2015「高句丽渤海考古论集」科学出版社
- 魏存成 2016「魏晋至隋唐时期中原地区都城规划布局的发展变化及其对高句丽渤海的影响」『边疆考古研究』20
- 吴春·韩海梅·高本宁主编 2012『唐大明宫史料汇编』文物出版社
- 辛德勇 1989「唐东都武则天明堂遗址质疑」『中国历史地理论丛』1989-3
- 辛德勇 1991「含元殿形制质疑」「隋唐两京从考」三秦出版社
- 徐光冀 1993「曹魏邺城的平面复原研究」「中国考古学论丛」科学出版社
- 徐光冀 2014「东魏北齐邺南城平面布局的复原研究」「邺城考古发现与研究」文物出版社
- 徐龙国 2019「汉魏晋南北朝都城模式及其演变」「中原文物」2019-1
- 徐龙国 2020「汉魏晋南北朝都城建筑的发展演变」「中原文物」2020-3
- 徐龙国 2022「汉长安城考古的收获，进展与思考」『南方文物』2022-2

- 杨鸿勋 1987「唐大明宫麟德殿复原研究阶段报告」《建筑考古学论文集》文物出版社
- 杨鸿勋 1989「唐长安大明宫含元殿复原研究」《庆祝苏秉琦考古五十五年论文集》文物出版社
- 杨鸿勋 1991「唐长安大明宫含元殿应为五风楼形制」《文物天地》1991-5
- 杨鸿勋 1997「唐长安大明宫含元殿复原再论」《城市与设计学报》1
- 杨鸿勋 1998「明堂泛论—明堂的考古学研究—」《东方学报》70
- 杨鸿勋 2001「自我作古 用适于事—武则天标新立异的洛阳明堂」《华夏考古》2001-2
- 杨鸿勋 2009《宫殿考古通论》紫禁城出版社
- 杨鸿勋 2012「宇文恺承前启后的明堂方案」《文物》2002-12
- 杨鸿勋 2013《大明宫》科学出版社
- 杨鸿勋 2023《建筑考古学》科学出版社
- 杨焕新 1994a「略谈隋唐东都宫城，皇城和东城的几个问题」《汉唐与边疆考古研究》1
- 杨焕新 1994b「试谈唐东都洛阳宫的几座主要殿址」《汉唐与边疆考古研究》1
- 杨军凯 2012「唐大明宫“五门”考」《文博》2012-4
- 杨宽 1993《中国古代都城制度史研究》上海古籍出版社
- 杨宽 2016a《中国古代都城制度史研究》上海人民出版社
- 杨宽 2016b《中国古代陵寝制度史研究》上海人民出版社
- 余扶危·李德方 1989「唐东都武则天明堂遗址探索」《河洛春秋》1989-1
- 俞伟超 1985「中国古代都城规划的发展阶段性」《文物》1985-2
- 张建锋 2019「咸阳长安皇宫位置变化的原因考察」《江汉考古》2019-5
- 张建林 2023「唐长安城南北郊的国家祭祀遗迹—以圆丘，方坛为中心—」《東アジア古代都城と祭祀儀礼・宗教空間》東アジア比較都城史研究会
- 张明皓 2019《高句丽宫殿建筑研究》中国建筑工业出版社
- 赵虹光 2009「渤海海上京城宫殿建制研究」《边疆考古研究》8
- 张铁宁 1994「渤海海上京城龙泉府宫殿建筑复原」《文物》1994-6
- 赵永磊 2021「晋宋时期的洛阳城与魏晋太极殿所在基址辨析」《考古》2021-10
- 赵哲夫 2015「从渤海海上京城城墙建筑顺序和营建方式看皇城宫城区域的划分」《庆祝魏存成先生七十岁论文集》科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所 1996「北魏洛阳永宁寺」中国大百科全书出版社
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1997「唐大明宫含元殿遗址 1995-1996 年发掘报告」《考古学报》1997-3
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队 1998「关于唐含元殿遗址发掘资料有关问题的说明」《考古》1998-2
- 中国社会科学院考古研究所 2003「西汉礼制建筑遗址」文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所西安唐城队 2006「西安市唐长安城大明宫丹凤门遗址的发掘」《考古》2006-7
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作队 2007「河南洛阳市隋唐东都应天门遗址 2001-2002 年发掘简报」《考古》2007-5
- 中国社会科学院考古研究所编著 2008「隋仁寿宫唐九成宫考古发掘报告」科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所 2010a「中国考古学—秦汉卷」中国社会科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所 2010b「汉魏洛阳故城南郊礼制建筑遗址」文物出版社
- 中国科学院考古研究所陕西第一工作队 2012「西安市唐大明宫遗址考古新收获」《考古》2012-11
- 中国社会院考古研究所内蒙古第二工作队·内蒙古文物考古研究所 2017「内蒙古巴林左旗辽上京宫城东门遗址发掘简报」《考古》2017-6
- 中国社会科学院考古研究所 2018「秦汉上林苑 2004-2012 年考古报告」文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城工作队·洛阳市文物考古研究院 2019「河南洛阳市隋唐东都宫城核心区南部 2010-2011 年发掘简报」《考古》2019-1
- 中国社会科学院考古研究所 2019「中国考古学—三国魏晋南北朝史—」中国社会科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所等 2020「栎阳宫考古发现与研究」科学出版社
- 中国社会科学院考古研究所等 2022「秦汉栎阳城 1980-1981 / 2012-2018 年考古报告」科学出版社

中国社会科学院考古研究所 2022『汉长安城研究』商务印书馆

中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队 2023『西安市十六国至北朝时期长安城宫城门址的勘探与发掘』『考古』2023-8

朱海仁 1998『略论曹魏邺城，北魏洛阳城，东魏北齐邺城南城平面布局的几个特点』『广州文物考古集』文物出版社

诸葛亮 2016『辽金元时期北京城市研究』东南大学出版社

佐川英治 2015『六朝建康城与日本藤原京』『南京晓庄学院学报』2015-7

東アジア正殿の報告書（中・日文）※中文は Sim Sun、日文は MS 明朝で表記。表3と対応する。

【中原・草原都城】

(1) 秦阿房宮（参考：咸陽宮）

- a. 中国社会科学院考古研究所等 2014『阿房宮考古发现与研究』文物出版社
- b. 陕西省考古研究所 2004『秦都咸陽考古报告』科学出版社

(2) 前漢長安城未央宮

- a. 中国社会科学院考古研究所 1996『汉长安城未央宮』中国大百科全书出版社

(3) 後漢洛陽城南宮

(4) 曹魏・西晉・北魏洛陽城（宮城）

- a. 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队 2015『河南洛阳市汉魏故城发现北魏宮城太极東堂遺址』『考古』2015-10
- b. 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏故城队 2016『河南洛阳市汉魏故城太极殿遺址的发掘』『考古』2016-7
- c. 陈建军・余冰 2019『太极殿建築形制之探讨』『洛阳考古』2019-1

(5) 東魏・北齊鄆城（宮城）

- a. 中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所・河北省临漳县文物旅游局 2014『鄆城考古发现与研究』文物出版社
- b. 中国社会科学院考古研究所・河北省文物考古研究院・鄆城队 2023『河北省临漳县鄆城遺址东魏北齊宮城 206 号大殿基址及附属遺迹』『考古』2023-2

(6) 北周長安城（宮城）

- a. 中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队 2008『西安市十六国至北朝时期长安遺址的勘探与试掘』『考古』2008-9

(7) 唐長安城太極宮

(8) 唐長安城大明宮

- a. 中国科学院考古研究所编著 1959『唐長安大明宮』科学出版社
- b. 中国社会科学院考古研究所编 2007『唐大明宮遺址考古发现与研究』文物出版社

(9) 唐長安興慶宮

- a. 马得志 1959『唐長安興慶宮發掘記』『考古』1959-10

(10) 唐洛陽城（宮城）

- a. 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1988『唐東都武則天明堂遺址發掘簡報』『考古』1988-3
- b. 中国社会科学院考古研究所编 2014『隋唐洛陽城』文物出版社
- c. 洛阳市文物考古研究院 2016『隋唐洛陽城天堂遺址發掘報告』科学出版社

(11) 北宋西京洛陽城（大内）

- a. 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1989『洛陽隋唐東都城 1982-1986 年考古工作紀要』『考古』1989-3
- b. 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1999a『河南洛阳市唐中路宋代大型殿址的发掘』『考古』1999-3
- c. 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1999b『河南洛阳唐宮路北唐宋遺址發掘簡報』『考古』1999-12
- d. 中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 2005『河南洛阳市中州路北唐宋建築基址發掘簡報』『考古』2005-2
- e. 洛阳市文物考古研究院 2016『隋唐洛陽城天堂遺址發掘報告』科学出版社

(12) 北宋東京開封城（大内）

- a. 孟凡人 2019『宋代至清代都城形制布局研究』中国社会科学出版社

(13) 遼上京城（宮城）

- a. 董新林 2019『辽上京規制和北宋东京模式』『考古』2019-5

b. 刘露露 2022「辽上京城的渤海因素探析」『北方文物』2022-2

(14) 辽中京城（宫城）

a. 孟凡人 2019『宋代至清代都城形制布局研究』中国社会科学出版社

(15) 金上京城（宫城）

a. 黑龙江省文物考古研究所 2017「哈尔滨市阿城区金上京皇城西部建筑址 2015 年发掘简报」『考古』2017-6

(16) 金中都（宫城）

a. 孟凡人 2019『宋代至清代都城形制布局研究』中国社会科学出版社

(17) 元上都（宫城）

a. 魏坚 2008『元上都上・下』中国大百科全书出版社

b. 内蒙古师范大学・内蒙古文物考古研究所・内蒙古文物保护中心 2014「内蒙古锡林郭勒盟元上都城址阙式宫殿基址发掘简报」『文物』2014-4

(18) 元中都（宫城）

a. 河北省文物研究所 2012『元中都』文物出版社

(19) 元大都（宫城）

a. 孟凡人 2019『宋代至清代都城形制布局研究』中国社会科学出版社

(20) 明北京城（紫禁城）

a. 孟凡人 2019『宋代至清代都城形制布局研究』中国社会科学出版社

(21) 清北京城（紫禁城）

a. 孟凡人 2019『宋代至清代都城形制布局研究』中国社会科学出版社

【高句丽・渤海都城】

(1) 高句丽安鹤宫

a. 朴灿圭 2015『平壤地区高句丽都城遗迹』香港亚洲出版社

(2) 渤海上京城

a. 黑龙江省文物考古研究所 2009『渤海上京城』文物出版社

b. 赵虹光 2012『渤海上京城考古』科学出版社

(3) 渤海西古城

a. 吉林省文物考古研究所・延边朝鲜族自治州文物局・延边朝鲜族自治州博物馆・和龙市博物馆 2007『西古城』文物出版社

(4) 渤海八连城

a. 吉林省文物考古研究所・吉林大学边疆考古研究中心・珲春市文物管理所 2014『八连城』文物出版社

【日本都城】

(1) 前期難波宮（難波長柄豐崎宮）

a. 大阪市文化財協会 1981『難波宮址の研究 第7（報告篇）』

(2) 近江宮

a. 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会 1992『錦織遺跡－近江大津宮関連遺跡－（本文編・図版編）』

(3) 飛鳥宮III期（飛鳥淨御原宮）

a. 奈良県教育委員会 1978『飛鳥京跡昭和 52 年度発掘調査概報 奈良県遺跡調査概報 1977 年度』

b. 奈良県立橿原考古学研究所 2008『飛鳥京跡 III』

(4) 藤原宮

a. 日本古文化研究所 1936『藤原宮址伝説地高殿の調査 I』日本古文化研究所報告第2

b. 奈良文化財研究所 2003『藤原宮の調査 大極殿の調査－第 117 次－』『奈良文化財研究所紀要 2003』

c. 奈良文化財研究所 2016『藤原宮大極殿基壇の測量調査－第 186 次－』『奈良文化財研究所紀要 2016』

d. 奈良文化財研究所 2022『藤原宮大極殿院の調査－飛鳥藤原第 210 次調査 現地見学会資料－』

e. 奈良文化財研究所 2023『藤原宮大極殿院の調査－第 210 次－』『奈良文化財研究所発掘調査報告』

(5) 平城宮

a. 奈良国立文化財研究所 1982 『平城宮発掘調査報告 11 第一次大極殿地域の調査』奈良国立文化財研究所学報第 40 冊

b. 奈良国立文化財研究所 1993 『平城宮発掘調査報告 14 第二次大極殿院の調査』奈良国立文化財研究所学報第 51 冊

c. 奈良文化財研究所 2009 『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 1 基壇・礎石』奈良文化財研究所学報第 79 冊

d. 奈良文化財研究所 2011 『平城宮発掘調査報告 17 第一次大極殿院地区の調査 2』奈良文化財研究所学報第 84 冊

(6) 茶仁宮

a. 中谷雅治・上原真人 1977 「茶仁宮跡昭和 51 年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 (1977)』京都府教育委員会

b. 中谷雅治・上原真人・大槻真純 1978 「茶仁宮跡昭和 52 年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 (1978)』京都府教育委員会

c. 古川匠 2020b 「茶仁宮中権部の儀礼空間とその構成」『難波宮と古代都城』同成社

(7) 後期難波宮

a. 大阪市文化財協会 1995 『難波宮址の研究 10 後期難波宮大極殿院地域の調査』

(8) 長岡宮

a. 向日市史編さん委員会 1983 『向日市史 上巻』京都府向日市

(9) 平安宮

a. 古代学協会 1976 『平安宮大極殿跡の発掘調査』平安京跡発掘調査報告書第 1 編

b. 古代学協会 1983 『平安宮推定大極殿跡発掘調査報告書』

c. 角田文衛監修 1994 『平安京提要』角川書店

d. 京都市文化市民局 2008 『平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡』『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』

図表出典一覧 ※中文は Sim Sun、日文は MS 明朝で表記。

図 1 積山 2013a p. 64 図 2 • p. 67 図 4、奈良文化財研究所 2020 p. 80 図 102 (廣瀬覚氏提供) を改変して作成。

図 2 重見 2020a p. 82 • P83 図 17 を改変して作成。

図 3 奈良文化財研究所 2010b p. 52 図を改変して作成。

図 4 中央区 : 小澤 2003 p. 334 第 37 図、東区 : 寺崎 2006b p. 55 図 6 を改変して作成。

図 5 奈良文化財研究所 2010b p. 93 図を改変して作成。

図 6 角田 1994 p. 153 図 11 • p. 157 図 14 を改変して作成。

図 7 上 : 重見 2020a p. 158 • 159 第 23 図、下 : 渡辺 2020 p. 12 図 7 を改変して作成。

図 8 後期難波宮大極殿 : 澤村 1995 p. 190 Fig. 58 • p. 195 Fig. 62、中枢部の変遷 : 中尾 1995b Fig. 54 を改変して作成。

図 9 鬼頭 2000 p. 289 図 2 • 3 を改変して作成。

図 10 大澤 2019 p. 17 図 4 • p. 20 図 7 • p21 図 9 • p. 25 図 13 • p. 28 図 17 • p. 34 図 20 を改変して作成。

図 11 構造: 寺崎 2006b p. 109 図 15、年表: 寺崎 2006b p. 110 表 7、中央区大嘗宮・大嘗宮の変遷: 奈良文化財研究所 2019 リーフレットを改変して作成。

図 12 渡辺 1996 p165 図 9 • p. 164 表 II を改変して作成。

図 13 藤森 2000 p. 28 図 1 • p. 29 図 2 • p. 32 図 3 • p. 33 図 4 • p. 46 図 5 • p. 47 図 6 を改変して作成。

図 14 儀礼の日中比較 : 藤森 2000 p. 27 表 1、儀礼の概略 : 寺崎 2006b p. 44 表 2、高御座 : 和田 1995 p. 172 第 1 図、宝幢 : 吉川 2007 p. 9 図 1 を改変して作成。

図 15 山本 2004 p. 35 図 39 • p. 36 図 40 • p. 36 図 41 を改変して作成。

図 16 王 2008a p. 15 図 9 • p. 16 図 10 を改変して作成。

図 17 渡辺 2009 p. 88 図 5 • 6 を改変して作成。

図 18 内田 2004 p. 19 付図 1 を改変・再トレイスして作成。

図 19 左 : 松本 2020 p. 172 図 5 • 6、右 : 吉田 2002 p. 93 第 9 図を改変して作成。

図 20 钱国祥 2022a p. 91 図 1 • p. 93 図 2 を改変して作成。

図 21 曹魏鄆北城 : 中国社会科学院考古研究所 2018 p. 52 図 1 – 14、北魏洛陽城 : 佐川 2016 p. 178 図 4 を改変して作成。

図 22 曹魏西晉洛陽城 : 钱国祥 2022b p. 106 図 3、南朝建康城 : 钱国祥 2010 p. 400 図 4 を改変して作成。

- 図 23 宋呂大坊唐長安城図：傅熹年主编 2009 p. 384 図 3-2-1、唐長安城太極宮：傅熹年主编 2009 p. 385 図 3-2-2、唐洛陽城宮城：傅熹年主编 2009 p. 393 図 3-2-5 を改変して作成。
- 図 24 何岁利 2019 p. 110 図 3・p. 107 図 2 を改変して作成。
- 図 25 楊 1998 p. 51 図 30a・p. 52 図 30b・p. 57 図 32・p. 57 図 33・p. 65 図 39・p. 69 図 40、楊鴻勛 2012 p. 65 図 1・p. 66 図 2 を改変して作成。
- 図 26 明堂の位置：洛阳市文物考古研究院 2016 p. 5 図 3、明堂閨闈圖と平面圖：韓建華 2019 p. 116 図 3・p. 117 図 4・p. 118 図 6・p. 118 図 7、唐永徽明堂と武則天明堂の復原：傅熹年主编 2009 p. 435 図 3-3-2・p. 437 図 3-3-5 を改変して作成。
- 図 27 天堂の位置と写真：洛阳市文物考古研究院 2016 p. 20 図 13・図版 7・図版 8、唐洛陽城の中軸線と天堂実測圖：石自社 2021 p. 94 図 2・4 を改変して作成。
- 図 28 7号建築：洛阳市文物考古研究院 2016 p. 27 図 15、唐洛陽城の中枢部と北宋期建物：王书林・徐新云 2022 p. 177 図 7・p. 179 図 10 を改変して作成。
- 図 29 唐宋洛陽城の中軸：中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1989 p. 247 図 9、北宋西京の中軸：韓建華 2016a p. 267 図 12、その他：韓建華 2016c p. 116 図 1・p. 116 図 2・p. 117 図 3・p. 118 図 4 を改変して作成。
- 図 30 松本 2020 p. 172 図 5・6 を改変して作成。
- 図 31 孟凡人 2019 図 1-2・図 1-8 を改変して作成。
- 図 32 高句麗安鶴宮：朴灿奎 2015 p. 23 図 15、渤海海上京城と遼上京城：劉露露 2022 p. 56 図 1・p. 58 図 2 を改変して作成。
- 図 33 諸葛淨 2016 p. 73 図 5-7・p. 78 図 5-13・p. 83 図 5-14 を改変して作成。
- 図 34 渤海上京城：黒龍江省文物考古研究所等 2009 pp. 15-16 図 9、渤海西古城：吉林省文物考古研究所等 2007 p. 15 図 10、渤海八連城：吉林省文物考古研究所等 2014 p. 291 図 238 を改変して作成。
- 図 35 咸陽宮・阿房宮の位置：中国社会科学院考古研究所等 2014 p. 58 図 1・咸陽宮：陝西省考古研究所 2004 図 2・249、阿房宮：中国社会科学院考古研究所等 2014 p. 59 図 2・p. 86 図 11 を改変して作成。
- 図 36 中国社会科学院考古研究所 1996 p. 5 図 3・p. 16 図 11 を改変して作成。
- 図 37 ① 北魏洛陽城：錢國祥 2018 p. 11 図 4、東魏北齊鄆城：中国社会科学院考古研究所 2018 p. 61 図 1-18、東魏北齊鄆城の最新成果：中国社会科学院考古研究所等 2023 p. 53 図 2 を改変して作成。
- 図 37 ② 東魏北齊鄆城 206 大殿：中国社会科学院考古研究所等 2023 図 6、北魏洛陽城太極殿：陳建军・余冰 2019 p. 36 図 1 を改変して作成。
- 図 38 上の復原圖：史衡忻 2023 p. 143 図 7・8、下の実測圖：中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊 2008 p. 26 図 2・p. 27 図 3 を改変して作成。
- 図 39 ① 太極宮：妹尾 2001 p. 123 図 32、大明宮：何岁利 2019 p. 106 図 1・含元殿・翔鸞閣・樓鳳閣：中国社会科学院考古研究所編 2007 p. 89 図 5・p. 93 図 8・p. 95 図 11 を改変して作成。
- 図 39 ② 朝堂：中国社会科学院考古研究所編 2007 p. 72-72 図 3～5、麟德殿：中国社会科学院考古研究所編 2007 p. 41 図 21、含元殿の復原案：楊鴻勛 2013 p. 226 図 4-23・郭又孚 1963 p. 32 図 1・傅熹年 1998a p. 418 図 3、唐九成宮 37 号宮殿：傅熹年 1998a p. 420 図 5 を改変して作成。
- 図 40 長安城圖碑：陝西省文物管理委員会 1958 附圖 3、興慶宮：馬得志 1959 p. 550 図 2・p. 551 図 3 を改変して作成。
- 図 41 宮城：石自社 2021 p. 94 図 2、明堂中心坑：中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1988 p. 229 図 2、天堂中心坑：洛阳市文物考古研究院 2016 p. 29 図 17、明堂：韓建華 2019 p. 116 図 3、天堂：洛阳市文物考古研究院 2016 図 16 を改変して作成。
- 図 42 宋西京城図：韓建華 2016c p. 116 図 2、天堂の位置・1・2号建築：洛阳市文物考古研究院 2016 p. 27 図 15・pp. 58-59 図 29 を改変して作成。
- 図 43 北宋開封城：孟凡人 2019 図 1-8、遼上京城：劉露露 2022 p. 56 図 1、遼中京城：孟凡人 2019 図 3-3 を改変して作成。
- 図 44 黑龍江省文物考古研究所 2017 p. 45 図 2・p. 48 図 6 を改変して作成。
- 図 45 孟凡人 2019 図 4-8 を改変して作成。
- 図 46 宮城：魏堅 2008 図 4、1号基壇：魏堅 2008 p. 302 図 5・図 6、2号基壇：内蒙古师范大学等 2014 p. 46 図 2 を改変して作成。
- 図 47 河北省文物研究所 2012 図 3・図 4・図 87 を改変して作成。

- 図 48 孟凡人 2019 図 6-10・図 6-11 を改変して作成。
- 図 49 明崇禎城：孟凡人 2019 図 10-6、清崇禎城：孟凡人 2019 図 11-11、清太和殿：孟凡人 2019 図 10-13、清中和殿：孟凡人 2019 図 10-14 を改変して作成。
- 図 50 朴灿圭 2015 p. 23 図 15・p. 37 図 39・p. 39 図 42・p. 35 図 36 を改変して作成。
- 図 51 黑龙江省文物考古研究所 2009 pp. 15-16 図 9・p. 438 図 315・p. 249 図 180・pp. 253-254 図 181・pp. 233-234 図 172・pp. 31-32 図 16 を改変して作成。
- 図 52 吉林省文物考古研究所等 2007 p. 15 図 10・pp. 257-258 図 158・pp. 321-322 図 196 を改変して作成。
- 図 53 吉林省文物考古研究所等 2014 p. 292 図 239・p. 53 図 40・p. 55 図 41・p. 134 図 106・p. 133 図 105 を改変して作成。
- 図 54 宮城：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 111 図 1（大阪市教育委員会事務局文化財保護課 2023 図 1を基に図版を改変）、軒廊：村元 2002 p. 91 図 19、内裏前殿：大阪市文化財協会 1981 p. 31 Fig. 9／図面 16 を改変して作成。
- 図 55 宮城：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 3 図 1、SB015：滋賀県教育委員会文化部文化財保護課ほか 1992 p. 145 第 145 図を改変して作成。
- 図 56 飛鳥宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 1 図 1、SB7701：奈良県教育委員会 1978 図 3、SB7910：奈良県立橿原考古学研究所 2008 図面 12 遺構図 10 を改変して作成。
- 図 57 藤原宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 4 図 1、中枢部：廣瀬 2023 p. 7 図 1、後殿：奈良文化財研究所 2022 平面図、大極殿：奈良文化財研究所 2016 p. 77 図 83、SB530：奈良文化財研究所 2003 p. 79 図 76 を改変して作成。
- 図 58 ① 平城宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 27 図 1、第一次・第二次大極殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 34 図 15・p. 42 図 38、第一次大極殿院遺構図：奈良国立文化財研究所 1982 PLAN3 を改変して作成。
- 図 58 ② 中央区大極殿：奈良文化財研究所 2011 p. 55 図 20、SN6601：奈良国立文化財研究所 1982 PLAN29、SB7700：奈良国立文化財研究所 1993 PLAN. 8 を改変して作成。
- 図 58 ③ SB10000：奈良国立文化財研究所 1993 PLAN. 5、SB9150：奈良国立文化財研究所 1993 PLAN. 4 を改変して作成。
- 図 59 儀礼空間・朝堂院地区・中枢部：古川 2020 p. 504 図 6・p. 501 図 3・p. 497 図 1、SB5100 の復原・実測図・礎石：中谷ほか 1978 p. 23 第 8 図・pp. 5-6 第 2 図・p. 10 第 4 図を改変して作成。
- 図 60 ① 大阪市文化財協会 1995 図面 2 を改変して作成。
- 図 60 ② 後期難波宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 112 図 2、SB1326・SB1321：大阪市文化財協会 1995 図面 4・7 を改変して作成。
- 図 61 宮城：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 125 図 2、大極殿院：向日市史編さん委員会 1983 p. 362 図 86 を改変して作成。
- 図 62 大極殿院：角田 1994 p. 152 図 10、豊樂院：角田 1994 p. 156 図 13、豊樂院・朝堂院：角田 1994 p. 153 図 11・p. 157 図 14、豊楽殿・清暑堂：京都市文化市民局 2008 p. 43 図 44 を改変して作成。
- 図 63 漢魏洛陽城太極殿：陈建军・余冰 2019 p. 36 図 1、仁寿殿：杨鸿勋 2013 p. 367 図 9-11、前漢長安城明堂：楊 1998 p. 57 図 32、後漢洛陽城明堂：楊 1998 p. 65 図 39、元含元殿：中国社会科学院考古研究所编 2007 p. 89 図 5、天就：洛阳市文物考古研究院 2016 国 16、明堂：韩建华 2019 p. 116 国 3、文明殿：洛阳市文物考古研究院 2016 pp. 58-59 国 29、元上都 1 号宫殿：河北省文物研究所 2012 国 87、元大都大明殿：孟凡人 2019 国 6-11、崇禁城三殿：孟凡人 2019 国 11-11 を改変して作成。
- 図 64 唐宋洛阳城：王书林・徐新云 2022 p. 179 国 10 に洛阳市文物考古研究院 2016 pp. 58-59 国 29 と中国社会科学院考古研究所洛阳唐城队 1989 p. 247 国 9 を合成、北宋东京开封城：孟凡人 2019 国 1-8 を改変して作成。
- 図 65 渤海上京城中軸上の建造物：黑龙江省文物考古研究所 2015 p. 6 国 2／黑龙江省文物考古研究所 2009 p. 438 国 315・pp. 253-254 国 181・p. 249 国 180・pp. 233-234 国 172・pp. 31-32 国 16・pp. 15-16 国 9 右／黑龙江省文物工作队 1985 p. 52 国 2、西古城の 5 号宫殿・寝殿：吉林省文物考古研究所等 2007 pp. 257-258 国 158・pp. 321-322 国 196、八連城の寝殿：吉林省文物考古研究所等 2014 p. 53 国 40、高句丽安鹤宫の三殿：朴灿圭 2015 p. 37 国 39・p. 39 国 42・p. 35 国 36 を改変して作成。
- 図 66 東魏北齐邺城と 206・209 大殿：中国社会科学院考古研究所等 2023 p. 53 国 2、渤海海上京城の寝殿：刘大平・孙志敏 2018 p. 247 国 6-44 を改変して作成。
- 図 67 前期難波宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 3 国 1、飛鳥宮エビノコ郭正殿 SB7701：奈良県教育委員会 1978 国 3、藤原宮大極殿院：廣瀬 2023 p. 7 国 1、平城宮中央区大極殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 34 国 15、平城宮東区大極殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 42 国 38、後期難波宮：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 112 国 2、長岡宮大極殿院：

向日市史編さん委員会 1983 p. 362 図 86、平安宮朝堂院：角田 1994 p. 152 図 10 を改変して作成。

図 68 唐洛陽城応天門：中国社会科学院考古研究所 2014 p. 400 図 5-49、唐長安城承天門：罗瑾歆 2019 p. 79 図 6、大明宮含元殿と朝堂：中国社会科学院考古研究所編 2007 p. 89 図 5・pp. 72-72 図 3～5、平城宮東区下層朝堂：寺崎 2006b p. 55 図 6 を改変して作成。

図 69 前期難波宮と藤原宮：奈良文化財研究所 2020 p. 80 図 102（廣瀬覚氏提供）、平城宮の樓閣：上野 2010 p. 11 図 1 を改変して作成。

図 70 唐永徽明堂：姜波 1996 p. 442 図 3、唐洛陽城明堂と中心坑：韩建华 2019 p. 116 図 3・中国社会科学院考古研究所洛陽唐城队 1988 p229 図 2、前期難波宮八角殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 111 図 1、平安宮大極殿院の舗設：山本 2004 p. 36 図 41 を改変して作成。

図 71 「後殿」の分類：各都城の報告書から模式図を作成。唐太極殿の房：吉田 2006 p. 4 第 1 図、日本都城の「後殿」の変遷：廣瀬 2023 p. 10 図 2 を改変して作成。

図 72 漢魏洛陽城太極殿：陈建军・余冰 2019 p. 36 図 1、大明宮含元殿：中国社会科学院考古研究所編 2007 p. 89 図 5、洛陽城明堂：韩建华 2019 p. 116 図 3、渤海海上京城 1 号宫殿：刘大平・孙志敏 2018 p. 159 図 5-3、2 号宫殿：黑龙江省文物考古研究所 2009 pp. 31-32 図 16、平城宮中央区大極殿：奈良文化財研究所 2011 p. 55 図 20、東区大極殿院：奈良国立文化財研究所 1993 PLAN. 4・5 を改変して作成。

図 73 唐長安城大明宮の建築群：中国社会科学院考古研究所編 2007 p. 89 図 5・pp. 72-72 図 3～5・中国社会科学院考古研究所西安唐城队 2006 p. 42 図 4、渤海海上京城：赵虹光 2009 p. 147 図 44、平城宮中央区大極殿院：奈良文化財研究所 2010a 資料編 p. 34 図 15、大明宮麟德殿：中国社会科学院考古研究所編 2007 p. 41 図 21、渤海海上京城 5 号宫殿：黑龙江省文物考古研究所 2009 p. 438 図 315、平城宮中央区朝堂院：奈良文化財研究所 2010b p. 77 中枢部図版を改変して作成。

表 1 宿白 1978 p. 423 表を改変して作成。

表 2 刘晓东・李陈奇 2006、王 2008b、今井 2012、魏存成 2016 の研究成果に基づいて作成。

表 3 発掘遺構の分析データを基に作成。表中の報告書番号は、東アジア正殿の報告書と対応する。

表 4 城倉 2021 p. 183 表 3 をアップデートして作成。

索引（造構関連用語）

あ **房宮前殿** 1, 29, 30, 50, 52, 88, 113

い

う

え **永寧寺** 57, 106 **エビノヨ郭正殿** 2, 3, 8, 11, 21, 24, 50, 76, 98, 106, 108, 109, 113
延英殿 42, 92 **円丘** 23, 29, 31, 112 **延休堂** 16, 100 **延春閣** 44, 69, 92

お **応天門** 36, 44, 92, 103 **オンドル** 71, 73, 75, 93

か **獨立殿** 18 **回廊** 8, 11, 12, 50, 61, 70, 71, 75, 77, 83, 85, 87, 98, 99, 103, 104, 106
花萼相輝樓 60, 61, 89, 100, 112, 113 **角樓** 57 **滴梁式門** 36 **觀象門** 57
甘泉宮前殿 29, 50 **外郭城** 26, 27, 31, 45, 92, 93, 114
外廟 12, 16, 24, 27, 35, 44, 45, 46, 47, 53, 54, 55, 57, 63, 70, 88, 92, 93, 99, 113
含元殿 1, 4, 5, 10, 12, 13, 16, 18, 19, 25, 26, 35, 36, 46, 47, 48, 49, 57, 60, 61, 62,
 68, 71, 87, 88, 89, 91, 92, 93, 95, 96, 98, 99, 100, 101, 106, 108, 109, 110, 111,
 112, 113, 114

かんげん **含元殿型大極殿** 96, 98, 99, 100, 101, 109, 112, 113

きしゅん **熙春閣** 44, 68, 92 **木階** 9, 13, 83

きほん **基本構造** 3, 15, 18, 27, 29, 32, 57, 69, 71, 73, 89, 91, 93, 95, 96, 98, 108, 109, 113

きゅう **九洲池** 36, 39, 101 **九成宮** 37 **号宮殿** 57, 106

きゆう **宮城** 1, 4, 9, 11, 15, 16, 24, 26, 27, 29, 30, 31, 32, 33, 36, 39, 40, 42, 43, 44, 45, 46,
 47, 48, 50, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 61, 62, 63, 64, 67, 68, 69, 70, 71, 73, 75, 87,
 88, 89, 91, 92, 93, 95, 96, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 106, 108, 109, 110, 111,
 112, 113, 114

きゆう **曲江池** 112 **勤政務本棟** 49, 61, 89, 100, 112, 113

きりん **儀礼的宮城正門** 99, 100, 103, 109, 114

く **空間的皇城正門** 109

け **乾元殿** 1, 36, 39, 62, 88, 89, 102, 108 **乾陽殿** 36, 62, 88, 89, 108

きよ **月台** 40, 45, 62, 68, 69

こ **後闇** 40, 63, 67, 92, 104, 106, 114 **香闇** 45, 67, 68, 69, 92 **皇極殿** 49

こうじ **皇城** 16, 27, 29, 31, 36, 40, 42, 43, 44, 45, 64, 67, 92, 93, 99, 109, 114

こうじ **工字形正殿** 11, 42, 47, 50, 88, 91, 92, 104, 106, 108, 113, 114

こうじ **後殿** 2, 8, 9, 11, 12, 16, 50, 60, 71, 75, 76, 77, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 96, 98, 104, 106,
 108

こうぼう **後房** 11, 104, 106, 108, 114

こうじ **閨門** 5, 7, 11, 12, 15, 16, 53, 54, 63, 67, 98, 99, 100, 101, 104, 108, 112, 114

こうじ **披拂** 63 **軒廊** 2, 9, 11, 75, 83, 84, 86, 87, 98, 104, 114

こうじ **5号宮殿** 45, 46, 71, 73, 74, 96, 98, 100, 112, 113, 114 **五鳳樓** 36, 39, 92

さ **三台** 47, 50, 70, 92, 104, 106, 108, 113 **三朝制** 1, 2, 12, 16, 27, 29, 35, 45, 47, 48

さん **三殿** 43, 45, 47, 48, 60, 70, 88, 92, 104

しゃん **紫宸殿** 12, 41, 47, 57, 92, 93 **四神旗** 13, 14, 19 **司馬門** 31

しゃん **小安殿** 8, 11, 87, 104, 106, 108 **閨闥門** 31, 53, 54 **承礎石** 57, 106

しゃん **承天門** 12, 16, 27, 36, 46, 57, 89, 91, 93, 99, 103, 106, 109 **昌福堂** 16, 100

しゃん **昭陽殿** 32, 33, 53, 54, 55, 56, 88, 95, 104, 106, 113 **翔鸞閣** 12, 35, 57, 89

松林苑	112	鐘樓	63	寝殿	45, 68, 69, 70, 71, 92, 95, 96, 104, 114	仁政殿	44, 67
仁寿殿	88						
垂拱殿	44	朱雀大街	25	朱雀大街	25		
朱雀門	4, 14, 31, 77, 98, 109						
栖霞楼	103	正衛	41, 63, 92, 104	畫景樓	103	清暑堂	87
西房	11, 104	鳳凰閣	12, 35, 57, 89	宣政殿	12, 41, 47, 57, 92, 93	宣德門	36, 92
坤精擁壁	9, 13, 77, 83	前朝後寢	45, 47, 54, 93, 104	千步廊	39, 44	宣陽門	31
双軸	31, 43, 47, 63, 88, 91, 92, 101, 108, 113	蒼龍樓	103				
第一次大極殿	4, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 25, 77, 96, 98						
第二次大極殿	4, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 77	太液池	35				
太極殿	1, 2, 4, 9, 10, 11, 12, 13, 16, 17, 18, 19, 24, 25, 27, 29, 30, 31, 32, 39, 40, 47, 48, 49, 50, 53, 54, 55, 57, 60, 62, 63, 87, 88, 89, 91, 92, 93, 95, 96, 98, 99, 101, 104, 106, 108, 109, 110, 111, 113, 114						
太極殿型太極殿	96, 98, 99, 100, 106, 109, 113	太和殿	1, 44, 49, 70, 92, 104				
高御座	11, 20, 21, 102, 103, 104	單一宮城制	31, 88	單軸	92		
丹鳳門	12, 35, 47, 57, 71, 93, 108, 109, 110	單廊	71, 75, 104				
大安閣	44, 49, 68, 92	大安殿	3, 7, 8, 44, 49, 67, 68, 70, 92				
第一堂	15, 16, 99, 100, 114	大慶殿	1, 41, 49, 63, 70, 89, 91, 92, 104, 106				
大極殿	2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 19, 20, 21, 23, 24, 25, 29, 47, 50, 76, 77, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 93, 96, 98, 99, 100, 101, 103, 104, 106, 108, 109, 111, 112, 113, 114						
大寶宮	8, 18	內裏後殿	75, 96, 98	內裏正殿	2, 8, 11, 27, 50, 75, 76, 96, 104		
內裏前殿	2, 3, 8, 10, 11, 16, 24, 27, 50, 75, 98, 104, 108						
內裏南門	2, 4, 16, 27, 76, 99, 101, 103, 114						
中央区大極殿	4, 7, 8, 12, 13, 19, 47, 50, 77, 83, 93, 98, 100, 101, 104, 108, 109, 112, 114						
中朝	12, 16, 27, 45, 46, 47, 53, 57						
柱廊	11, 40, 45, 62, 63, 68, 69, 70, 71, 75, 92, 104, 106	中和殿	44, 70, 92, 104				
朝集堂	10, 15	聽政殿	31, 53, 88	朝庭	2, 5, 7, 12, 13, 15, 18, 19, 111		
朝堂	2, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 19, 20, 21, 23, 29, 31, 35, 36, 57, 71, 85, 87, 88, 89, 93, 96, 98, 99, 100, 101, 103, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114						
通乾門	57	通天宮	1, 36, 62, 89				
天興殿	39	天枢	36, 89, 102				
天堂	35, 36, 40, 42, 62, 63, 89, 91, 92, 101, 102, 108, 113						
東西堂	2, 4, 11, 16, 24, 29, 31, 32, 47, 48, 53, 54, 55, 88, 95, 104, 106, 113						
東西房	106	東堂	29, 32, 53, 54	登聞鼓	16, 36, 57, 89	東房	11, 104
幡旗	13, 14, 85, 99, 110	幡帳	13				
内朝	12, 27, 45, 46, 47, 53, 54, 57, 95	南北長殿	2, 99				
西宮	8, 13, 18, 25, 26, 56, 101, 112	西樓	4, 8, 12, 14, 103, 114				
206・209 大殿	55, 56, 75, 95, 96, 104, 113						

は	<u>肺石</u>	16, 36, 57, 89	<u>配房</u>	40, 62	<u>八角壇</u>	102, 103	
	<u>八角殿</u>	2, 4, 88, 99, 101, 102, 103, 114			<u>万象神宮</u>	1, 36, 62, 89, 102	
ひ	<u>東区大極殿</u>	4, 7, 12, 50, 77, 83, 85, 99, 103, 104, 108, 112, 114					
	<u>東樓</u>	4, 12, 76, 77, 85, 103	<u>百官待漏院</u>	15	<u>白虎樓</u>	103	
ふ	<u>副陞</u>	57	<u>複廊</u>	56, 75, 95, 98	<u>武成殿</u>	41, 62, 92	
						<u>豐樂殿</u>	50, 87, 112
へ	<u>騎列剎</u>	31, 43, 47, 88, 91, 113					
ほ	<u>方丘</u>	102, 103	<u>宝幢</u>	13, 14, 19	<u>保和殿</u>	44, 70, 92, 104	
						<u>穆清閣</u>	44, 68, 92

ま						
み	<u>未央宮前殿</u>	1, 29, 49, 50, 88, 113	<u>壬生門</u>	77, 98		
む						
め	<u>明堂</u>	1, 35, 36, 39, 42, 47, 48, 49, 62, 63, 87, 88, 89, 91, 92, 98, 101, 102, 103, 108, 109, 111, 113, 114				
も						

や	<u>楊梅宮</u>	113
ゆ	<u>悠紀院</u>	18
よ		

ら						
り	<u>里坊</u>	25, 27, 43, 114	<u>龍尾壇</u>	13		
	<u>龍尾道</u>	12, 13, 25, 35, 47, 48, 50, 57, 83, 89, 91, 93, 98, 99, 100, 106, 110				
	<u>両儀殿</u>	12, 27, 57				
	<u>麟德殿</u>	25, 26, 35, 36, 46, 57, 60, 71, 73, 89, 93, 96, 98, 100, 101, 109, 111, 112, 113, 114				
る						
れ	<u>礼制建築</u>	33, 47, 62, 89, 98, 101, 102, 103, 108, 113, 114	<u>連廊</u>	55, 56, 75		
ろ	<u>捲閣台</u>	33, 49, 56, 57	<u>廊廡</u>	67, 70, 71, 73, 74, 75, 93, 95, 104, 108, 110		
	<u>廊房</u>	33, 54, 55, 56				

わ
を
ん

結言

本書の位置付け

本書は、例言で記載した2つの科研費、①空間構造科研、②中枢部科研の成果である。①は本来、2017～2020年の4年間の計画だったが、2019年末から始まった世界的なコロナ禍により、中央アジア・中国での活動が出来ない状態となり、やむを得ず国内での分析作業に集中することになった。そのため、①と②の課題を連動させて、中枢部の空間構造を遺構の国際比較から考究する科研費報告書として本書を刊行した。本報告は、中国都城研究シリーズ（調査研究報告第2・5・6冊）の3冊目となる。都城において特定の機能を持つ遺構に注目した研究としては、正門（第5冊）に続く第2弾で、正殿（6冊）に焦点を当てた。次回以降は、もう一つの中枢である礼制建築、および外郭城（里坊）へと分析を進める予定である。

本書の内容と今後の展望

本書の成果については、「おわりに」で16項目に整理した。本研究は、東アジア都城の中枢正殿の発掘遺構に注目し、その規模・構造・機能・空間配置を時空間を越えて比較するというシンプルな試みである。しかし、コンセプトとしてはシンプルであっても、実際には日中両言語で積み重ねられてきた膨大な研究史を整理し、発掘報告書を悉皆的に集成して構造を検討する基礎作業には、多くの時間を使う必要があった。先学の多くの研究成果を1つ1つ検証しながら、考察に繋がる論点を整理することも容易な作業ではなかった。自分自身で発掘した遺構は含まれていないため、細部の検証には限界があるものの、中国都城における正殿の変遷と唐代を中心とした東アジアへの展開過程の実態に関しては、大枠を示すことができたと考える。

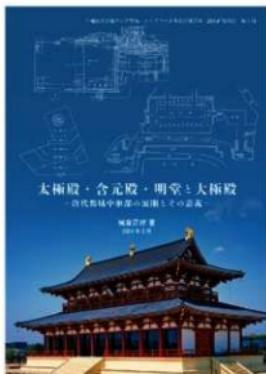
魏晋南北朝～唐代を中心として東アジアに展開した都城制を国際的に比較しようとする時、考古学的には技術的な分析視点を設定する必要がある。発掘遺構・遺物が分析対象となる考古学においては、必然的に個別の要素に分解して研究を進めることになる。唐代都城の歴史性を構造的に読み解こうとする場合、宮城・皇城・外郭城・礼制建築の要素に分解する視点が有効だと考えるが、現実的には皇城に関する発掘知見は少ない。そのため、自身の科研研究では都城の各空間を結びつける正門、中枢の正殿、もう一つの中枢である礼制建築、都市空間である外郭城の4つの要素に着目している。これら4要素への分解は、考古学的な分析の技術的な理由に基づくものであり、東アジア都城の比較研究の全体的な成果については、次回以降の礼制建築、外郭城の分析を踏まえた上で、改めて総合的に論じたいと思う。



調査研究報告 第2冊



調査研究報告 第5冊



調査研究報告 第6冊

※中国都城研究シリーズは、早稲田大学リポジトリ・全国遺跡報告総覧でPDFを公開中。

著者略歴

城倉 正祥（じょうくら・まさよし）

- 1978年 長野県生まれ
- 2002年 早稲田大学 教育学部 社会科地理歴史専修 卒業
- 2004年 早稲田大学大学院 文学研究科 修士課程 修了
- 2007年 早稲田大学大学院 文学研究科 博士後期課程 修了／博士（文学）
- 2007～2011年 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所／研究員
- 2011～2014年 早稲田大学 文文学術院／専任講師
- 2014～2019年 早稲田大学 文文学術院／准教授
- 2015年～ 早稲田大学 東アジア都城・シルクロード考古学研究所／所長
- 2019年～ 早稲田大学 文文学術院／教授

※専門は、東アジア考古学（墳墓・寺院・都城）。研究業績は researchmap で公開中。

出版シリーズ

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

【調査研究報告】

- 第1冊『山室姫塚古墳の研究』(2016年7月)
- 第2冊『中国都城・シルクロード都市遺跡の考古学的研究』(2017年3月)
- 第3冊『殿塚・姫塚古墳の研究』(2017年3月)
- 第4冊『デジタル技術を用いた古墳の非破壊調査研究』(2017年10月)
- 第5冊『唐代都城の空間構造とその展開』(2021年9月)
- 第6冊『太極殿・含元殿・明堂と大極殿』(2024年2月)

【研究論集】

- 第1冊『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』(2018年12月)

【デジタル調査概報】

- 第1冊『栃木県小山市 摩利支天塚古墳の測量・GPR調査』(2020年8月)
- 第2冊『群馬県藤岡市 七奥山古墳の測量・GPR調査』(2020年10月)
- 第3冊『上総国分僧寺の測量・GPR(第1次)調査』(2021年10月)
- 第4冊『埼玉県行田市 埼玉愛宕山古墳の測量・GPR調査』(2022年4月)
- 第5冊『群馬県藤岡市 白石稻荷山古墳の測量・GPR調査』(2023年2月)
- 第6冊『埼玉県行田市 埼玉二子山古墳の測量・GPR調査』(2023年6月)

※調査研究報告第3冊のみ、六一書房より販売。それ以外は、早稲田大学リポジトリ・全国遺跡報告総覽に全文をPDFで公開中。

報告書抄録

シリーズ：早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 調査研究報告 第6冊
タイトル：太極殿・含元殿・明堂と大極殿—唐代都城中枢部の展開とその意義—

刊行年月日：2024年2月29日刊行

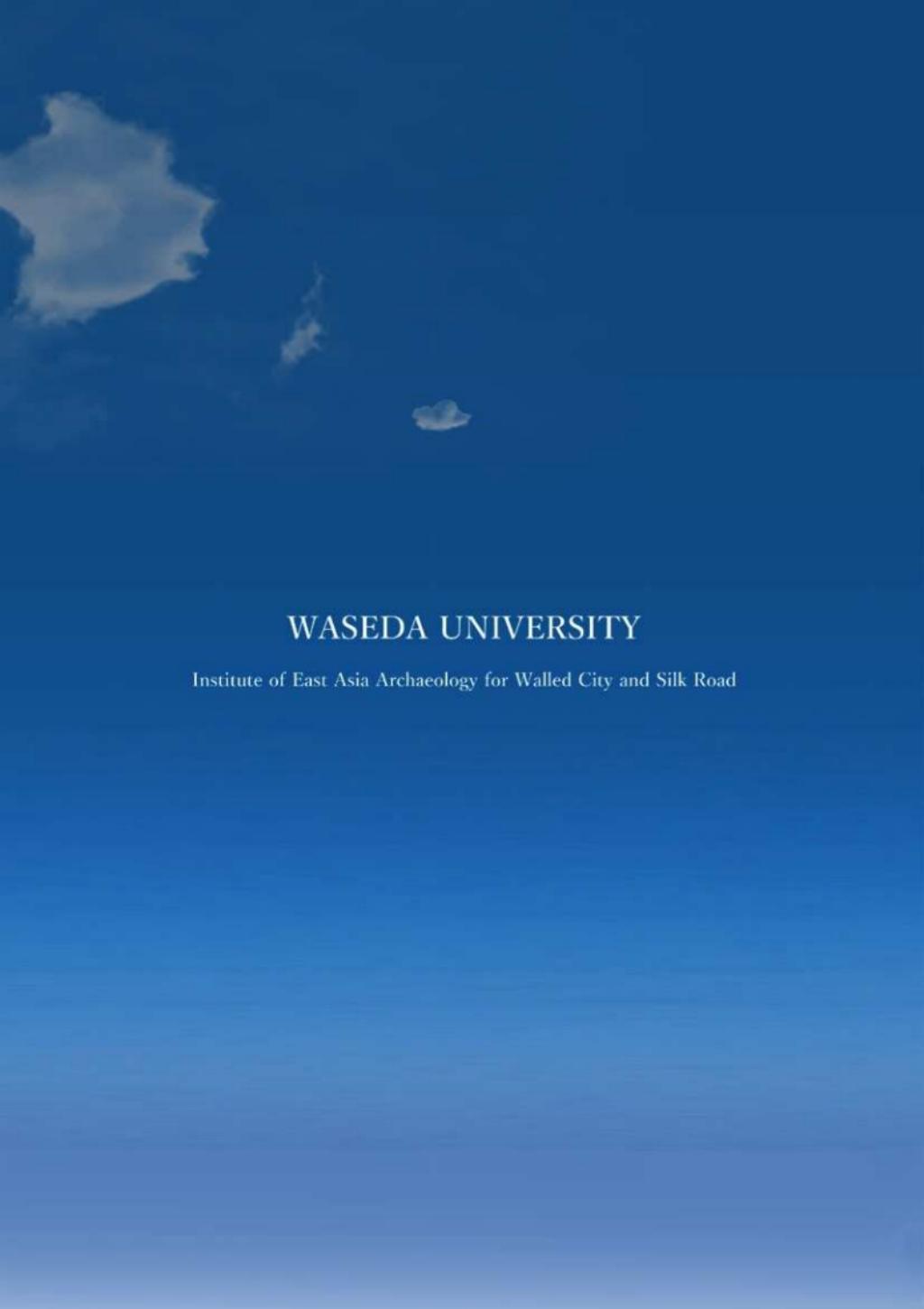
著者：城倉 正祥

発行：早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学学術院（城倉個人研究室内）

印刷：株式会社 正文社

〒260-0001 千葉県千葉市中央区都町1-10-6



WASEDA UNIVERSITY

Institute of East Asia Archaeology for Walled City and Silk Road